

川本町

たけ の はな しも おお つか えん な み  
竹之花・下大塚・円阿弥遺跡

川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

- I -

1991



竹之花遺跡出土の主な縄文土器（18号住居跡、202・208・371号土壙、A区グリッド）



円阿弥遺跡出土の主な縄文土器（10・13・19号住居跡）

## 序

埼玉県大里郡川本町は鎌倉時代の初期に活躍する武蔵武士の代表格である畠山重忠が居を構えた所であり、その墓も所在するなど中世に開発の進んだ地域と考えられています。また、それ以前の時代におきましても、荒川の南側の河岸段丘に沿って縄文時代中期を中心とした集落跡である舟山遺跡、古墳時代後期的一大群集古墳地帯となっている鹿島古墳群など県下有数の遺跡も數多く分布しており、歴史的環境および自然環境の豊かな地域であります。

このたび、この地域の工業化の促進と調和のとれた開発をめざして、川本工業団地の造成が行われることになりました。事業地約50万m<sup>2</sup>の中に所在する埋蔵文化財に関する取り扱いについては、埼玉県企業局と埼玉県教育委員会との間で慎重に協議が重ねられた結果、7カ所の遺跡について財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が埼玉県企業局の委託を受けて発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

本書はそれらのうち昭和63年度および平成元年度に調査を行った竹之花遺跡・下大塚・円阿弥遺跡の調査報告書であります。これらからは、多数の竪穴住居跡、土壙群、集石構などが発見され、土器類・石器類を中心とした多くの遺物の出土が確認され、縄文時代から近世に至るまでの当地域の歴史的環境を明らかにする上で重要な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財の保存、文化財保護の普及・啓蒙や学術研究の基礎資料、教育機関等の参考資料等々に広くご活用いただければ幸いであります。

刊行にあたり、終始ご指導を賜りました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査からこの記録の完成に至るまで種々のご協力をいただいた埼玉県企業局土地開発第二課・同北部土地開発事務所、さらに川本町教育委員会・江南町教育委員会・嵐山町教育委員会・花園町教育委員会ならびに地元関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

## 例　　言

1. 本書は川本工業団地建設にかかる区域のうち、大里郡川本町大字本田字竹之花1574他、同字白草2960-25、同字円阿弥3403他に所在する竹之花遺跡、下大塚、円阿弥遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県教育局指導部文化財保護課の調査を経て、埼玉県企業局土地開発第二課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は昭和62年10月1日から平成2年3月31日まで、報告書作成事業は平成2年4月1日から平成3年3月31日まで実施した。
4. 発掘調査は利根川章彦・川口潤・山本靖が、報告書作成事業は利根川が実施した。発掘調査・報告書作成事業の組織は本文（2頁）に示した。
5. 発掘調査時の写真は利根川・川口・山本・磯崎一が撮影し、遺物写真は川口・金子直行・高崎光司が撮影した。
6. 遺物の実測および遺構・遺物実測図のトレースは利根川・山崎えり子が中心となり、調査補助員8名の補助を受けて実施した。縄文土器については金子、石器については川口の協力を得た。
7. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局指導部文化財保護課職員、III-2、V-2のうち縄文土器を金子、縄文時代の石器を川口、それ以外を利根川が執筆した。
8. 発掘調査から本書の完成にいたるまで下記の方々の御教示・御協力を賜った。記して謝意を表したい。

村松 篤	新井 端	渡辺 一	鈴木 徳雄
河野 喜映	酒井 清治	金子 真土	笹森 健一
柿沼 幹夫	高橋 一夫	市川 修	植木 弘
森下昌市郎	関 和彦	福田 健司	飯塚 博和

## 目 次

序

例 言

I	発掘調査の概要	1
1	調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	2
3	発掘調査の方法と調査の経過	3
II	遺跡の立地と環境	7
III	竹之花遺跡の発掘調査	11
1	遺跡の概観	11
2	遺構と出土遺物	13
a	縄文時代の遺構と出土遺物	13
b	奈良・平安時代の遺構と出土遺物	93
c	その他の遺構と出土遺物	140
IV	下大塚の発掘調査	175
V	円阿弥遺跡の発掘調査	179
1	遺跡の概観	179
2	遺構と出土遺物	180
a	縄文時代の遺構と出土遺物	180
b	弥生時代の遺構と出土遺物	199
c	古墳時代の遺構と出土遺物	207
d	平安時代の遺構と出土遺物	226
e	その他の遺構と出土遺物	232
VI	結 語	240
	参考文献	

## 挿 図 目 次

第1図 グリッド呼称の方法	3	第32図 住居跡出土縄文土器拓影図（3）	54
第2図 川本工業団地事業地周辺の遺跡分布図		第33図 土壌出土縄文土器拓影図（1）	56
	折り込み	第34図 土壌出土縄文土器拓影図（2）	57
第3図 川本工業団地事業地と各遺跡位置図		第35図 土壌出土縄文土器拓影図（3）	58
	10	第36図 土壌出土縄文土器拓影図（4）	59
第4図 竹之花遺跡主要遺構分布概念図	11	第37図 土壌出土縄文土器拓影図（5）	60
第5図 標準土層図	12	第38図 A区グリッド出土縄文土器（1）	64
第6図 1号住居跡	13	第39図 A区グリッド出土縄文土器（2）	65
第7図 3号住居跡	14	第40図 A区グリッド出土縄文土器（3）	66
第8図 4号住居跡	14	第41図 A区グリッド出土縄文土器（4）	67
第9図 6号住居跡	15	第42図 B区グリッド出土縄文土器（1）	69
第10図 11号住居跡	16	第43図 B区グリッド出土縄文土器（2）	70
第11図 12号住居跡	17	第44図 200号土壌出土耳飾	74
第12図 13号住居跡	18	第45図 住居跡出土土器（1）	76
第13図 18号住居跡	19	第46図 住居跡出土土器（2）	77
第14図 18号住居跡埋甕	20	第47図 住居跡出土土器（3）	78
第15図 19号住居跡	21	第48図 住居跡出土土器（4）	79
第16図 19号住居跡埋甕	22	第49図 集石遺構出土石器	81
第17図 20号住居跡	23	第50図 土壌出土石器（1）	82
第18図 竹之花遺跡出土埋甕	24	第51図 土壌出土石器（2）	84
第19図 集石遺構	25	第52図 グリッド出土石器（1）	86
第20図 縄文時代土壌（1）	27	第53図 グリッド出土石器（2）	87
第21図 縄文時代土壌（2）	28	第54図 グリッド出土石器（3）	88
第22図 縄文時代土壌（3）	29	第55図 グリッド出土石器（4）	89
第23図 縄文時代土壌（4）	30	第56図 グリッド出土石器（5）	90
第24図 縄文時代土壌（5）	31	第57図 5号住居跡	93
第25図 遺構出土縄文土器（1）	46	第58図 5号住居跡カマド	94
第26図 遺構出土縄文土器（2）	47	第59図 7号住居跡	95
第27図 遺構出土縄文土器（3）	48	第60図 7号住居跡カマド	96
第28図 遺構出土縄文土器（4）	49	第61図 8号住居跡	97
第29図 遺構出土縄文土器（5）	50	第62図 8号住居跡カマド	98
第30図 住居跡出土縄文土器拓影図（1）	52	第63図 10号住居跡	99
第31図 住居跡出土縄文土器拓影図（2）	53	第64図 10号住居跡カマド	101

第65図	10号住居跡ホリカタ	102	第101 図	歴史時代土壙 (12)	155
第66図	14号住居跡	103	第102 図	歴史時代土壙 (13)	156
第67図	14号住居跡カマド	104	第103 図	歴史時代土壙 (14)	157
第68図	15号住居跡	105	第104 図	歴史時代土壙 (15)	158
第69図	15号住居跡カマド	106	第105 図	歴史時代土壙 (16)	159
第70図	16号住居跡	107	第106 図	歴史時代土壙 (17)	160
第71図	17号住居跡	108	第107 図	歴史時代土壙 (18)	161
第72図	17号住居跡北壁カマド	109	第108 図	歴史時代土壙 (19)	162
第73図	17号住居跡東壁カマド	110	第109 図	歴史時代土壙 (20)	163
第74図	5号住居跡出土土器	112	第110 図	歴史時代土壙 (21)	164
第75図	7号住居跡出土土器 (1)	115	第111 図	歴史時代土壙 (22)	165
第76図	7号住居跡出土土器 (2)	116	第112 図	歴史時代溝状遺構	170
第77図	7号住居跡出土土器 (3)	121	第113 図	グリッド出土歴史時代遺物 (1)	
第78図	7号住居跡出土土器 (4)	122			171
第79図	7号住居跡出土土器 (5)	123	第114 図	グリッド出土歴史時代遺物 (2)	
第80図	8号住居跡出土土器	124			172
第81図	8号住居跡出土瓦 1 (平瓦)	126	第115 図	下塙平面図および土層断面図	176
第82図	8号住居跡出土瓦 2 (軒丸瓦)	127	第116 図	下塙出土遺物 (1) 土器類	177
第83図	8号住居跡出土瓦 3 (丸瓦)	128	第117 図	下塙出土遺物 (1) 古銭	177
第84図	10・14号住居跡出土土器	129	第118 図	円アサ遺跡遺構分布概念図	179
第85図	15号住居跡出土土器 (1)	131	第119 図	10号住居跡 (1) 平面図・断面図	
第86図	15号住居跡出土土器 (2)	132			181
第87図	15号住居跡出土墨書き土器	135	第120 図	10号住居跡 (2) 遺物出土位置	
第88図	16号住居跡出土土器	136			182
第89図	17号住居跡出土土器	136	第121 図	11号住居跡	183
第90図	歴史時代土壙 (1)	144	第122 図	12号住居跡・32号土壙	184
第91図	歴史時代土壙 (2)	145	第123 図	13号住居跡	185
第92図	歴史時代土壙 (3)	146	第124 図	19号住居跡	186
第93図	歴史時代土壙 (4)	147	第125 図	遺構出土土器 (1)	188
第94図	歴史時代土壙 (5)	148	第126 図	遺構出土土器 (2)	189
第95図	歴史時代土壙 (6)	149	第127 図	遺構出土土器 (3)	190
第96図	歴史時代土壙 (7)	150	第128 図	遺構出土土器 (4)・グリッド出土	
第97図	歴史時代土壙 (8)	151		土器 (1)	191
第98図	歴史時代土壙 (9)	152	第129 図	グリッド出土土器 (2)	192
第99図	歴史時代土壙 (10)	153	第130 図	遺構出土石器 (1)	196
第100 図	歴史時代土壙 (11)	154	第131 図	遺構出土石器 (2)	197

第132 図 遺構出土石器（3）	198	第152 図 3号住居跡出土土器（1）	217
第133 図 9号住居跡	199	第153 図 3号住居跡出土土器（2）	218
第134 図 15号住居跡	200	第154 図 4号住居跡および5号土壤出土土器	219
第135 図 16号住居跡	201	第155 図 5・6号住居跡および3号土壤出土土器	219
第136 図 18号住居跡	202	第156 図 17号住居跡出土土器	220
第137 図 20号住居跡	203	第157 図 古墳時代遺構出土石器	225
第138 図 弥生時代遺構出土土器（1）	204	第158 図 7号住居跡	226
第139 図 弥生時代遺構出土土器（2）	204	第159 図 8号住居跡	227
第140 図 9号住居跡出土手捏土器	204	第160 図 14号住居跡	228
第141 図 弥生時代遺構出土石器	205	第161 図 7・8・14号住居跡出土土器	229
第142 図 1号住居跡	207	第162 図 円阿弥遺跡土壤（1）	233
第143 図 2号住居跡・4号土壤	208	第163 図 円阿弥遺跡土壤（2）	234
第144 図 3号住居跡	209	第164 図 1・2号土壤出土土器	234
第145 図 3号住居跡ホリカタ	210	第165 図 グリッド出土土器	237
第146 図 4号住居跡・5号土壤	211		
第147 図 5号住居跡	212		
第148 図 6号住居跡・3号土壤	213	付図 1 竹之花遺跡全測図	
第149 図 17号住居跡	214	付図 2 円阿弥遺跡全測図	
第150 図 17号住居跡ホリカタ	215		
第151 図 1・2号住居跡出土土器	216		

## 表 目 次

第1表 竹之花遺跡石器一覧（1）	91	第5表 歴史時代土壤一覧（3）	167
第2表 竹之花遺跡石器一覧（2）	92	第6表 歴史時代土壤一覧（4）	168
第3表 歴史時代土壤一覧（1）	165	第7表 歴史時代土壤一覧（5）	169
第4表 歴史時代土壤一覧（2）	166	第8表 遺構出土石器一覧	195

## 図 版 目 次

図版 1 川本工業団地事業地とその周辺 竹之花遺跡遠景		図版 4 繩文時代住居跡	
図版 2 円阿弥遺跡遠景 川本工業団地事業地内第1次調査ト レンチ全景		図版 5 奈良・平安時代住居跡	
図版 3 竹之花遺跡全景		図版 6 奈良・平安時代住居跡カマド	
		図版 7 遺跡北東端部土壤群 遺跡中央谷部北側住居跡群・土壤群	
		図版 8 遺跡南端部住居跡群・土壤群	

- 遺跡中央谷部南側土壤群  
図版9 遺跡中央谷部南側土壤群東部  
遺跡中央谷部南側土壤群西部  
図版10 墓壙・集石遺構  
図版11 繩文時代土壤遺物出土状態  
7号住居跡遺物出土状態  
図版12 下大塚全景  
下大塚土層断面  
図版13 円阿弥遺跡北端部住居跡群・上擴群  
円阿弥遺跡南端部住居跡群  
図版14 繩文・弥生時代住居跡  
図版15 古墳・平安時代住居跡  
図版16 7号住居跡カマド  
8号住居跡カマド  
図版17 繩文・弥生・古墳・平安時代土壤  
図版18 住居跡遺物出土状態  
図版19 17号住居跡炉跡上土器出土状態  
14号住居跡南東コーナー土器出土状態  
図版20 竹之花遺跡出土繩文土器(1)  
図版21 竹之花遺跡出土繩文土器(2)  
図版22 竹之花遺跡出土繩文土器(3)  
図版23 竹之花遺跡出土繩文土器(4)  
図版24 竹之花遺跡出土繩文土器(5)  
図版25 竹之花遺跡出土繩文土器(6)  
図版26 竹之花遺跡出土繩文土器(7)  
図版27 竹之花遺跡出土繩文土器(8)  
図版28 竹之花遺跡出土繩文土器(9)  
図版29 竹之花遺跡出土繩文土器(10)  
図版30 竹之花遺跡出土繩文土器(11)  
図版31 竹之花遺跡出土繩文土器(12)  
図版32 竹之花遺跡出土繩文土器(13)  
図版33 竹之花遺跡出土石器(1)  
図版34 竹之花遺跡出土石器(2)  
図版35 竹之花遺跡出土石器(3)  
図版36 竹之花遺跡出土石器(4)  
図版37 竹之花遺跡出土土師器・須恵器(1)  
図版38 竹之花遺跡出土土師器・須恵器(2)  
図版39 竹之花遺跡出土土師器・須恵器(3)  
図版40 竹之花遺跡出土土師器・須恵器(4)  
図版41 8号住居跡出土瓦1(平瓦)  
図版42 8号住居跡出土瓦2(軒丸瓦)  
図版43 8号住居跡出土瓦3(丸瓦)  
図版44 円阿弥遺跡出土繩文土器(1)  
図版45 円阿弥遺跡出土繩文土器(2)  
図版46 円阿弥遺跡出土繩文土器(3)  
図版47 円阿弥遺跡出土繩文土器(4)・弥生土器  
図版48 円阿弥遺跡出土石器(1)  
図版49 円阿弥遺跡出土石器(2)  
図版50 円阿弥遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器(1)  
図版51 円阿弥遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器(2)  
図版52 円阿弥遺跡出土弥生土器・土師器・須恵器(3)

# I 発掘調査の概要

## 1 調査に至るまでの経過

埼玉県では生活環境の整備と県土に合った土地利用計画を進めるため、各種の施策を実施している。その一環として県企業局では工場誘致と適切な工場配置を行うため、大里郡川本町に川本工業団地の造成を計画した。県教育局文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遗漏の無いよう調整を進めてきた。

同工業団地の造成計画にあたり、昭和61年12月15日付け企局造第1257号で県企業局宅地造成課長から教育局文化財保護課長あて「川本工業団地造成事業地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会があった。しかし、この時点では環境アセスメントが終了していなかったので所在確認調査は実施できなかったが、川本町教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、3カ所の遺物散布地が確認された。

この結果をふまえ、県企業局と文化財保護課の間でその保存について協議を重ねたが、事業計画を変更することは不可能との結論に達した。しかし、周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲確認及び所在確認調査は不可避であり、環境アセスメント終了後実施することを相互確認した。また、上記の照会に対する回答は確認調査を実施して後行うこととした。

この結果をふまえ、昭和62年3月30日付け教文第1257号をもって文化財保護課長から埼玉県企業局公営企業管理者あて次のように通知した。

- 1 川本工業団地造成予定地内に所在する円阿弥遺跡ほか2遺跡の埋蔵文化財包蔵地の調査は、昭和62年度の後半に朝埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施する。
- 2 発掘調査の実施にあたっては、事前に文化財保護法第57条の3第1項の規定により、文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査に関する届け出をすること。

昭和62年7月に10日間にわたる所在及び確認調査を実施した。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にわたる埋蔵文化財包蔵地5カ所を確認した。

文化財保護課では、現地踏査、所在及び確認調査の結果を検討し、県企業局宅地造成課長あて、次のように回答した。

- 1 工業団地造成予定地内には、円阿弥遺跡、竹之花遺跡、白草遺跡、下大塚、四反歩（北・東・南地区）遺跡が所在する。
- 2 上記の埋蔵文化財包蔵地にかかる造成計画の変更が不可能な場合には、記録保存のための発掘調査を実施すること。
- 3 発掘調査の実施にあたっては文化財保護課と協議すること。

その後発掘調査の実施について協議した結果、昭和62年9月16日付けで県企業局と埼玉県埋蔵文化財調査事業団との間に発掘調査に関する委託契約書が締結された。発掘調査は昭和62年9月、竹之花遺跡の調査から開始され、昭和63年度、平成元年度へと引き継がれた。また、昭和62年11月27日付け委保第5-1733号をもって文化庁から埋蔵文化財発掘調査の届に対する通知があった。

## 2 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

### 1. 発掘調査(昭和62年度)

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

副理事長 百瀬陽二

常務理事長 兼  
調査研究部長 早川智明

管理部長 原田家次

管理部

主査 関野栄一

主事 江田和美

主事 岡野美智子

主事 福田浩

主事 本庄朗人

調査研究部

副部長 塩野博

第三課長 宮崎朝雄

主査 手野和信

調査員 川口潤

### 2. 発掘調査(昭和63年度)

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

副理事長 百瀬陽二

常務理事長 兼  
調査研究部長 早川智明

管理部長 原田家次

管理部

主査 関野栄一

主事 江田和美

主事 岡野美智子

主事 本庄朗人

主事 齊藤勝秀

調査研究部

副部長 塩野博

第一課長 手野和信

主任調査員 利根川章彦

調査員 山本靖

### 3. 発掘調査(平成元年度)

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

副理事長 百瀬陽二

常務理事長 兼  
管理部長 古市芳之

理事長 兼  
調査研究部長 吉川國男

管理部

管理課長 関野栄一

主事 江田和美

主事 岡野美智子

主事 本庄朗人

主事 齊藤勝秀

調査研究部

副部長 塩野博

第一課長 手野和信

主任調査員 利根川章彦

調査員 川口潤

### 4. 整理・報告書刊行(平成2年度)

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

副理事長 早川智明

常務理事長 兼  
管理部長 古市芳之

理事長 兼  
調査研究部長 吉川國男

資料部長 栗原文藏

管理部

庶務課長 高田弘義

主査 松本晋

主事 長瀧美智子

経理課長 関野栄一

主任任 江田和美

主事 本庄朗人(～9月)

主事 齊藤勝秀

主事 菊池久(10月～)

資料部

副部長 兼  
第一課長 増田逸朗

主任調査員 利根川章彦

調査員補 山崎えり子

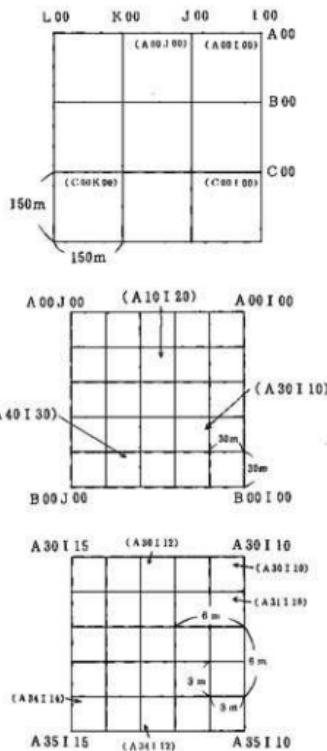
### 3 発掘調査の方法と調査の経過

調査は川本工業団地事業地全域を対象とするものであったが、事業地内には山林が広く所在しており、当初周知の遺跡として把握されていたのは竹之花地区から白草地区にかけての広がり（現在は竹之花遺跡・白草遺跡・下大塚に分けられている）と円阿弥地区のみであった。

昭和62年度には遺跡の範囲確認のための試掘調査を埼玉県教育局指導部文化財保護課が実施し、その後9月から昭和63年3月まで埼玉県埋蔵文化財調査事業団が事業地内の発掘調査の全体計画を策定するための第1次調査に入った。ただし山林部分の調査着手は自然環境保全の検討のため環境影響評価を待たねばならなかった。環境影響評価は昭和63年10月中旬調査報告書の供覧が終了し、その時点から山林部分に伐採等の手を加えられるようになり、調査の空白は6ヶ月間となった。これ以後山林部分に対する遺跡の範囲確認のための第1次調査とすでにおおよその遺跡の範囲が把握されていた竹之花・円阿弥遺跡の本調査に着手できることになった。

以下に本書で対象とする3遺跡の発掘調査の方法と経過の概要を記述しておく。

まず、第1次調査の開始にあたって、グリッド設定を行ったが、対象地が東西約900m、南北約1,000mという広範囲であるため、座標に与える記号の設定から考えなくてはならなかった。昭和62年度担当者のアイデアにより、対象地の北東の外側に起点を設け、150mごとに、南北方向は北からA, B, C, ……, H、東西方向は東からI, J, K, ……, Oというアルファベット大文字で示し、30mグリッドの表示のためにこの後に二桁の数字を付して、最小の3m小グリッドの呼称を十進法で数えていく形式とした（第1図）。つまり、起点はA00—I00であり、南北3mの区画でA01—I00、南北3mではA10—I00、東西3mでA00—I01、東西3mでA00—I10となる。150m先の地点では二桁数字は49となり、次のグリッドで00にもどり、アルファベットが一つ進むという形式である。座標は測量法に基づく公共座標（第K系）に合わせた方眼によっており、たとえば、A10—I40グリッド（30m大グリッド区画）の杭位置でX=+13,780.0m、Y=-47,440.0mの座標値と



第1図 グリッド呼称の方法

なる。グリッド名称は北東隅の点に与えられた（たとえば、A12—I 48のような）記号を読むことになる。

第1次調査においては30m大グリッドの杭を結んだ線を基準とし、グリッドの北端線から南側に3m幅の東西方向トレンチ、グリッド東端線から西側に3m幅の南北方向トレンチを設定した。グリッドの北東隅の杭で屈曲する逆L字形のトレンチということになる。この方法では30mについて3mの調査であるから全体の約1/10の比率の試掘調査である。

第2次調査（本調査）においては第1次調査で確定した遺跡の範囲をバック・ホーにより表土除去し、その後大小のグリッド設定杭を打ち、それに従って遺構確認あるいは遺構発掘後の遺物出土位置の計測・遺構の平面実測を行った。この際、遺構確認面に1m方眼の水糸を張る簡易造り方によった。

#### 第1次調査の概要

第1次調査は埼玉県教育局指導部文化財保護課が実施した試掘調査の結果示された、第1次調査を要する範囲（未調査箇所）、第1次調査を要する箇所、明確となった遺跡の範囲、遺跡の所在しない範囲という四区分に従って、より正確に遺跡の範囲を確定することを目的に実施した。

昭和62年度は、環境影響評価に直接関連しなかった畑・荒地の地目部分に限定した調査となった。調査は昭和62年9月1日から昭和63年3月31日まで実施した。この結果、竹之花・白草地区に大きくマーキングされていた「竹ノ花遺跡」を三つに分け、北東端の「竹之花1遺跡」（竹之花遺跡）、西寄りに広がる「竹ノ花2遺跡」（白草遺跡）、南部に単独で所在する「下大塚」がほぼ確定し、円阿弥地区の「円阿弥遺跡」、工業団地の南側取付道路で調査した「権現堂遺跡」の合計5遺跡の所在が確定した。また、北條場地区に纏文時代早期の石器群がやや集中的に出土する地点があったが、トレンチの拡張によって遺物の分布を確認して、遺物を取り上げた。これは平成元年度に遺跡として認定することになり、「北條場北遺跡」として登録した。山林の地目にあたる部分の第1次調査は前述のように昭和63年10月中旬以降の伐採作業の進捗状況に従って進めることになったため、竹之花・白草地区、円阿弥地区（北部）、および協議によって川本町教育委員会が調査を実施することになった権現堂・円阿弥地区（南部）の伐採を先行し、伐採終了後すぐトレンチ設定→バック・ホーによるトレンチ掘り下げという手順を順次踏んで行うことになった。なお、トレンチに遺構がかかった場合、昭和63年度に関してはできるだけトレンチを拡張する方針で調査を進めた。竹之花・円阿弥地区は11月上旬からバック・ホーによるトレンチ掘り下げを実施し、年内におおよその状況を把握することができた。それぞれ南方に範囲が拡大し、最終的な調査対象面積は竹之花遺跡約27,000m<sup>2</sup>、円阿弥遺跡も同じく約27,000m<sup>2</sup>ということになった。

年が明けて、元号が改まった平成元年1月初旬はまだ四反歩地区の南部の伐採作業が続いていたが、調査が可能になった北部に重機を導入し、伐採の終了を待ちながら順次南へ下っていく形で調査を進めた。伐採作業は結局3月上旬までこれこんてしまい、四反歩地区南部の第1次調査はほとんど年度末ギリギリまで行うことになった。四反歩地区は若干の空白域を中間に持ちながら広い範囲で遺構が確認された。この空白域で遺跡を三つに分け、北から四反歩北遺跡（約4,500m<sup>2</sup>）、四反歩東遺跡（約16,000m<sup>2</sup>）、四反歩南遺跡（約10,000m<sup>2</sup>）の3遺跡を確認した。これ以外に事業地南西

端の権現堂地区で工業団地南側取付道路にかかった権現堂遺跡の北部部分と円阿弥地区南部の権現堂北遺跡は協議により昭和63年度中に川本町教育委員会が調査を担当することになり、当事業団の竹之花遺跡の調査と併行する時期に調査が実施された。

#### 竹之花遺跡第2次調査の経過

##### 昭和63年度

- 10月 バック・ホーによる表土除去（11日～12月16日）、遺構確認（17日～11月25日）。
- 11月 遺構発掘。1・3・4号住居跡と北東部の繩文時代土墳群を中心着手する（28日～）。
- 12月 遺物出土位置測量、遺構測量を並行しながら掘り下げを続ける。遺構に付随しない単独埋甕、集石遺構も土墳発掘途上に発見し、発掘に着手する（19日）。
- 1月 （平成元年） 埋甕・集石遺構写真撮影・実測、1～6号住居跡掘り下げ・実測（17日～）、繩文時代・歴史時代土墳群掘り下げ・実測続行。
- 2月 1～6号住居跡平面図作成・写真撮影（8日）。7・8号住居跡掘り下げ・遺物出土状態写真撮影（22日）。
- 3月 川本町建設課が工業団地の北側取付道路工事を行うため、10日前後に遺跡北東隅を明け渡す必要が生じた。そこで、3号住居跡とその付近の土墳の実測・写真撮影を先行して行う（10日）。株式会社バスクに委託して航空写真測量・写真撮影実施（10日）。1～8号住居跡・1～190号土墳まで掘った時点で、昭和63年度中の調査を終了する（29日）。

##### 平成元年度

- 4月 発掘作業再開。遺跡中央部の住居跡群・土壤群から着手（10日）。順次南側に進む。
- 5月 10～13号住居跡・191～250号土墳を掘り下げる。
- 6月 中央谷部の北側の繩文時代土墳群の掘り下げほぼ終わり、実測・写真撮影（6日）。
- 7月 中央谷部南側土墳群掘り下げに着手。8・10・18・19号住居跡実測・写真撮影（～25日）。
- 8月 7・11～14・16・17号住居跡実測・写真撮影（～17日）。15・20号住居跡実測・写真撮影（～30日）。谷部南側土墳群実測・写真撮影（～30日）。航空写真測量・写真撮影（24日）。
- 9月 各住居跡のホリカタ確認（～5日）。残った遺構すべての実測・写真撮影完了、遺跡全景・遠景写真撮影（12日）。残った器材のすべてを移動して調査完了（14日）。

#### 下大塚の調査の経過

当初、平成元年5月中旬に約1カ月で調査を行う予定で調査に着手したが、竹之花遺跡・円阿弥遺跡の調査の日程と重機利用の都合により、断続的に10月末まで行うことになった。以下に経過を述べる。

- 5月 伐採完了（15日）。調査前全景写真撮影（16日）。盛土地形測量（29～31日）。
- 6月 東西・南北のグリッド方向に沿って土層断面設定し、掘り下げ開始（5日）。中段に礫の集中出土があったため中断（28日）。遺物・礫出土状態写真撮影（29日）。
- 7月 遺物・礫実測・取り上げ（3～4日）。
- 9月 重機による盛土断ち割り（28日）。
- 10月 土層断面・盛土周囲清掃、盛土下遺構確認、土層断面実測（2～6日）。土層断面および盛土

断ち割り状態写真撮影（9日・12日）。重機による盛土除去（23日）。盛土下を清掃し、写真撮影。すべての作業を完了（25日）。

#### 円阿弥遺跡第2次調査の経過

8月（平成元年） バック・ホーによる表土除去開始（22日）。

9月 遺構確認開始（12日）。10月中旬まで続行。

10月 遺跡南部の1～6号住居跡の発掘を開始（5日）。2・5・6号住居跡遺物出土状態写真撮影（16日）。1・2・4・5号住居跡実測・写真撮影（25日）。

11月 7・8・9号住居跡実測・写真撮影（～2日）。3・10～15・17号住居跡実測・写真撮影（～15日）。遺跡北部土塙群写真撮影・実測（14日・15日）。10・13号住居跡埋甕・柱穴断ち割り実測・写真撮影（17日）。残る住居跡・土塙のすべてを実測・写真撮影（20～27日）。遺跡全景写真撮影（27日）。

当初予定の発掘区の調査はこれで完了したが、年度途中の協議の結果、北側の農道部分についても当事業団が年度内に調査することになった。調査は平成2年2月中に実施した。

2月 バック・ホーによる表土除去（9日・13日）。遺構確認（13～16日）。住居跡4軒を確認し、掘り下げ開始（19日）。18・19・20号住居跡実測（23日）。17号住居跡遺物出土状態実測（26日）。17・18・19・20号住居跡写真撮影（27日）。19号住居跡埋甕断ち割り実測・写真撮影（28日）。

3月 農道部分発掘区全景写真撮影（1日）。これをもって円阿弥遺跡の調査を完了した。

## Ⅱ 遺跡の立地と環境

川本工業団地事業地を乗せる台地は荒川右岸沿いに広がるいわゆる江南台地の北縁部にあたる。江南台地は基盤の第三紀層の上に秩父古生層起源の砂礫層を乗せる荒川中位段丘に相当する。その上の堆積面が台地面の基本であり、東西17km、南北3kmの長方形に近い形態を呈している。荒川に面する北縁部は比高差10~20mの急崖となって沖積面に移行する。工業団地事業地近傍は荒川の小支流である吉野川とその他のクリークによって開析されて南北に長い大きな舌状台地が東西に並んでいる。工業団地事業地を乗せる台地は東側斜面から小さな谷が数多く入り込み、北縁部から東縁部にかけて緩斜面あるいはやや平坦な区域が広く存在する。工業団地事業地の遺跡群はこれらの谷間に面した緩斜面か台地北縁部～東縁部の緩斜面および平坦面に立地する。

本書で報告する竹之花遺跡は台地北東端部の緩斜面、下大塚は台地北端部からやや中央寄りに上がった平坦面、円阿弥遺跡は台地西部の北縁の北西向き緩斜面にそれぞれ所在し、所在地は以下のとおりである。

竹之花遺跡 埼玉県大里郡川本町大字本田字竹之花1574他

下大塚 埼玉県大里郡川本町大字本田字白草2960-25

円阿弥遺跡 埼玉県大里郡川本町大字本田字円阿弥3403他

この3遺跡は本文中で概要を示すように、縄文時代から平安時代にかけて、さらに、飛んで江戸時代末期以降に形成されている。以下にこれらの遺跡に関連する周辺の遺跡の状況を通じた歴史的環境について述べておきたい。

旧石器時代の遺跡は発見例がまだあまり多くないが、台地北縁部の吉野川沿いでは川本町本田上ノ山、宮入、寄居町牛無具利の各遺跡、南部の小江川沿いでは江南町塩西、宮脇、本田・東台、荒神脇の各遺跡、市野川沿いでは寄居町稻荷窪遺跡でナイフ型石器・搔器・槍先形尖頭器等が確認されており、工業団地事業地内の白草遺跡でも細石刃・細石核等の良好なセットが得られている。

縄文時代の遺跡は前期・中期の遺跡を中心としたものが工業団地事業地周辺にやや多く分布するようになるが、草創期・早期の遺跡はまだ数少ない。川本町内では工業団地事業地北方の上本田、荒川本流沿いの崩山で有舌尖頭器の出土が知られていたが、工業団地事業地の南端部にある四反歩南遺跡から矢柄研磨器等の草創期の遺物が出土している。荒川の対岸にある花園町宮林遺跡において爪形文土器・多縄文土器等のこの時期の土器類を多量に出土し、住居跡も1軒検出されている。早期の遺物・遺構は工業団地事業地内では四反歩南遺跡から撲糸文期の住居跡8軒・土器片20,000点以上が検出されたのが特筆に値しよう。白草遺跡で条痕文期の住居跡3軒・上塙77基・炉穴17基が検出され、竹之花遺跡でもごくわずかであるが、押型文・沈線文土器が確認された。事業地の北東に隣接する舟山遺跡でも撲糸文・沈線文・条痕文土器を出土している。また舟山遺跡の南方で竹之花遺跡の東方にある荷鞍ヶ谷戸遺跡にも撲糸文・押型文・条痕文土器を出土している。さらに南方の万願寺遺跡は四反歩南遺跡の東方にあり、表探資料ながら撲糸文・押型文・沈線文・条痕文土器など早期の上器の纏った資料が知られている。吉野川沿いの江南町域では上前原遺跡で撲糸文・条痕文土器が出土している。工業団地事業地より南方の小江川沿いには春日丘遺跡があり、撲糸文

土器とスタンプ状石器が出土している。その東方の江南町域では撚糸文・押型文土器などの遺跡として塩前遺跡・宮脇遺跡など、沈線文・条痕文土器などの遺跡として本田・東台遺跡などが知られている。荒川左岸では宮林遺跡で早期前半の住居跡1軒・堅穴状遺構3軒と土壙が検出された。その東方の川本町大林Ⅰ遺跡では早期のスタンプ状石器が出土している。前期に関しては、工業団地事業地内では竹之花・円阿弥・白草・四反歩東・四反歩南・権現堂の各遺跡で散在的ながら黒浜・諸磯期の住居跡群が形成され、あるいは土器が出土している。周辺の遺跡では、舟山遺跡で花積下層式～十三菩提式の各型式の土器が出土し、関山期の住居跡が検出されている。荷駄ケ谷戸・焼谷・山ノ腰・大林Ⅰ・大林Ⅱの各遺跡では黒浜式・諸磯a式土器の出土が知られている。この時期にはやや上流の花園・寄居町城に遺跡の増加が顕著となり、荒川左岸側には上南原・台耕地・塙屋・北塙屋などの各遺跡、右岸側では甘粕原・ゴシン・露梨子・上郷A・上郷西・薬師台などの各遺跡で黒浜・諸磯期の遺構・遺物が検出されている。中期には大きな集落遺跡が形成されるが、工業団地事業地内では竹之花・権現堂・権現堂北の各遺跡で加曾利E期の遺物が若干認められた程度で顕著な遺構は検出されていない。東に隣接する舟山遺跡は勝坂・加曾利E期の住居跡3軒・北西に隣接する上本田遺跡では勝坂・加曾利E期の住居跡48軒・土壙約100基が検出されている。近傍では台耕地遺跡で勝坂・加曾利E期の住居跡25軒が検出され、焼谷・山ノ腰・大林Ⅱ・下南原・橋屋・宮台・甘粕原・ゴシン・露梨子・上前原などの各遺跡でこの時期の遺物が検出されている。後期～晩期には遺跡数の減少傾向が著しく、弥生時代後期を迎えるまでまとまった集落遺跡は形成されない。工業団地事業地内では、四反歩北遺跡で堀之内期の住居跡が検出されている程度であり、焼谷・舟山・荷駄ケ谷戸・山ノ腰・大林Ⅰなどの各遺跡に後期後半までの遺物が知られている。晩期には橋屋遺跡での耳飾・土偶などが知られる。熊谷市・深谷市域の大里沖積地中の徽高地に遺跡の確認される例があり、丘陵・台地地域からの集団の移動を想起させる。

弥生時代の遺跡は後期吉ヶ谷期になってから遺跡の形成が進んでいる。工業団地事業地内では、円阿弥遺跡で5軒・白草遺跡で22軒・四反歩東・四反歩南遺跡で5軒がこの時期の住居跡であり、比較的まとまった集落群と考えることができる。工業団地事業地南西の焼谷遺跡でも住居跡7軒・土壙5基が検出されている。さらに隣接区域では上ノ山・荷駄ケ谷戸・上本田前・万願寺の各遺跡で吉ヶ谷期の土器が確認されている。東の江南町城では吉野川沿いに堀ヶ沢遺跡・小江川沿いに塩前遺跡で住居跡や土器類が検出されている。いずれの遺跡においても吉ヶ谷期のやや新しい段階と思われる土器類が多い。吉ヶ谷式土器は比企丘陵や入間地方から次第に北上する傾向が見られることがすでに指摘されているが、現在知られる状況からもこの見解は支持されるであろう。

古墳時代の遺跡は古墳・集落遺跡ともに前期・中期にはあまり多くなく、後期に増加するようである。工業団地事業地内では前期五領期は円阿弥遺跡に住居跡7軒・土壙3基・白草遺跡に住居跡1軒があり、中期和泉期は白草遺跡に住居跡8軒がある。西方にある芳沼からも改修時に採集された五領式土器があり、嵐山字上中谷の山道にもこの時期の住居跡断面が確認されている。周辺の前期・中期の集落遺跡は小江川沿いの塩前遺跡・塩西遺跡があり、やはりこの時期に大半が築造されると推定されている塩古墳群とともに塩地区に集中している。荒川左岸の台耕地遺跡には五領期の住居跡が13軒検出されている。右岸では寄居町東遺跡・むじな塙遺跡などが目立つ程度である。江



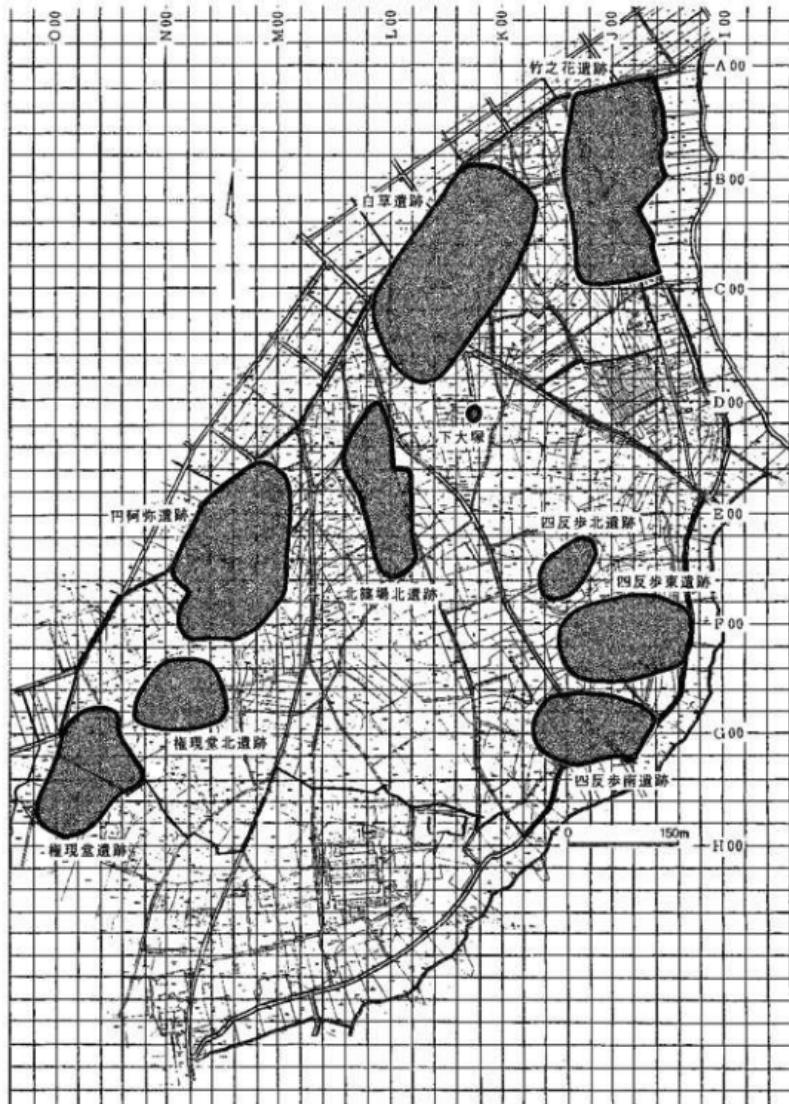
- |              |            |             |            |             |
|--------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 竹之花遺跡     | 2. 円阿弥遺跡   | 3. 下大塚      | 4. 白草遺跡    | 5. 北藤場北遺跡   |
| 6. 四反歩北遺跡    | 7. 四反歩東遺跡  | 8. 四反歩南遺跡   | 9. 横現堂北遺跡  | 10. 横現堂南遺跡  |
| 11. 謙光寺発字(?) | 12. 万願寺遺跡  | 13. 荷物ヶ谷戸遺跡 | 14. 舟山遺跡   | 15. 鳴島古墳群   |
| 16. 鹿島古方裏遺跡  | 17. 山ノ根遺跡  | 18. 上木田透跡   | 19. 上大塚古墳群 | 20. マス森古墳   |
| 21. 墓原古墳群    | 22. 川端遺跡   | 23. 稲崎古墳群   | 24. 黒田古墳群  | 25. 台耕地遺跡   |
| 26. 盆台遺跡     | 27. 下南原遺跡  | 28. 萩原遺跡    | 29. 大林I遺跡  | 30. 大林II遺跡  |
| 31. 見目古墳群    | 32. 長在原古墳群 | 33. ハク尻古墳群  | 34. 小尻大王遺跡 | 34. 三ヶ尻古墳遺跡 |
| 35. 三尻中学校遺跡  | 36. 上辻遺跡   | 35. 二ヶ尻古墳群  | 36. 平道遺跡   | 37. 広橋古墳群   |
| 38. 黑沢跡      | 39. 千代前古墳群 | 40. 清水古古墳群  | 41. 塔ヶ沢遺跡  | 42. 上野古墳群   |
| 43. 横須坂城輪窓跡  | 44. 千代太糞群  | 45. 宮古遺跡    | 46. 野原古墳群  | 47. 本郷古墳群   |
| 48. 小川内古墳群   | 49. 佐野西遺跡  | 50. 堀山古墳群   | 51. 切久保遺跡  | 52. 上前原古墳   |
| 53. 野古墳群     | 54. 佐野古墳群  | 55. 二ヶ塚古墳   | 56. 藤塚古墳   | 57. 金山遺跡    |
| 56. 桜山遺跡     | 59. 春日丘遺跡  | 60. 烧谷遺跡    | 61. 上木田前遺跡 | 62. 宮福寺遺跡   |
| 63. 上ノ山遺跡    | 64. 宮入遺跡   | 65. 午無貝利遺跡  | 66. 稲荷院遺跡  | 67. 嵩山塚跡    |
| 66. 嵩山重忠寺    | 69. 古武出土地  |             |            |             |

第2図 川本工業団地事業地周辺の遺跡分布図(縮尺1:50,000)

南台地は前期古墳の集中地域に乏しく、集落遺跡も希薄に分布していると見るべきであろう。後期は荒川両岸沿いに多数の古墳が築造され、検出数は少ないものの集落遺跡も密度の大きいものが判明しつつある。工業団地事業地内では、椎見堂遺跡から後期鬼高窓の住居跡7軒が検出されているだけであり、古墳の群在する荒川沿いの巣高地にこの時期の集落遺跡の主体が移っていると考えられる。島山地区の川端遺跡は古墳時代後期から平安時代にかけてのやや高密度の集落遺跡であり、住居跡15軒・掘立柱建物跡1棟・柱穴100基以上が検出されている。また、工業団地事業地の北方にある鹿島古墳群に隣接して所在する鹿島遺跡にも東方の施設平方裏遺跡と合わせて古墳時代から平安時代にかけての住居跡28軒が検出されている。古墳時代後期以降、島山地区と施設地区に拠点的・大集落遺跡が形成されると考えられる。周辺では荒川右岸の寄居町域に甘粕原遺跡・東遺跡が鬼高窓の遺跡として知られ、小江川沿いの本田・東台遺跡などからもこの時期の住居跡が検出されている。

後期古墳はかなり消滅しているものの多数が知られており、特に荒川河岸付近に顕著に分布している。右岸上流側から見ると、寄居町との境界付近に6世紀前半から7世紀代にかけて32基以上が築造された箱崎古墳群は全長30mの前方後円墳1基と大型円墳1基を含み、須恵器・埴輪・玉類・鉄器類が出土している。下流約1.3kmの島山地区に塚原古墳群があり、かつては前方後円墳の船塚古墳を含む數十基が知られていたが、現存していない。調査された古墳からは耳環・鉄器類・埴輪片が出土しており、船塚古墳からはかつて頭椎大刀の柄頭が出土したと言われている。さらに下流の江南町との境界付近には鹿島古墳群がある。円墳のみ88基が確認され、27基調査されており、大刀・鉄鎌など鉄器類とわずかな埴輪片・須恵器が出土している。6世紀末から8世紀にかけて築造されたと考えられる。工業団地事業地の北西には上大塚古墳群がある。6基確認され、横穴式石室以前の築造の可能性が指摘されている。鹿島古墳群の南約600mには舟山遺跡に隣接して清水山古墳群がある。11基確認され、出土した埴輪などから6世紀前半以降の築造と見られている。左岸では箱崎古墳群の対岸に花園町黒田古墳群（総数22基、6世紀前半～7世紀前半）、塚原古墳群の対岸付近に見目古墳群（総数2基、7世紀前半～後半）、北東の櫛挽町地上に三ヶ尻古墳群（総数約40基、6世紀後半～7世紀前半）、黒田古墳群の上流に小前田古墳群（総数100基以上、6世紀半ば～7世紀前半）、小江川沿いに野原古墳群（総数22基以上、6世紀後半～7世紀後半）など周辺地域にも数多くの後期古墳が知られている。これらの古墳は河原石を使用して横穴式石室を築くものが多い。なお、吉野川沿いの姥ヶ沢遺跡では6世紀前半以降の埴輪窯跡群が検出されている。

奈良・平安時代の遺跡は前述のように古墳時代から繼續して営まれるものが多いが、工業団地事業地内では、竹之花遺跡で奈良・平安時代の住居跡8軒・円阿弥遺跡で平安時代の住居跡3軒・土墳2基・白草遺跡で平安時代の56軒・掘立柱建物跡3棟・土墳5基・溝1条、四反歩北遺跡で奈良・平安時代の住居跡4軒、四反歩東遺跡で奈良・平安時代の住居跡5軒が検出されている。周辺地域では、この時期にあたる集落遺跡はそれほど多く調査されているわけではなく、台耕地遺跡や三ヶ尻地区の上辻・下辻遺跡などがまとまった集落遺跡として知られている。また、竹之花遺跡の隣接地には南に諸光寺廃寺、東に荷鞍ケ谷戸瓦窯跡の推定地があり、小金銅仏や平瓦・軒平瓦などが採集されている。実態はまだ不明確であるが、古代仏教文化を考える上で重要な遺跡であろう。



第3図 川本工業団地事業地と各遺跡位置図

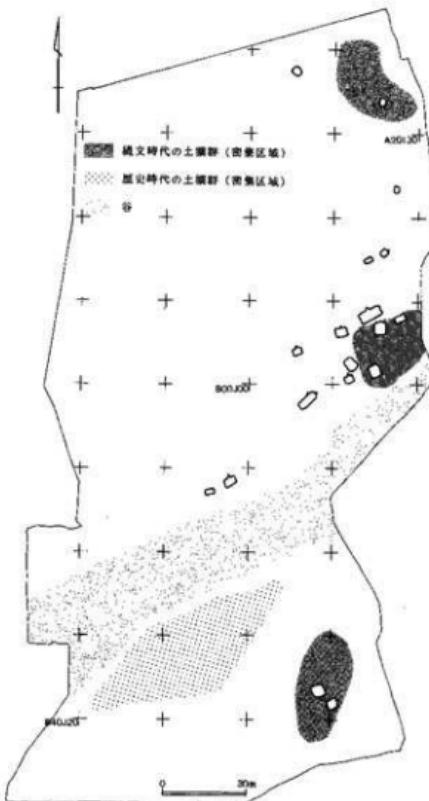
### III 竹之花遺跡の発掘調査

#### 1 遺跡の概観

竹之花遺跡は川本工業団地事業地の北東端に位置している。遺跡の範囲は南北に細長く伸びており、東西約140m、南北約270m、面積約27,000m<sup>2</sup>を測る。西には白草遺跡が隣接するが、最も近い部分で約40mの距離をおいている。大きく見ると、吉野川を北西に臨む台地上にあり、水田面との比高差3~5mの北および東に向く緩斜面に立地している。中央南寄りにやや深い谷地形部分があり、幅25~30m程で北東~南西方向に伸びている。この谷に面する一帯も緩斜面となっているが、谷の南側は遺跡のやや北向きの斜面が続いている。

遺構は緩斜面と平坦面の変換点および斜面部に集中している。特に縄文時代の住居跡・土壙は東側斜面を意識した位置をとるものが多く、奈良・平安時代の住居跡は中央谷部の北側斜面に集中している。遺構の内訳は縄文時代の住居跡10軒、土壙115基、埋甕9個体、集石遺構5基、奈良・平安時代の住居跡8軒、近世以降と考えられる歴史時代の土壙415基、溝3条である。

縄文時代の住居跡は前期後半の黒浜・諸磯a・諸磯b期に属するものであり、他の時期のものを含まない。また縄文時代の土壙も住居跡の時期に対応しており、しかも住居跡の周辺に集中的に分布する傾向がある(第4図)。集石遺構は調査時には12基検出したが、6号集石遺構以降の7基は近代以降に路肩に石を寄せて埋め込んだ結果できたものと判断して遺構としての扱いをしなかったので本書の記録からは除外しておいた。ただしB00-J07グリッドの「10号集石遺構」には縄文時代の石器として見るべきものがあるため、図示し記述しておいた。集石遺構は時期不明瞭であるが、わずかな遺物から中期後半を中心とした時期と考えた。住居跡や土壙に認められるような分布の特徴はない。埋甕は黒浜・諸磯a・加曾利EⅢ期のものであり、諸磯a期の3点



第4図 竹之花遺跡主要遺構分布概念図

## 竹之花

のうち10号埋甕は調査中に20号住居跡に伴うものであることが判明した。

奈良・平安時代の住居跡は主軸方向が比較的近似しており、住居間距離も十分とされている。奈良時代前半と奈良時代末～平安時代初期の2つの時期に偏っている。短辺と長辺の比較が1:2.5、1:3になる「長屋状」の住居跡が2軒含まれていること、カマド構築材に瓦が使用される住居跡があることが注目される。

近世以降と考えられる土壌は遺跡の全域に広がっており、形態・規模はバラエティに富んでいる。しかしながら、長辺1～2.5m、短辺30～50cm程の長方形を呈するものが多く、方向性を揃えて集中する区域もいくつかある。特に谷部南側の緩斜面には密度の高い土壌群があるが、ここには比較的方向性の揃った200基以上の長方形土壌が集中する。遺物が少ないため、年代・性格の特定が困難である。溝も近世に属するものと思われ、何らかの建築物に伴うものであろうが、やはり遺物がないために推定の域をでない。

第5図に竹之花遺跡の標準土層を示した。以下に各層の様相について述べておこう。

第Ⅰ層：暗褐色土。白色粒子を若干量、ローム土を少量含む。軟かく、間隙もややあり、しまりも良くない。層の厚さ25～35cm。

第Ⅱ層：褐色土。ローム土をやや多く含む。軟かく、しまり良い。層の厚さ10～15cm。

第Ⅲ層：黄褐色土。ソフトローム。軟かく、しまり良い。層の厚さ15～25cm。この層の上面で大半の遺構を確認することができた。

第Ⅳ層：褐色土。やや硬く、しまり良い。粘質である。層の厚さ8～12cm。

第Ⅴ層：暗黄褐色土。硬く、しまり良い。強い粘質の土である。層の厚さ20～30cm。

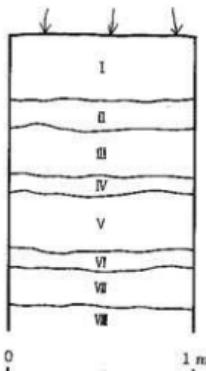
第Ⅵ層：褐色土。やや硬く、しまり良い。強い粘質の土である。層の厚さ5～15cm。

第Ⅶ層：茶褐色土。硬くしまり良い。強い粘質の土である。層の厚さ18～40cm。

第Ⅷ層：白色粘土層。しまり良く、たいへん粘質。層の厚さ20cm以上。

第Ⅱ層は遺跡北半部で欠落する区域も広く存在し、標高の高い区域では第Ⅲ層下部にあたる部分まで現地表面から20cm程度しかないという状況であった。おそらく山林に利用されていた時代が割合長かったため、表土の堆積が緩慢となってしまったためであろう。

この層序は川本工業団地事業地となる台地全体に共通するようであるので、円阿弥遺跡の遺跡概観の項目においては省略する。



第5図 標準土層図

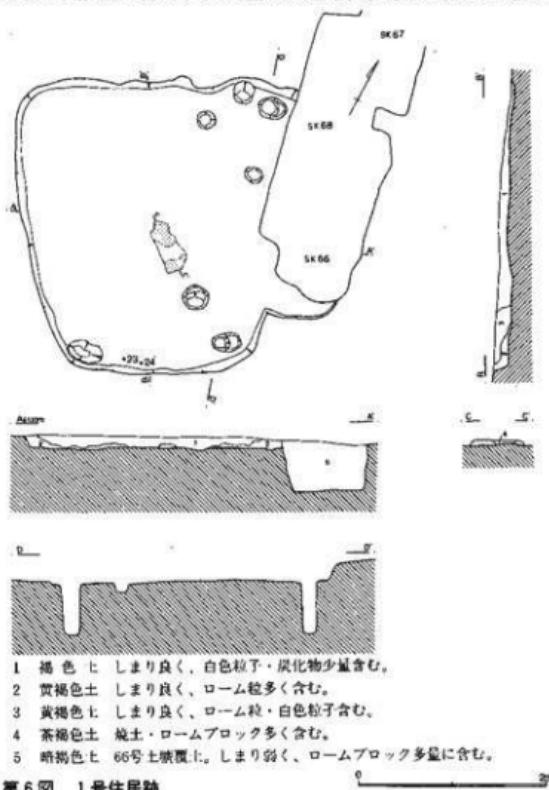
## 2 遺構と出土遺物

### a 繩文時代の遺構と出土遺物

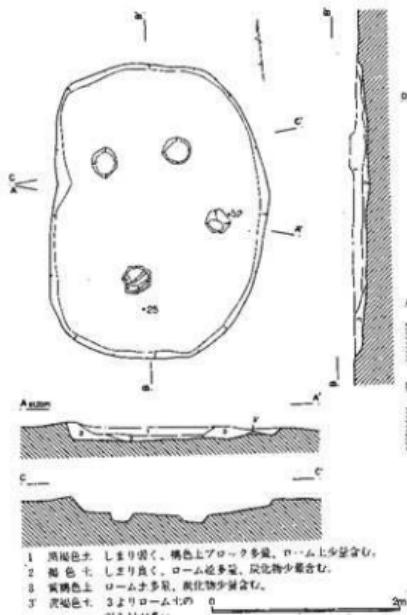
#### (1) 繩文時代の遺構

##### 1号住居跡（第6図、遺物第30図）

1号住居跡は遺跡北端部に近いA12—144グリッドに検出された。主軸方向はN—32°—Wでやや西に振れている。南北約3.15m、東西約2.65mを測り、小型の住居跡である。不整台形であるが、隅丸方形に近い形態を呈する。北向きの斜面に向かって作られていたため、北側の壁は流れ気味で浅かった。東側を66・67・68号土壇に切られており、住居跡の重複もあったかもしれないが、攪乱等のためよくわからなかった。中央やや南寄りに炉跡と推定される焼土塊が2個あったが、まわりの床面の遺存状態から考える限りかなり痛んでいるようであり、正確な形状・大きさは不明である。おそらく長径60cm、短径30cmぐらいの橢円形であったものと思われる。焼上の厚さは約5cm程度しかなかった。北東・南東のコーナーに1本ずつ深さ55cm程の柱穴があり、それ以外にも北東柱穴の周囲に3個、南東柱穴のやや内側に1個、南西コーナーに1個の計5個の深いピットが検出されたが、いずれも深さ20cm以下であった。床面までは北壁付近では5cm以下、南壁付近で15cm程、平均的に約15cm程度の覆土が残っていたが、やや攪乱気味で灰黒色気味の暗褐色土を中心とする覆土であった。床面は全体的に硬いが、凹凸が目立ちやや痛んでいるようであった。遺物はほとんど出土しておらず、住居跡の帰属時期は明確でないが、僅少な遺物から判断する限り、黒浜期に属する住居ということになる。



第6図 1号住居跡



第7図 3号住居跡

## 3号住居跡（第7図、遺物第30図）

3号住居跡は遺跡北東隅に近く、1号住居跡の東南東約30m、A16—134グリッドに所在する。遺跡東部の緩斜面から平坦面の移行部分に位置する。南北（長軸）約3.1m、東西（短軸）約2.3mを測り、小判形に近い形態を呈する。主軸方向はN-7°—Eである。周間に多くの土壌があるが、土壌との重複関係はない。ピットが4個検出されたが、いずれも深さ10cm以下であり、主柱穴と考えることはできない。平面プランの確認が困難であったため、3号住居跡とその周縁の土壌群は覆土が浅くなってしまっている。覆土の厚さは平均15cm程度である。覆土は茶褐色土とやや灰黑色味の暗褐色土であった。ピットは円形に近く、径20~30cmを測る。北側の2個は東西に並んでいるが、南側の2個は不整形であり、それぞれ東寄り、中央南寄りと偏っており、整然としていない。床面はおおむね平らであるが、中央がわずかに低くなっている。床面はしまりはよいが、若干軟かめであった。炉は検出されなかった。出土遺物はわずかであったが、黒浜期に属するものであった。

## 4号住居跡（第8図、遺物第30図）

4号住居跡は3号住居跡の約18m南方にあり、やはり遺跡東部の緩斜面から平坦面への移行部分に検出された。A26—132グリッドに所在する。南北（長軸）約2.6m、東西（短軸）約1.9mを測り、隅丸長方形を呈するが、小判形にも近い。主軸方向はほぼ正方位で3号住居跡よりもひとまわ

り小振りで、木遺跡の縄文時代の住居跡のなかでは最小であった。やはり、斜面で覆土が流れてしまい、浅い覆土であった。ピット4個と炉跡かと思われる皿状の掘り込みが1カ所床面から検出された。ピットはやはり浅く、柱穴と考えることはできないものであった。西側のピット2個は南北に並んでおり、径25~30cm、深さ5cm程度で、北東のピットは径20cm、深さ10cm程である。南東のピットは東壁寄りになっており、4個のピットの配列は整っていない。炉跡と思われる皿状の掘り込みは北側のピット2個に東西から挟まれており、床面中央からかなり北寄りの位置にある。長径45cm、短径35cm、深さ7cmを測り、わずかに燒土・炭化物を含む暗褐色土が堆積して埋まっていた。覆土は平均10cm、最深部でも20cmには達せず、東壁付近はほとんど流れてしまっていた。茶褐色土を基質とした土を覆土としていた。床面は凹凸が目立ち、やや硬めであった。出土遺物は僅少であり、黒浜期に属するものである。

#### 6号住居跡（第9図、遺物第30図）

6号住居跡は4号住居跡の南南西25m程の位置にあり、遺跡東部緩斜面からやや中に入った平坦面に所在する。隣接して、奈良時代終末から平安時代初期にかけての5号住居跡が検出されているが、重複はしていない。1・3・4・6号住居跡はほぼ等間隔に近い感じで三カ月形に配列されているように見えるが、若干の時間的前後関係があり、意図的配置ではなかろう。

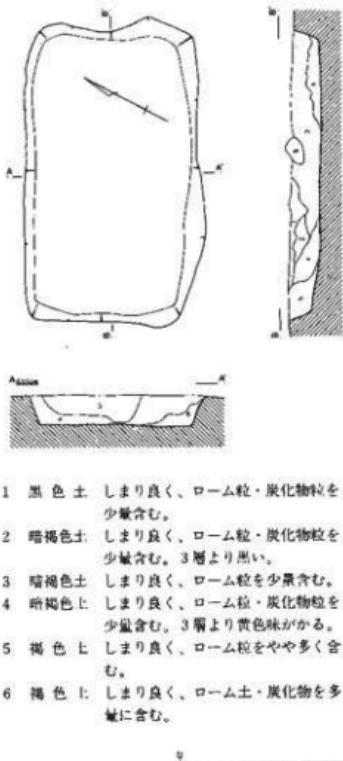
N-68'-Eの主軸方向となり、大きく東に偏した方向であるが、短辺を主軸方向とすると、1号住居跡の主軸方向に近いよう見受けられる。A34-I35グリッドに所在する。

隅丸長方形の形態を呈し、南北（長辺）3.25m、東西（短辺）1.95mを測る。床面には柱穴、ピット、炉跡等が検出されず。平坦面所在の住居であったため、覆土も深く弁当箱状掘り込みであった。覆土は32~35cm程であった。床面はやや硬く、ハードローム面で造成されているようであった。覆土は茶褐色土を中心としており、比較的軟かい土であった。

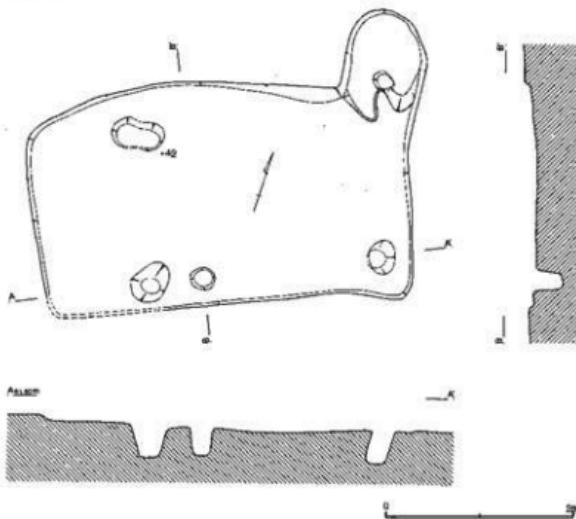
出土遺物はやはり僅少で、黒浜期あるいは諸磯a期に属するものであった。

#### 11号住居跡（第10図、遺物第30図）

11号住居跡は6号住居跡の南南東22mの位置にあり、12・13・20号住居跡と共に遺跡中央谷部に



第9図 6号住居跡



第10図 11号住居跡

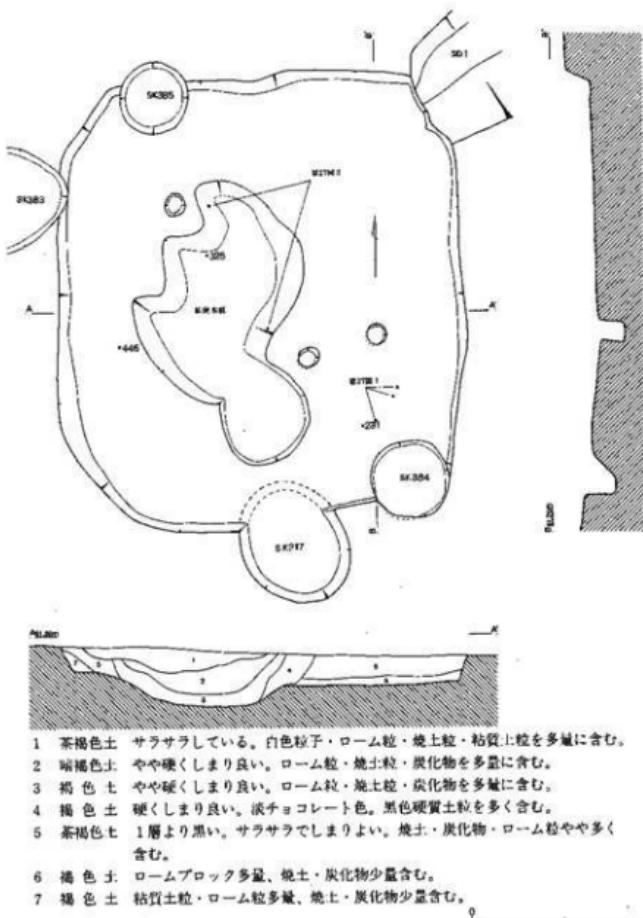
隅丸長方形を呈し、東西（長辺）約4.1m、南北（短辺）約2.38mを測る。東北コーナーには南北80cm、東西90cm程の楕円形の突出部があるが、土壤との重複かもしれない。ただし、この部分の掘り込みの深さは11号住居跡床面のレベルよりわずかに5cm深いだけであり、深さ約10cmの柱穴状ピットを伴うため、とりあえず住居跡の付属施設として扱っておきたい。また、南東コーナーに1本および約2~2.5m西側の南壁沿いに2本柱穴があり、30~35cm程の深さがある。この南西コーナー寄りの柱穴に対向する位置の北壁寄りに二個重複した状態のピットがあるが、深さ20cmであり、柱穴になる可能性もある。突出部のピットと合わせて4本柱穴のように見えるが、当面保留しておきたい。主軸方向は長辺の方向をとると、N-67°-Eである。

遺物はやはり数少ないが、諸磯b期に属するものである。

#### 12号住居跡（第11図、遺物第27・31図）

12号住居跡は11号住居跡の西4mに隣接して検出された。11号住居跡はA42—132グリッド、12号住居跡はA43—134グリッドに所在する。南北（長辺）4.8m、東西（短辺）4.45mを測り、中型の住居である。主軸方向はほとんど座標北方に向っている。まわりに縄文時代の土壤が多数分布しており、217・383・384・385号土壤と重複している。住居の掘り込みはやや深く、平均25~30cm程である。やや南北に長い隅丸長方形を呈する。床面には深さ20~30cmのピットが3個あり、床面中央部東寄り・南寄り・北西寄りに分かれ、あまり規則的な配置とはいえない。また床面中央部北寄りには径20cm程の焼土の集中が見られた部分もあったが、灰跡と考えるには曖昧であったので特に図示しなかった。なお、床面中央部からやや西寄り部分にかけて3m×1.6m程の風倒木痕と思われる攪乱孔があり、床面下25cmまで及んでいた。床面はおおむね平らであるが、ローム下の粘土層ま

面している。谷の斜面にはかかっていないが平坦面からの移行部にある。当初、谷の斜面の一部と考えて掘り始めたが、遺物が若干集中することに覆土が谷の堆土よりわずかに黒かったため、住居跡として確認することができた。谷地形の形成で住居跡の掘り込みの上部は削られてしまい、平均5cm程の浅い覆土であった。覆土は黒色土でしまりがよく若干軟かかった。



第11図 12号住居跡

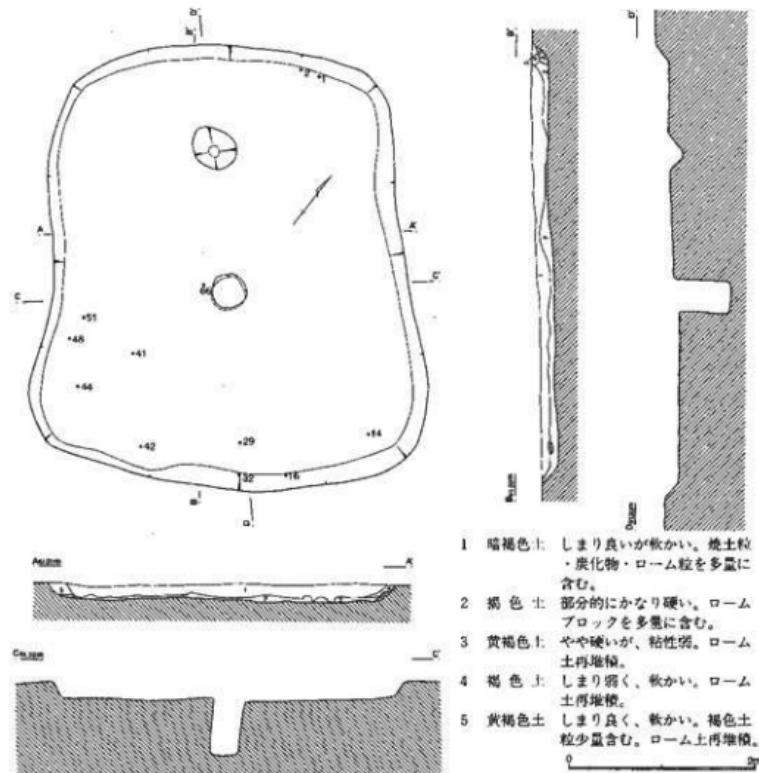
で掘り込まれており、中央部はわずかに下がっていた。

覆土は茶褐色土を基調としており、全体的にしまりがよくやや硬い感じであった。ローム下の粘土を若干含んでいる部分もあった。

遺物は少なめであったが、特徴的な文様をもつ土器片がややあり、諸磯 b 期に属する。

13号住居跡（第12図、遺物第45図）

13号住戸跡は12号住戸跡の南西7mに位置し、南東方向緩斜面に一部かかる形で所在している。

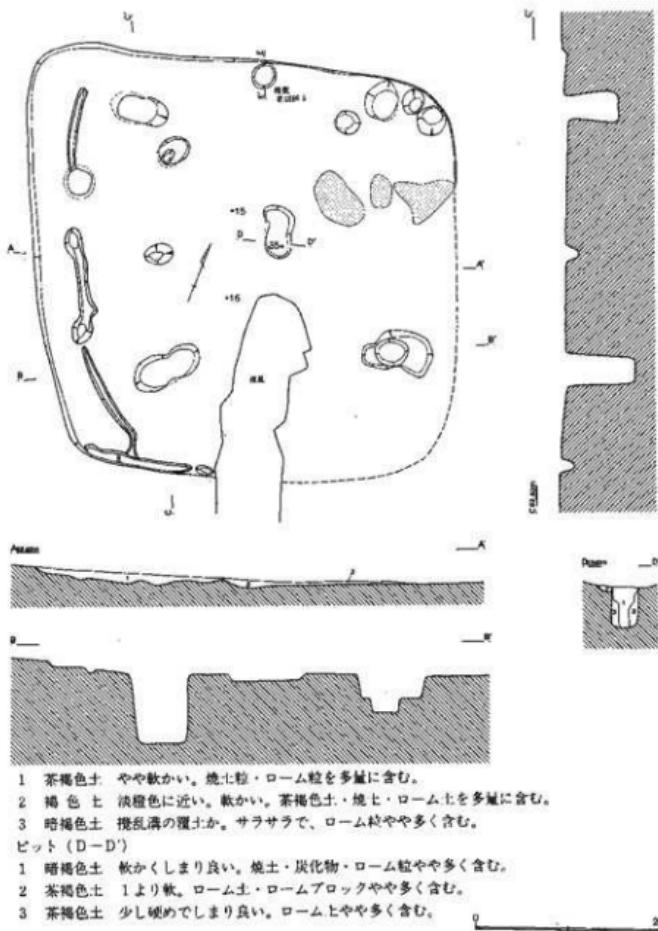


第12図 13号住居跡

A47—I37グリッドの位置にあたる。南北（長軸）4.7m、東西（短軸）は3.8~4.3mを測り、東西両壁が中央でわずかにくびれる不整隔丸長方形を呈する。壁の立ち上がり方はかなり緩く、床面も斜面に沿ってやや傾斜していた。床面はあまり凹凸がなく、軟かめであった。床面中央には深さ約60cmの柱穴状ピットが1個、中央北寄りには深さ約15cmの皿状掘り込みが1個検出されている。皿状掘り込みは炉跡の可能性もあるが、その堆積土にはほとんど焼土等が含まれず、茶褐色土とロームの混ざり合った土で埋まっていた。この住居跡全体の覆土も茶褐色土を基質としていたが、しまりがよく硬めであった。住居の主軸方向はN—40°—Wでかなり西に振れている。遺物はわずかであり、土器はまったく検出されなかったので、時期は決定できない。

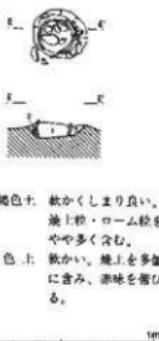
## 18号住居跡（第13・14図、遺物第25・28・30図）

18号住居跡は遺跡中央谷部の南側の台地上に所在しており、19号住居跡に隣接して検出されている。東側が緩斜面となっているため、東壁の大部分と南壁の東側半分は失われてしまっていた。



第13図 18号住跡

住居の主軸方向はN—27°—Wでやや西に振れている。南北約4.6m、東西約4.4mを測り、やや歪んで台形状の形態であるが、おそらく方形を意識したものと考えられる。西壁の約50cm内側には幅10cm程の壁溝状の溝が断続的に走っており、南壁の壁溝につながっている。ピットは数多く検出されており、北東コーナー付近に4個、北西コーナーの内側1~1.5m程の位置に3個、床面中央と中央西寄りに各1個、南東コーナー・南西コーナーの約1m内側に各1個、合計11個である。このうち各コーナーの内側にあるものは深さ45~70cmと深く、4本柱穴に復元できそうである。その他の



- 1 茶褐色土。軟かくしりまい。施上物・ローム絆をやや多く含む。
- 2 黄色土。軟かい。地J.を多量に含み、油味を帯びる。

第14図 18号住居跡埋裏

ものもやや深いものが多く、建て替えによる柱穴の掘り返しとみてよいかもしない。床面中央のピットも深さ45cmの柱穴状の掘り込みであり、本来数軒の住居跡の重複を考えるべきかもしれない。また床面中央北東寄りから東壁にかけて焼土の広がりが3カ所あるが、いずれもその厚さが3cm以下であり、確証がないがいちばん内側の不整梢円形のものが炉跡で内側の二つは擾乱で流れた土と考えておきたい。この推定「炉跡」は長径65cm、短径40cmの大きさであった。北壁中央内側には埋甕が埋設されていた（第14図、第25図4、No.44）。埋設場所は30cm×26cmで土器の大きさよりひとまわり大きいものであった。上器は検出面から18cm下まで埋められていた。床面はかなり痛んでおり、凹凸が顕著であった。また、擾乱溝が住居跡中央を南北に走っていた。覆土はほとんど残っていなかったが、茶褐色土を基質とする軟かな土であった。遺物はあまり多くなかつたが、諸磯a期に属するものであった。

#### 19号住居跡（第15・16図、遺物第28・32図）

19号住居跡は18号住居跡の南東約3mにあり、18号住居跡はB36—I41グリッド、19号住居跡はB38—I39グリッドに所在する。この住居跡も緩斜面のために東壁のほとんどが失われ、西壁も大きな擾乱溝のために北東コーナーの位置以外は不明瞭であった。残存部で測ると南北3.5m、東西3.7mであり、隅丸方形を呈するやや小型の住居跡であったことがわかる。各コーナーに検出されたピットはいずれも長径60~80cm、深さ50~60cmの大きなもので、柱をひきぬかれた柱穴と考えることのできるものであった。それ以外に9個のピットがあり、住居の東半分に偏在している。床面中央のものとその南側の2個はやや深さのあるもので、南西コーナーの外に出ている1個を含めてもう1軒分の柱穴を考えることができそうであるが、埋甕の散在状況からはもう何軒か住居が存在したことを考慮すべきかもしれない。

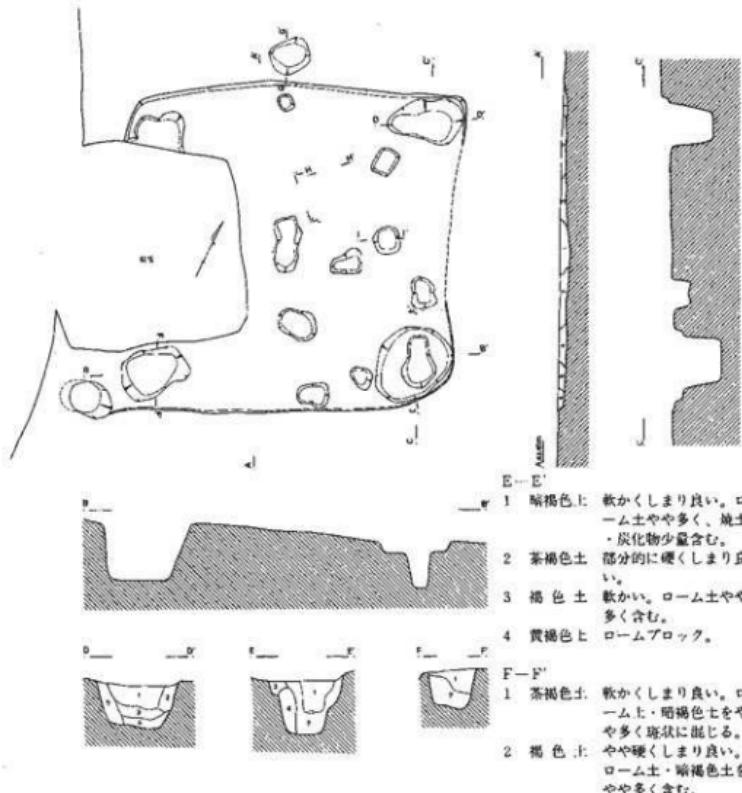
埋甕は埋設場4カ所に5個体が埋設されていた（第16図、No.50・51・57・58）。ただし、No.50は床面より下に上器が埋まっておらず、埋甕とすることはできないかもしれない。いずれも住居跡の北部ないし東部に偏在しており、住居の入り口等の施設の位置と関係があるかもしれない。No.57は入れ子状に2個体埋設されており、そのうち外側の土器とNo.58は文様の特徴が共通し、同一時期とすることができるかもしれない。No.50は住居外の小土壤に埋設されていた。土壤のより住居側を選んで埋めているように見受けられ、住居に関わりが深いことは疑えないであろう。

床面は北壁寄りの一部にしか残っていなかったが、凹凸が顕著で硬めであった。また、住居の主軸方向はN-22°-Wでは18号住居跡とは同じように西に振れている。

遺物は埋甕5個体以外にも若干の破片が出土しており、黒浜期のものと諸磯a期のものが混在している。ここからも住居の重複があったことを推定することができる。

#### 20号住居跡（第17・18図、遺物第27・30図）

20号住居跡は13号住居跡の東南東5mの位置にあり、A48—I34グリッドに検出された。緩斜面

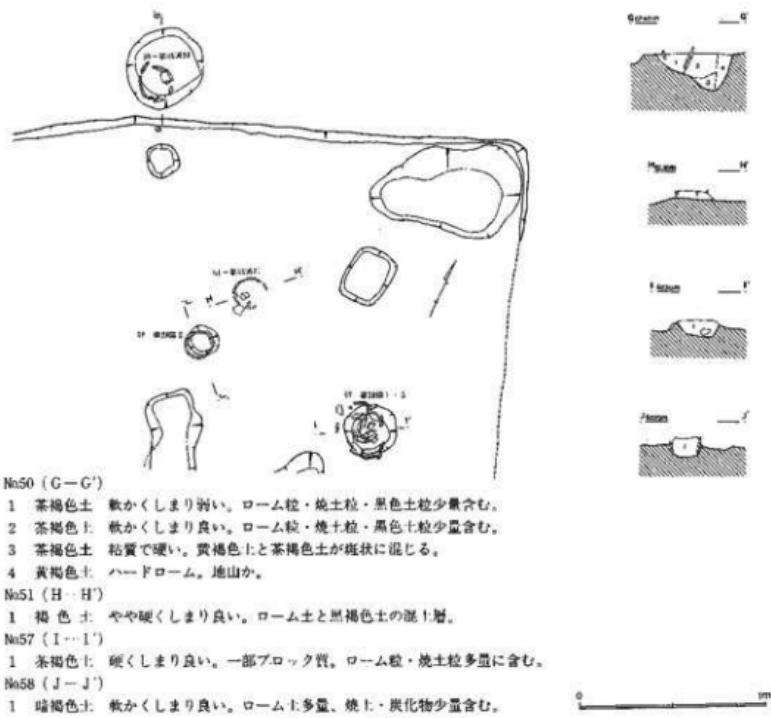


- 暗褐色土 やや硬くしまり良い。ローム土・ロームブロックやや多く、焼土・炭化物少量含む。
- 茶褐色土 ローム土・ロームブロックやや多く、焼土・炭化物少量含む。
- 褐色土 部分的に硬い。ローム土・ロームブロックやや多く、焼土・炭化物少量含む。
- 黄褐色土 ローム土堆積。茶褐色土やや多く、焼土・炭化物少量含む。
- 黄褐色土 4層より黄色い。やや硬い。ローム土多量、茶褐色土少量含む。

D-D'

- 暗褐色土 軟かくしまり良い。黒色土と褐色土が斑状に混じる。焼土・炭化物・ローム土やや多く含む。
- 褐色土 軟かくしまり良い。焼土・炭化物をわずかに含む。
- 茶褐色土 軟かくしまり良い。ローム土をやや多く含む。
- 褐色土 かなり硬く粘質。ローム土主体。茶褐色土を少景含む。
- 黄褐色土 ロームブロック・ローム土主体。褐色土をやや多く含む。

第15図 19号住居跡



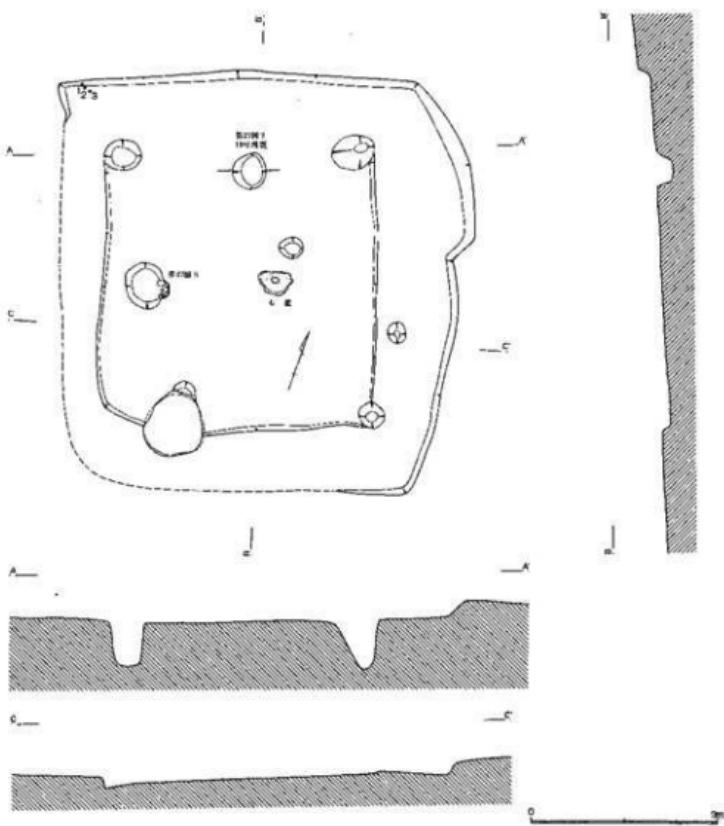
第16図 19号住居跡埋蔵

に移行した部分に所在していたため、当初住居跡であるとは気が付かず床面の大半が露出してしまってから、埋甕・石皿等の出土および柱穴の検出によって住居跡であることがわかった。

覆土は谷部の堆積とほぼ同じであり、しまりよくやや敷かい黒色土であった。床面は谷の傾斜に沿ってわずかに傾斜している。

南北4.45m、東西4.45mを測り、方形に近いがやや不整形である。主軸方向はN-20°-Wでやや西に振れている。南壁と西壁は斜面のために失われている。掘り込みは二段になっており、住居の拡張を考えることができるかもしれない。この二段目の掘り込みは南北3.1m、東西3m程であり、小型の住居である。これを縦横それぞれ1.5倍、面積2倍強に拡張して中型の住居にしたことになる。

柱穴は掘っていないが、北寄りの柱穴状ビットは北東側が深さ55cm、北西側が深さ50cmである。この2本の柱穴の間に埋甕があったが、これは10号埋甕として取り上げている。これ以外にビットは5個あるが深さ30cm以下であり、南東コーナー内側のものを除いて柱穴とは考えにくい。また、住居中央に石皿が置かれていたが、よく使い込まれたせいか中央に孔が空いていた。炉は検出され



第17図 20号住居跡

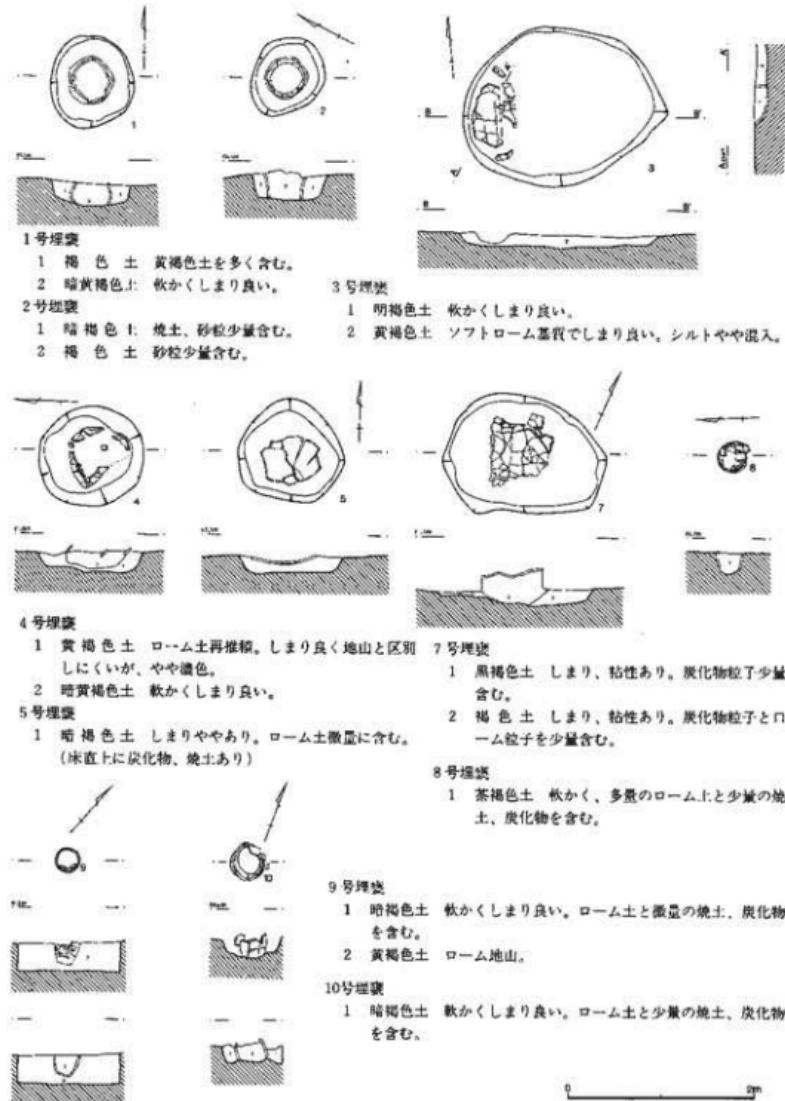
ていない。

遺物は多くないが、黒浜期のものと諸職b期のものが混在している。黒浜期の遺物は流れ込みであろう。

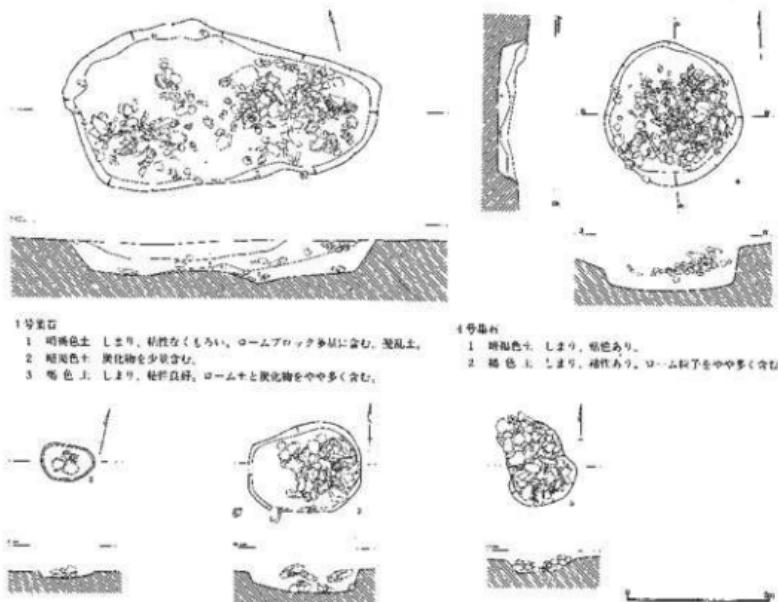
#### 1号埋甕 (第18図1・第29図1)

住居跡等に伴わない埋甕は合計9個体検出した。ただし、途中まで埋甕扱いしていた6号埋甕を土器の残存状況・出土状態から不適当なため埋甕からはずしたため、番号は10号までとなっている。おおむね遺跡全体に散在しており、埋設位置や出土状態に特別な規則性はないようである。以下に出土状況を番号順に記述しておく。

1号埋甕は1号住居跡の東約3mの地点、A12-I43グリッドに検出された。土器は50cm×44cm



第18図 竹之花遺跡出土埋甕



第19図 集石遺構

の径の円形の埋設壙の中央に逆位で据え置かれており、底部は欠失していた。検出面から埋設壙の底面までは12cm程であった。ロームを基質とした軟かい黄褐色土で埋められていた。

#### 2号埋壙（第18図2・第29図2）

2号埋壙は1号住居跡の南南西18mの位置に検出された。46cm×38cmの径の楕円形埋設壙の中央に正位で据え置かれていた。検出面から埋設壙の底面までは15cm程であった。砂粒を若干含む軟かい暗褐色土および褐色土で埋められていた。グリッド位置はA18—I46である。

#### 3号埋壙（第18図3・第28図7）

3号埋壙は1号住居跡の南西約60m、4号住居跡の西約75mの位置にあり、遺跡の中で標高の最も高い場所に所在している。3号埋壙から東南東12mの位置にある4号埋壙も同様である。110cm×84cmの径の楕円形の埋設壙の西端に口縁部を内向きにして横倒しの状態で出土した。検出面から埋設壙の底面までは7cm程の深さしかない。ロームを基質としたしまりよい黄褐色土で埋められていた。グリッド位置はA29—I07。

#### 4号埋壙（第18図4・第29図3）

4号埋壙はA31—J03グリッドに検出された。4号住居跡の西南西約65mの位置である。56cm×53cmの径の円形の埋設壙の中央に口縁部を北に向かって横倒し状態で出土した。検出面から埋設壙の底面まで12cm程の深さがある。軟かくしまりよい暗黄褐色土および黄褐色土で埋められていた。

## 5号埋甕（第18図5・第29図4）

5号埋甕は1号住居跡の西北西11m遺跡北端部の北向き緩斜面に検出された。グリッド位置はA10—I49である。57cm×55cmの径の不整円形の埋設壙の中央に口縁部を北向きにして横倒し状態で出土した。検出面から埋設壙の底面まで10cm程の深さがある。ややしまりよい暗褐色土で埋められており、埋設壙の底面には炭化物・焼上が認められた。

## 7号埋甕（第18図7・第25図2）

7号埋甕は4号住居跡の北東14mの位置の遺跡東端部に検出された。グリッド位置はA22—I29である。90cm×62cmの径の椭円形の埋設壙の中央に口縁部を西向きにして横倒し状態で出土した。上器は埋設壙底面から15~20cm程浮いていた。埋設壙検出面から底面までは10cm程しかなかった。しまりよくやや粘質の暗褐色土で埋められていたが、この土は谷の埋土とはほとんど変わらないものであった。

## 8号埋甕（第18図8・第28図4）

8号埋甕は18号住居跡の北12mの位置にある。遺跡中央谷部に対する北向きの緩斜面に所在し、周囲には縄文時代に属する548・568・569号土壙がある。グリッド位置はB31—I40である。埋設壙は土器と同じ大きさであり、正位に埋められ、土器内部にはローム土を多く含む茶褐色土が詰まっていた。検出面から埋設壙底面までは12cm程であった。

## 9号埋甕（第18図9・第26図3）

9号埋甕は13号住居跡の南西約23m、17号住居跡の南約3mの遺跡中央谷部に面した南東向き緩斜面に所在する。埋設壙は土器と同じ大きさであり、やや東に傾いているが正位に埋められ、土器内部には軟らかくしまりよい暗褐色土が詰まっていた。検出面から埋設壙底面までは12cmの深さがある。グリッド位置はB03—I42である。

## 10号埋甕（第18図10・第27図6）

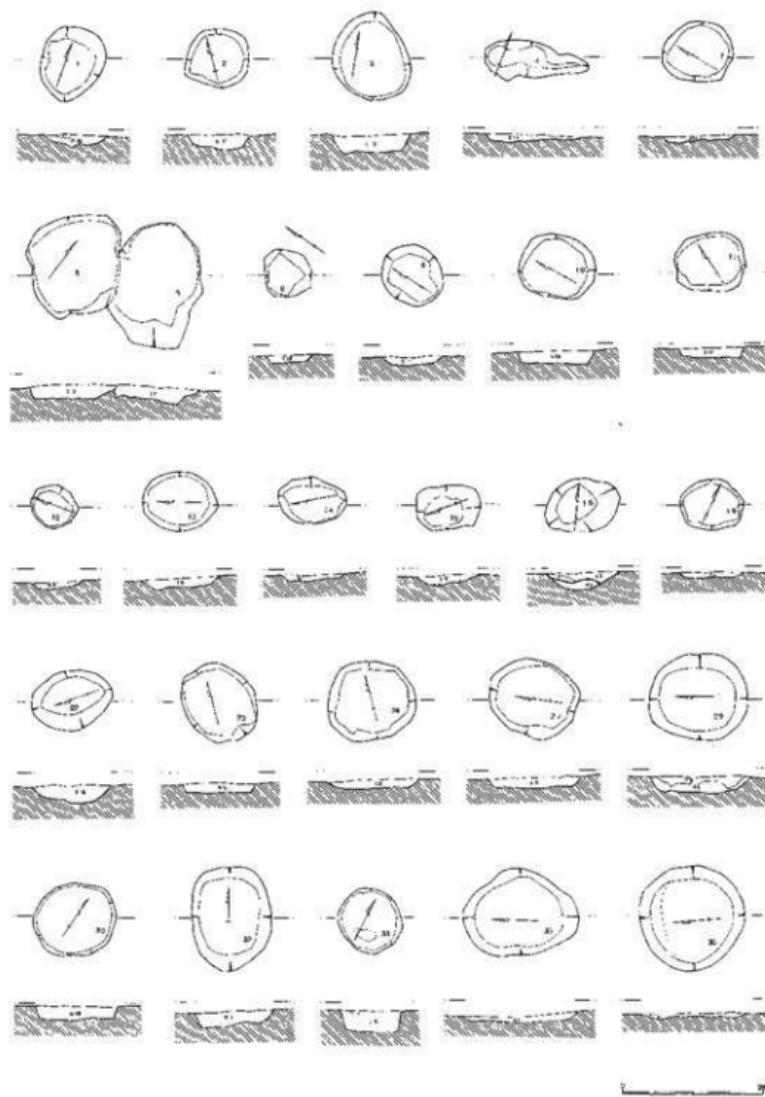
10号埋甕は前述のように20号住居跡の北壁寄りの床面に埋設されていた。径35cmの円形の埋設壙の中央に正位で据え置かれていた。検出面から埋設壙底面まで10cm程であり、軟らかくしまりよい暗褐色土で埋められていた。ただしこれは谷部埋土の特徴に近いものであり、谷の埋没によって土壙の同化作用があったことが考えられる。同じ斜面に属する住居跡や土壙においても同様である。グリッド位置はA47—I35。

遺構に属していない埋甕は以上の9個体である。これらの土器の特徴は後述するが、帰属時期は1~5号埋甕が縄文時代中期後半加曾利EⅡ期、7号埋甕が黒浜期、8~10号埋甕が諸磯a期である。

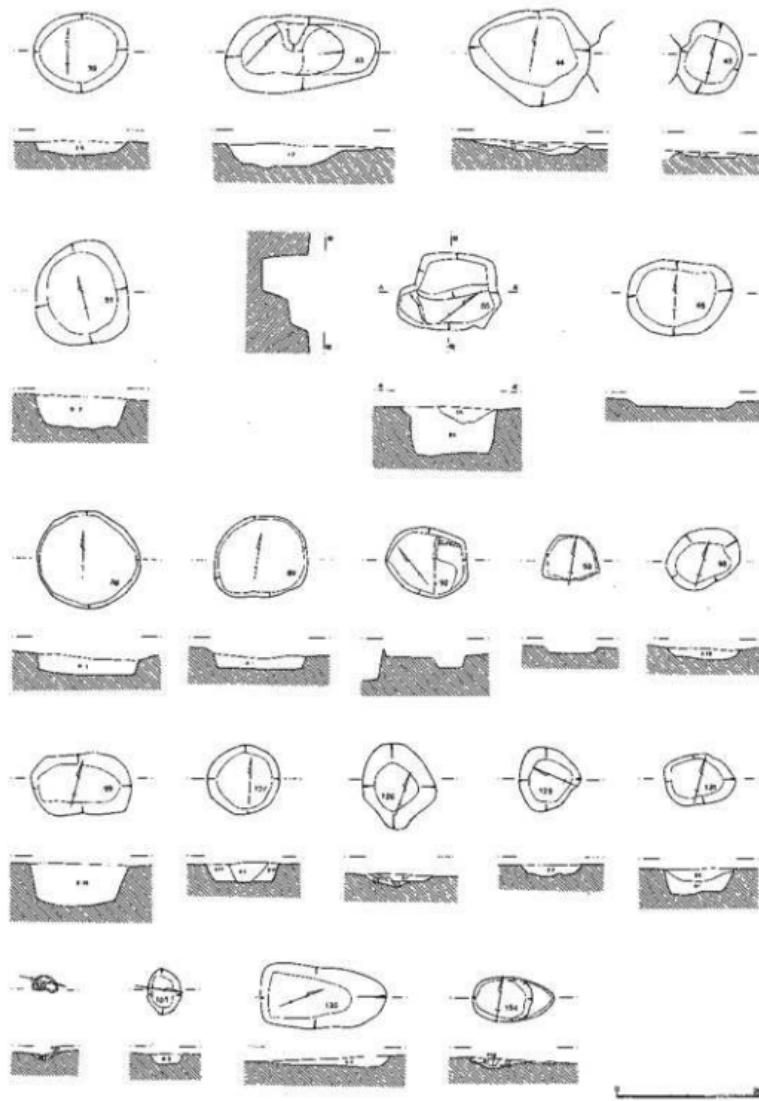
## 1号集石遺構（第19図）

集石遺構は大小さまざまなもののが検出されている。5基を確認しているが、このうち4基は遺跡北部に偏在し、その中の2・3・4号集石遺構は遺跡北東部の1・3・4号住居跡周囲の土壤群に付随して所在している。以下に順次遺構の概要を述べる。

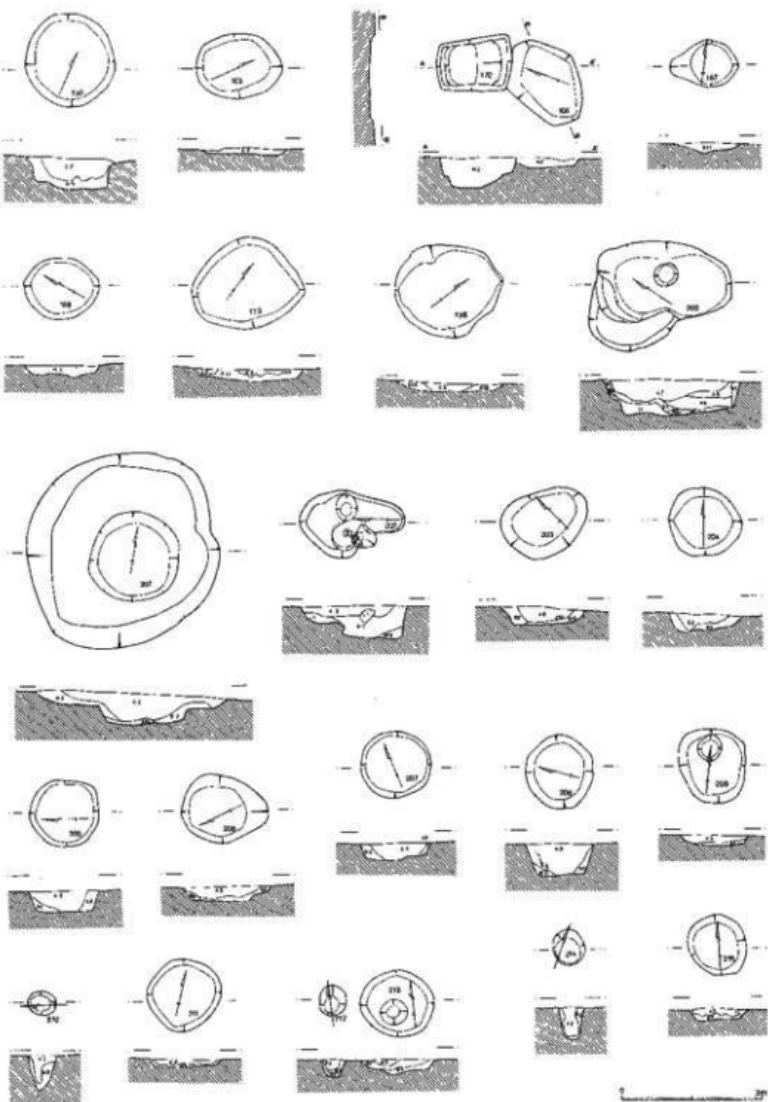
1号集石遺構は1号住居跡の西南西約40mの位置にあり、A18—J06グリッドに所在する。本遺跡で最も大きく、長径4.5m、短径2.35m、深さ62cmの東西方向に長い土壙の中に326点の砾が堆積

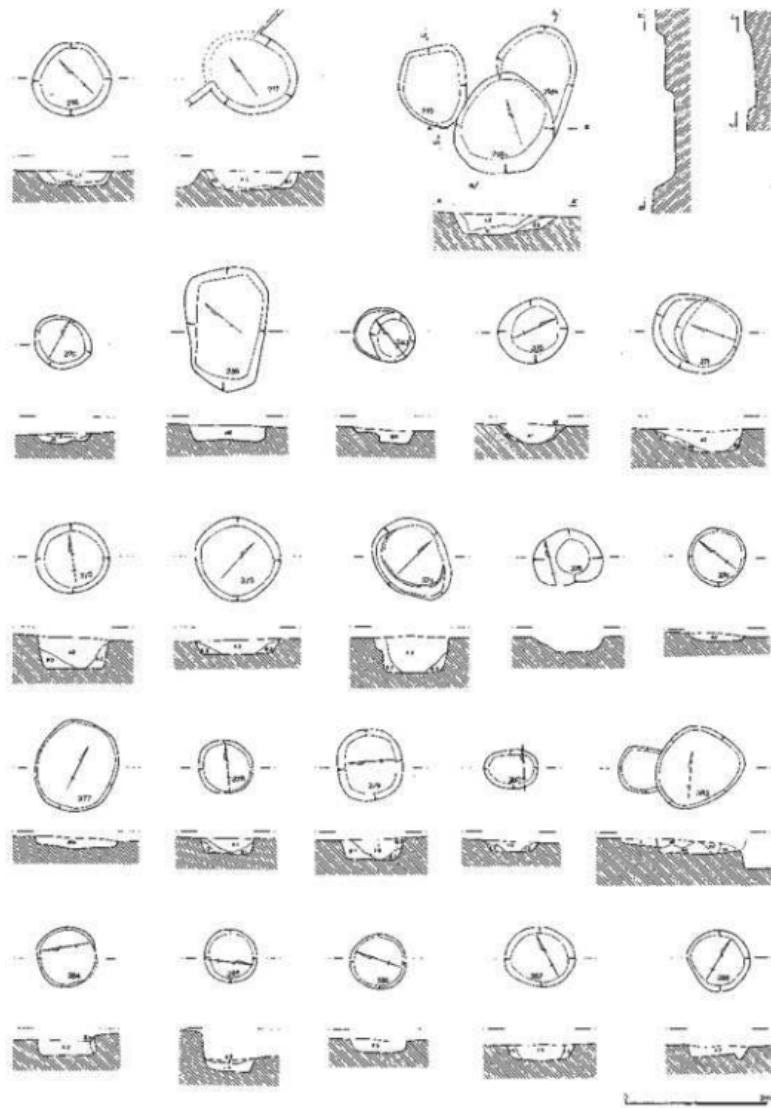


第20図 調文時代土壤 (1)

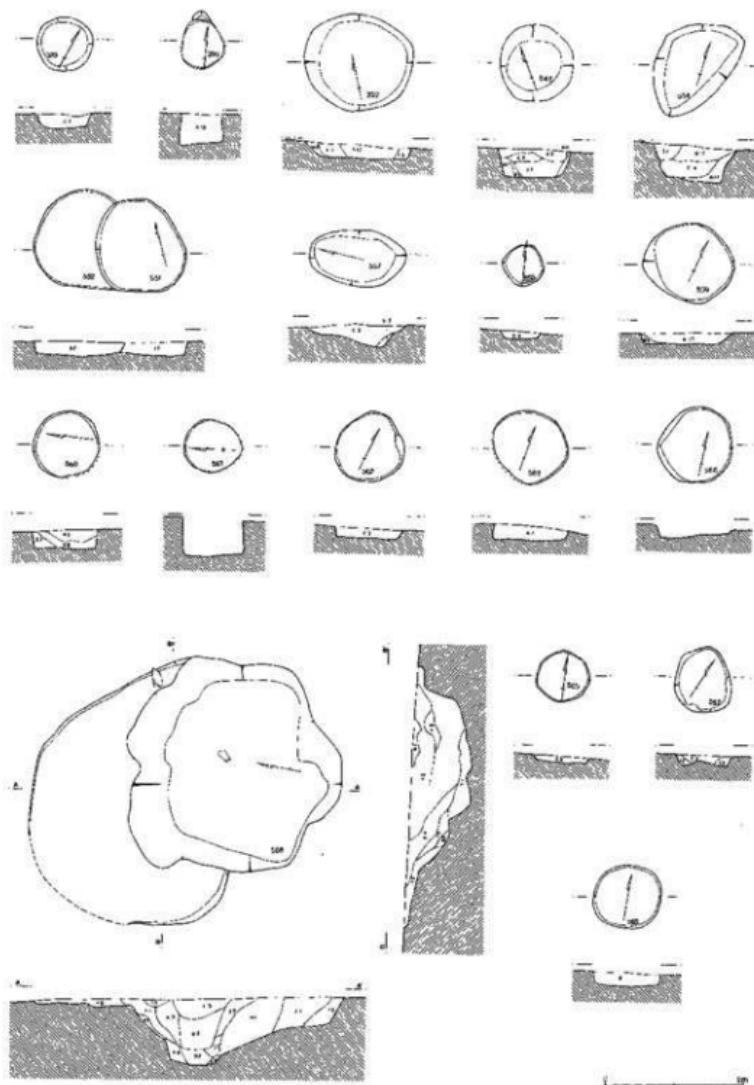


第21図 縄文時代土器 (2)





第23図 漢文時代土壤 (4)



第24図 鷦鷯時代土壙 (5)

## 竹之花

していた。礫の堆積の厚さは最高40cm程あり、礫の集中部も東西2カ所に分かれている。火を受けて破碎した礫も若干見受けられたが、ここで恒常に火を焚いていたと考えられる程には量的に多くはなかった。礫堆積の上面は中央付近で約30cm程窪んで、遺構全体で見れば浅い皿状の掘り込みのようになっていた。ただし礫堆積自体は他の集石遺構よりも密集の度合いが蜜ではなく、礫の量よりも堆積土の量の方がかなり多かった。また破碎礫は礫堆積上面付近と最下層付近で多くなる傾向があった。礫堆積中の堆積土は燒土・炭化物をやや多く含む暗褐色土ないし褐色土であり、しまりはよいが軟かい土であった。

### 2号集石遺構（第19図2）

2号集石遺構は1号住居跡の南西15m、3号住居跡の西18mの位置にあり、A10—I46グリッドに所在する。本遺跡で最も小さく、長径77cm、短径51cmの梢円形土壇の中央部に厚さ約20cm、11点の礫の堆積が見られた。検出面から土壇底面までは10cm程である。礫堆積周囲の堆積土は少ないが、軟かな茶褐色土であった。礫堆積中にはあまり土は入っていないかった。

### 3号集石遺構（第19図3）

3号集石遺構は2号集石遺構の南東12m、3号住居跡の南西約10mの位置にあり、A18—I46グリッドに所在する。長径1.6m、短径1.25m、深さ34cmの梢円形土壇に厚さ42cm、62点の礫の堆積が見られた。礫堆積上部には縄文時代中期後半の土器片も共伴しており、集石遺構形成時期の手がかりとなる。下部には破碎礫がより多く見られる。礫堆積は土壇東部に偏在しており、堆積土はあまり多くはなかった。堆積土は軟かな茶褐色土であった。

### 4号集石遺構（第19図4）

4号集石遺構は3号住居跡の南東約20m、4号住居跡の北北東約20mの位置にあり、発掘区東端部のA20—I29グリッドに所在する。長径2.1m、短径1.98m、深さ約40cmの円形土壇のはば全体に礫堆積が見られた。厚さ最高35cmで、合計401点の礫で構成されていた。全体的に破碎礫が多く1号集石遺構と同様に礫堆積上面中央部は約20cm窪んでおり、火を受けているのが顕著な部分があった。礫堆積最下部の下には20cm前後の堆積土層があった。土壇底面はおおよそ平らであった。堆積土はしまりよく粘質で炭化物を含む暗褐色土およびローム土をやや多く含む褐色土であった。

### 5号集石遺構（第19図5）

5号集石遺構は13号住居跡の西約85mの位置にあり、A47—J16グリッドに所在する。他の4号の集石遺構からは大きく南西方向に離れており、近傍に他の縄文時代の遺構も存在しない。礫堆積の密度は本遺跡の中では最高であり、長径1.33m、短径0.8m、深さ22cmの不整梢円形の土壇の全面にびっしり詰め込まれたように堆積していた。破碎礫はあまり多くなく、火を受けた痕跡も明瞭なものはなかった。ただし礫堆積の中央部がわずかに窪んでいることは他の集石遺構と共通した特徴である。礫堆積の厚さは最高25cm、平均15cm程であった。土壇底面はやはり平らであった。礫堆積中に堆積土はほとんどなく、土壇全体が硬く埋まっている状態であったため、土壇覆土自体もほとんどなかった。

以上が本遺跡の集石遺構のすべてであったが、形成時期を判断する材料は多くなく、3号集石遺構の土器片が信頼できるならば、縄文中期後半を中心とした時期と考えられよう。

## 1号土壙（第20図）

本遺跡には縄文時代の上壙と認定できたものが合計115基ある。ただしこのうち確実に土器を伴い、時期を特定できるものは約半数程度である。また柱穴風のものも數基あるが、それらも便宜的に土壙扱いして記述しておく。本遺跡の縄文時代の土壙は大きく3～4群に分かれており、北から3号住居跡周辺、4号住居跡周辺、11・12・13・20号住居跡周辺および18・19号住居跡周辺の各群が指摘できる。

なお、覆土の上層に関しては、本遺跡の土壙数全体がたいへん多いため、分類・整理し、記号化した。歴史時代の土壙の項でこれについて述べる。

以下に縄文時代の上壙について番号順に述べることにしたい。

1号土壙は遺跡北東端部のA09—I35グリッドに所在する。長径106cm、短径88cm、深さ18cmを測る。不整円形を呈する。主軸方向はN—5°—E。断面図基準線の標高は60.60m。

## 2号土壙（第20図）

2号土壙は遺跡北東部の一帯に属し、A13—I39グリッドに所在する。長径92cm、短径84cm、深さ22cmを測る。不整円形を呈する。長軸をとると、主軸方向はN—85°—W。断面図基準線の標高は61.10m。

## 3号土壙（第20図、遺物第33図1～6）

3号土壙は1号土壙の西方のA07—I42グリッドに所在する。長径126cm、短径100cm、深さ26cmを測る。不整円形を呈する。壙底面は平坦である。主軸方向はN—9°—W。断面図基準線の標高は60.70m。

## 4号土壙（第20図、遺物第33図7）

4号土壙は2号土壙の東に隣接しており、A13—I38グリッドに所在する。長径150cm、短径50cm、深さ12cmを測り、不整長椭円形を呈する。主軸方向はN—67°—Eである。断面図基準線の標高は61.10m。

## 5・6号土壙（第20図、遺物第33図8～11,12～16）

これらの上壙は1号土壙と2・4号土壙の中間の位置にあり、A11—I36グリッドに所在する。東西方向で重複しており、形態・大きさ・方向等はほぼ同じである。5号土壙は長径160cm、短径146cm、深さ22cmの不整椭円形で、主軸方向はN—21°—W。6号土壙は長径180cm、短径126cm、深さ20cmの不整椭円形であり、主軸方向はN—25°—W。断面図基準線の標高は61.00m。

## 7号土壙（第20図）

7号土壙は5・6号土壙の南方にあり、8・9・10号土壙に近接しており、A14—I36グリッドに所在する。長径102cm、短径88cm、深さ8cmを測り、不整椭円形である。主軸方向はN—36°—Wである。断面図基準線の標高は61.10m。

## 8号土壙（第20図）

8号土壙はA13—I36グリッドに所在し、長径76cm、短径70cm、深さ10cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—2°—Eである。断面図基準線の標高は61.10m。

## 9号土壙（第20図）

## 竹之花

9号土壤はA13—I37グリッドに所在し、長径94cm、短径82cm、深さ12cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—3°—Eである。断面図基準線の標高は61.10m。

## 10号土壤（第20図）

10号土壤はA12—I37グリッドに所在し、長径110cm、短径94cm、深さ18cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—26°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

## 11号土壤（第20図）

11号土壤は2・4号土壤の北にあり、A12—I39グリッドに所在する。長径102cm、短径82cm、深さ14cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—60°—W。断面図基準線の標高は61.90m。

## 12号土壤（第20図）

12号土壤は9号土壤の東に隣接し、A13—I36グリッドに所在する。長径66cm、短径62cm、深さ9cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—2°—Eである。断面図基準線の標高は61.10m。

## 13号土壤（第20図）

13号土壤は11号土壤の東に隣接し、A12—I39グリッドに所在する。長径110cm、短径86cm、深さ10cmを測る。不整梢円形を呈する。主軸方向はN—1°—E。断面図基準線の標高は61.00m。

## 14号土壤（第20図）

14号土壤は7号土壤の南西に隣接する。A14—I36グリッドに所在する。長径98cm、短径68cm、深さ8cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—10°—E。断面図基準線の標高は61.10m。

## 15号土壤（第20図）

15号土壤は7号土壤の南東に隣接し、A14—I35グリッドに所在する。長径94cm、短径64cm、深さ14cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—13°—E。断面図基準線の標高は61.10m。

## 16号土壤（第20図）

16号土壤は14・15号土壤の南にあり、A16—I36グリッドに所在する。長径110cm、短径80cm、深さ24cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—73°—E。断面図基準線の標高は61.20m。

## 19号土壤（第20図、遺物第33図17）

19号土壤は14号土壤の西にあり、A14—I37グリッドに所在する。長径92cm、短径74cm、深さ8cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—52°—E。断面図基準線の標高は61.00m。

## 22号土壤（第20図、遺物第33図18）

22号土壤は2号埋蔵と1号集石遺構の中間の位置にあり、A18—J01グリッドに所在する。長径118cm、短径86cm、深さ24cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—3°—Wである。断面図基準線の標高は61.40m。

## 23号土壤（第20図）

23号土壤は11号土壤の西にあり、24号土壤が東に隣接する。A11—I42グリッドに所在する。長径114cm、短径104cm、深さ15cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—8°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

## 24号土壤（第20図）

24号土壤はA11—I41グリッドに所在する。長径128cm、短径112cm、深さ12cmを測る。不整円形

を呈し、主軸方向はN-89°-Eである。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 27号土壌（第20図）

27号土壌は3号集石遺構の南西、2号埋甕の南東にそれぞれ約20m離れており、A23-I 42グリッドに所在する。長径126cm、短径108cm、深さ16cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-5°-Eである。断面図基準線の標高は61.60m。

#### 29号土壌（第20図）

29号土壌は4号住居跡の西に隣接しており、A26-I 33グリッドに所在する。長径142cm、短径122cm、深さ22cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-2°-Wである。断面図基準線の標高は61.60m。

#### 30号土壌（第20図）

30号土壌は2号埋甕の北にあり、A17-I 46グリッドに位置する。長径120cm、短径104cm、深さ20cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-50°-E。断面図基準線の標高は61.30m。

#### 32号土壌（第20図）

32号土壌は1号住居跡の西南西12mにあり、A14-I 48グリッドに所在する。長径150cm、短径114cm、深さ22cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-3°-Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 33号土壌（第20図、遺物第26図2、第33図19）

33号土壌は3号集石遺構の西南西15mにあり、A20-I 41グリッドに所在する。長径96cm、短径92cm、深さ30cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-31°-Wである。断面図基準線の標高は61.50m。

#### 35号土壌（第20図）

35号土壌は32号土壌の西5mの位置にあり、A14-J 00グリッドに所在する。長径166cm、短径124cm、深さ10cm、を測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-4°-Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 36号土壌（第20図）

36号土壌は4号住居跡の西南西15mにあり、A28-I 37グリッドに所在する。長径152cm、短径148cm、深さ10cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-2°-Wである。断面図基準線の標高は61.80m。

#### 39号土壌（第21図）

39号土壌は4号住居跡の南西8mの位置にあり、A28-I 34グリッドに所在する。長径132cm、短径112cm、深さ20cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN-64°-Eである。断面図基準線の標高は61.70m。

#### 43号土壌（第21図）

43号土壌は36・39号土壌に隣接しており、A29-I 37グリッドに所在する。長径220cm、短径106cm、深さ36cmを測る。不整長橭円形を呈し、主軸方向はN-41°-Eである。断面図基準線の標高は61.80m。

44・45号土壙（第21図）

この2基の土壙は東西方向でわずかに重複し、4号住居跡の北東5mに位置し、A25—I31グリッドに所在する。44号上壙は長径162cm、短径140cm、深さ16cmを測り、不整椭円形を呈し、主軸方向N—89°—Eである。断面図基準線の標高は61.40m。45号上壙は長径104cm、短径86cm、深さ7cmを測り、不整椭円形を呈し、主軸方向N—1°—Wである。断面図基準線の標高は61.50m。

51号土壙（第21図、遺物第33図20～22）

51号土壙は4号住居跡の南約10mの位置にあり、A30—I32グリッドに所在する。長径144cm、短径130cm、深さ45cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—8°—Eである。断面図基準線の標高は61.50m。

55号土壙（第21図、遺物第33図23・24）

55号土壙は1号集石遺構の南に隣接し、A19—J06グリッドに所在する。長径144cm、短径110cm、深さ68cmを測る。不整長方形を呈し、主軸方向はN—39°—Eである。断面図基準線の標高は61.50m。

65号土壙（第21図）

65号土壙は3号土壙の東に隣接し、A09—I38グリッドに所在する。長径146cm、短径106cm、深さ10cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—82°—E断面図基準線の標高は60.60m。

88号土壙（第21図、遺物第33図25～27）

88号土壙は3号住居跡の北東5mの位置にあり、A14—I32グリッドに所在する。長径146cm、短径138cm、深さ26cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—86°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

89号土壙（第21図、遺物第33図28・29）

89号土壙は88号土壙の西に隣接しA14—I33グリッドに所在する。長径134cm、短径114cm、深さ15cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—69°—E。断面図基準線の標高は61.00m。

92号土壙（第21図、遺物第33図30）

92号土壙は3号住居跡・93号土壙に隣接し、A15—I33グリッドに所在する。長径116cm、短径96cm、深さ16cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—44°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

93号土壙（第21図、遺物第33図31・32）

93号土壙はA16—I33グリッドに所在し、長径76cm、短径64cm、深さ10cmを測る。不整台形を呈し、主軸方向はN—81°—Eである。断面図基準線の標高は61.00m。

98号土壙（第21図）

98号土壙は3号住居跡の南東6mの位置にあり、A17—I32グリッドに所在する。長径106cm、短径80cm、深さ16cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—54°—Eである。断面図基準線の標高は61.00m。

99号土壙（第21図）

99号土壙は3号住居跡の東約10mの位置にあり、A17—I30グリッドに所在する。長径140cm、短径82cm、深さ62cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—79°—Eである。断面図基準線の標

高は60.70m。

#### 100号土壤（第21図、遺物第33図33）

100号土壤は1号住居跡・1号埋甕の東に隣接し、A12—I43グリッドに所在する。長径36cm、短径20cm、深さ10cmを測る。覆土の特徴から炉跡の可能性もある。不整橭円形を呈し、主軸方向N—4°—Wである。断面図基準線の標高は61.50m。

#### 101号土壤（第21図）

101号土壤は3号住居跡の東に隣接し、93号土壤の南に位置する。A16—I33グリッドに所在する。長径64cm、短径46cm、深さ14cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN—86°—Eである。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 107号土壤（第21図）

107号土壤は3号埋甕の南西27mの遺跡西端部付近にある。A35—J14グリッドに位置する。長径102cm、短径98cm、深さ30cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN—86°—E。断面図基準線の標高は61.50m。

#### 126号土壤（第21図、遺物第33図34）

126号土壤は3号埋甕の西37mの遺跡西端部にあり、本遺跡の縄文時代の土壤中最も西にある。A30—J19グリッドに位置する。長径108cm、短径94cm、深さ20cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN—37°—Eである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 129号土壤（第21図）

129号土壤は1号集石遺構の南東約30m、4号埋甕の北東19mにあり、A26—I49グリッドに所在するが、このあたりは縄文時代に限らず遺構の密度が高い場所である。長径88cm、短径86cm、深さ16cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—43°—E。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 131号土壤（第21図）

131号土壤は1号集石遺構の西北西7mにあり、A17—J08グリッドに所在する。長径98cm、短径72cm、深さ36cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN—68°—Eである。断面図基準線の標高は61.30m。

#### 133号土壤（第21図）

133号土壤は9号埋甕の南西5m、17号住居跡の南8mに位置し、遺跡中央谷部の南東向き斜面に面している。B05—I44グリッドに所在する。長径176cm、短径90cm、深さ16cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN—30°—Eである。断面図基準線の標高は61.40m。

#### 150号土壤（第22図）

150号土壤は133号土壤の南西16mにあり、遺跡中央谷部の南東向き斜面に面している。B10—I48グリッドに所在する。長径132cm、短径126cm、深さ44cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN—18°—W。断面図基準線の標高は61.80m。

#### 154号土壤（第21図）

154号土壤は133号土壤の南南西13mの位置の南東向き緩斜面にあり、B09—I45グリッドに所在する。長径114cm、短径62cm、深さ12cmを測る。不整橭円形を呈し、主軸方向はN—85°—E。断面

## 竹之花

図基準線の標高は61.40m。

### 165号土壙（第22図）

165号土壙は9号埋甕の西約30mにあり、B04—J 03グリッドに所在する。周囲には6～7m間隔で縄文時代の土壙3基が散在する。長径120cm、短径92cm、深さ10cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—12°—Eである。断面図基準線の標高は62.30m。

### 166号土壙（第22図）

166号土壙は165号土壙の西北西7mにあり、B04—J 05グリッドに所在する。長径134cm、短径100cm深さ14cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—48°—Eである。断面図基準線の標高は62.40m。

### 167号土壙（第22図）

167号土壙は165号土壙の北北西7mにあり、B02—J 03グリッドに所在する。長径100cm、短径68cm、深さ14cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—83°—Eである。断面図基準線の標高は62.30m。

### 168号土壙（第22図）

168号土壙は167号土壙の西約8mにあり、B02—J 06グリッドに所在する。長径108cm、短径86cm、深さ16cm。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—24°—W。断面図基準線の標高は62.50m。

### 173号土壙（第22図）

173号土壙は165号土壙の南約10mにあり、B08—J 03グリッドに所在する。長径152cm、短径130cm、深さ16cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—31°—Eである。断面図基準線の標高は62.40m。

### 198号土壙（第22図）

198号土壙は4号住居跡の北東13mにあり、遺跡東端部に位置する。A23—I 29グリッドに所在する。長径146cm、短径138cm、深さ12cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—4°—Eである。断面図基準線の標高は60.80m。

### 200号土壙（第22図、遺物第25図1・第26図1・第34図1～12）

200号土壙は遺跡中央谷部に面する南東向き緩斜面にあり、最も密度の高い縄文時代土壙群に属している。A44—I 31グリッドに所在する。2段のテラスを持つ掘り込みで、底面に径約30cmのピットがある。長径200cm、短径150cm、深さ50cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—42°—Wである。断面図基準線の標高は60.80m。

### 201号土壙（第22図、遺物第34図13～15）

201号土壙は200号土壙以下の土壙群の中央にあり、掘り込みの規模も最大である。A45—I 31グリッドに所在する。長径304cm、短径268cm、深さ46cmを測り、不整円形を呈する。2段の掘り込みであり、内側も約120cmの円形掘り込みとなっている。主軸方向はN—32°—Eである。断面図基準線の標高は60.90m。

### 202号土壙（第22図）

202号土壙は200号土壙の北に隣接し、A43—I 31グリッドに所在する。1段のテラスと径30～40

cm程のピットを持つ。長径150cm、短径96cm、深さ48cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—2°—Eである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 203号土壤（第22図）

203号土壤は202号土壤の東に隣接し、同じA43—I 31グリッドに所在する。長径126cm、短径92cm、深さ26cm、不整椭円形を呈し、主軸方向はN—66°—W。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 204号土壤（第22図）

204号土壤は203号土壤の東に隣接しており、A43—I 31グリッドに所在する。長径106cm、短径96cm、深さ22cm、不整椭円形を呈し、主軸方向はN—89°—E。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 205号土壤（第22図）

205号土壤は203・204号土壤の北に隣接し、A43—I 30グリッドに所在する。長径100cm、短径94cm、深さ30cm、不整円形を呈し、主軸方向はN—2°—W。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 206号土壤（第22図）

206号土壤は205号土壤の西に隣接し、A42—I 40グリッドに所在する。長径124cm、短径102cm、深さ21cm、不整椭円形を呈し、主軸方向はN—7°—E。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 207号土壤（第22図、遺物第33図35）

207号土壤は東に隣接する208号土壤と共に200号土壤以下の土壤群の北端にある。A41—I 30グリッドに所在する。長径100cm、短径94cm、深さ24cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—88°—Wである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 208号土壤（第22図、遺物第26図4・第34図16～22）

208号土壤もA41—I 30グリッドに所在する。長径104cm、短径98cm、深さ45cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向は座標東西方向である。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 209号土壤（第22図）

209号土壤は210号土壤と共に20号住居跡の北に隣接し、A46—I 34グリッドに所在する。長径104cm、短径96cm、深さ16cmを測る。径38cmのピットを北壁寄りに有する。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—10°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 210号土壤（第22図）

210号土壤はピット状であるが、便宜上土壤として扱う。A46—I 35グリッドに所在する。長径40cm、短径34cm、深さ50cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—8°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 211号土壤（第22図）

211号土壤は13号住居跡の東4m、20号住居跡の北西4mの位置にあり、A46—I 36グリッドに所在する。長径108cm、短径104cm、深さ12cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—60°—Eである。断面図基準線の標高は61.10m。

#### 212号土壤（第22図）

212号土壤は213・214号土壤と共に211号土壤の北3mの位置にあり、A45—I 36グリッドに所在する。やはりピット状であり、長径42cm、短径38cm、深さ26cmを測る。不整円形を呈し、主軸方

#### 竹之花

向はN—12°—Eである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 213号土壤（第22図、遺物第35図1）

213号土壤は212号土壤の東に隣接し、A45—I 35グリッドに所在する。中央やや南寄りに径40cmのピットがある。長径116cm、短径94cm、深さ21cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—80°—Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 214号土壤（第22図）

214号土壤は212号土壤の西に隣接し、A45—I 36グリッドに所在する。ピット状であり、長径50cm、短径48cm、深さ46cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—8°—Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 215号土壤（第22図）

215号土壤は12号住居跡の南3m、213号土壤の北3mに位置し、A44—I 35グリッドに所在する。長径86cm、短径84cm、深さ16cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—27°—Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 216号土壤（第23図）

216号土壤は215号土壤の東2mの位置にあり、A44—I 34グリッドに所在する。長径108cm、短径106cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—86°—Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 217号土壤（第23図、遺物第35図2）

217号土壤は12号住居跡の南壁中央に重複しており、216号土壤の北2mの位置にある。A44—I 34グリッドに所在する。長径は約140cm程に推定でき、短径118cm、深さ26cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—25°—Wである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 218・219号土壤（第23図、遺物第35図3～7）

218・219号土壤は216号土壤の東2mにあり、わずかに重複している。A45—I 33グリッドに所在する。218号土壤は2段の掘り込みになっており、これ自体重複かもしれない。218号土壤全体の長径230cm、218aの長径142cm、短径134cm、218bの長径116cm、最深部の深さ32cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—46°—E。219号土壤は長径116cm、短径100cm、深さ10cmを測り、不整円形を呈し、主軸方向はN—5°—E。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 220号土壤（第23図）

220号土壤は202号土壤の西に隣接しており、A43—I 32グリッドに所在する。長径86cm、短径72cm、深さ15cmを測る。不整円形を呈する。主軸方向は座標東西方向である。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 239号土壤（第23図）

239号土壤は166号土壤の南約13mにあり、B08—J 05グリッドに所在する。長径176cm、短径110cm、深さ20cmを測る。不整長方形を呈し、主軸方向はN—55°—Eである。断面図基準線の標高は62.50m。

#### 243号土壤（第23図）

243号土壤は239号土壤の南東5mにあり、B10-J04グリッドに所在する。長径90cm、短径78cm、深さ18cmを測る。不整円形の本体にテラスが付いて不整椭円形になっている。主軸方向はN-40°-Wである。断面図基準線の標高は62.40m。

#### 370号土壤（第23図、遺物第25図5・第35図8）

370号土壤は20号住居跡の東3mにあり、200号土壤以下の縄文時代土壤群のうち南寄りに位置する。A48-I33グリッドに所在する。長径98cm、短径88cm、深さ28cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN-3°-Wである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 371号土壤（第23図、遺物第27図4・第35図9～12）

371号土壤は370号土壤の南に隣接し、A48-I33グリッドに所在する。長径126cm、短径108cm、深さ31cmを測る。1段テラスを持ち、不整椭円形を呈する。主軸方向は座標南北方向である。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 372号土壤（第23図、遺物第35図13～17）

372号土壤は371号土壤の南西に隣接しており、A49-I33グリッドに所在する。長径105cm、短径98cm、深さ42cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN-83°-Wである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 373号土壤（第23図、遺物第35図18）

373号土壤は372号土壤の南東に隣接し、同じくA49-I33グリッドに所在する。長径124cm、短径118cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN-58°-Eである。断面図基準線の標高は60.80m。

#### 374号土壤（第23図、遺物第35図19～25）

374号土壤は370号土壤の東に隣接し、A48-I32グリッドに所在する。長径106cm、短径102cm、深さ52cmを測る。1段テラスを持ち、不整椭円形を呈する。主軸方向は座標東西方向である。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 375号土壤（第23図、遺物第36図8～13）

375号土壤は13号住居跡の西南西5mにあり、A48-I39グリッドに所在する。長径100cm、短径76cm、深さ22cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN-73°-Wである。断面図基準線の標高は61.10m。

#### 376号土壤（第23図、遺物第36図14・15）

376号土壤は204号土壤の南東に隣接し、発掘区の東端に位置する。A44-I30グリッドに所在する。長径82cm、短径80cm、深さ12cmを測る。円形を呈し、主軸方向はN-37°-Eである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 377号土壤（第23図）

377号土壤は201号土壤の南3mの位置にあり、A47-I31グリッドに所在する。長径130cm、短径120cm、深さ16cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN-1°-Wである。断面図基準線の標高は60.70m。

#### 378号土壤（第23図）

#### 竹之花

378号土壌は20号住居跡の東に隣接し、370号土壌の西に隣接する。A48—I33グリッドに所在する。長径78cm、短径74cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—37°—Wである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 379号土壌（第23図）

379号土壌は214号土壌の北西3mに位置し、A44—I37グリッドに所在する。長径100cm、短径92cm、深さ28cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向は座標東西方向である。断面図基準線の標高は61.30m。

#### 380号土壌（第23図）

380号土壌は379号土壌の北に隣接し、同じくA44—I37グリッドに所在する。長径76cm、短径56cm、深さ14cm。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—86°—W。断面図基準線の標高は61.40m。

#### 383号土壌（第23図）

383号土壌は12号住居跡の西壁のやや北寄り部分に重複しており、A42—I35グリッドに所在する。西側に小振りの掘り込みが突出しているが、擾乱の可能性がある。突出部を含めた長径は180cm、突出部を含めない長径は116cm、深さ18cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—87°—Wである。断面図基準線の標高は61.30m。

#### 384号土壌（第23図、遺物第36図16～18）

384号土壌は12号住居跡の南東コーナー部に重複しており、A43—I33グリッドに所在する。長径84cm、短径82cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—1°—Wである。断面図基準線の標高は60.90m。

#### 385号土壌（第23図、遺物第36図19）

385号土壌は12号住居跡の北西コーナー部に重複しており、A43—I34グリッドに所在する。長径76cm、短径74cm、深さ18cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—11°—Eである。断面図基準線の標高は61.20m。

#### 386号土壌（第23図）

386号土壌は20号住居跡の北東に隣接しており、A47—I34グリッドに所在する。長径80cm、短径76cm、深さ18cm。不整円形を呈し、主軸方向はN—17°—W。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 387号土壌（第23図、遺物第36図20・21）

387号土壌は388号土壌と共に370号土壌の北側に隣接し、A47—I33グリッドに所在する。長径102cm、短径84cm、深さ24cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—59°—Wである。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 388号土壌（第23図）

388号土壌は387号土壌の東に隣接し、同じくA47—I33グリッドに所在する。長径90cm、短径86cm、深さ14cm。不整円形を呈し、主軸方向はN—68°—W。断面図基準線の標高は61.00m。

#### 389号土壌（第24図）

389号土壌は20号住居跡の南に隣接し、A49—I35グリッドに所在する。長径80cm、短径78cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—55°—E。断面図基準線の標高は60.60m。

## 390号土壌（第24図）

390号土壌は20号住居跡の南西コーナー内側にあり、柱穴状ピットを1個破壊していた。A48—I35グリッドに所在する。長径84cm、短径66cm、深さ42cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—4°—Wである。断面図基準線の標高は60.60m。

## 392号土壌（第24図、遺物第36図22～24）

392号土壌は9号埋甕の南東3mの位置にありB04—I42グリッドに所在する。長径160cm、短径142cm、深さ20cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—54°—Wである。断面図基準線の標高は62.00m。

## 548号土壌（第24図、遺物第36図25～30・第37図1）

548号土壌は遺跡中央谷部の南側台地上にある縄文時代土壙群の北部にあり、北向きの緩斜面に位置する。B30—I39グリッドに所在する。長径112cm、短径106cm、深さ40cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—9°—Eである。断面図基準線の標高は61.80m。

## 551号土壌（第24図、遺物第37図2～4）

551号土壌は548号土壌以下の土壙群の北端にあり、552号土壌と重複している。548号土壌から北東に約18mの位置にあり、共にB25—I37グリッドに所在する。長径140cm、短径128cm、深さ20cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—69°—Wである。断面図基準線の標高は61.30m。

## 552号土壌（第24図）

552号土壌は551号土壌の南に約3分の1程重複しており、短径の大きさが不明確である。長径148cm、短径は推定約140cm程度、深さ20cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN—67°—Wである。断面図基準線の標高は61.30m。

## 554号土壌（第24図、遺物第37図5～8）

554号土壌の南南東約10mにあり、B28—I36グリッドに所在する。長径152cm、短径120cm、深さ50cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—26°—Eである。断面図基準線の標高は61.30m。

## 557号土壌（第24図）

557号土壌は19号住居跡の南南西約10mにあり、548号土壌以下の縄文時代土壙群の中では最南端、本遺跡全体でも南端部にあたる位置である。B41—I42グリッドに所在する。長径140cm、短径80cm、深さ30cmを測る。不整椭円形を呈し、主軸方向はN—4°—Wである。断面図基準線の標高は62.90m。

## 558号土壌（第24図）

558号土壌は557号土壌の北に隣接し同じくB41—I42グリッドに所在する。径60cm、深さ12cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN—41°—Wである。断面図基準線の標高は63.00m。

## 559号土壌（第24図、遺物第37図9）

559号土壌と共に19号住居跡の西に隣接し、B38—I41グリッドに所在する。長径134cm、短径104cm、深さ16cmを測る。不整円形を呈する。主軸方向はN—20°—Wである。断面図基準線の標高は62.70m。

## 560号土壌（第24図）

#### 竹之花

560号土壙は559号土壙の北に隣接し、同じくB38—I41グリッドに所在する。長径99cm、短径92cm、深さ28cm。不整円形を呈し、主軸方向はN—47°—W。断面図基準線の標高は62.70m。

#### 561号土壙（第24図、遺物第27図5・第37図10～13）

561号土壙は19号住居跡の南西約10mにあり、B40—I43グリッドに所在する。長径86cm、短径76cm、深さ54cm。不整円形を呈し、主軸方向はN—1°—W。断面図基準線の標高は63.10m。

#### 562号土壙（第24図、遺物第25図3・第37図14・15）

562号土壙は561号土壙の北3mの位置にあり、B39—I43グリッドに所在する。長径104cm、短径100cm、深さ14cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—10°—Wである。断面図基準線の標高は63.20m。

#### 563号土壙（第24図）

563号土壙は18号住居跡の西4mの位置にあり、B37—I43グリッドに所在する。長径116cm、短径102cm、深さ21cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向は座標東西方向である。断面図基準線の標高は62.80m。

#### 565号土壙（第24図）

565号土壙は18号住居跡の北北西8mにあり、B33—I42グリッドに所在する。長径78cm、短径74cm、深さ10cm。不整円形を呈し主軸方向はN—52°—E。断面図基準線の標高は62.50m。

#### 566号土壙（第24図、遺物第37図16）

566号土壙は18号住居跡の北西に隣接する位置にあり、565号土壙の南南東5mにある。B35—I42グリッドに所在する。長径110cm、短径108cm、深さ16cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向は座標南北方向である。断面図基準線の標高は63.20m。

#### 567号土壙（第24図、遺物第28図6・第37図17～19）

567号土壙は551・552号土壙の南西6mの位置にあり、B36—I39グリッドに所在する。長径94cm、短径80cm、深さ12cmを測る。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—33°—Wである。断面図基準線の標高は61.40m。

#### 568号土壙（第24図、遺物第37図20～26）

568号土壙は8号埋甕の南東5m、18号住居跡の北東9mの位置にあり、B36—I39グリッドに所在する。径約3mのやや大きな楕円形に全体の三分の1程を破壊されている。長径390cm、短径302cm、深さ12cmを測る。北壁から60cm内側の床面に径20cm程の焼土の痕跡があり、掘り込みの規模も考え合わせると、住居跡の可能性もある。不整梢円形を呈し、主軸方向はN—62°—Wである。断面図基準線の標高は61.80m。

#### 569号土壙（第24図）

569号土壙は548号土壙の西北西3mの位置にあり、B31—I40グリッドに所在する。長径100cm、短径92cm、深さ20cmを測る。不整円形を呈し、主軸方向はN—88°—Eである。断面図基準線の標高は62.00m。

## (2)縄文時代の出土土器

## (a)住居跡出土土器

## 1号住居跡（第30図1）

直線的にやや開く器形の口縁部で、口唇部は角頭状を呈する。胎土に纖維を多く含み、太い縄文単節LRが横位に施文され、黒浜式に比定される。

## 3号住居跡（第30図2～9）

6は早期の条痕文土器で、若干纖維を含み、条痕文が施文される。4、5、7～9は胎土に纖維を含む黒浜式で、4、5、9は羽状縄文、7は「正反の合」の縄、8は斜縄文が施文される。2、3は諸磯a式であり、2は内側する口縁が開き、口唇部が内削状の平坦面となり、押し引きの爪形文が1条施文される。口縁部は口唇直下に1条の爪形文が施文され、2条の平行沈線文で連弧状モチーフが描寫されており、地文は単節LRである。3は口唇上に1条、口縁部に2条の爪形文が施文される。

## 4号住居跡（第30図10～12）

10、11は早期の条痕文土器で、若干纖維を含み、10は沈線区画内に集合沈線文を充満し、11は条痕文が施される。12は纖維を含む黒浜式で、羽状縄文が施文される。

## 6号住居跡（第30図13～18）

15、17は纖維を含む黒浜式であり、他は諸磯式である。13は角頭状を呈する口縁部で、単節RLが、14は櫛歯状工具による波状文が施文される。18は底部破片で、太い単節RLが施される。

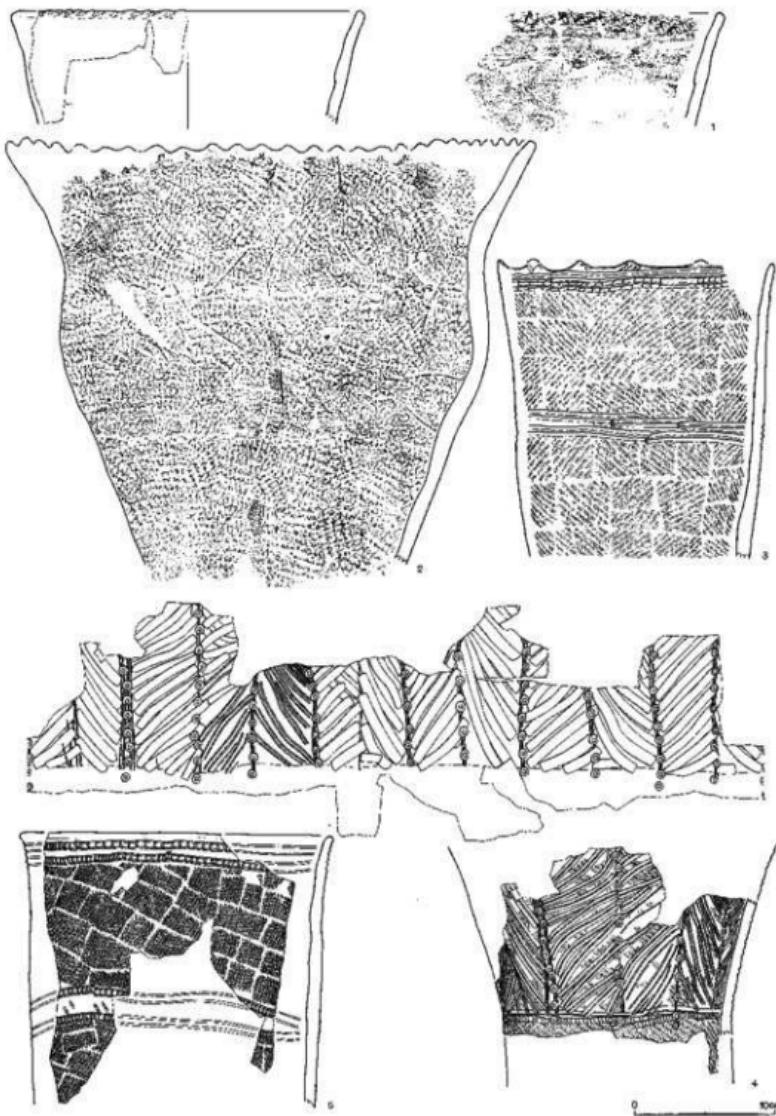
## 11号住居跡（第30図19～27）

19は波状文の施文される口縁部破片である。24は幅狭に区画された平行沈線文間に、櫛歯状の状線文が施文され、ランダムに円形竹管文が垂下する。25は細い爪形文が施文される。以上は諸磯a式と思われる。他は諸磯b式で20、21は爪形文土器、22、23は多段の波状文が施文され、26は平行沈線文のみ施される。27は浮線文土器であり、地文とやや太めの浮線上に単節RLが施文される。

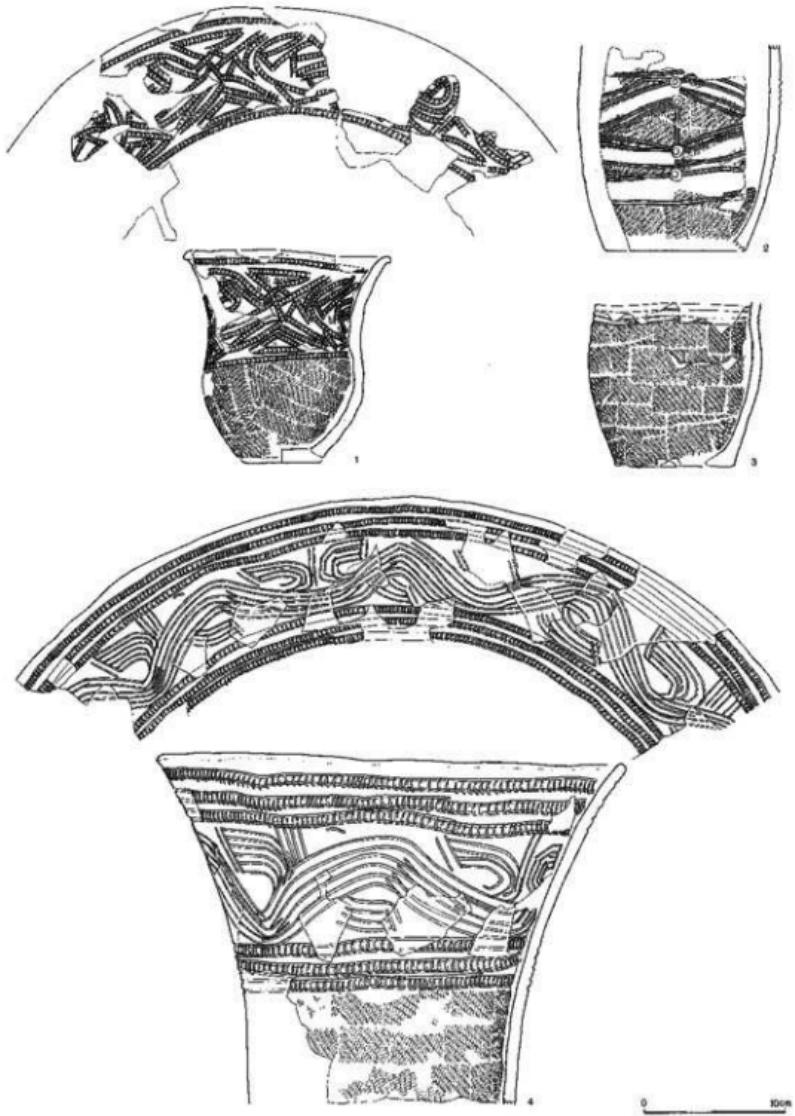
## 12号住居跡（第27図1、3、第31図）

1～9、38は諸磯a式と思われ、他は諸磯b式である。1～3は口縁部破片であり、平行沈線文が施されている。4は平行条線文の幅狭区画内に円形竹管文が施文される。5～7は肋骨文土器であり、6、7は同一個体と思われる。5は2列の爪形文で口縁部が区画され、縦位の区画線が間隔を狭めて施文されて、弧状の肋骨文が施文される。円形竹管文は最後に施されている。文様帶内には単節RLが施文されている。6、7は櫛歯状工具で施文されるもので、口縁部には押し引き状に、肋骨文は弧状に施文される。施文は縦位区画線、肋骨文、円形竹管文の順である。8、9は幅狭の平行区画内に小波状文が施文されるもので、38は口縁部に平行沈線文のみ施される。

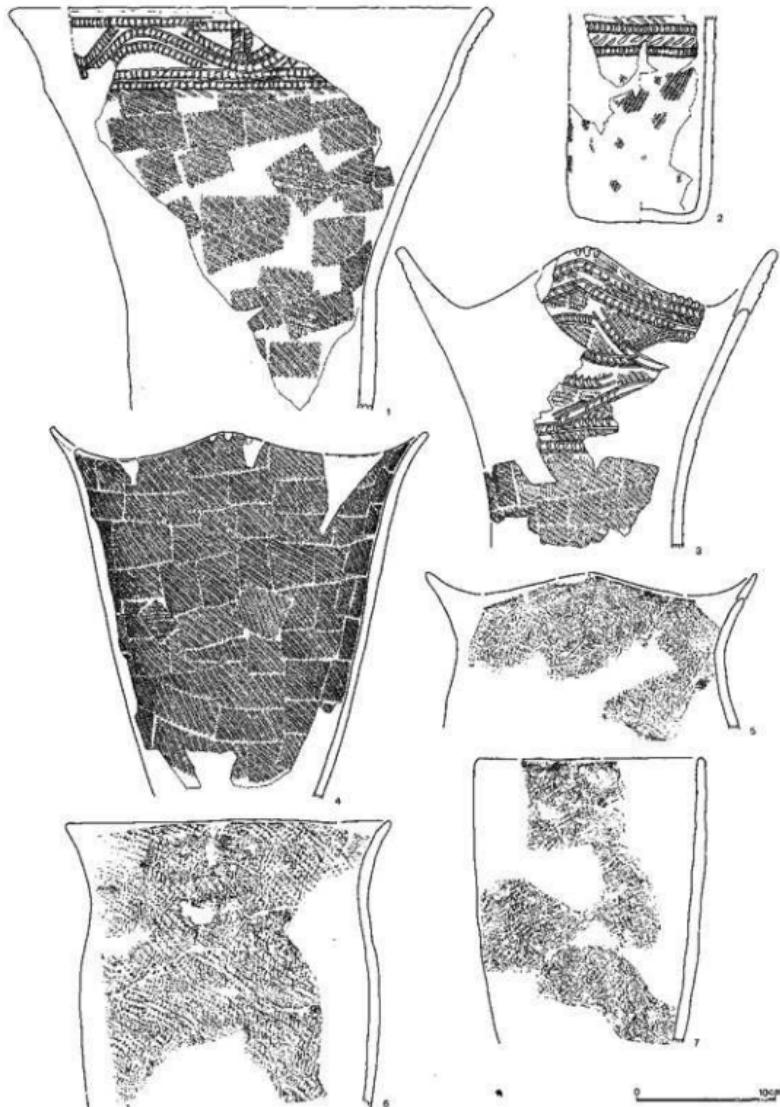
第27図1は朝顔状に口縁の開く深鉢で、幅狭の口縁部文様帶に爪形文で波状モチーフが描寫される。波状間は部分的に縦位の爪形文が垂下する。文様帶の下端区画線は隆起状を呈し、斜位の刻みが施される。地文は、太線の燃り合わせの単節RLである。第27図3、第31図10、14、15は同一個体で、口縁の開く4単位の波状縁土器である。波頂部に3本、波底部に4本の隆起が浮線文状に施文され、口縁部文様帶の上下端が2本の爪形文で区画されている。文様帶内は地文単節RL上に、



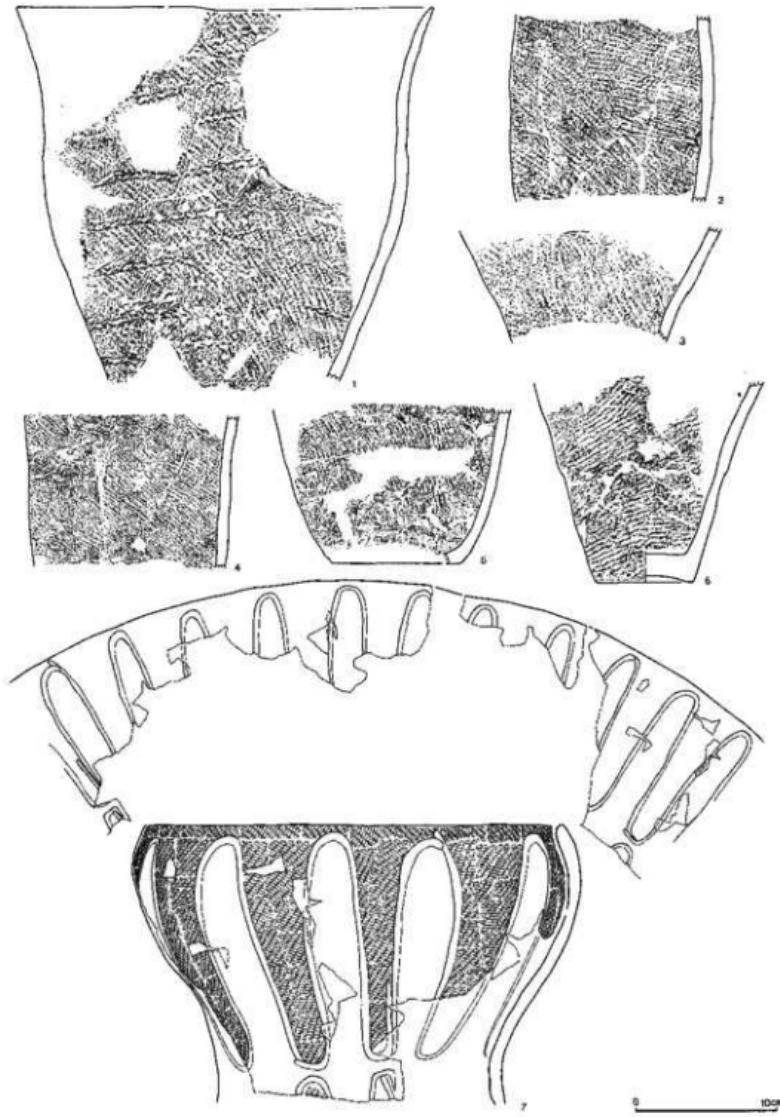
第25図 遺構出土縄文土器 (1)



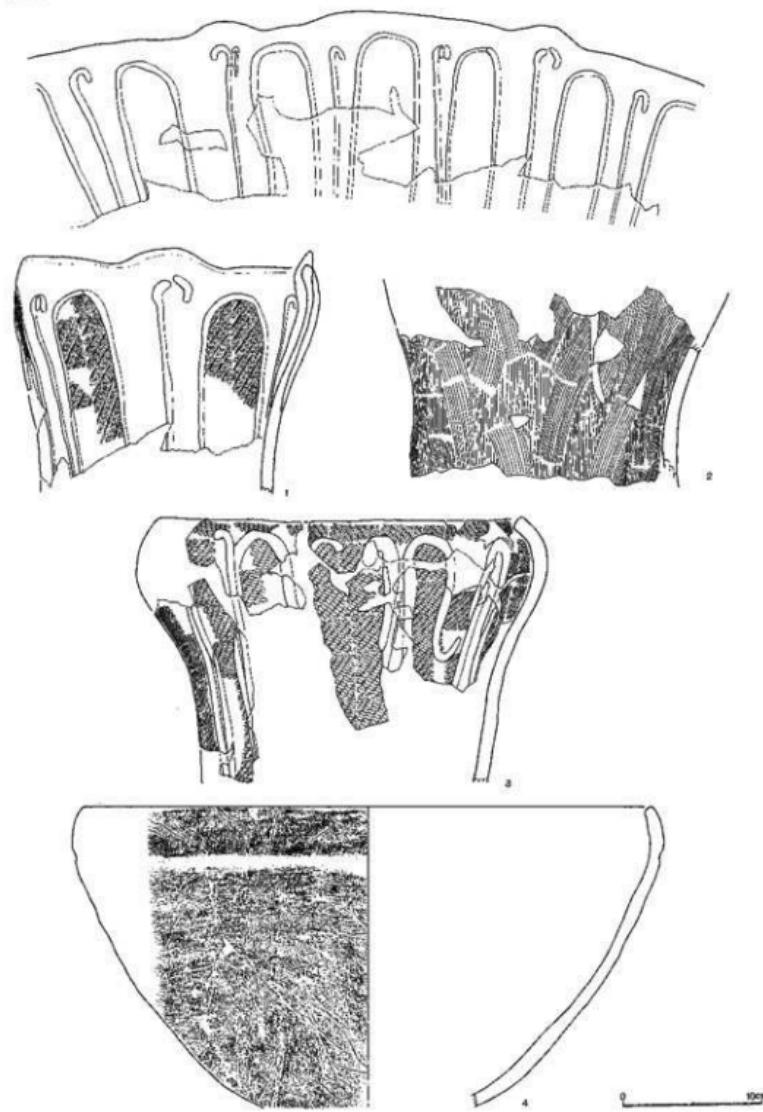
第26圖 遺構出土繩文土器（2）



第27図 遺構出土縄文土器 (3)



第28図 遺構出土縄文土器（4）



第29図 遺構出土縄文土器 (5)

爪形文で木葉状文の崩れた様なモチーフが描写されている。

11～13、16は平行沈線文系の土器で、18～36は爪形文系の土器である。23のみ爪形文間に隆起線状の浮縁が施され、爪形文とは逆方向の刻みが施される。39、40は浮縁文系土器で、浮縁文上には縄文が施文される。37は織維を含む黒浜式で、41、42は諸磯式の底部である。

#### 18号住居跡（第25図4、第28図5、第30図29～33）

第25図4は肋骨文系の土器で、13本の縦位区画線が垂下し、肋骨文は幅広の工具で施文されるが、一部分細い平行沈線文で施文される。地文は単節RLである。第28図5は壺壺であり、底部で単節RLが施文されている。

32は隆起線と条線文の施文される黒浜式で、織維を含む。29、31は刻みの施される外削状の口唇部が開き、29は地文RL上に肋骨文が施文され、31は縦位の条線文が施文される。30は無文土器の口縁部で、33は太細の縄文RLが施文される。32以外は諸磯式である。

#### 19号住居跡（第28図1～3、第32図）

第16図の壺壺番号50は第32図20、51は第32図21、57は2個体で第28図1と3、58は第28図2である。第32図20は斜縄文の条が横位に近い状態に施文され、原体は付加条縄文の様である。第32図21は織維を多く含む黒浜式で、LRが「正反の合」、RLが付加条縄文の構成による羽状縄文が施文される。第28図1は、原体の末端を結束する斜縄文RLの施文される深鉢で、胸部でふくらむ器形を呈する。縄文原体は太細の然り合わせである。第28図2は胸部のみ現存するもので、太細の然り合わせ縄文RLが、条が横位に近い状態で施文される。第28図3は、同1と共に出土しているが、縄文原体が異なるため別個体である。単節RLが施文される。

第32図1は平行沈線文で木葉状文が施文され、区画内に縄文RLが施文される。2は口唇部に刻みがあり、口縁部が平行沈線文で区画され、斜位の条線文が施文される。4は条線文の上に円形竹管文が施文され、7も条線文の土器である。3、5は肋骨文系の土器で、3は平行沈線文で、5は条線文で肋骨文が施文され、3は円形竹管文、4は刺突文が縦位区画線に沿って施文される。6、8は幅狭の水平区画内に波状文を施文するもので、6が条線文、8が平行沈線文で施文される。9は文様帶が平行沈線文で区画され、縄文RLが施文される。10～15、17～18は斜縄文が施文される。16は21と同一個体であり、19はケズリ状の強い整形の上に、斜位の平行沈線文と細かな円形竹管文が施文されている。

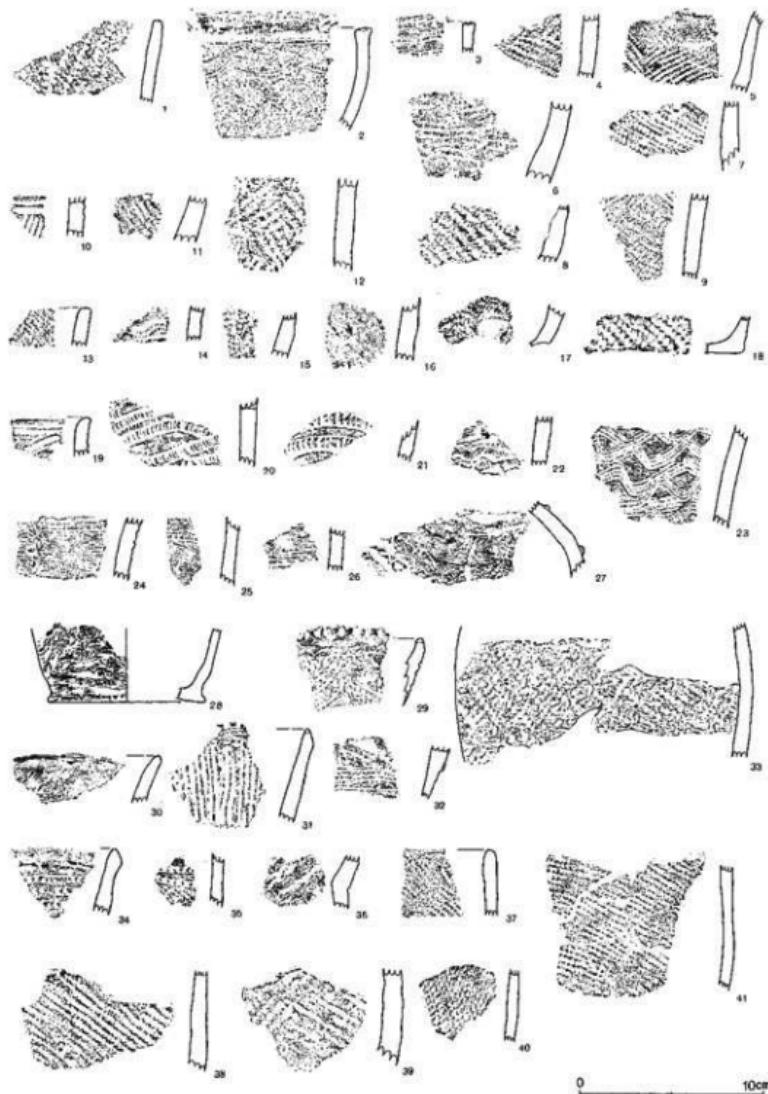
#### 20号住居跡（第27図6、第30図34～41）

第27図6は頸部が緩く括れ、口縁が聞く器形を呈し、単節RLが施文される諸磯式である。36、40は織維を含む黒浜式で、36はコンバス文、40は羽状縄文が施文される。34、35は爪形文系の土器で諸磯式か。他は斜縄文RLが施文され、38のみ複節RLRが施文されてる。

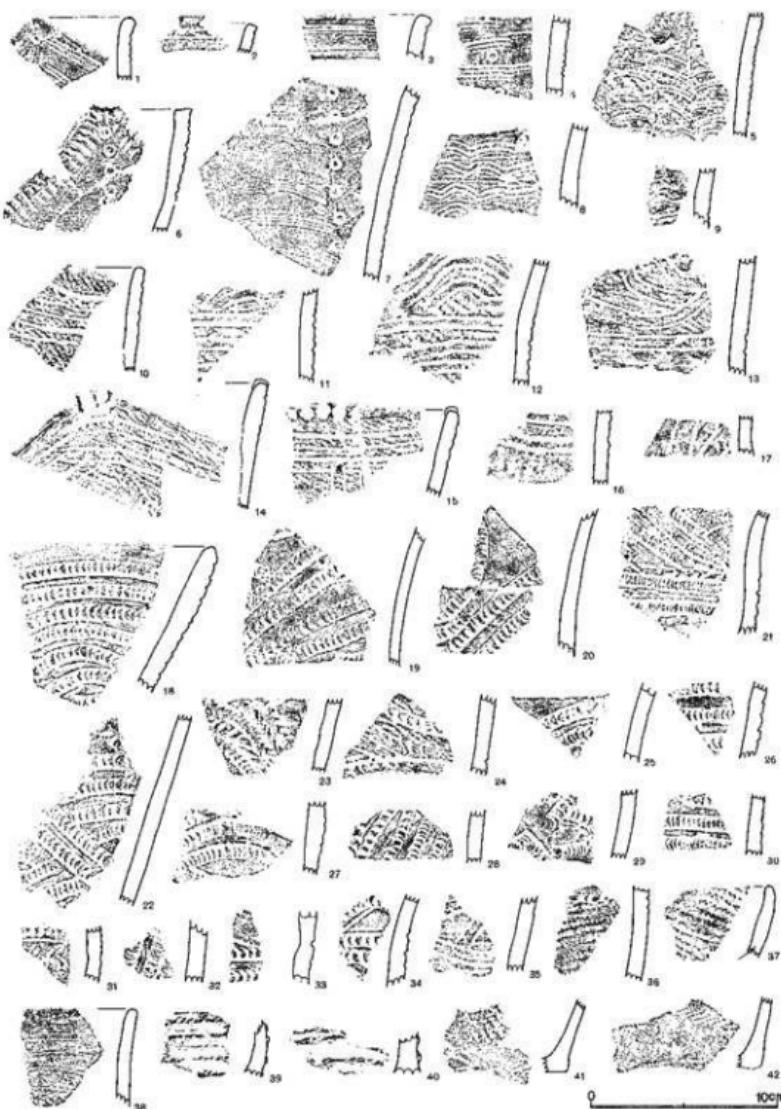
#### (b) 壺壺

##### 1号壺壺（第29図1）

胴下半部を欠損するが、口縁部は完存する。胴部が緩く括れて、口縁部が内側して聞くキャリバー形を呈し、口縁部には2単位の緩い把手を持つ。モチーフは把手を中心として6単位で構成され、藤手状態垂文と逆「U」字状文が交互に施文される。藤手状態垂文は把手下が大きく渦を巻き、

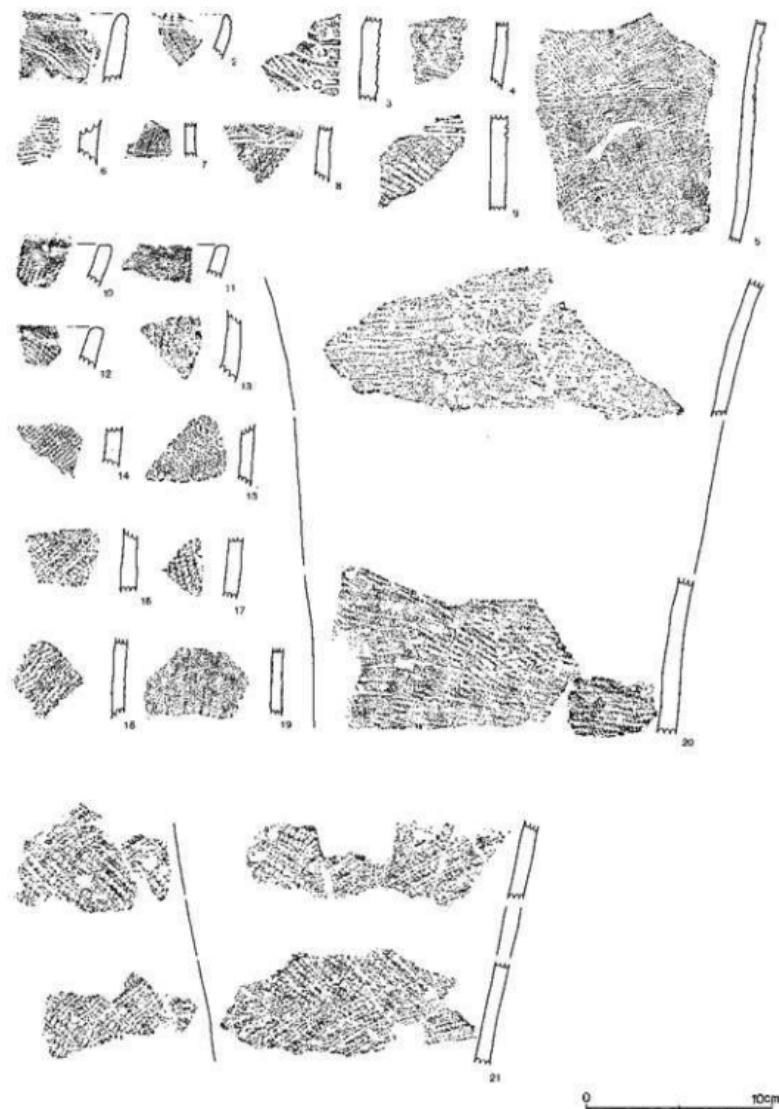


第30図 住居跡出土調文土器拓影図（1）



第31図 住居跡出土縄文土器拓影図（2）(12号住跡)

竹之花



第32図 住居跡出土陶文土器拓影図（3）（19号住居跡）

対峙する部分で巻の方向が逆になる。従って、6本中1本だけが逆巻となっている。綱文は充填縦文で、原体は2段LRに1段Lを巻き戻しながら、第2種巻きする付加条縦文である。加曾利EⅢ式である。

#### 2号埋甕（第29図2）

胴部のみ現存するキャリバー形土器で、地文に条縦文のみ施文されるものである。加曾利EⅢ式に比定されよう。

#### 3号埋甕（第28図7）

胴部が強く括れ、内彎する口縁部が開くキャリバー形を呈するもので、胴上半部が現存する。振幅が大きく波長の短い波状文が、沈縦文で胴上半部に抽出され、それに対応する形で逆「U」字状文が胴下半部に施文されている。地文は充填縦文であり、単節RLが口縁部で1段横位に施文され、胴部で縦位に施文される。加曾利EⅢ式である。

#### 4号埋甕（第29図3）

口縁部が強く内彎するキャリバー形土器で、胴上半部が現存する。口縁部付近に凹線状の沈縦文で波状文を基本としたモチーフが描出され、部分的に波状文間に懸垂文が貫入する。地文は単節RLが口縁部で横位に、胴部で縦位に施文されている。加曾利EⅢ式である。

#### 5号埋甕（第29図4）

口縁の内彎した針状の浅鉢である。口縁部に凹線状の沈縦文が巡り、口縁部がやや肥厚する。地文は無く無文である。整形痕が残る。加曾利EⅢ式である。

#### 7号埋甕（第25図2）

小波状口縁を呈し、頸部が括れ胴部で張る器形を呈する。繊維を多く含む黒浜式であり、地文は単節RLを縦横に施文しているが、部分的に方向を変えてモチーフ状に施文する箇所もある。

#### 8号埋甕（第28図4）

胴部のみ現存する深鉢であり、単節RLを施文する。諸磯式である。

#### 9号埋甕（第26図3）

胴下半部が現存するもので、下半部が緩く張る器形を呈する。胴部で文様帯が平行沈縦文で区画され、地文に単節RLが施文される。諸磯b式に比定されよう。

#### 10号埋甕（第27図7）

口縁部が直行して緩く開く器形を呈し、単節LRの斜縦文が施文される諸磯式である。

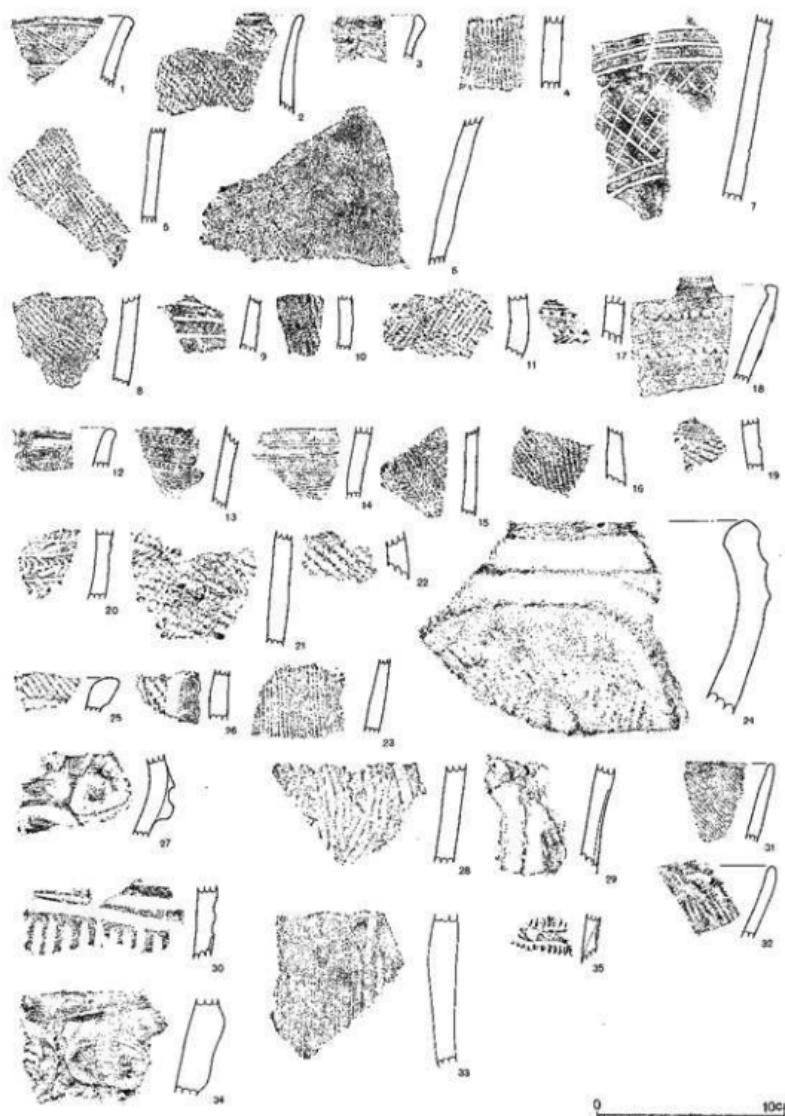
#### (c)七墳出土土器

##### 3号土壤（第33図1～6）

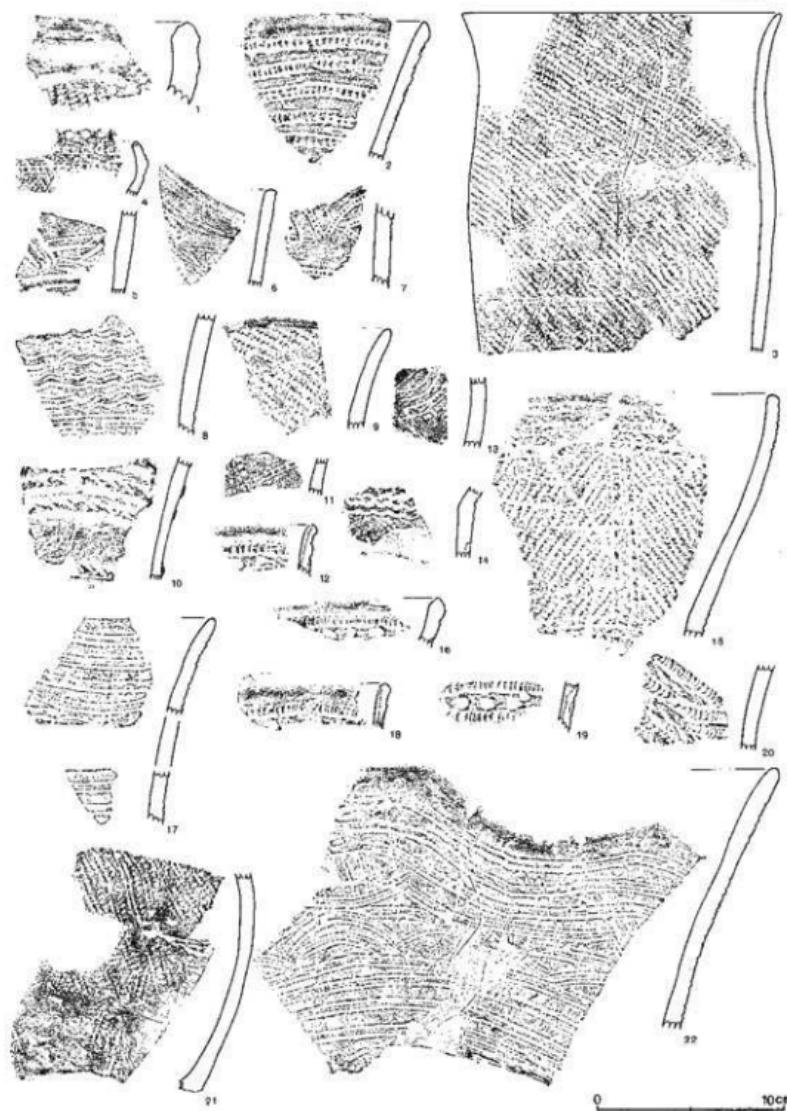
1～3は口縁の開く口縁部破片であり、1は平行沈縦文で幅狭の口縁部文様帯が区画され、平行沈縦文で鋸歯状文が施文される。3は細い爪形文で口縁部が区画され、円形竹管文が垂下する。他は縦文のみ施文される破片で、4のみLRで他はRLである。

##### 4号土壤（第33図7）

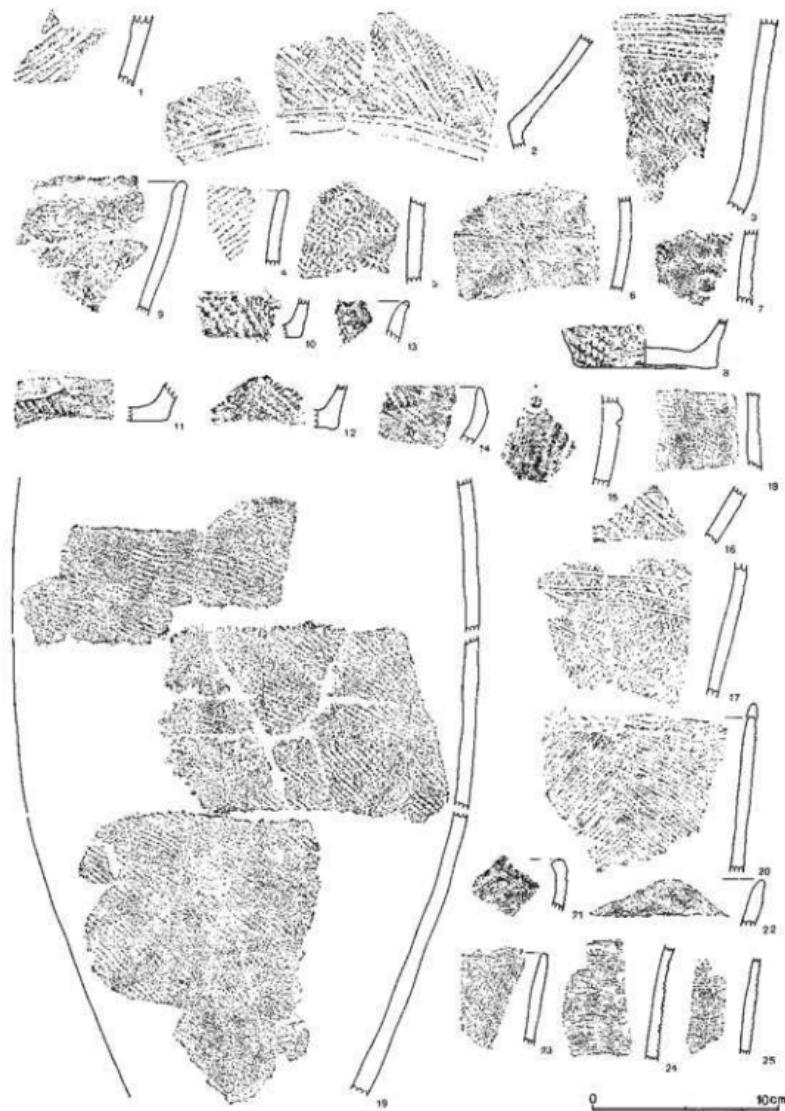
底部付近の破片であり、ほぼ円錐状の尖底を呈する。平行沈縦文で文様帯が多帯に分割され、最下部の分帯にあたる。文様は単沈縦による格子目文が施文される。三井式である。



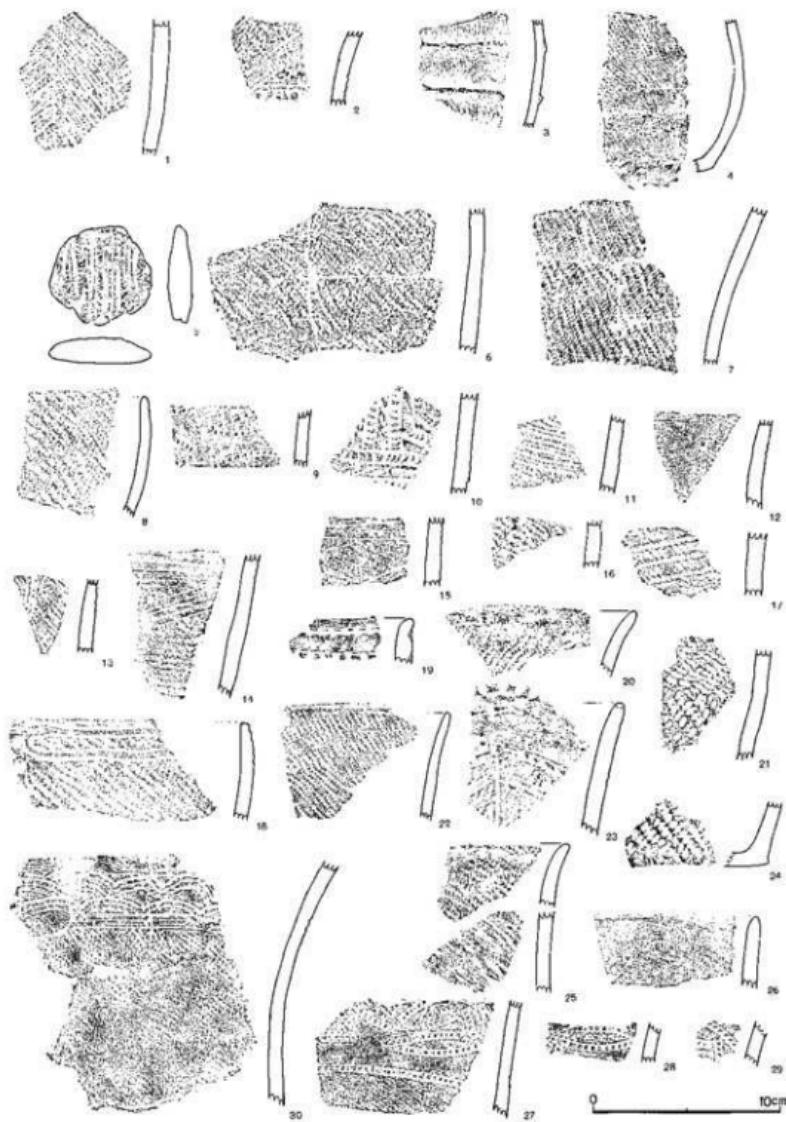
第33図 土壤出土構文土器拓影図（1）



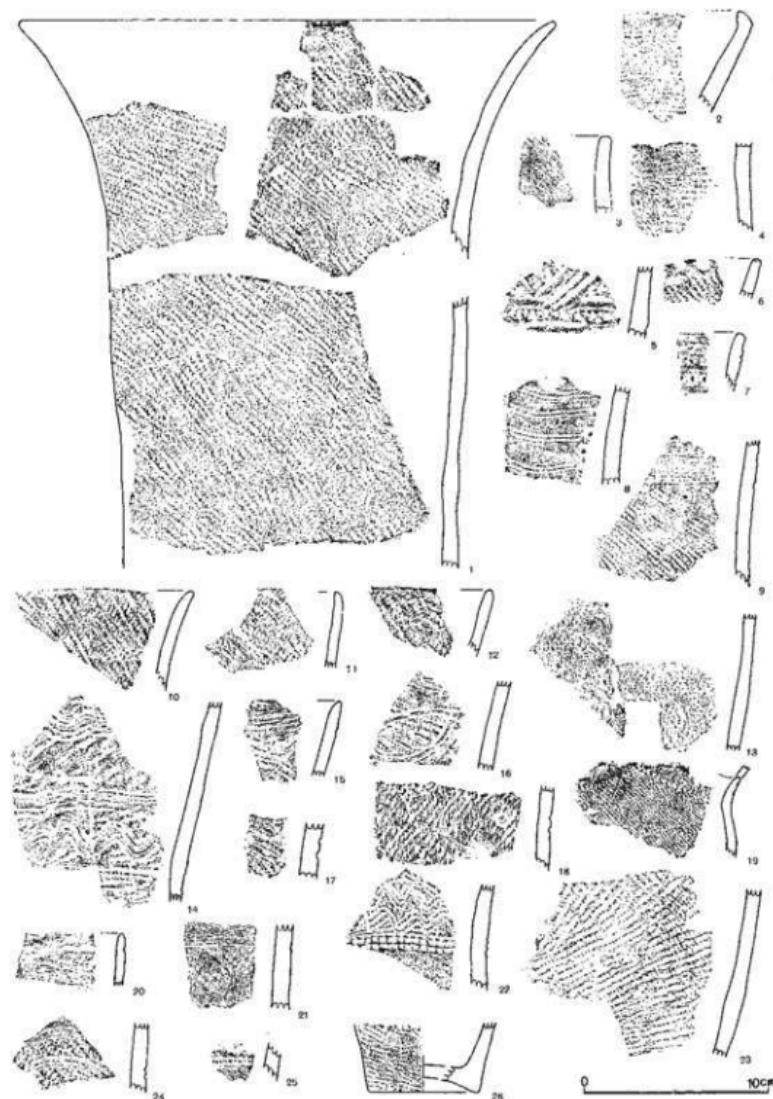
第34図 土壤出土縄文土器拓影図（2）



第35図 土壤出土縄文土器拓影図（3）



第36図 土壤出土繩文土器拓影図（4）



第37図 土壤出土縄文土器拓影図（5）

## 5号土壙（第33図8～11）

9は平行沈線文のみ施文されるもので、8、10は単節R Lが施文されている。11は「正反の合」の網による羽状網文が施文される黒浜式である。

## 6号土壙（第33図12～16）

12、14は平行沈線文のみ施文されるもので、12は口縁部破片であり細い平行沈線文で「米」字文の一部と思われるモチーフが施文される。14は横位の平行沈線文のみ施文されるが、施文具は細い。13は細い爪形文が施文され、地文に単節R Lが施される。15、16は繩文のみ施文されるもので、15が付加条網文と思われ、16は単節L Rである。いずれも、諸磯a式である。

## 19号土壙（第33図17）

纖維を含む黒浜式土器であり、半截竹管状工具による細い平行沈線文に沿って、同一工具と思われる連続刺突文が施される。

## 22号土壙（第33図18）

内面に沈線文の施される口縁部が直線的に開き、口縁部に押圧状の刺突文が施される隆起線文が2本巡らされている。掘之内Ⅱ式である。

## 33号土壙（第26図2、第33図19）

2は胴下半部に施文されている「米」字文土器であり、平行沈線文間が磨消繩文となっている。19は地文繩文の上に細い平行沈線文が施文されており、その上から円形竹管文が施されている。諸磯a式である。

## 51号土壙（第33図20～22）

21、22は纖維を含む黒浜式で、単節R Lが施文されている。20は諸磯b式の爪形文系土器で、幅広の爪形文が施文され、爪形文間に斜位の刻み状の刺突文が施されている。

## 55号土壙（第33図23、24）

24は口縁の内側するキャリバー形土器で、断面が三角形の隆帯文が渦巻を中心としたモチーフを描出するものである。地文は単節Rである。23は条線文のみ施文される破片である。

## 88号土壙（第33図25～27）

25は内削状に肥厚する口唇部がやや外傾し、沈線文で文様帶が区画されるが、口唇直下に単節R Lが施文されている。26は磨消懸垂文で、地文は単節L Rである。27は口縁部文様帶であり、低隆帯による渦巻文が施されている。渦巻文はかなり弛緩しており、隆帯脇のなぞりも強いため、加曾利EⅢ式に比定されよう。

## 89号土壙（第33図28、29）

28は幅広の磨消懸垂文がみられるもので、地文は無節Rである。29は低隆帯の懸垂文が施文されるもので、隆帯脇のなぞりは強い。地文は単節L Rである。

## 92号土壙（第33図30）

太い削り込む様な沈線文で区画され、区画内にやや細目の沈線文を削る様に施文して充填する。裏面には強い整形痕が残り、色調は赤褐色を呈する。田下下層式に比定される。

## 93号土壙（第33図31、32）

## 竹之花

31は口縁のやや開く小形の深鉢形土器で、器面整形は丁寧であり、細かな単節RLが施文されている。32は波状II縁の波頂部であり、内面はよく研磨されている。地文は単節RLである。

## 100号土壤（第33図33）

幅広の沈線文の磨消懸垂文が垂下するもので、地文は条線文のみである。加曾利EⅢ式に比定されよう。

## 126号土壤（第33図34）

キャリバー形土器の口縁部文様帶であり、隆帶により文様帶が区画されている。区画内には単節RLが施文されている。

## 200号土壤（第25図1、第34図1～12）

第34図2、4、7、11、12は爪形文系土器で、7、11は細い爪形文による変形木葉状文が施文されている。2は口縁部が開く器形で横位の爪形文が多段に施文され、4は口縁部が内折し爪形文が2列施文される。5、6は沈線文系土器で、半載竹管による平行沈線文でモチーフが描出される。8は平行沈線文で文様帶が区画され、小波状文が多段に施文される。10は浮線文系土器で、やや太目の浮線文が水平に施され、文様帶を区画している。浮線文上には斜位の刻みが施されており、地文に単節LRが施文されている。3は頸部が若干括れ、口縁部が開く器形を呈し、斜綱文単節RLが整然と施文されている。9は口縁の開く器形で、単節RLが施文される。諸磯b式を中心とし、1は加曾利EⅢ式である。

また、第25図1は早期の子母口式であり、口唇部に格条体压痕文が施されており、纖維を若干含み、条痕ではなく擦痕状の整形が施されている。

## 201号土壤（第34図13～15）

全て纖維を含む墨沢式である。13は付加条縄文の上に、平行沈線文で曲線文が描出されている。14は屈曲する胴部破片であり、原体は不明瞭であるが異条縄文の上にコンパス文が2条施文されている。15は胸部で括れ、やや内彎するII縁部が開く器形を呈し、口縁部と括れ部に3列の爪形文が施文されて、文様帶を区画している。さらに文様帶は2列の爪形文が垂下されて、縦位に分割されている。地文は分割内毎に単節RL、LRの原体を変えて、大きな羽状構成をとる。

## 202号土壤（第26図1）

口縁から底部まで現存するもので、爪形文による変形木葉状文の崩れたモチーフが展開されている。地文は単節RLの条が立つように施文されている。

## 207号土壤（第33図35）

爪形文が2列施文されている破片であり、爪形文間にU形の押し引き刺突文が施文される。諸磯b式である。

## 208号土壤（第26図4、第34図16～22）

第26図4は口縁が朝顔状に開く深鉢で、胴上半部が現存している。文様帶の上下端が3列の爪形文で区画され、モチーフは多重の平行沈線文で描出される。文様は波状文を基本にして、上下に溝巻文を配置し、縦位の分割線が施文されている。地文は単節RLである。

17、22は沈線文系土器で、同一個体である。4単位の波状縁で、朝顔状にII縁の開く器形を呈し、

文様帶の上端が3列の平行沈線文で、下端が4列の平行沈線文で区画されている。文様帶内は、上下の連弧状モチーフが施文されて、波頂部下には菱形状の区画が形成される。波状部のレンズ状区画内には縦位の平行沈線文が充填されている。16、18～20は爪形文系土器で、16、18、19は同一個体である。爪形文間に円形の押し引きが施文され、20は斜位の刻みが施される。21は胴下半部が膨らむ器形を呈し、付加条縄文が施文されている。以上、諸磯b式である。

#### 213号土壤（第35図1）

爪形文系土器であり、破片内に幅広で細かな爪形文が施文されている。諸磯b式である。

#### 217号土壤（第35図2）

胴部で強く屈曲し、平行沈線文で文様帶が区画されている。文様は所謂「米」字文で、平行沈線文による斜行沈線文が、単節RLの条に沿う様に施文されている。諸磯a式である。

#### 218号土壤（第35図3～7）

4は繊維を含む黒浜式で、単節RLが施文される。5、7は単節RL地文上に円形竹管文が縦位に施文される。6は単節RLの地文上に、角張った平行沈線文が施される。5～7は諸磯a式である。3は諸磯b式の爪形文系上器で、地文に付加条縄文が施文される。

#### 370号土壤（第25図5、第35図8）

第25図5は口縁のあまり開かない深鉢で、口縁部に2列の爪形文が巡り、胴部は爪形文に挟まれた無文帯が巡らされている。地文は細かな複節RLRである。第35図8は底部破片で、単節RLが施文される。諸磯a式である。

#### 371号土壤（第27図4、第35図9～12）

第27図4は口縁の聞く4単位の波状口縁で、波頂部に3単位の押圧状の刻みが施文されている。地文は太細の燃り合わせの単節RLの斜縄文である。他の全ても縄文のみ施文される土器で、原体も単節RLである。諸磯式である。

#### 372号土壤（第35図13～17）

15は単節RL地文上に円形竹管文が施文され、16、17は単節RL地文上に平行沈線文の「米」字状文が施文される。13は口縁に押圧状の刻みが施されて、小波状口縁が内轉し、単節RLが施文される。諸磯a式である。

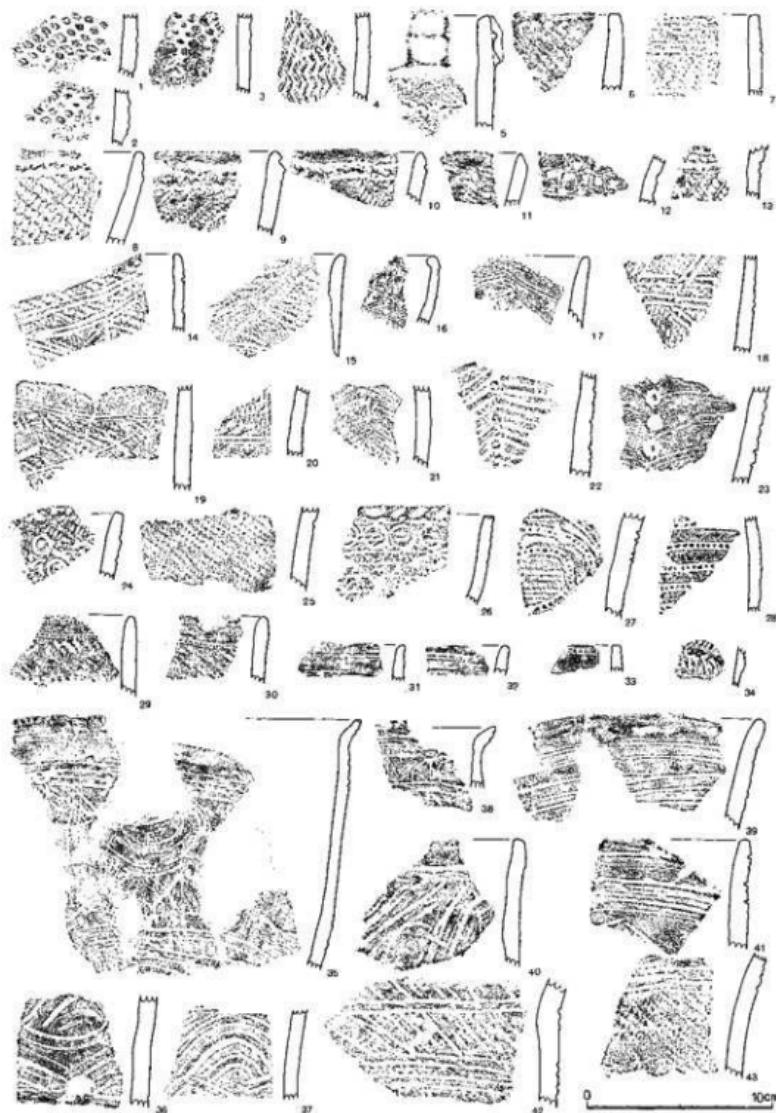
#### 373号土壤（第35図18）

条縁で文様帶が区画され、地文に単節RLが施文される。諸磯a式である。

#### 374号土壤（第35図19～25、第36図1～7）

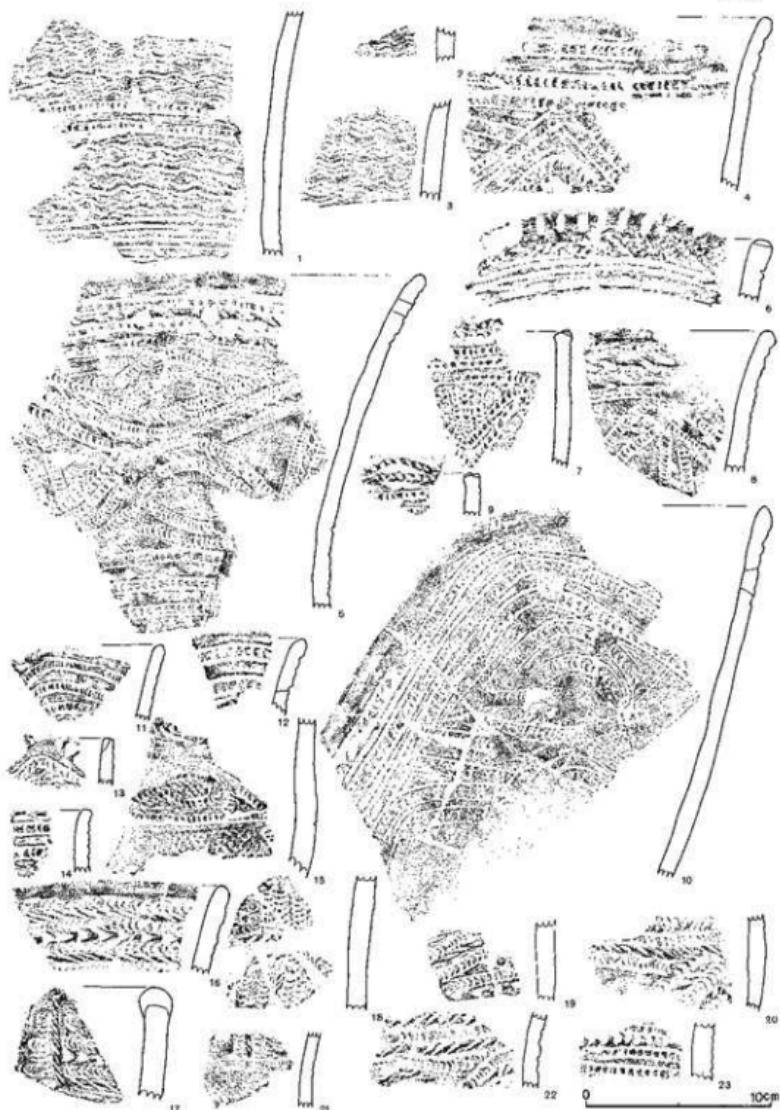
20は繊維を含む黒浜式の肋骨文土器で、口縁に小突を持ち、口縁部を爪形文で区画し、縦位の区画線施文後、綾形状の平行沈線文を施文している。21～23は波状口縁で、21は細い爪形文と円形竹管文が施文されている。22、23は単節RLのみ施文される。24、25は同一個体で間隔の狭い木葉状の肋骨文土器である。19は胴部の大形破片であり、単節RLの斜縄文のみ施文される。

第36図1は肋骨文土器で、2は磨消縄文による「米」字状文土器である。3は浮縫文間に幅広で細かな爪形文が施文される北白川2式類似土器である。4、6、7は斜縄文のみ施文されるもので、原体は単節RLである。5は扁平円形な上製品であり、表面に条痕状沈線文が施文される。20以外

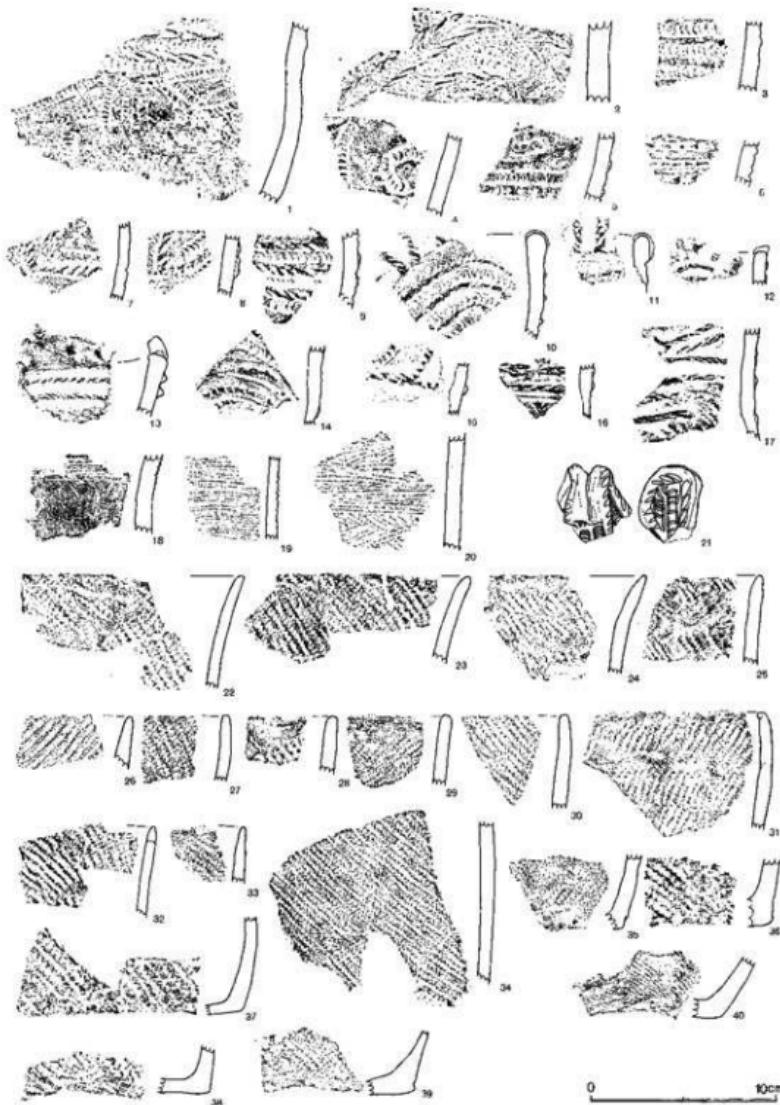


第38図 A区グリッド出土縄文土器拓影図（1）

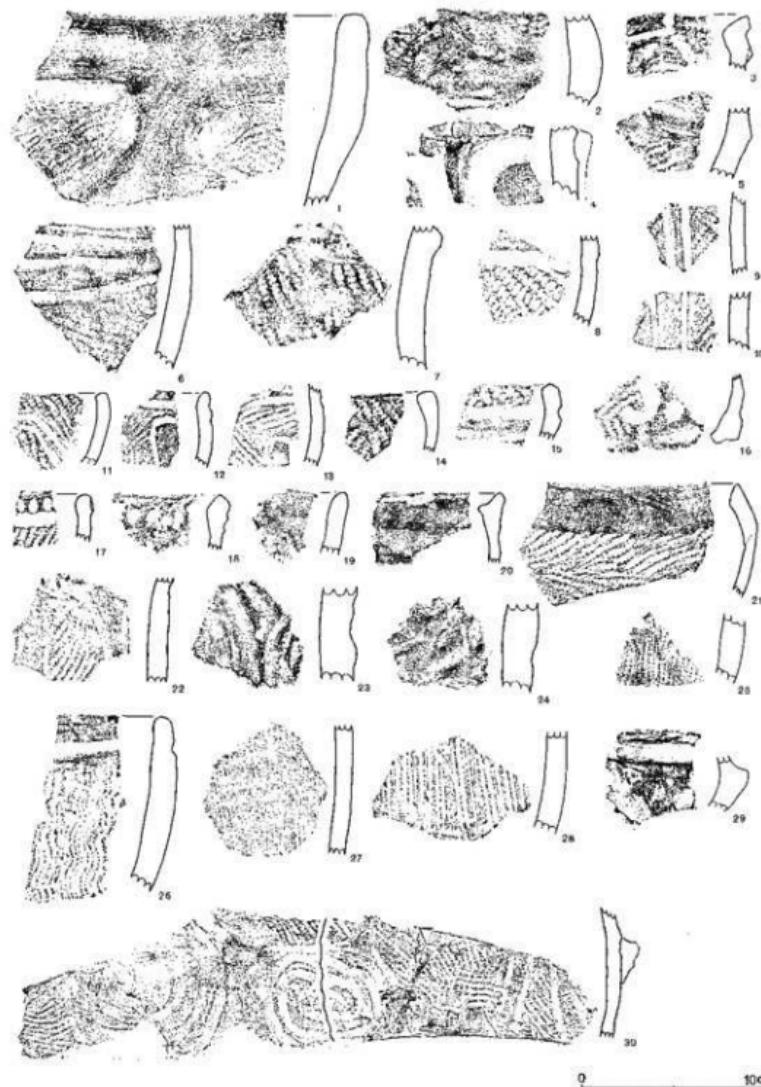
竹之花



第39図 A区グリッド出土縄文土器拓影図（2）



第40図 A区グリッド出土繩文土器拓影図（3）



第41図 A区グリッド出土縄文土器拓影図（4）

は諸磯 a 式に比定されよう。5は早期の条痕文期所産か。

375号土壤 (第36図 8～13)

9、11～13は諸磯 a 式であり、9は木葉文、11～13は肋骨文系上器である。10は諸磯 b 式の爪形文土器である。爪形文の間に斜位の刻みが施されている。8は内縛する口縫部がやや開き、単節 R L しが施文されている。

376号土壤 (第36図14、15)

14、15は同一体であり、平行沈線文によって「米」字文系のモチーフが描出されている。地文は単節 R L しが、横走する様に施文されている。

384号土壤 (第36図16～18)

17は大縦の擦り合わせによる付加条に類似した縄文であり、織維を含む黒浜式である。18はやや内縛する口縫部破片であり、口唇下に平行沈線文による横長の椭円区画文が施文され、区画文の一端からは斜行する平行沈線文と円形の刺突文が垂下している。諸磯 a 式である。地文は単節 R L である。19は単節 R L の施文される諸磯式である。

385号土壤 (第36図19)

諸磯 a 式の口縫部破片であり、口縫部に2列の爪形文が施文され、文様帶が区画される。

387号土壤 (第36図20、21)

21は織維を含み、同一原体を縦横に施文して、羽状縄文を構成している。黒浜式と思われる。20は諸磯式の口縫部破片であり、やや開く口縫部に単節 R L が施文される。

392号土壤 (第36図22～24)

23は波状縁を呈し、波頂部に押圧による刻みが5単位に施文され、2列の爪形文で文様帶が区画される。モチーフは垂下する平行沈線を中心にして、肋骨文か「米」字文が描出される。地文は単節 R L である。22は細密な単節縄文 R L が施文される口縫部破片で、内面はよく研磨されている。24は底部破片であり、単節 R L が施文される。諸磯 a 式である。

548号土壤 (第36図25～30、第37図1)

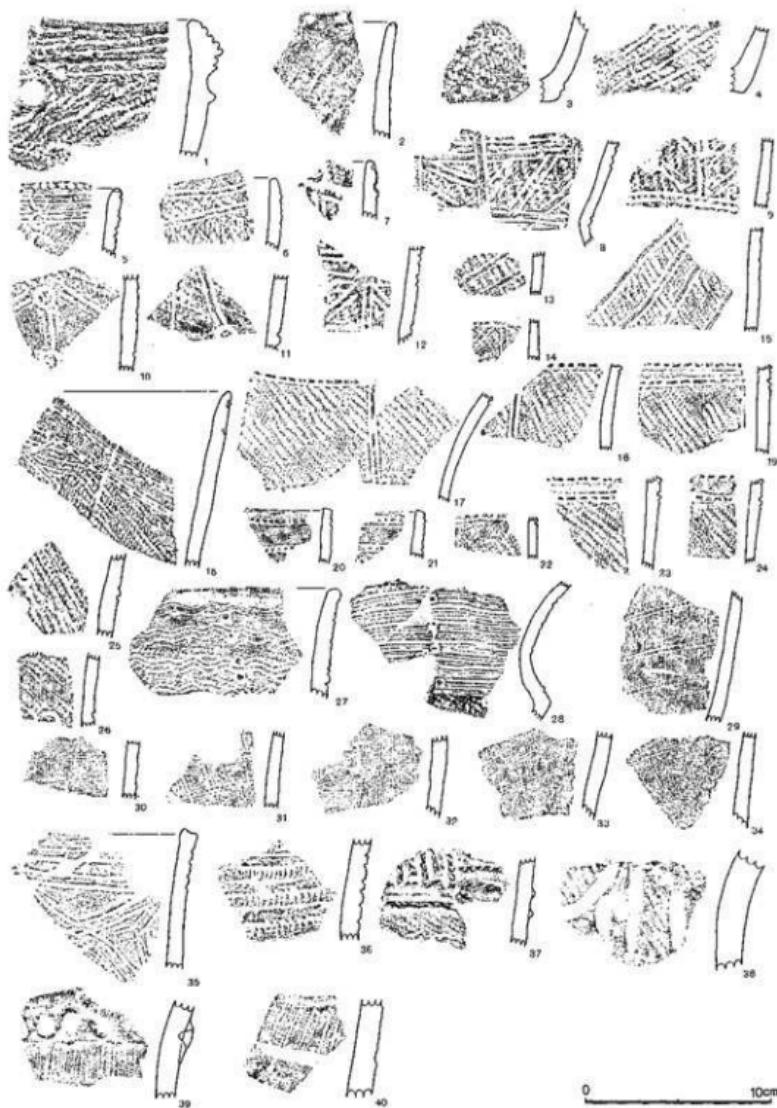
27～29は変形木葉文土器であり、同一個体である。木葉文内は磨消縄文が施されており、胴部の地文も単節 R L である。30は口縫が帆顎状に開く器形を呈し、平行沈線文の水平区画文内に、2段の小波状文を施文している。地文は単節 R L である。25、26、第36図1は縄文のみ施文される土器で、いずれも単節 R L が施文されている。

551号土壤 (第37図 2～4)

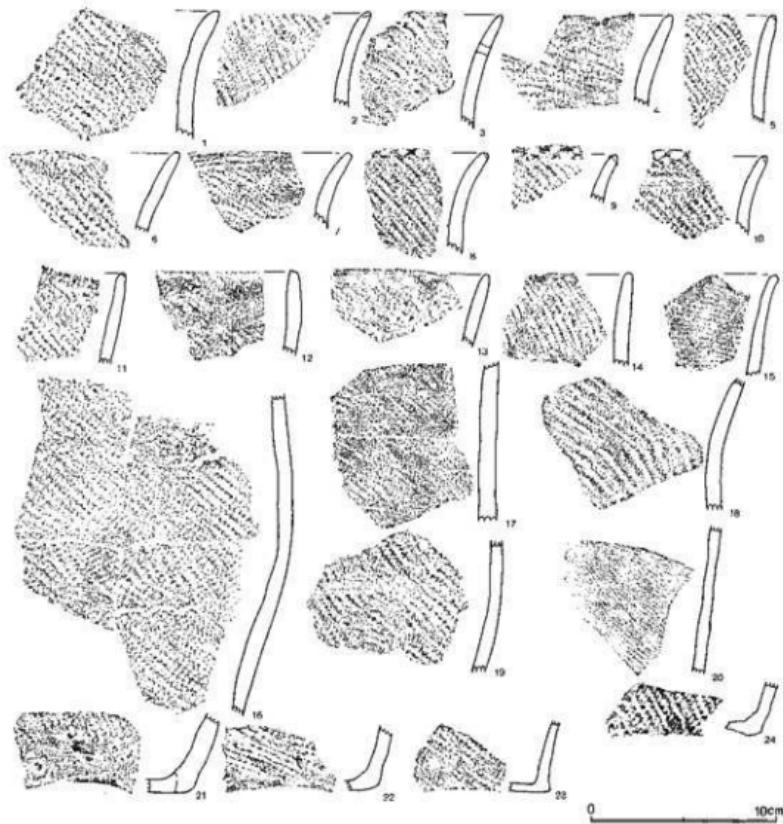
2は口唇部が内折し、口唇上に小波状の押圧が施されており、櫛歯状工具による2列の押し引き文で口縫部が区画され、押し引き文間に小波状文を施文している。3、4は縄文のみ施文される破片で、単節 R L が施文されている。

554号土壤 (第37図 5～8)

5は地文縄文の上に平行沈線文でモチーフが描出されるものであり、8は肋骨文土器である。6は押圧の刻みが施される口縫部破片であり、単節 R L しが施文される。7は平行沈線文間に刺突文が施される。いずれも諸磯 a 式である。



第42図 B区グリッド出土縄文土器拓影図（1）



第43図 B区グリッド出土縄文土器拓影図（2）

559号土壤（第37図9）

文様帯の下端部が2列の爪形文で区画され、地文に単節RLが施文される。諸磯a式である。

561号土壤（第27図5、第37図10～13）

第27図5は緩い4単位の波状口縁を呈し、頸部で折れ、口縁部が開く器形を呈し、単節RLが施文される。10～12は口縁部破片であり、13まで単節RLが施文される。諸磯式である。

562号土壤（第25図3、第37図14、15）

いざれも繊維を含む黒浜式であり、第24図3は底部を欠損する完形品である。口縁は小波状を呈し、平行沈線文と平行結節沈線文が口縁部と胴部に施文されている。地文は2～3段の同一施文を交互に繰り返して、全体として大きな菱形構成をとる。14、15は同一個体で、地文LRを施文後、

条縦文で水平に多段分割し、間に小波状文を施文している。

#### 566号土壤（第37図16）

木葉文の施文される諸職a式土器で、区画内には磨消縦文で単節RLが施文されている。

#### 567号土壤（第37図17～19）

17は平行沈線文に刺突文の施される諸職a式土器で、地文は単節RLである。19は波状口縁を呈する小形の深鉢で、2列の爪形文で口縁部が区画される。地文は単節RLである。

#### 568号土壤（第37図20～26）

20、23、26は織維を含む黒浜式で、20は沈線文の施される口縁部破片、23は単節RLの施文される胴部破片で、26は貝殻付圧痕文の施される底部破片である。21、24、25は諸職a式土器である。21は水平区画文内に波状文を施文するもので、24は地文単節RL上に肋骨文が施文され、25は口縁に近い破片で、細かな爪形文が施文されている。地文は細密な単節RLである。22は3条の結節沈線文で文様帶の下端を区画し、同一工具で多段の小波状文を描出している。地文は単節RLで、諸職b式に比定される。

#### (d)グリッド出土土器

##### A区出土土器

###### 第Ⅰ群土器（第38図1～4）

織文時代早期の押型文系土器群を一括する。1～3は椭円押型文土器で、器壁がやや厚く、胎土に白色粒子を含む。4は山形押型文土器であり、器壁が厚く、足の長い山形文が施文され、胎土に少量の雲母を含んでいる。

###### 第Ⅱ群土器（第38図5～13）

前期の織維を含む羽状縦文系土器群である、黒浜式土器を一括した。1は口縁部に梯子状の背の高い隆帯が施文されており、指頭による丁寧な整形が隆帯に施されている。地文は単節RLのループ文が多段に施文されている。胎土に織維を多く含む。6は口唇下に「C」字状の爪形文が1列施文されて口縁部が区画されており、地文には単節RLが施文される。7は口縁部に平行結節沈線文を2列施文して区画し、その下に平行沈線文を施文している。文様帶を多段に区画するのか、別のモチーフが描出されるのかは不明である。地文は単節RLである。8～10は口唇直下に1本のコンバス文が施文されて口縁部が区画されるものであり、8は単節RL、9は1付加条縦文、10は単節RLが施文されている。11は外削状の口唇部を呈し、無節Rが施文される。12は胴部の搦れ部の破片で、平行沈線文を施文後、角頭状工具による連続刺突文が3列施文されている。13は平行結節沈線文で胴部を区画し、地文に付加条縦文を施文する。

###### 第Ⅲ群土器（第38図14～34）

前期後半の諸職a・b式土器、及び同時期に比定される土器群を一括する。

###### 第1類（第38図14～34）

諸職a式、及び同時期に比定される土器群を一括する。

###### a種（14～20）

所謂「米」字文を基本とするモチーフが描出されるもので、口縁部は波状を呈するものが多い。

14~17の口縁部は半截竹管による幅狭な2本の平行沈線文や爪形文で区画され、区画内は15が磨消し、14が地文のままであり、16、17には地文が施文されていない。地文は14、15とも単節R Lである。16は波頂部下に爪形文による「V」字状のモチーフが施文されている。18は幅の広い平行沈線文で「米」状文が構成されるものであり、横位区画を施文した後に斜位の沈線文を施文している。地文は単節R Lである。19、20は幅狭の平行沈線文で区画されるが、脇部には地文繩文を磨消した後に、平行沈線文で縦取る無文部が区画されている。地文は19が単節R L、20がL Rである。

#### b種 (21~23)

所謂肋骨文系のモチーフを描出する土器群である。21は地文繩文の上に幅広の沈線文で描出され、縦位区画線を先に施文し、後に斜行沈線文を施文している。地文は単節R Lである。22、23は半截竹管の平行沈線文で施文され、縦位区画線、肋骨文、円形竹管文の順に施文される。22は地文に単節R Lが施文されるが、平行沈線文が多条のため地文は目立たない。23の地文はない。

#### c種 (24~26)

円形竹管文が施文されるものを一括した。24、25は繩文地文の上に口縁部から円形竹管文列が垂下するもので、両者とも地文は単節R Lである。24の口唇部には刻みが施されている。26は地文単節R L上に、平行沈線文が施文されており、口唇直下では平行沈線文の上から大きめの円形竹管文が、横一列に施文されている。角頭状の口唇部には、浅い押圧状の刻みが施される。

#### d種 (27~33)

施文要素として幅狭な爪形文が使用されているものを一括した。27は結節沈線文状の爪形文で変形木葉文を描出しているものと思われ、区画内に単節R Lが施文される。28は横位の爪形文が多段に施文される。29~33は口縁部の区画線に、2列の爪形文が施文されている。

#### e種 (34)

北白川2式類似土器である。器壁が4mm程で薄く、隆起線文を粘付した後に、隆起線筋に幅広で細かな爪形文を施文している。爪形文は押し引き状に施文される部分と、ロッキング状に施文する部分がある。爪形文の施文の結果、隆起線文は断面三角形状となる。内外面に帶上の朱が塗られている。

#### 第2類土器 (第38図35~43、第40図1~21)

第1類土器と系統性や類似性が強い、諸職b式土器を一括する。

#### a種 (第38図35~43、第39図1~3)

沈線文系上器を一括する。35、38は口縁部が強く外反し、口唇部に刻みが施される。文様帶の上下を平行沈線文で区画し、文様帶内に上下からの対向する渦巻文が平行沈線文で描出される。38は幅狭の文様帶が区画され、渦巻文を基本としたモチーフが描出される。36、37は文様帶内に施文される渦巻文であり、37には渦巻の先端に直交する止めの沈線文が施文される。39、41は同一個体であり、口縁部が平行沈線文で区画され、区画線下に歯齒状のモチーフが描出される。40は斜めの平行沈線文が施文され、渦巻文と組み合わさるものと思われる。42は地文繩文単節R Lの上に、脇部区画線の平行沈線文を2本施文し、斜行沈線文を施文した後に、1本の横位の平行沈線文を施文している。43は地文単節R L上に、区画の平行沈線文が施文される。第39図1~3は多段の波状文が

施文されるもので同一個体である。1は胴部が3本の平行沈線文で区画され、2列の爪形文で上半部の文様帯が幅広に区画されて、平行沈線文による波状沈線文が多段に施文される。

b種（第27図2、第39図4～8、10～16、18～20）

爪形文系土器を一括する。口縁部が開き、波状縫と平縫がある。4～8、14、16は平縫を呈し、文様帯の上下を2～3列の爪形文で区画し、4、7、8は鋸歯状モチーフと垂下する区画線が組み合わさるもので、鋸歯状文も大きく波状を構成するものと思われる。5は縦位区画線と波状文で区画された部分に曲線文を組み合せてレンズ状の文様を構成している。爪形文間には、文様帯上下の区画線内では押し引き状の刺突文、モチーフ描出線間では斜行の刻みが施されている。16は口縁部の区画線に、1本毎に異った要素を施文している。10～13は波状縫上器で、文様の構成は平縫と同様なものを、波状縫の中に組み込んでいる。

c種（第39図9、17、21～23、第40図1～11、14、15、21）

爪形文の間に浮線文が施文されるものを一括する。第39図17、21～23、第40図1～6は爪形文間に低くて太い隆帯状の浮線文が施文されるもので、浮線上には刺みや押し引き状の刺突文が施されている。施文順位は、浮線文でモチーフを決め、爪形文を施文した後に、浮線文上に刻みが施されている。第40図7～12、14、15は爪形文よりも浮線文の方が目立つもので、典型例は10である。第39図9は口唇上に蛇行する浮線文を施文し、第40図10、11は口唇に直角に浮線文が施文される。21は波状縫の把手部分である。

d種（第40図12、13、16、17）

浮線文系土器である。浮線文のみでモチーフが描出されるものであり、地文には繩文が施文され、浮線上には斜位の刻みが施されている。

e種（18～20）

条線文の施文される土器を一括した。18は文様帯の区画に条線文が使用され、19は底部近くまで条線文が施文されている。20は条線文による多段区画帶に、矢羽状の条線文が施文される。

第3類土器（第40図22～39）

繩文のみ施文されるものを一括する。26、33、36は纖維を含む黒浜式であり、26は単節RL、33はRL、36は複節RLRが施文される。他は諸穀式であり、25は単節RLの斜繩文の上に、無節Lが帯状に施文される。37は太細の擦り合わせによる単節RLである。29、31、35が単節RLの他はRLであり、圧倒的に多い。

第IV群土器（第41図）

中期の土器群を一括する。1～5は口縁部文様帯を持つキャリパー形の上器で、6～10は磨消懸垂文の垂下する上器である。地文は繩文が施文されるものが多いが、4は条線文が施文される。

11～21は口縁部文様帯を持たない土器で、口縁部から波状文、逆「U」字状文が施文され、繩文は充填手法をとる。22～24は胴部破片であり、22は逆「U」字状文の懸垂文が垂下し、23、24は低隆帯でモチーフが描かれる。

26は口縁に凹線状の沈線が巡り、蛇行条線文が施文される浅鉢である。29は肩の張る壺である。25は繩文が、27、28は条線文が施文される。30は把手の付く壺形上器であり、沈線文による渦巻文

### 竹之花

が施文されている。

#### B区出土土器（第42図～第43図）

A区と同様の分類を行うため、総括的に説明する。

第42図1～4は第Ⅱ群土器で織維を含む黒浜式であり、1は口縁部に隆帯が巡り、隆帯脇に平行結節沈線文が施文され、円形の押圧文が施文される。地文は付加条縄文である。3は底部に1列の爪形文が巡る。4の原体は太縦の縄文LRである。

5～24は第Ⅲ群第1類土器でa種の「米」字文系土器で、25、26はc種の円形竹管文の施される土器である。27は多段の波状文が施文され、円形竹管文列が垂下するものである。28は多段の条縄文が多段に施文され、円形竹管文列が垂下し、構成は27と同様である。27、28は第1類から第2類にかけての上器群であり、型式学的な帰属は難しい。

29～34は平行沈線文による粗い格子目文が施文されるものであるが、帰属が難しく器面整形等から第1類上器として促えて置きたい。

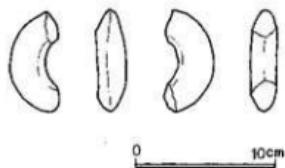
35～37は第Ⅲ群第2類である。35はa種で、平行沈線文によりモチーフが描出される。36はb種で、爪形文が多段に施文される。37はd種であり、半節RLの地文上に縦横の浮線文を施し、浮線上には刻みが施される。

38～40は第Ⅳ群土器である。38は磨消懸垂文のなかに、巻手状懸垂文が垂下する。39、40は曾利系の上器であり、39は隆帯上に交差の刺突文が施文され、地文に条縄文が施文される。40は沈線文の区画内に、細い沈線文が充填されている。

第43図1～24は縄文のみ施文される破片であり、9、10の口縁部には刻みが施文されている。原体はほとんどが半節RLである。全て、諸機式に比定される。

#### 土製耳飾（第44図）

1点のみ出土した。半分のみ現存する。断面形が梢円形を呈し、全体形が円形を呈するものと思われる。第200号土壤で、諸磯式期所産のものと思われる。



第44図 200号土壤出土耳飾

## (3)縄文時代の出土石器

## (a)住居跡出土石器

## 1号住居跡

敲き石（第45図1）

扁平な円礫を素材とし、木端に3枚、側縁に1枚の剝離面が認められる。

石斧（第45図4）

片面に自然面を大きく残し、その自然面を刃部に利用している。

## 3号住居跡

スクレイバー（第45図3）

剝片を用い、一側縁に鋸齒状の加工が施されている。

石斧（第45図5）

上半部を欠損しているが、分銅形の打製石斧であつただろうと思われる。

## 11号住居跡

石斧（第45図6）

横長剝片を素材とし、表面刃部付近に自然面を残す撥形の打製石斧である。

## 12号住居跡

石鎌（第45図2）

凹基無茎鎌形の局部磨製石鎌である。周辺の上本田遺跡（江南町）等で早期押型文土器と共に検出される局部磨製石鎌に酷似する。本住居跡は前期諸磯b式期のものであるが、この石鎌は本来早期のものであり、本住居跡に混入したものである可能性が高い。

石斧（第45図7～9）

7は上端を僅かに欠損するが、9と同様撥形の打製石斧である。8は下半部を欠損しているが分銅形の打製石斧であろう。

## 13号住居跡

石斧（第46図1～7、第47図2）

第46図1、2は乳棒状、3、4は短圓形、5は分銅形、6は撥形の石斧である。2、3は撥形剝離後の敲打痕に覆われる。3は刃部周辺を中心に研磨される。4は扁平な礫を素材とし、5は横長剝片を用いている。第47図2は短圓形の石斧であったと思われるが刃部方向からの剝離によって原形を留めていない。

削器（第47図1）

横長剝片を素材とし一側縁に数枚の剝離面が観察される。

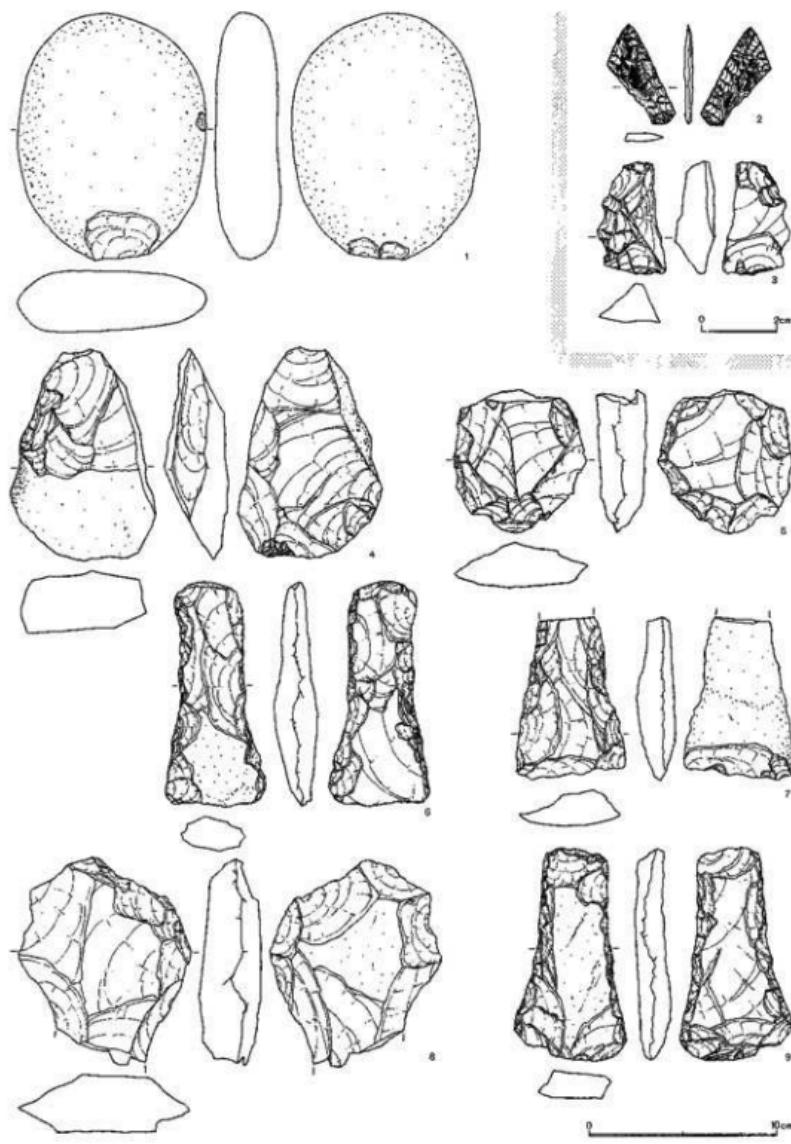
敲き石（第47図3）

柱状の礫を用い、両端と側縁に使用の痕跡が残る。

石皿（第47図4）

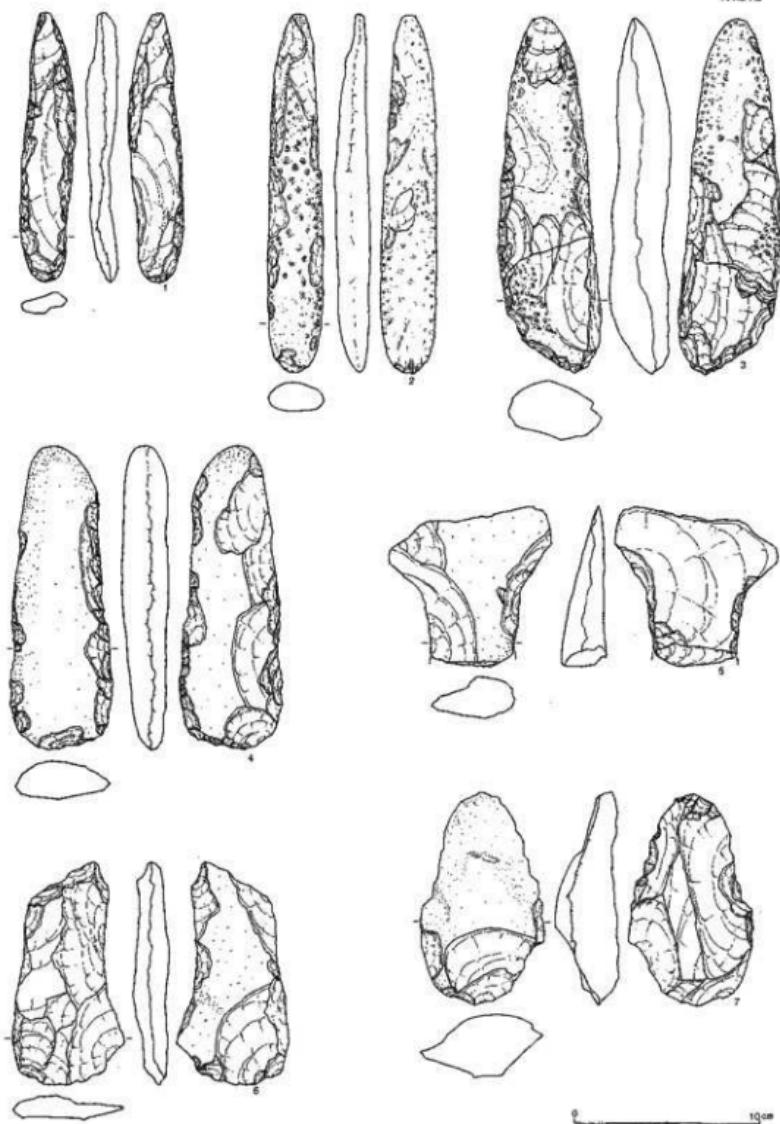
扁平な礫を素材とし片面に僅かに使用の痕跡が残る。

磨り石（第47図5）



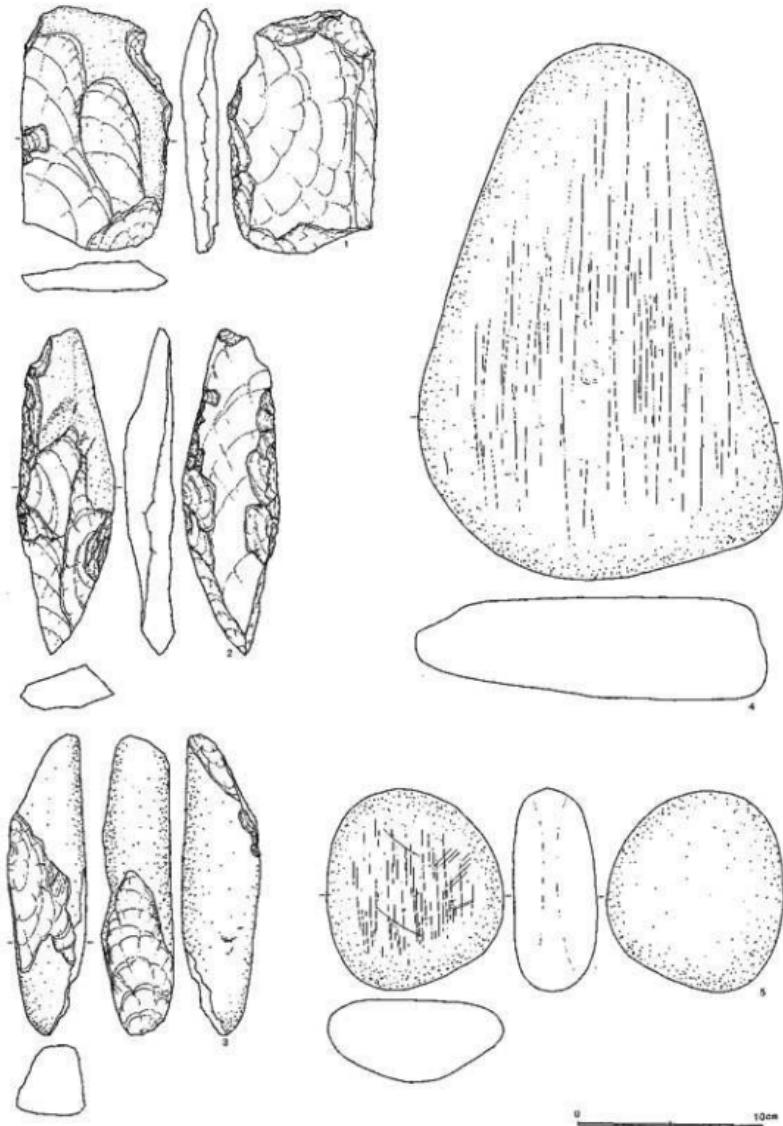
第45図 住居跡出土石器 (1)

竹之花

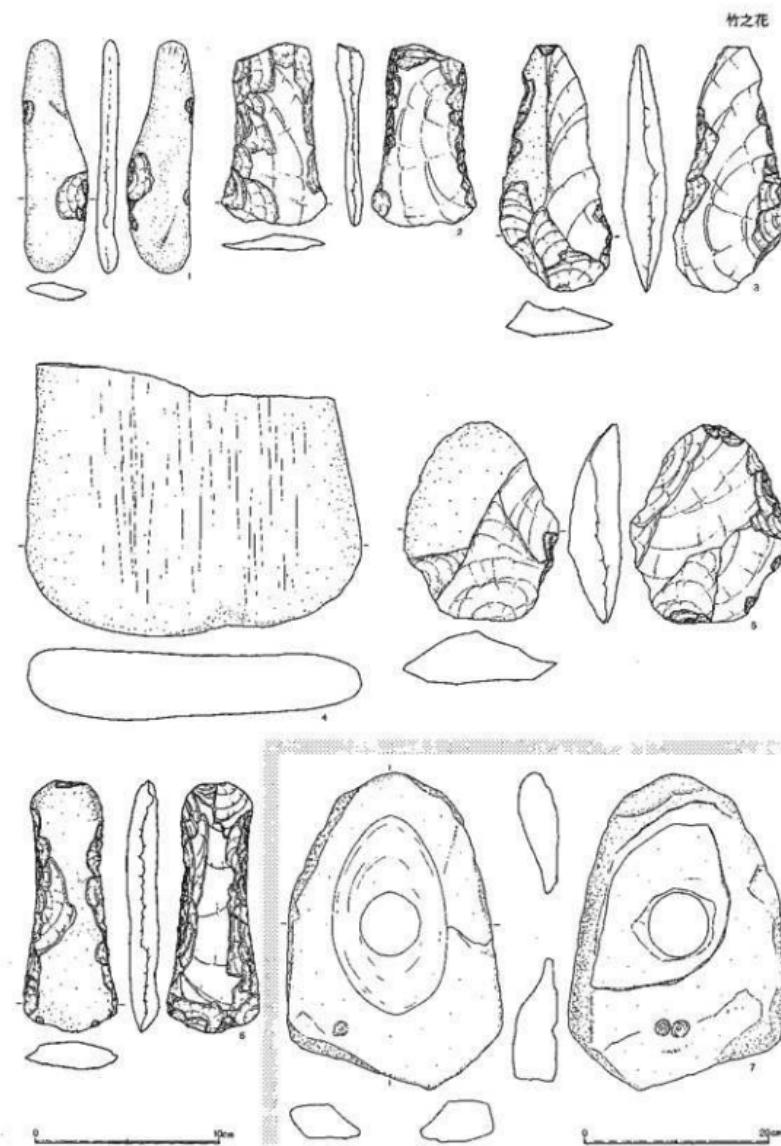


第46図 住居跡出土石器（2）

竹之花



第47図 任居跡出土石器（3）



第48図 住居跡出土石器 (4)

#### 竹之花

やや丸みをもった扁平礫を用い、平坦な面を磨り面としている。

#### 18号住居跡

敲き石（第48図1）

棒状の礫の側縁の突出部を利用して敲き石としている。

石皿（第48図4）

扁平な礫を素材とし、一方の面を使用している。使用の痕跡は顯著ではない。大きく欠損している。

#### 20号住居跡

石斧（第48図2、3、6）

2、3は横長剝片、6は縦長剝片を素材としている。2、6は楕円形の石斧である。

石皿（第48図7）

楕円形に大きく凹んだ磨り面を有し、磨り面の中央には直径約7cmの円形の穴が貫通している。  
表面に1カ所、裏面に2カ所凹み石にみられるような凹みが看取される。

#### (b)集石出土石器

調査時点で集石として扱っているものの中には石器自体は縄文時代のものでも、集められたのは後世であろうと思われるものも含まれている。

#### 2号集石

スタンプ形石器（第50図3）

一側縁に交互剝離による稜が形成され、分割面の縁辺にも複数の剝離面が認められる。底面は著しく摩耗している。縄文時代早期のものであろう。

#### 5号集石

凹み石（第49図1）

下半部は欠損しているが、現存部表面に2カ所の凹みが認められる。上端部には敲打痕も僅かに観察され、敲き石としても使用された可能性が考えられる。

磨り石（第49図2、3）

2、3とも扁平な楕円礫の表裏に磨痕が観察される。3の表面の磨痕は特に顯著であり光沢を有するほどである。

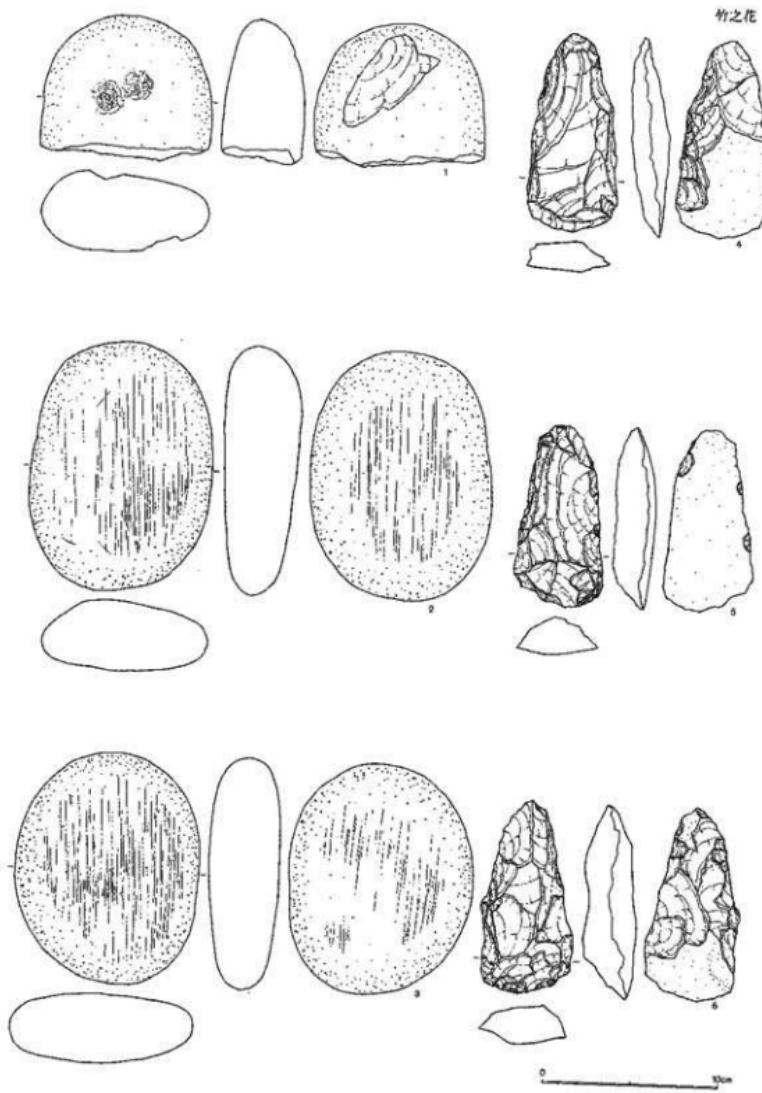
石斧（第49図4～6、第50図1、2）

第49図4～6、第50図1は裏面に大きく自然面を残し、自然面を利用して刃部を作出する特徴的な形態の打製石斧である。縄文時代早期の石斧であろう。

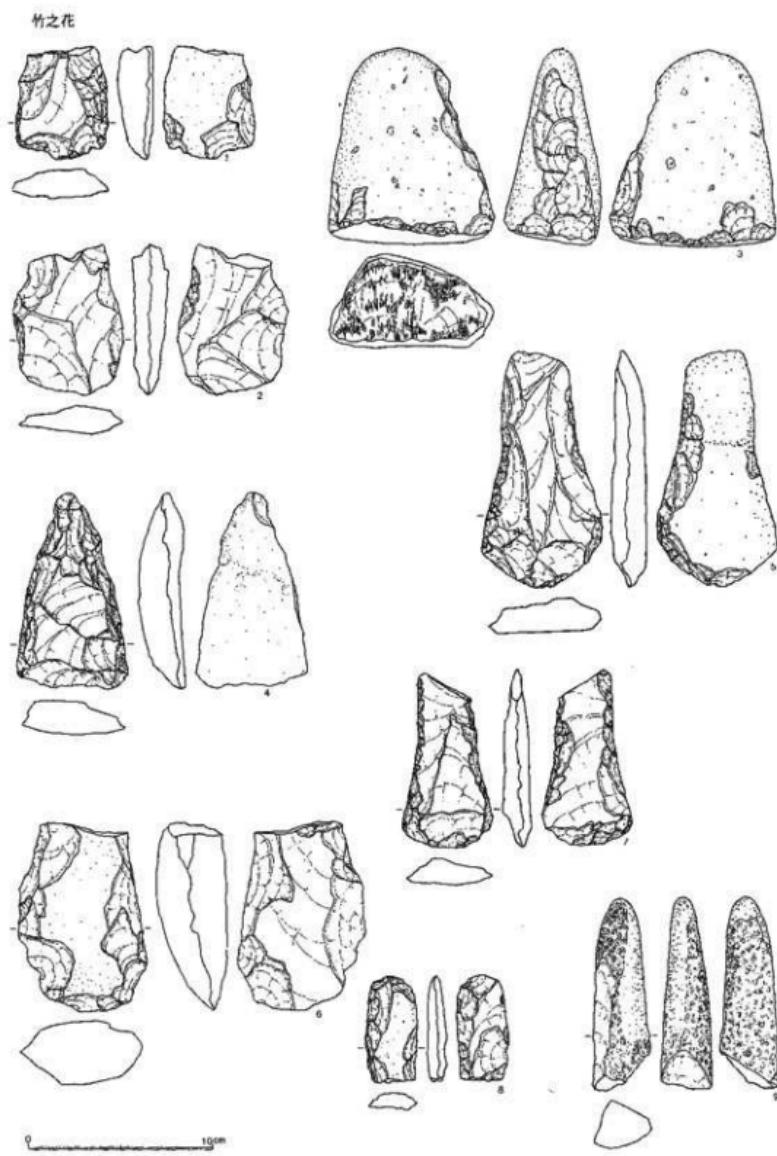
#### 10号集石

石斧（第50図4、5）

4、5は裏面に大きく自然面を残す打製石斧である。4は5号集石の石斧同様縄文時代早期のものと思われる。



第49図 集石遺構出土石器



第50図 土壤出土石器（1）

## (e) 土壌出土石器

## 201号土壌

## 石斧（第50図6）

表面に自然面を大きく残した片刃の打製石斧である。上半部は欠損している。

## 203号土壌

## 石斧（第50図7）

縦長剝片素材で、その打点部付近を刃部にした撥形の打製石斧である。基部付近は斜めに欠損している。

## 206号土壌

## 石斧（第50図8、9）

8は小形の打製石斧で大きく欠損している。9は三角柱状の石斧の基部で敲打痕が広範囲に認められる。

## 218号土壌

## 凹み石（第51図1）

1/2はほど欠損しているが凹みが1カ所認められる。被熱しておりかなり脆弱である。被熱によるくずれの影響で明瞭ではないが、敲き石としても使用されたと思われる痕跡も観察される。

## 375号土壌

## 石斧（第51図2、3）

2は縦長剝片素材の短冊形の打製石斧であるが刃部側は欠損している。3は片面に大きく自然面を残した小形の石斧で縦長剝片素材である。表面の一側縁に連続する敲打痕が認められる。同一側縁の裏面には連続する剝離面が観察されるが敲打より後出のものである。敲打痕を有する大形の石斧から剥落した剝片を再利用した可能性が考えられる。

## 376号土壌

## 石斧（第51図4）

縦長剝片素材の短冊形の打製石斧である。

## 452号土壌

## 石斧（第51図5）

片面に自然面を大きく残した横長剝片素材の撥形の打製石斧である。

## 553号土壌

## 石斧（第51図6）

横長剝片素材の撥形の打製石斧である。

## 560号土壌

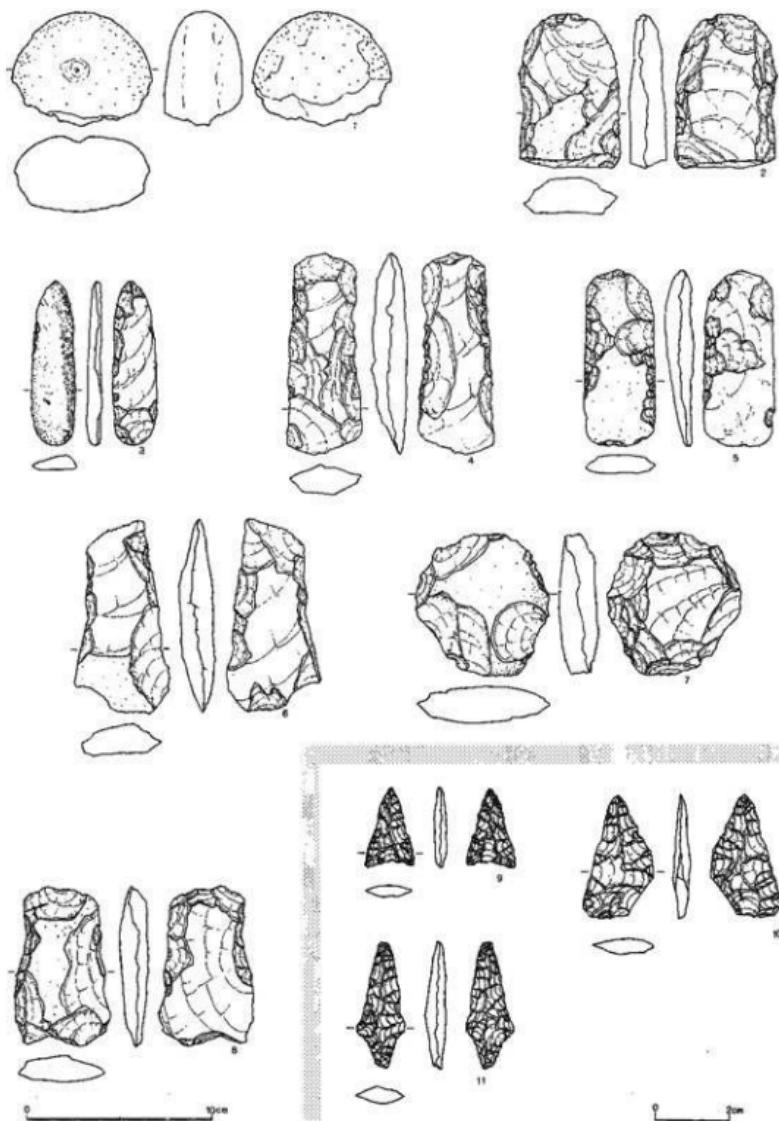
## 石斧（第51図7）

横長剝片素材の分瓣形の打製石斧であるが半分欠損している。

## 568号土壌（第51図8）

横長剝片素材の撥形の打製石斧である。

竹之花



第51図 土壤出土石器（2）

## (d) グリッド出土石器および表面採集石器

## 石鎌 (第51図 9~11)

9は凹基無茎鎌で脚部がやや張り出す。10は平基無茎鎌で一方の脚部が欠損する。11は凸基有茎鎌である。

## 石斧 (第52図 1~10、第53図 1~7、第54図 1~8)

第52図 1~10、第53図 1~3は打製石斧である。第52図 7~10は裏面に自然面を大きく残し、自然面を利用して刃部を作出している。刃部から基部に向かって尖頭形に近づくように加工される。極めて定形的な石斧で、5号集石、10号集石にも類例がみられる。大きさにはばらつきはあるがほぼ相似形である。縄文時代早期のものであろう。第52図 1は分銅形の打製石斧である。

第53図 4~7は研磨痕は観察されないものの磨製石斧の一部あるいは磨製石斧の未製品と考えられるものである。いずれの石斧にも敲打痕が観察される。

第54図 1~8は研磨痕が観察される石斧である。1~3の磨痕は刃部を中心とした部分的なものであり使用に伴うものと考えられる。4~8は磨製石斧で、特に8には入念な研磨が施されている。7は部分的に被熱しているようである。

## 第53図 4、6、第54図 6、7は刃部側を、第54図 8は基部側を欠損している。

## 礫器 (第54図 9~11)

9は片刃のチョッパー状の礫器である。10、11も含めて縄文時代早期の礫器であろうと思われる。いずれも自然面を大きく残す。

## スタンプ形石器 (第55図 1~4)

1、2は分割しただけで他に加工や使用的痕跡等は観察されない。3、4は底面の摩耗が顕著である。3は底面からの剝離面が数面観察される。いずれのスタンプ形石器も側縁等に加工は認められない。

## 凹み石 (第55図 5~7、第56図 1)

第55図 5、7は表裏に2カ所ずつ、6は表面に3カ所、裏面に2カ所、第56図 1は表面に1カ所凹みが観察される。6表面の中央部の凹みはV字谷状を呈する。5、6は被熱しているようで脆弱である。

## 磨り石 (第56図 2、3)

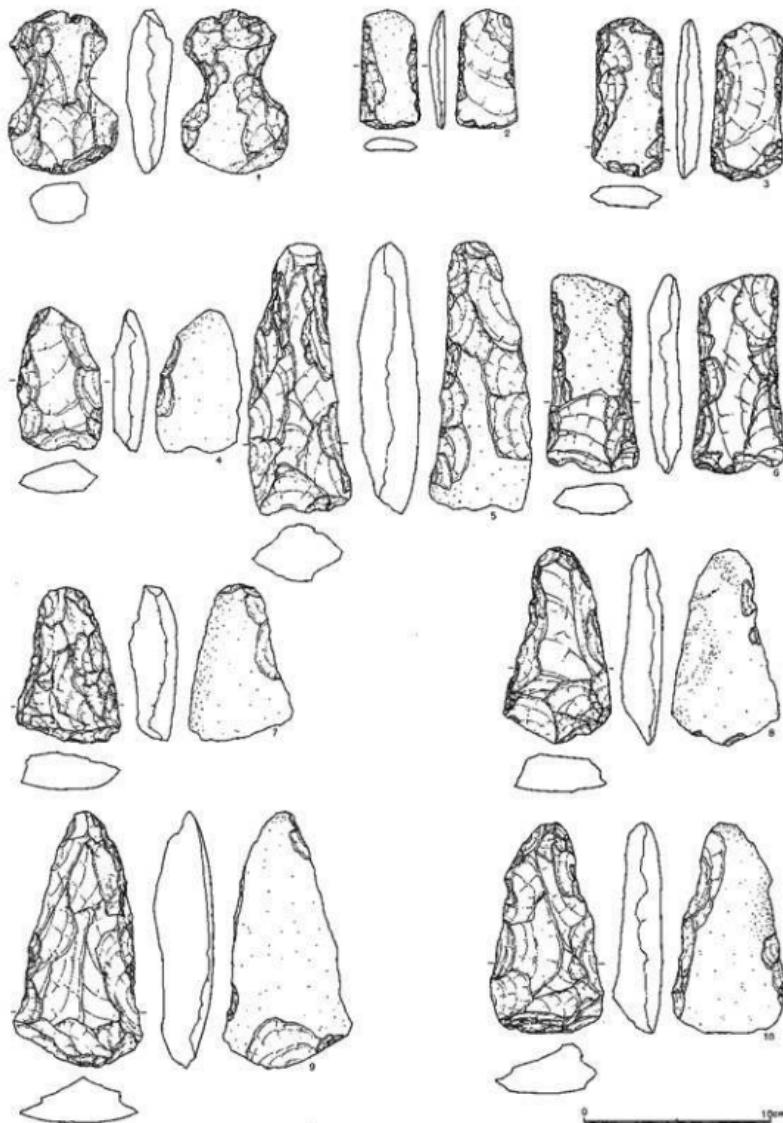
2は扁平な円錐の片面に顕著な磨痕が認められるが、もう一方の面および側面にも一部に磨痕が観察される。3は表裏に横位の擦痕が走るが、末端部には連続する敲打痕も観察される。磨り石としての使用の他に敲き石としても使用されたようである。

## 石皿 (第56図 4)

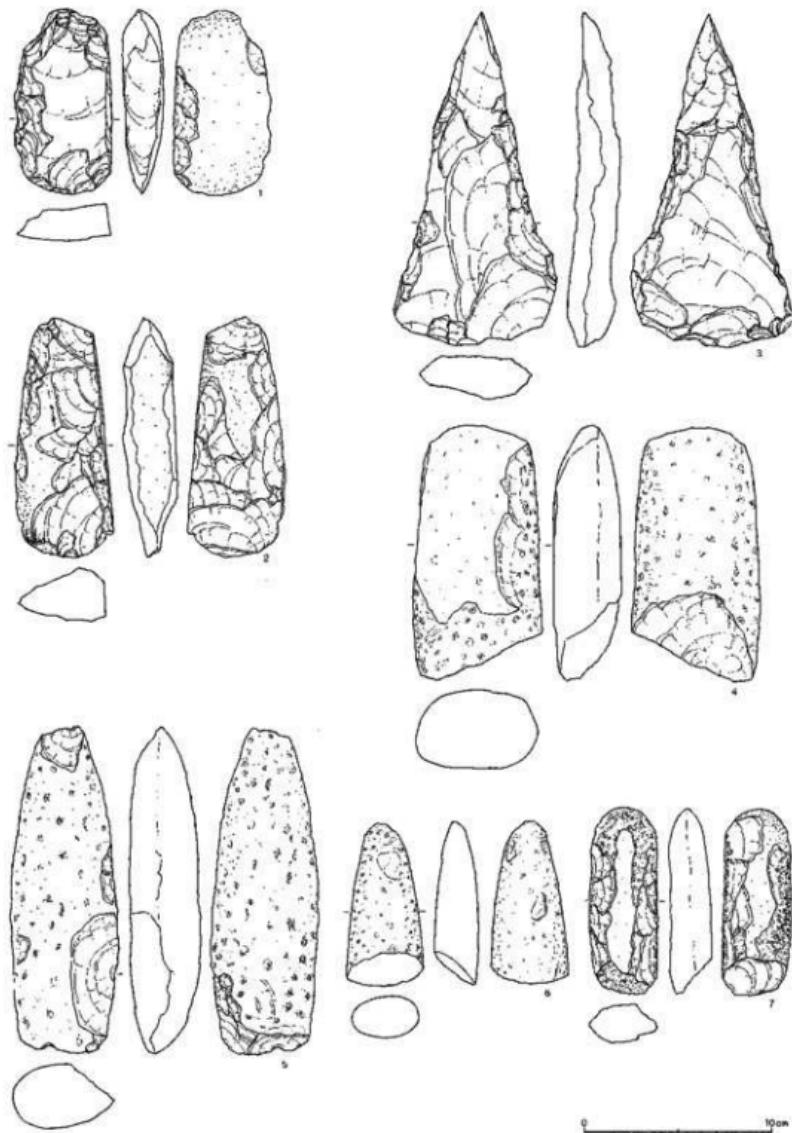
表面は平坦面であるが裏面は弧状を呈する。表面のはば中央部に長径11cm、短径6.5cm程の橢円形の磨り面を有する。

なお、遺構図中に石器の番号を記入したが、これは注記番号である。石器実測図との対比は一覧表を参照されたい。(円阿弥遺跡も同じ)

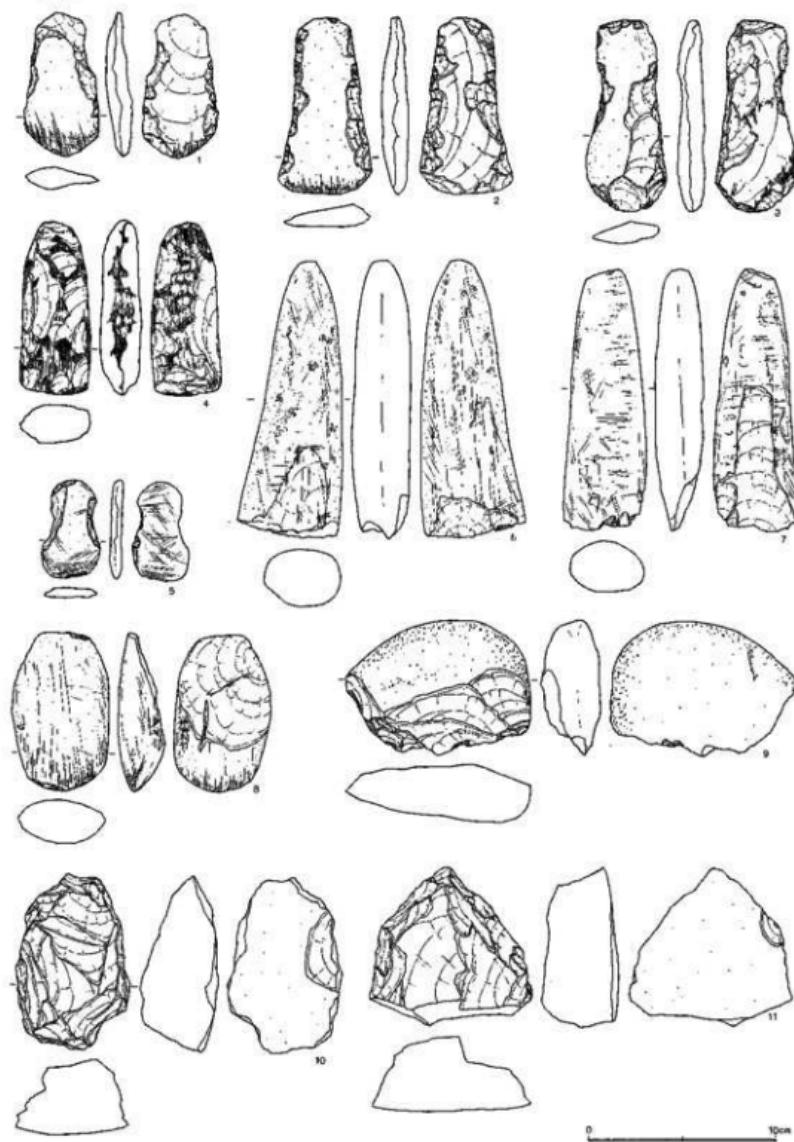
竹之花



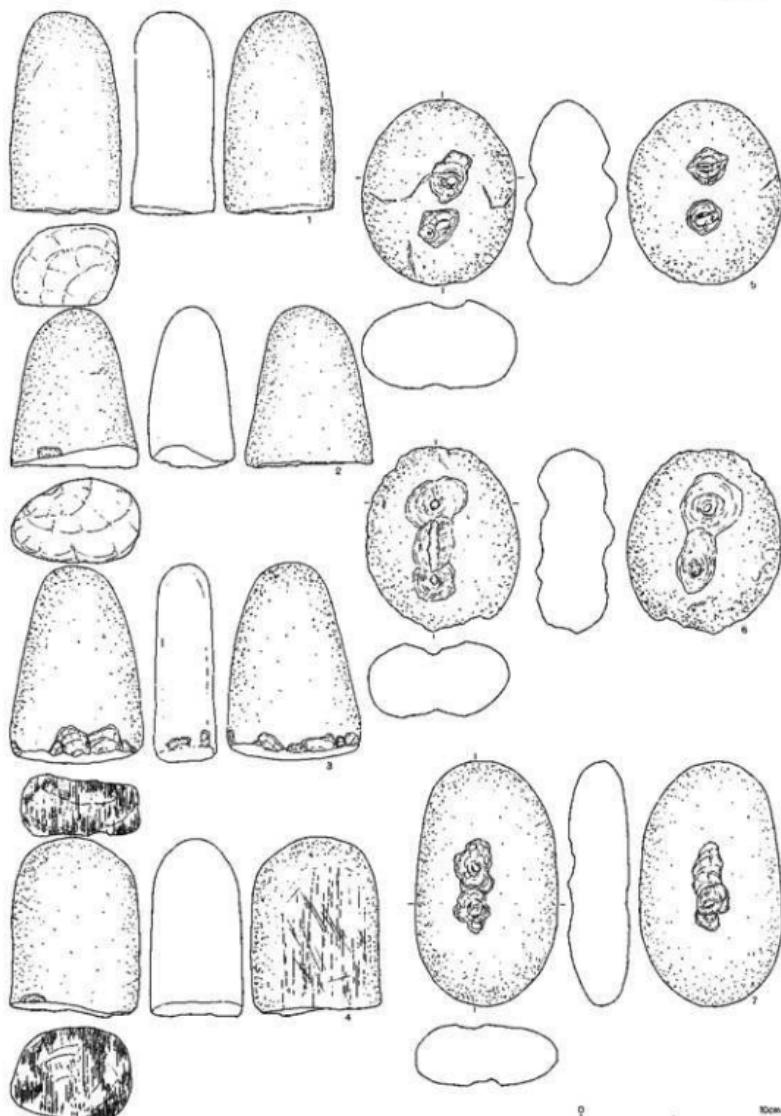
第52図 グリッド出土石器（1）



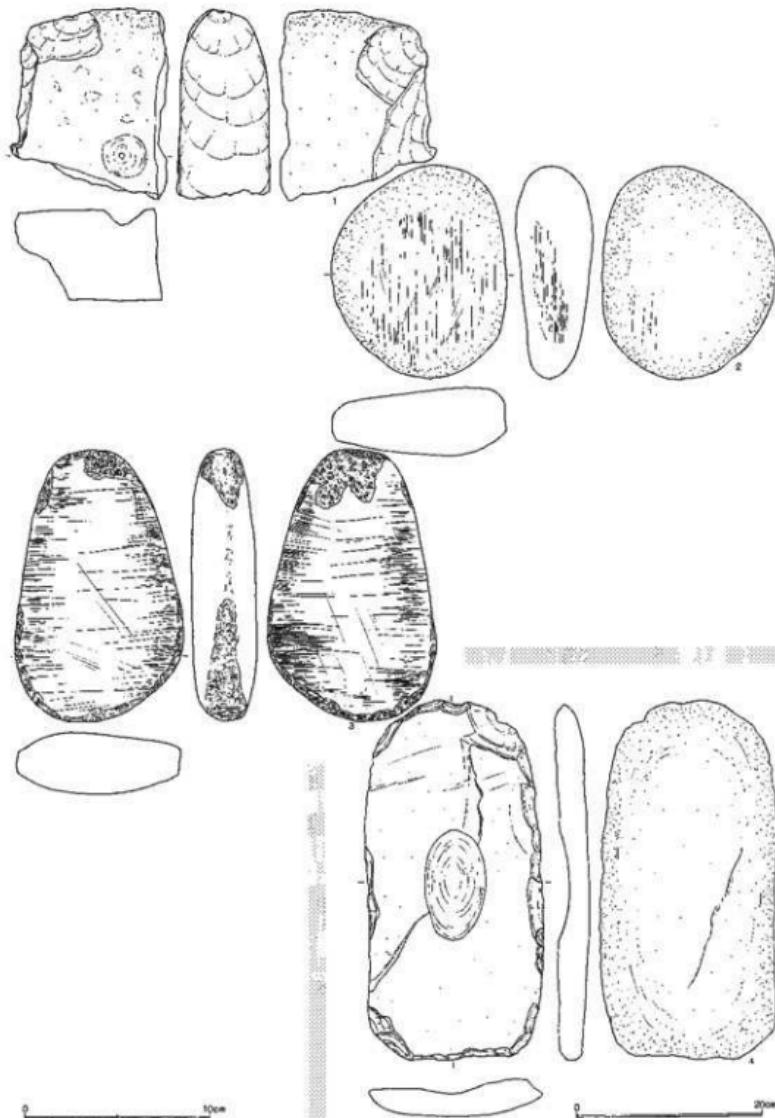
第53図 グリッド出土石器（2）



第54図 グリッド出土石器（3）



第55図 グリット出土石器（4）



第56図 グリッド出土石器 (5)

番号	注記番号	器種	石質	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第45回1	S J 1-23	敲き石		1号住	13.2	10.1	3.6	740	
2	S J 12-414	石礫	黒曜石	12号住	2.7	1.9	0.2	0.69	
3	S J 3-52	スクレイバー	黒曜石	3号住	3.0	1.9	1.1	4.13	
4	S J 1-24	石斧	ホルンフェルス	1号住	11.3	7.8	3.4	300	
5	S J 3-35	石斧	安山岩	3号住	7.6	7.2	2.7	170	
6	S J 11-42	石斧	ホルンフェルス	11号住	12.0	5.3	2.4	130	
7	S J 12-325	石斧	ホルンフェルス	12号住	8.7	5.9	2.1	110	
8	S J 12-446	石斧		12号住	11.0	9.2	3.3	350	
9	S J 12-231	石斧	ホルンフェルス	12号住	11.3	6.0	1.9	130	
第46回1	S J 13-41	石斧	凝灰岩	13号住	14.6	3.0	1.8	84	
2	S J 13-14	石斧	凝灰岩	13号住	19.4	3.1	2.0	180	
3	S J 13-51-52	石斧	砂岩	13号住	19.3	5.6	3.4	440	
4	S J 13-42	石斧	閃緑岩	13号住	16.4	5.7	2.5	320	
5	S J 13-32	石斧	凝灰岩	13号住	8.7	8.8	2.4	145	
6	S J 13-41	石斧	ホルンフェルス	13号住	12.0	6.1	1.9	140	
7	S J 13-66	石斧	安山岩	13号住	11.5	6.8	3.5	230	
第47回1	S J 13-28	削器		13号住	13.2	8.1	2.1	290	
2	S J 13-16	石斧		13号住	17.6	5.3	2.7	250	
3	S J 13-2	敲き石		13号住	16.2	4.3	4.0	400	
4	S J 13-29	石皿	閃緑岩	13号住	28.9	19.9	5.5	5000	
5	S J 13-1	磨り石	閃緑岩	13号住	10.9	9.6	4.6	690	
第48回1	S J 18-35	敲き石	凝灰岩	18号住	12.7	3.6	1.2	80	
2	S J 20-1	石斧	安山岩	20号住	9.9	5.8	1.5	70	
3	S J 20-3	石斧	安山岩	20号住	13.4	6.2	2.4	170	
4	S J 18-16	石皿	閃緑岩	18号住	15.0	18.4	3.7	1855	
5	S J 18-15	石斧	安山岩	18号住	10.9	8.5	3.0	250	
6	S J 20-2	石斧	粘板岩	20号住	13.6	5.1	1.8	150	
7	S J 20-42	石皿	綠泥片岩	20号住	17.2	11.9	2.5	5900	
第49回1	S C 5-89	凹み石	閃緑岩	5号集石	8.3	9.9	4.8	500	
2	S C 5-91	磨り石	閃緑岩	5号集石	14.2	10.5	4.5	860	
3	S C 5-50	磨り石	閃緑岩	5号集石	13.3	10.6	4.1	760	
4	S C 5-90	石斧	安山岩	5号集石	10.4	5.2	2.4	140	
5	S C 5-51	石斧	安山岩	5号集石	11.3	5.2	2.3	130	
6	S C 5-20	石斧	安山岩	5号集石	11.1	5.3	3.2	170	
第50回1	S C 5-5	石斧	安山岩	5号集石	6.2	5.0	2.0	80	
2	S C 5-41	石斧	安山岩	5号集石	8.2	6.0	2.0	100	
3	S C 2-53	スランプ型石器		2号集石	10.7	9.1	5.3	690	
4	S C 10	石斧	安山岩	10号集石	10.7	6.1	2.6	140	
5	S C 10	石斧	安山岩	10号集石	12.9	6.6	2.0	190	
6	S K 201-22	石斧	ホルンフェルス	201土壤	10.2	7.0	3.9	330	
7	S K 203-3	石斧	粘板岩	203土壤	9.5	5.0	1.5	70	
8	S K 206-1	石斧	綠泥片岩	206土壤	5.8	2.9	1.1	35	
9	S K 206-2	石斧	凝灰岩	206土壤	10.5	3.2	2.8	120	
第51回1	S K 218-22	凹み石	閃緑岩	218土壤	6.2	7.6	4.3	220	被熱
2	S K 375-31	石斧	凝灰岩	375土壤	8.4	5.5	2.0	140	
3	S K 375-33	石斧	凝灰岩	375土壤	8.9	2.5	0.9	30	
4	S K 376-4	石斧	安山岩	376土壤	10.9	4.1	2.0	100	

第1表 竹之花遺跡石器一覧(1)

番号	注記番号	器種	石質	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第51回5	S K452-1	石斧	砂岩	452土壤	9.5	3.9	1.6	80	
6	S K553-7	石斧		553土壤	10.4	5.2	2.0	110	
7	S K560-4	石斧	粘板岩	560土壤	7.7	7.3	2.2	145	
8	S K568-15	石斧	ホルンフェルス	568土壤	8.6	5.2	1.6	80	
9	表採	石礫	チャート	表採	2.2	1.4	0.4	0.76	
10	表採	石礫	チャート	表採	3.4	1.9	0.5	2.51	
11	B00135-21	石礫	チャート	B00135	3.5	1.3	0.5	1.82	
第52回1	B24J00-4	石斧	ホルンフェルス	B24J00	8.8	5.9	2.3	120	
2	A48I35-79	石斧	凝灰岩	A48I35	6.4	3.3	0.9	42	
3	A2J3-N5	石斧	砂岩	A2J3-N5	8.5	3.9	1.5	60	
4	A49I34-40	石斧	ホルンフェルス	A49I34	7.8	4.5	2.0	78	
5	C1J1-EW	石斧	安山岩	C1J1-EW	14.5	5.6	3.3	256	
6	-	石斧	ホルンフェルス	表採	10.6	5.0	1.8	140	
7	表採	石斧	安山岩	表採	8.4	5.7	2.6	145	
8	A49J07	石斧	安山岩	A49J07	10.6	5.8	2.3	136	
9	A49J08	石斧	ホルンフェルス	A49J08	13.8	7.0	3.3	286	
10	A49J07	石斧	ホルンフェルス	A49J07	11.3	6.1	2.7	188	
第53回1	B0J2-EW	石斧	ホルンフェルス	B0J2-EW	9.9	5.2	2.3	165	
2	表採	石斧	砂岩	表採	12.8	5.2	3.0	230	
3	B01I34-36	石斧	ホルンフェルス	B01I34	18.0	9.0	2.7	330	
4	A47I28-44	石斧	綠泥片岩	A47I28	13.6	7.0	3.7	575	
5	A48I34-88	石斧	綠泥片岩	A48I34	17.5	5.8	3.9	555	
6	A37I34-3	石斧	凝灰岩	A37I34	8.7	4.1	2.4	124	
7	A11I36	石斧	綠泥片岩	A11I36	10.0	3.7	2.4	140	
第54回1	B02I34-15	石斧	ホルンフェルス	B02I34	7.7	4.0	1.3	40	
2	B3I4-NS	石斧	砂岩	B3I4-NS	9.5	5.0	1.5	66	
3	B07I40-5	石斧	泥岩	B07I40	10.3	4.3	1.5	74	
4	B03I38-1	石斧	凝灰岩	B03I38	9.3	3.8	2.2	122	
5	B03I37-2	石斧	粘板岩	B03I37	5.3	3.2	0.7	18	
6	B00I35-25	石斧	綠泥片岩	B00I35	14.9	5.7	3.1	370	
7	B11I41-35	石斧	綠泥片岩	B11I41	14.0	4.6	2.6	260	
8	B00I35-13	石斧	凝灰岩	B00I35	8.5	5.3	2.5	150	
9	B0J2-EW	礪器	安山岩	B0J2-EW	7.2	9.9	3.3	282	
10	C1K0-EW	礪器	安山岩	C1K0-EW	9.4	6.1	4.2	270	
11	A20I40NS3	礪器	安山岩	A20I40NS	8.5	8.7	4.2	330	
第55回1	A10I40NS4	スランプ形石器		A10I40NS	11.0	6.1	4.7	470	
2	A3J1-NS	スランプ形石器	閃綠岩	A3J1-NS	8.8	7.0	4.7	360	
3	A10I40NS8	スランプ形石器		A10I40	10.7	7.3	3.5	420	
4	A49I30-6	スランプ形石器	閃綠岩	A49I30	9.8	7.0	5.1	560	
5	A49I28-43	凹み石	閃綠岩	A49I30	10.0	8.5	5.0	440	被熱
6	A49I30-6	凹み石	閃綠岩	A49I30	10.0	8.4	4.4	460	被熱
7	A48I28-43	凹み石	砂岩	A48I28	13.3	7.8	3.4	534	
第56回1	A47I29-90	凹み石	砂岩	A47I29	10.3	8.6	5.1	549	被熱
2	B22J00	磨り石	閃綠岩	B22J00	11.5	9.5	4.2	632	
3	A16I36	磨り石	閃綠岩	A16I36	14.7	9.2	3.6	686	
4	A47I30-5	石錐	綠泥片岩	A47I30	19.5	9.6	2.0	4500	

第2表 竹之花遺跡石器一覧(2)

## b 奈良・平安時代の遺構と出土遺物

### (1) 奈良・平安時代の遺構

竹の花遺跡においては奈良・平安の住居跡が8軒検出された。これらは遺跡中央谷部の北側の南東向きの緩斜面に集中して分布しており、縄文時代の住居跡・土壙群が遺跡の東側斜面に集中しながらも遺跡の北端から南端まで分布していたことと対照的であった。住居跡の重複関係もなく住居間距離をかんがえると意図的配置さえ思わせるものであった。

以下に各住居跡について個別的に記述しておきたい。

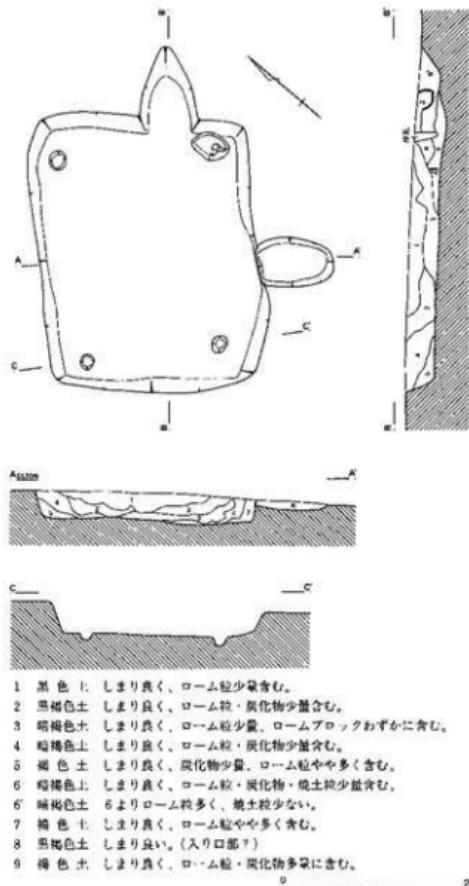
#### 5号住居跡（第57・58図、遺物第

74図）

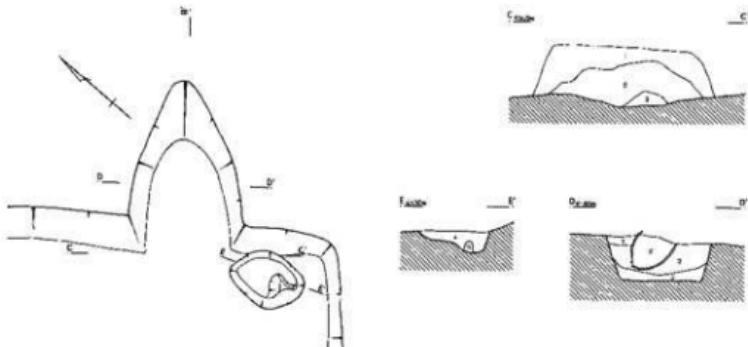
5号住居跡は奈良・平安時代の住居跡群中最も北に位置し、他の住居跡よりも標高の高い台地平坦面にある。縄文時代の6号住居跡の東に隣接し、A34-I34グリッドに所在する。長径2.9m、短径2.32m、検出面から床面までの深さ平均30cmを測る。やや矩形気味の長方形を呈する。

東壁の中央やや南寄りにカマドを取り付け、壁面から外側に煙道が77cm伸びる。カマドのホリカタの形態は砲弾形であり、煙道の長さも特別長いわけではない。カマドは短辺側に取り付いている。焼土の堆積ははっきりしないが、支脚状の土塊があり、甕1個体が中央に据え置かれていたので使用後の廃棄であることは疑えない。径15~20cm、深さ5~10cmの浅いビットが北西・南西・南東各コーナーの内側に1本ずつ検出され、北東コーナーにも長径40cm、短径30cm、深さ12cmの橢円形貯蔵穴状ビットがある。

また南壁中央に外接するように長径82cm、短径52cm、深さ8cmの掘り込みがあるが、入口施設か土壙との



第57図 5号住居跡



- 1 晴褐色土 しまり良く、ローム粒少量、ロームブロックわずかに含む。
- 2 略褐色土 しまり良く、ローム粒・炭化物・炭土粒少量含む。
- 3 褐色土 しまり良く、ローム粒・炭化物多量に含む。
- 4 黒色土 しまり良く、混入物ほとんどない。ローム土再堆積。
- 5 ロームブロック

第58図 5号住居跡カマド

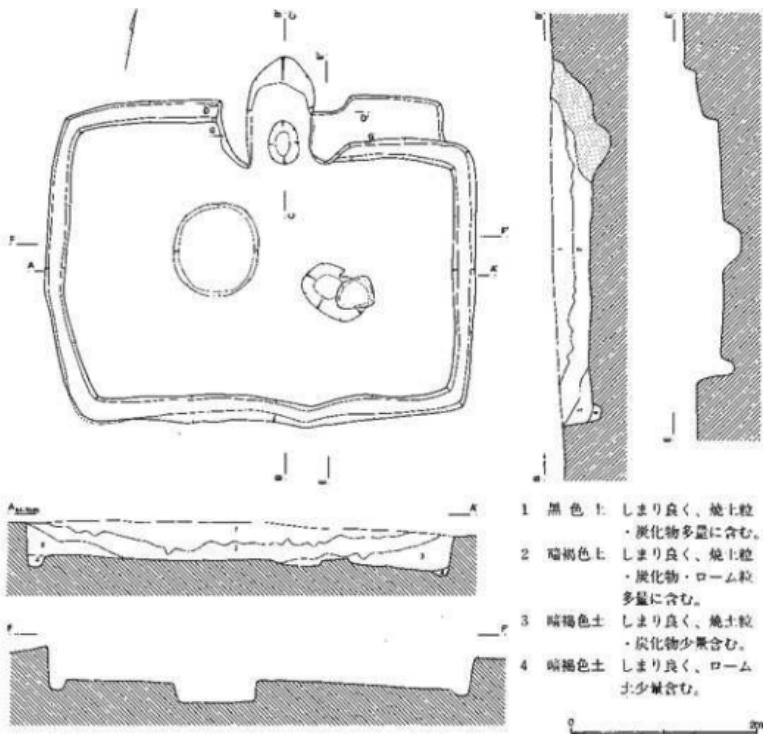
重複か判然としない。ここでは入口施設の可能性を考えておきたい。床面は凸凹が少ないので、わずかに東に傾斜しており、やや歓かめである。住居跡の主軸方向はN-48°-Eであり、かなり東に振れている。カマドの主軸方向もほぼ一致する。

遺物はカマドのホリカタ中央の甕、カマド焚き口前の位置に横倒して検出された台付甕と壺などが出土した。1軒の出土量としては少なめである。これらから判断するならば、奈良時代末期から平安時代初期あたりの時代である。

#### 7号住居跡（第59・60図、遺物第75～79図）

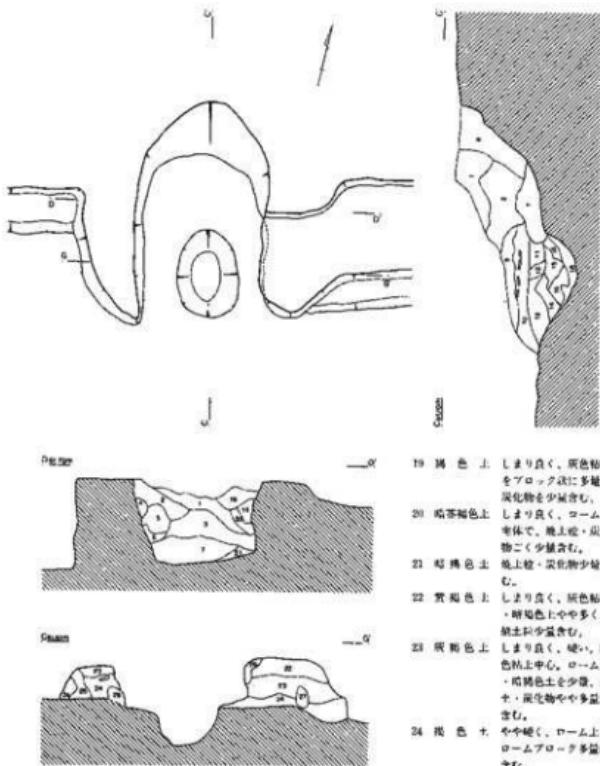
7号住居跡は5号住居跡の南南西約30mの位置にあり、東北東約5mに10号住居跡、西南西約13mに8号住居跡がある。これら3軒の住居跡は平坦面から緩斜面に移行する部分に東西横一列に並んでいる。A43-I39グリッドを中心とした区域に所在する。

カマドは北壁の中央に取り付いているが、右脇部分に棚状のテラスがあり、壁の位置がカマドの左右でずれている。ずれている部分の幅がそのままテラスの幅であり、約50cmを測る。検出面からテラス上面までは12cm掘り込まれており、床面からの高さは26cmである。住居跡自体の大きさは長辺24.3m、西壁側の短辺3.5m、東壁側の短辺2.8mとなる。検出面から床面までの深さは40cm程度であり、深さ平均3～5cm程度の平らなホリカタを持っていた。床下土壇は2基あり、床面中央やや西寄りに長辺100cm、短辺90cm、深さ24cmの不整円形のもの1基、東寄りの長辺73cm、短辺50cm、深さ20cmの不整椭円形のもの1基である。この東寄りの床下土壇にかぶさるように、平坦面を上面にした長辺42cm、短辺32cmのやや大きい台石が床面上におかれていた。



第59図 7号住居跡

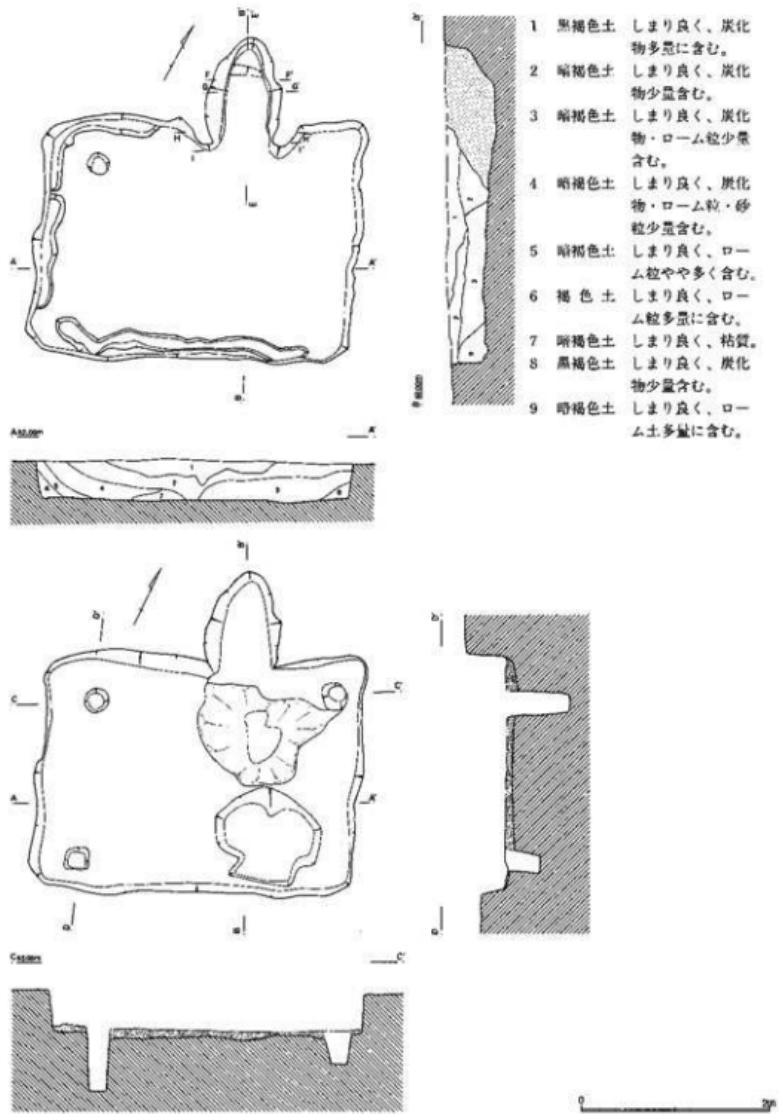
カマドは、煙道が北壁面から約45cm外側まで突出している。検出されたソデの先端から煙道の先端まで118cmの長さがある。煙道部分はわずかに右寄りにカーブして伸びているため、煙道部分を中心にして軸方向を測るとN-9°-Wとなる。住居跡の主軸はN-16°-Wである。床面はやや硬く、おおよそ平坦であった。壁溝が検出されているが、カマド部分を除く壁面沿いに全周している。割合幅広で最低19cm、最高29cmの幅があり、深さは6~14cmで、掘り込みはしっかりしていた。遺物はかなり多く出土している。出土位置は偏りがあり、カマド前面を中心にやや西寄りの部分にかけての広がり、カマド右側テラスの直下とそのやや内側、台石の周囲の3ヶ所は特に集中していた。須恵器類はテラス直下の一群と台石周辺の一群にすべて含まれていた。また、カマドには土師器幾種個体が細かく壊れた状態で検出されている。出土土器の総量はこの住居で使用されたと想定される量をはるかにうわまわっており、床面に貼り付いて出土したものもほとんどない。このことから、この住居跡出土の土器はテラス・カマドの外側（住居の内外の双方を含む）に置かれたものと捨てられたものとが住居の廃棄および崩壊後流入したと考えておきたい。



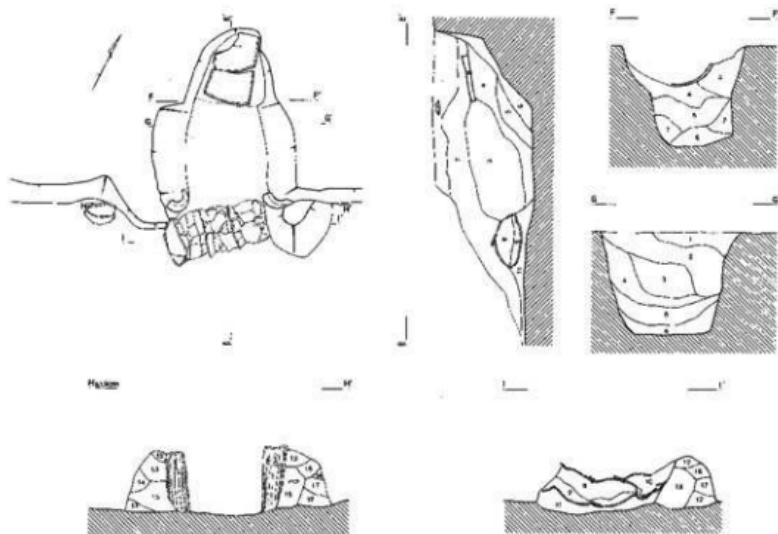
1. 暗灰褐色土 粘土が基質。施土粒、炭化物少量含む。
2. 黒灰褐色土 粘土が基質。施土粒、炭化物、ローム较少含む。
3. 灰色土 施質、施土粒、炭化物少量含む。
4. 暗灰褐色土 しまり良く、施土粒、炭化物少量含む。
5. 灰色土 施質、施土粒、炭化物多量に含む。
6. 白色土 施質、ローム少量含む。
7. 暗褐色土 砂、施土粒、炭化物多量に含む。
8. 暗褐色土 施土粒多量、炭化物少量含む。
9. 暗褐色土 しまり良く、施質、施土粒多量に含む。
10. 暗褐色土 しまり良く、施質、施土粒多量に含む。
11. 暗赤褐色土 しまり良く、施土粒、炭化物多量に含む。
12. 黑褐色土 炭化物。
13. 暗褐色土 しまり良く、施土粒、炭化物や多量に含む。
14. 暗褐色土 施土粒多量に含む。地味がかかる。
15. 赤褐色土 施土層。
16. 赤褐色土 施土とローム中の選土層。
17. 暗褐色土 しまり良く、施土粒、炭化物少量含む。
18. 淡褐色土 しまり良く、灰色粘土多量、施土粒、炭化物少量含む。

19. 淡褐色土 しまり良く、灰色粘土をブロック状に多量、炭化物を少量含む。
20. 暗赤褐色土 しまり良く、コーム土塊体で、施土粒、炭化物ごく少量含む。
21. 暗褐色土 施土粒、炭化物少量含む。
22. 暗褐色土 しまり良く、灰色粘土・暗褐色土や多く、施土粒少量含む。
23. 暗褐色土 しまり良く、硬い、灰色粘土中心。ローム土・暗褐色土を少量、施土・炭化物や多量に含む。
24. 淡褐色土 やや硬く、ローム土・ロームブロック多量に含む。
25. 暗褐色土 ローム土・ロームブロックをつき固めたような土。暗褐色土少量含む。
26. 暗褐色土 やや硬く、灰色粘土・施土粒多量に含む。
27. 茶褐色土 細かい、灰色粘土多量、施土粒わずかに含む。
28. ロームブロック

第60図 7号住居跡カマド



第61図 8号住居跡



- 1 黄色土 しまり良い。 第62図  
 2 暗褐色土 しまり良く、焼土・炭化物多量に含む。  
 3 灰褐色土 灰色粘土層。燒土・炭化物少量含む。  
 4 硫亦褐色土 焼土多量に含む。  
 5 黄色土 烧土・炭化物少量含む。  
 6 暗褐色土 烧土少量、炭化物多量に含む。  
 7 赤褐色土 烧土層。  
 8 黑色土 しまり良く、焼土・炭化物や多く含む。  
 9 茶褐色土 ややしまり良く、焼土・炭化物はほとんど含まない。  
 10 茶褐色土 しまり良く、粘質。灰色粘土粒多量に含む。  
 11 暗褐色土 しまり良く、焼土・炭化物多量、ローム粒やや多く含む。

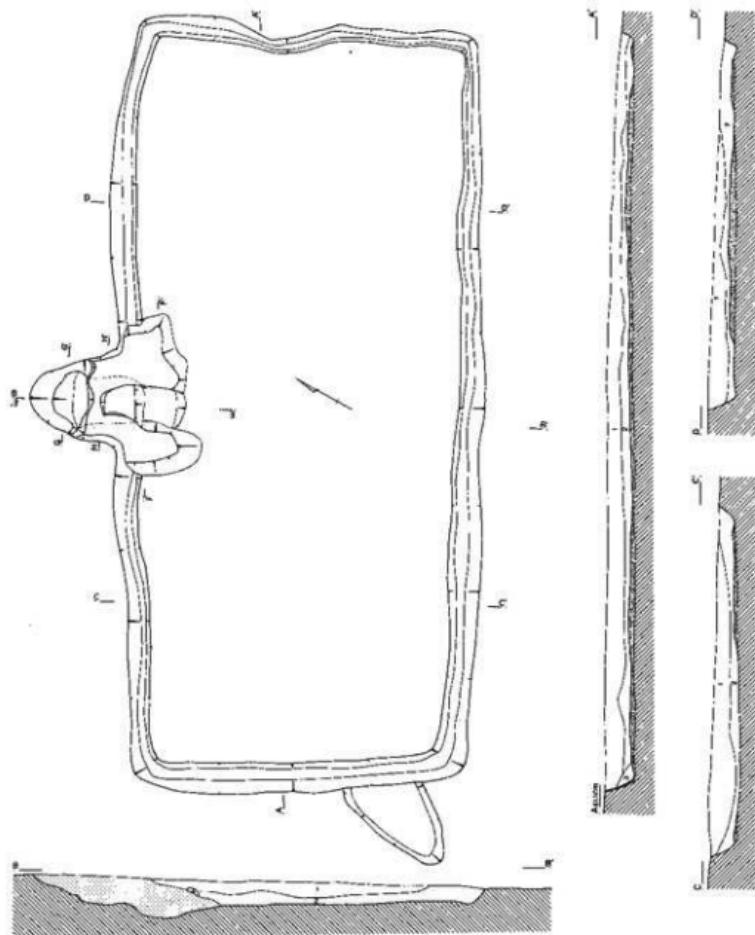
0 1m

第62図 8号住居跡カマド

これら土器・須恵器の年代はやや幅がありそうであるが、奈良時代前半を中心とする時期を想定することができる。

#### 8号住居跡（第61-62図、遺物第80～83図）

8号住居跡はA46-I44グリッドを中心とした位置に存在する。7号住居跡と同様に横長の長方形であるが、やや平行四辺形気味に歪んでいる。長辺3.47m、短辺2.4m、深さ平均40cmを測る。住居跡の主軸方向はN-22°-W、カマドの主軸方向はN-25°-Wであり、7号住居跡よりやや西に振れた方向であった。



1. 黒色土 ローム粒少數含む。
2. 褐色土 ローム土多量に含む。
3. 黄褐色土 ローム土再堆積。黒色土やや多く含む。
4. 褐色土 硬くしまり良い。黑色土粒・地土粒・炭化物やや多く含む。

第63図 10号住居跡

カマドは北壁中央やや東寄りに取り付いており、壁面の外側に約92cm煙道を突出させている。残存するソデ先端部からの長さは125cmである。掘り込みの形態はやはり砲弾形で、煙道が細長く伸びる形ではない。カマドの両ソデには右に丸瓦、左に軒丸瓦が芯材として直立状態で据え付けられており、その前面には土師器甕3個体を直列させて設構させたものが転落した状態で出土した。さらに煙道直上とおもわれる位置には平瓦が凹面を上にして据え置かれていた。

壁溝は2~4cmの浅いもので北壁西半部-西壁-南壁と西寄りの部分を断続的にまわっている。ホリカタ検出時には失われてしまった。床面はやや硬く、平坦であった。ホリカタもほとんど平坦で床面からの深さは3cm~10cmであった。ただしカマドの前方部分には径1~1.3m程の深い皿状の掘り込みが2ヶ所あった。ピットは検出困難であり、床面精査では北西コーナー内側の1本のみ判明したが、ホリカタ掘り下げ時に北東コーナー・南西コーナーの内側にも各1本あることがわかった。床面からの深さは北東35cm、北西67cm、南東38cmであり、いずれも柱穴と考えることができるものである。

遺物はカマドに付随する土師器甕と瓦類以外には顕著なものは少なく、カマド左ソデ外側に密着して出土した暗文付きの土師器甕を時期決定の決め手に加えることができる。これらから考えると奈良時代前半期のやや新しい時期、つまり7号住居跡より1段階下る時期とすることができよう。

#### 10号住居跡（第63~65図、遺物第84図）

10号住居跡はA40-I35グリットを中心とした位置に所在する。長辺8m、短辺3.6m、深さ最高33cm、最低12cmを測る。横長の長方形を呈するが、長辺が短辺の約2.2倍となり、この時期の住居跡としては2~3軒分の面積を持つものである。このような規模・形態の特徴はひとまわり小さいが17号住居跡でも同様であった。住居跡の主軸方向はN-28°-Wであり、8号住居跡に比較的近い方向をとる。カマドの主軸方向はN-25°-Wで、8号住居跡と一致した。

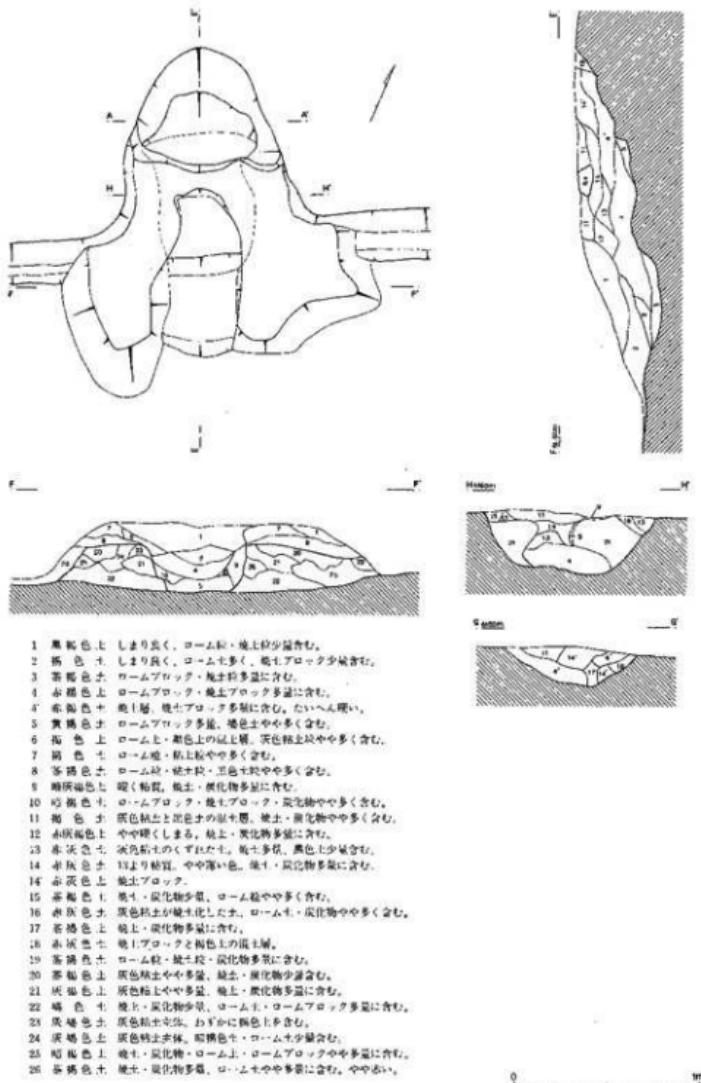
北壁の中央にカマドが取り付いている。天井部が一部残存しており、9cmの厚さで確認された。検出されたソデの先端から煙道の先端まで190cm、ソデの最大幅174cmをはかる。やや大きめのカマドである。掘り込みは砲弾形で、煙道の先端部もやや丸い。焼土の堆積は顕著であり、両ソデの内壁もよく焼けていた。ソデは幅広で床面から高さ25cm程しか残っておらず、平らにつぶれたように検出されている。カマドのホリカタは北壁付近で段がついたようになっており、落差は10cm弱程度である。

壁溝はカマド部分以外全周する。幅は13~38cmで平均20~25cm、深さは2~4cmでやや曖昧な掘り込みとなっている。8号住居跡と同じく、床面ホリカタ検出時には失われてしまった。

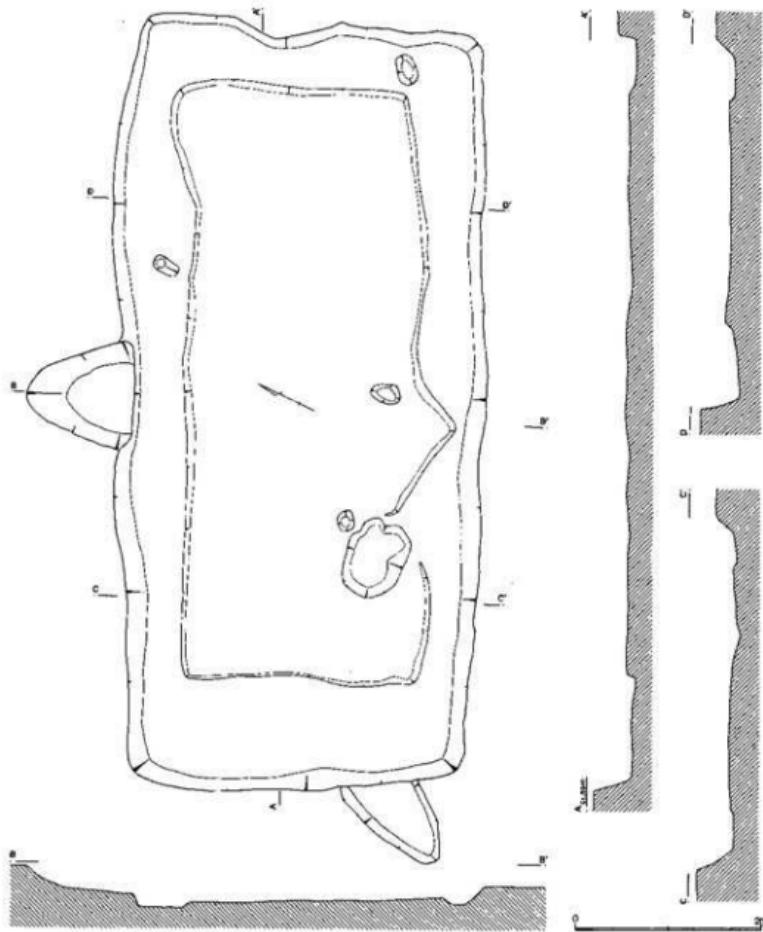
床面ホリカタは平均5~10cm程度を平らに掘り込むが、中を台状に掘り残し、周囲を幅50~80cmにわたって深さ10cmくらい余計に掘り下げる方式で造成している。ピット状の穴や皿状上塙のような部分もあるが、床下上塙や柱穴とは異なるようである。床面はかなり硬く、おおむね平坦であるが、わずかに南東に傾斜しているように見える。これは地形の制約を受けているためであろう。

#### 柱穴・貯蔵穴・入り口その他の付属施設はまったくない。

遺物は若干量の破片があるが、縄文時代中期の土器の流れこんだものが多く、時期判定に利用できるものはごくわずかであった。器形の判断できる土師器甕・甕から考へる限り、奈良時代の半ば



第64図 10号住居跡力マド

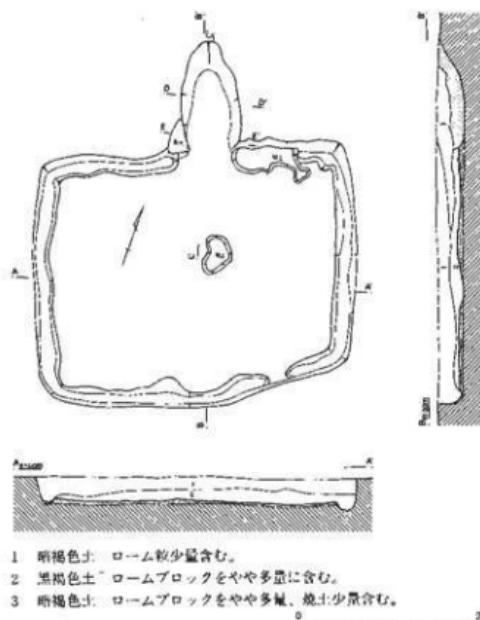


第65図 10号住居跡ホリカタ

から後半あたりの時期を考えることができる。

#### 14号住居跡（第66・67図、遺物第84図）

14号住居跡は7号住居跡の南13mにあり、A49-I 38グリットを中心とする位置にある。7・8・10号住居跡よりもやや低い緩斜面に所在する。緩斜面に位置する住居跡はさらに西に17・16・15号住居跡がある。17号住居跡は14号住居跡の西南西11mにあり、平坦面の住居跡群に対応するような位置にあるが、15号住居跡は17号住居跡の南西35m、16号住居跡はその西5mにあるのでやや散



第66図 14号住居跡

が割合多く認められ、かなり使用されてからの施設であることがわかる。

ところで、住居跡の主軸方向はN-23°-W、カマドの主軸方向はN-25°-Wであり、やや西に振られた方向性を示すが、8号住居跡の方向とはほぼ一致する。

礎溝はカマドを除く全壁面に沿って検出された。南壁のやや東寄りの部分に1ヶ所ブリッジを持っている。幅平均22cm、深さ4~9cmであり、床面ホリカタ検出時には大半が失われてしまった。床面および床面ホリカタはおおむね平坦であり、やや硬めであった。柱穴・貯蔵穴その他の施設は検出されなかった。

遺物はかなり少なかったが、カマド内に土器片・杯片があり、これらから奈良時代半ばから後半にかけての時期を想定することができる。

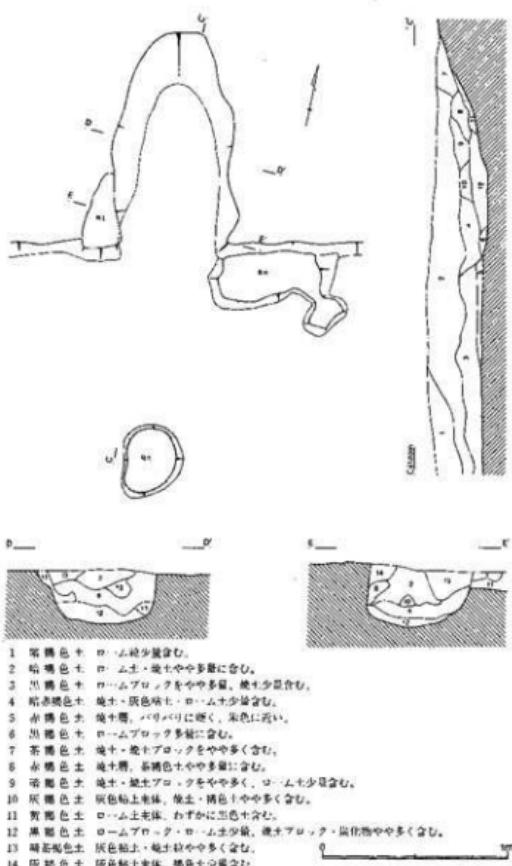
#### 15号住居跡（第68・69図、遺物第85~87図）

15号住居跡はB11-J02グリットを中心とした位置にあり、本遺跡の奈良・平安時代の住居跡の中では最も標高の低い住居跡である。調査時には湧水が多く、床面の硬さについてはほとんど確認できなかった。やはり東西方向横長の長方形の住居跡であり、長辺4.4m、短辺2.8m、深さ39~50cmを測る。

北壁中央やや東寄りにカマドが付設されており、煙道は壁面の外側147cmまで伸びている。掘り

在的な分布状況となっている。14号住居跡もまた東西方向を長辺とする横長の長方形を呈する住居跡であり、長辺3.4m、短辺2.5m、床面までの深さ平均25cmをはかる。

北壁中央にはカマドが取り付け、煙道は壁面から外側に110cm突出している。カマドの掘り込みの形態は先端の丸い砲弾形である。ソデは残りが悪く、右ソデ位置に70cm×30~40cmの白色粘土塊、左ソデ外部のカマド掘り込み左側壁に40cm×21cmの白色粘土塊がソデの痕跡として検出されるにとどまった。なお北壁面から90cmのカマド前方にも長径40cm、短形32cmの楕円形の粘土塊がある。カマドとの直接的関係があるかどうかは不明である。カマドには焼土の堆積



第67図 14号住居跡カマド

床面ホリカタはやや深めであり、10~30cm掘り込まれていた。造成の特徴は周囲を掘り残し、内側を広く掘り下げる形式であった。不整長方形あるいは不整橢円形に掘り込まれ、北東コーナー内側に最大幅50cm、北壁西部の内側に最大幅50cm、南壁内側に幅15~40cmのテラスがある。このホリカタ確認時にピット2本が検出された。1本は台石状の礫の西隣にあり、径30cm、床面からの深さ28cmである。もう1本は1.8m東で、やや南寄りにある。径33cm、床面からの深さ36cmである。柱穴とする積極的根拠はないが、径・深さからはその可能性もある。

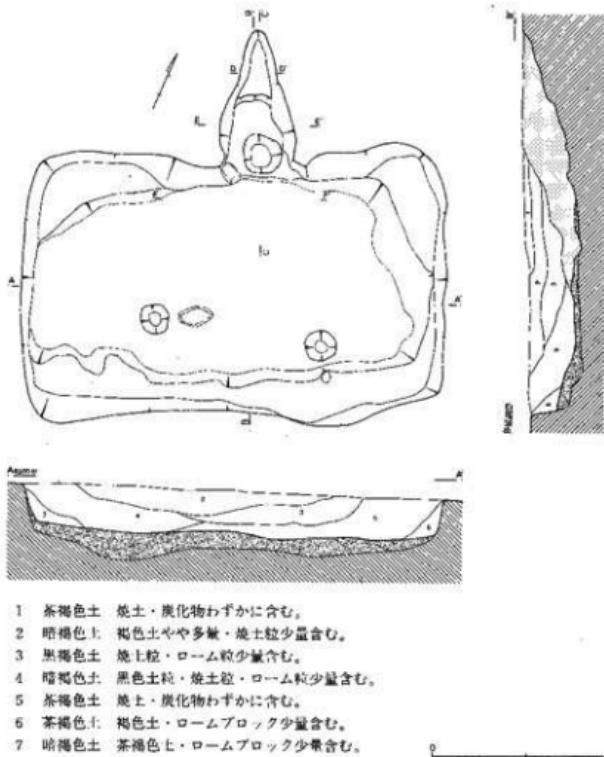
櫛溝・貯蔵穴その他の施設は確認されていない。

遺物はカマド内を中心に出土しており、カマド前方の床面直上にもわずかながら土器片が検出さ

込みの形態は長三角形で、煙道の先端に向かって尖り気味になっている。ソデは痕跡的な突出部が右ソデの根元部分にあり、左ソデ根元の部分には株状礫が1点直立していた。カマド中央には上部器壁1点が掛けられた状態で出土しており、焼土もかなり堆積していた。ただし、住居の内側のやや入った部分ではカマド堆積土が流れで焼土の堆積は確認できなかった。

なお、住居跡の主軸方向およびカマドの主軸方向は一致しており、N-24°-Wである。やはり、8・14号住居跡の主軸方向に近似している。

床面はおおよそ平坦であるが、湧水によって不明確な部分もある。床面中央や南東寄りの部分には長径37cm、短径22cmの礫が置かれていた。おそらく7号住居跡と同様な台石であろうが、7号住居跡に見られたような上面の広い平坦面は持たず、若干その志向性を認めるにとどまる。

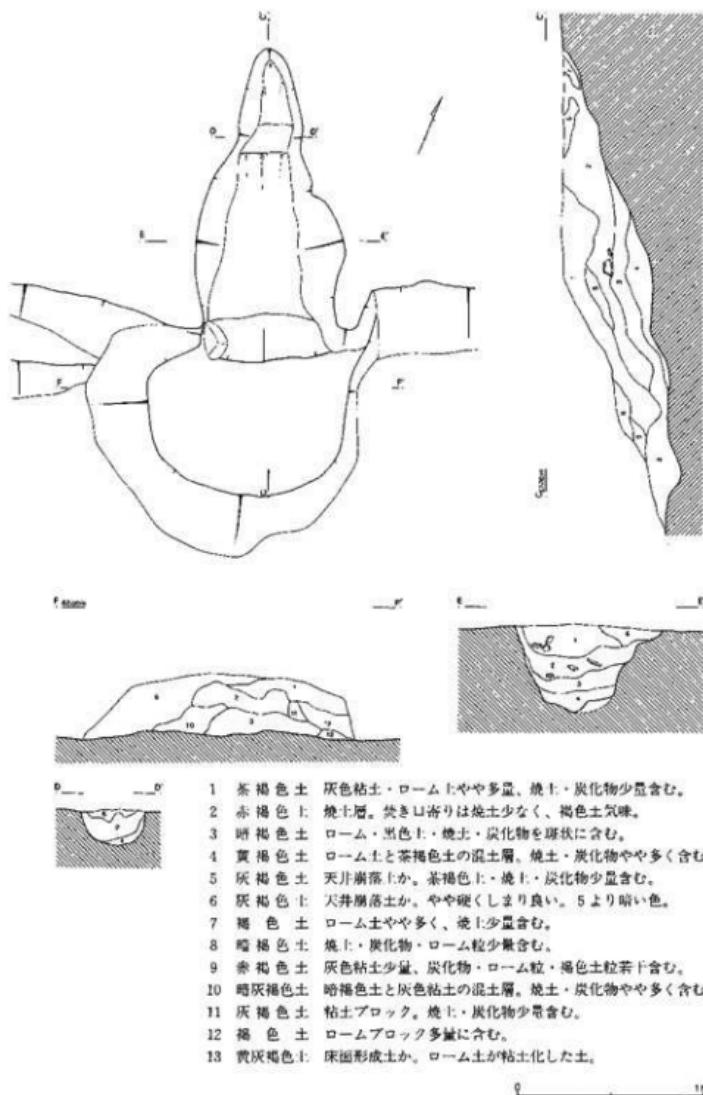


第68図 15号住居跡

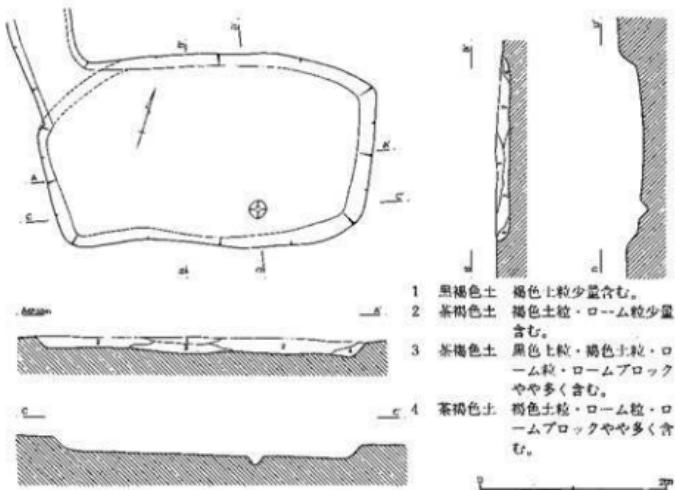
れている。これらは大きく二つの時期に分かれ、古いものは奈良時代前半代、新しいものは奈良時代末期から平安時代初期である。カマドに掛かっていた土師器壺や床面出土の須恵器环片などが後者にあたるため、住居跡の時期はその時期と考えておきたい。

## 16号住居跡（第70図、遺物第88図）

16号住居跡は15号住居跡の西南西4m、B12-J04グリッドを中心とした位置にある。東西方向横長の、逆台形に近い不整長方形を呈する住居跡であり、長辺3.5m、短辺1.45m、深さ11~18cmを測る。主軸方向は、短軸をとるとN-21°-Wである。南東コーナーから西に90cmの位置の、南壁から少し離れた場所に径20cm、深さ10cmのピットがある以外付属施設がまったくなく、カマドも付設されていない。ここでは住居跡に扱っておくが、本来恒常的居住施設ではなかったかもしれない。北西コーナーは339号土壇に切られて失われている。床面は部分的にやや硬いが、全体的には比較的軟かい。平坦であるが、中央がやや低くなっている。



第69図 15号住居跡カマド



第70図 16号住居跡

遺物は多くなかったが、土器器坏・壺、須恵器器坏などがあり、奈良時代終末から平安時代初期の時期わからんがえることができる。15号住居跡とほぼ同時期と見てよいであろう。

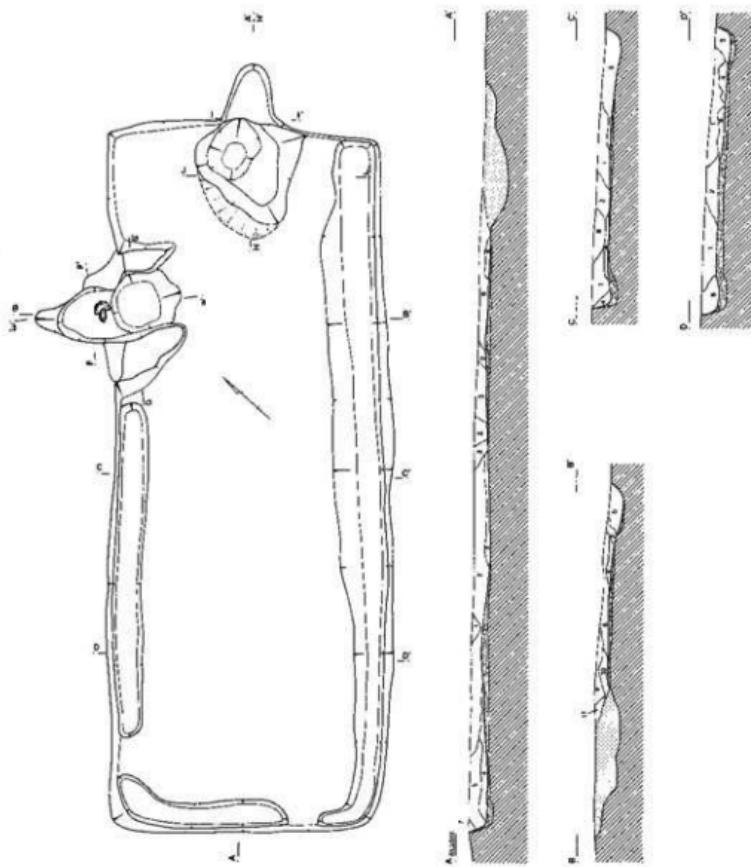
#### 17号住居跡（第71～73図、第89図）

17号住居跡はB01-I42グリッドを中心とした位置にあり、緩斜面に所在する。10号住居跡と同様に、長辺（東西）が短辺より大幅に長くなる長方形の住居跡である。10号住居跡および17号住居跡は調査時には俗に「長屋状住居」などと呼称していた。

長辺7.4m、短辺2.9m、深さ9～21cm（平均13cm）を測る。長辺は短辺の約2.55倍である。住居跡の主軸方向は短軸をとるとN-43°-Wとなり、奈良・平安時代の住居跡の中で最も西に振れる方向をとっている。これは谷の斜面の方向に規制されているためであろう。

カマドは2辺に各1基ずつ計2基付設されている。東壁の中央と北壁のやや東寄りに取り付いているが、ソデや上器類の遺存のあり方から考えると、東壁のカマドが古く作られ、北壁のカマド構築に際して廃されてしまったのではないかと思われる。東壁のカマドは、椭円形に近い先端の丸い掘り込みを持ち、壁面から63cm突出している。住居内部のカマドホリカタも大きく、長さ（カマド主軸方向）126cm、幅114cm、床面からの深さ25cmを測り、不整椭円形で緩い段を持つ二重の掘り込みになっている。焼土の堆積は住居覆土に混じってしまっている部分もあって顯著でなく、ソデも残っていないかった。わずかに痕跡的に粘土ブロックやロームブロックの部分的堆積が確認されたにすぎない。東壁カマドの主軸方向はN-51°-Eであり、住居主軸方向には直交している。

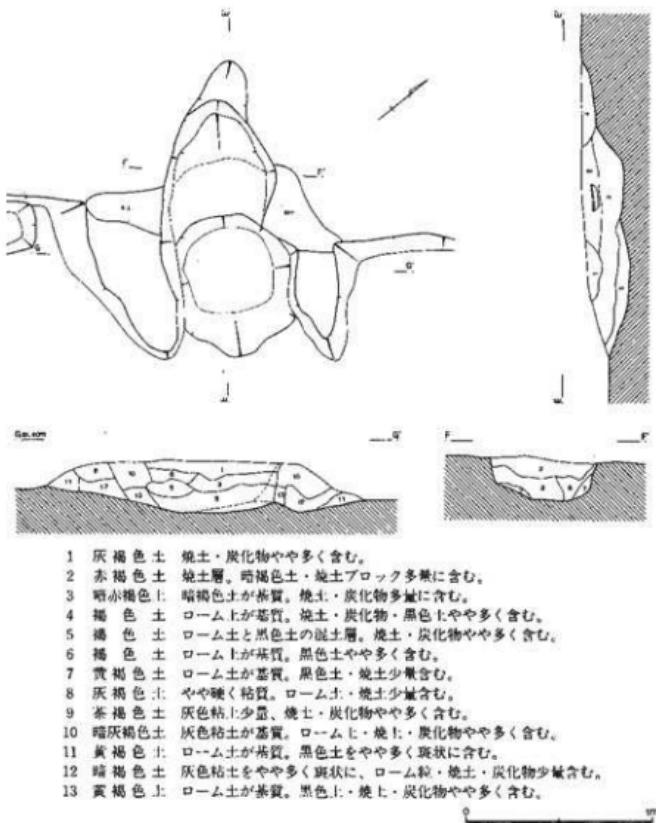
北壁のカマドは、仮に住居跡を東西二分割すると東側の住居跡に都合のよいと思われる位置に偏在している。10号住居跡では北壁のセンターに近い位置だったので、機能上の相違があるかもしれない



- 1 褐褐色土 ローム土少量斑状に含む。
- 2 茶褐色土 ローム土・黒色土やや多く斑状に含む。
- 3 褐茶褐色土 ローム土・焼土・炭化物少量含む。
- 4 黄褐色土 ローム土が基質。暗褐色土少量斑状に含む。
- 5 灰褐色土 ローム土・炭化物やや多く含む。
- 6 褐茶褐色土 ローム土やや多く、焼土・炭化物多量に含む。
- 7 灰褐色土 しまり良く、歫かく砂質に近い。
- 8 褐褐色土 歫かくしまり良い。ローム土少量含む。
- 9 褐茶褐色土 焼土・炭化物多量、ローム土少量含む。
- 10 褐褐色土 燃土・炭化物やや多量、ローム土やや少量含む。
- 11 灰褐色土 粘質。焼土・炭化物多量に含む。カマド構築上の流出か。

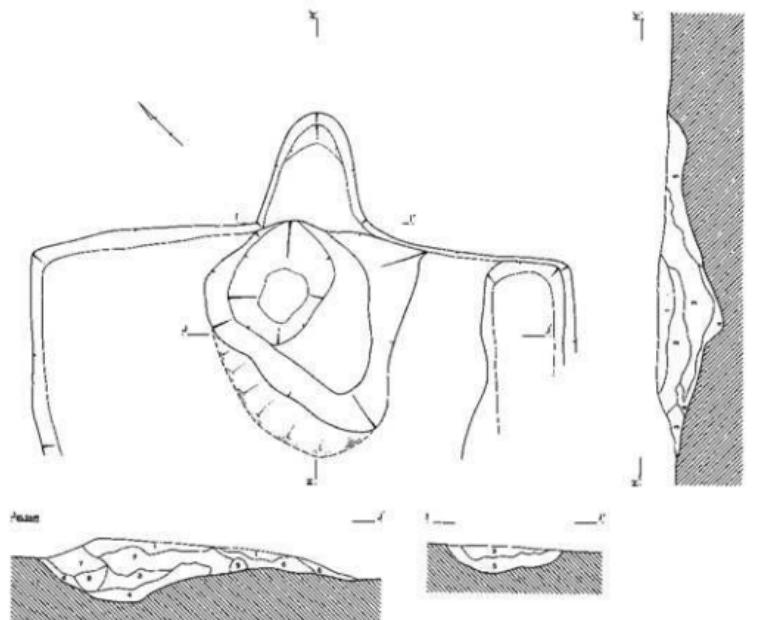
0 20

第71図 17号住居跡



第72図 17号住居跡北壁カマド

ない。北壁のカマドは両ソデが比較的よく残り、燃土の堆積も厚く明瞭であった。カマドの使用はかなり多かったと考えてよいのではなかろうか。ソデの付け根と壁面の間を充填するように白色粘土が張り込まれていたが、たいへん硬く取り外すのが困難であった。壁面から外側には88cm突出しており、掘り込みの形態は砲弾形であった。住居内側のホリカタは長径（カマド主軸方向）77cm、短径60cm、床面からの深さ11cmで不整円形を呈するものであった。ソデは白色粘土と暗褐色土を混合させた土を中心にしてローム土を少量含んだ土で構築されており、右ソデは最大幅36cm、長さ64cm、左ソデは最大幅68cm、長さ88cmを測る。カマド中央部の燃土堆積中には土師器壺が1個体正位に置かれたように出土している。壺を掛けた場合の蓋代わりに使用されたものであろうか。北壁カマドの主軸方向はN-60°-Wであり、北壁に対して直角に取り付いておらず、18°西に振れている。



- 1 暗褐色土 燐土・炭化物少量含む。
- 2 茶褐色土 燐土・炭化物・ローム土やや多く含む。
- 3 赤褐色土 燐土層か。ローム土少量、埴上・炭化物多量に含む。
- 4 黑色土 黒色土とローム土の混土層。
- 5 黄褐色土 ローム土再堆積。褐色土を少量含む。
- 6 棕色土 ローム土が基質。黒色土斑状に混じる。埴上・炭化物多量に含む。
- 7 灰褐色土 灰色粘土が基質。琉土・炭化物・ローム土・ロームブロック多量に含む。
- 8 茶褐色土 燐土・炭化物やや多量、ローム土ごくわずかに含む。
- 9 ロームブロック

0 1m

第73図 17号住居跡東壁カマド

床面および床面ホリカタはおおむね平坦であったが、住居跡が緩斜面に存在するためか、わずかに南東方向に傾斜していた。壁溝ではないが、幅広の溝状の掘り込みが壁沿いに周っている。北西コーナーよりやや東寄りの部分、南西コーナーよりやや北寄りの部分にはブリッジ状の断絶部があり、北東コーナーから東壁にかけては掘り込まれていない。北壁・西壁は平均30cmの幅、南壁はやや幅広く15~60cm程である。深さ2~5cmしかなく、ホリカタで10cm下がる部分もある。ホリカタは3~10cmの深さで平均4cm程度掘り下げられていた。特別な造成はされておらず、床面の形がそ

のまま掘り下がったような形式であった。床面の硬さは比較的硬かった。

遺物はあまり多くなかったが、土師器壺・甕・須恵器壺・鉢片などがあった。形態の復元が可能なものから時期を考えるならば、奈良時代前半から中葉にかけての時期としてよいであろう。

## (2)奈良・平安時代の出土遺物

奈良・平安時代に属する遺物は土器・瓦・羽口などがある。グリッドから取り上げた出土遺物は「その他の遺構と出土遺物」の項において記述することにし、ここでは住居跡出土の土器類・瓦類について順次述べることにする。

### 5号住居跡（第74図）

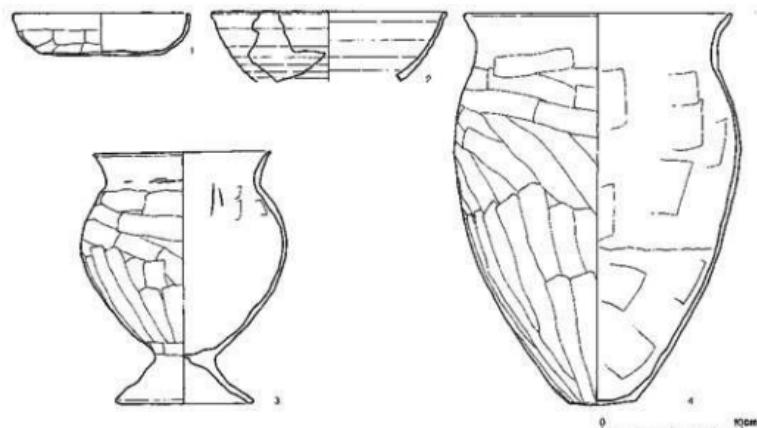
出土遺物はNo.1～26の番号を付けて取り上げたが、図示できたものはわずか4点で、カマド内に据え置かれた上師器甕（4、No.24）、カマド内に散乱していた須恵器壺片（2、No.2）、カマド前方に置かれていた土師器壺（1、No.25）・（3、No.26）がその内訳である。

1は口径12.6cm、器高3.6cmを測る。扁平化して平底になった小振りの壺である。口縁部は内湾気味に直立し、口唇部は内側にわずかに肥厚気味になり、丸い。器壁は薄い。口縁部外面から体部内内面にかけてヨコナデされ、底部内面はヘラナデ、体部から底部外表面はヘラケズリされる。体部内外面は指押さえ痕跡風の凸凹が残る。胎土細。石英・角閃石などの微細粒を多量に含む。棕褐色を呈する。体部内面に油の焦げ付きのようなススの付着が1ヶ所認められる。焼成良好。完形。

2は全体の5%以下の小破片であるため、器形復元に不安がある。推定口径17.0cm、残存部の器高5cmである。やや内湾気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外反し、上方にゆるい面を持つ。器壁は薄く、底部付近でやや厚めになる。ロクロ調整痕は明瞭であり、ロクロ右回転である。胎土は緻密で白色針状物質をやや多く混入する。わずかに青い灰褐色を呈する。焼成堅緘。

3は口径12.8cm、胴径14.8cm、器高18.0cmを測る。やや小振りの台付甕である。頸部で「く」の字に折れ、口縁部は外反して立つ。口唇部は尖り気味で外側に肥厚し、上方に面を持つ。胴部は中位よりやや上に最大径があり、丸みのある胴部である。脚台部は大きく「ハ」の字に開き、高くなない。脚端部は丸く、ややつまみ出し気味に作られ、下方にゆるい面を持つ。胴部の器壁は薄い。口縁部内外面および脚台部内外面はヨコナデ、頸部から胴部の内面は丁寧なヘラナデ、胴部外表面は上半部がヨコ・ナナメヘラケズリ、下半部タテヘラケズリ、脚台部との接合部はヨコヘラケズリである。頸部には横位のヘラ痕が顕著である。胎土細でややザラつく。角閃石・石英・長石などの微細粒を多量に含む。径1mm以上の小石も少量あり。棕褐色。胴下半部はスス付着で黒ずんでいる。焼成良好。ほぼ完形。

4は「コ」の字状口縁に接近した形態をとる。口径19.3cm、胴径20.6cm、器高28.0cmを測る。口縁部は外反して立つが、口唇部はやや内湾気味になり、つまみ出し傾向で丸い。頸部は直立。頸部と胴部の境目の屈曲弱く、胴部の張り出しもゆるい。最大径は胴上半部にあり、ゆるやかにつぼまりながら小さな平底の底部に移行する。口縁部から頸部の内外面はヨコナデ、胴部上位ヨコヘラケズリ、中位ナナメ・下半部タテヘラケズリ、底部は一方向のヘラケズリ、胴部内面は上半部ヨコ・下半部ナナメヘラナデである。胴部中位よりやや下の内面に粘土帶接合痕がある。胎土細。角閃石



第74図 5号住居跡出土土器

・石英・長石などの微細粒を多量に含む。径1mm以上的小石も少量あり、淡橙褐色。洞部中位から下部にかけてスス付着により黒ずむ部分あり。焼成良好。約80%残存。

#### 7号住居跡（第75～79図）

この住居跡からは前述のようにかなり多量の出土遺物が得られた。No.1152までナンバリングしているが、個体数は80前後であろう。図示したのは土師器環22・小型甕2・甕15・台付甕1・皿1・須恵器环4・小皿1・中型甕2・大型甕片2の計50点である。

土師器杯（第75図1～22）はすべて丸底を呈し、口縁部が内湾して立つもの（1～9）、口縁部が直立するもの（10～13）、口縁部が外傾ないし外傾気味に立つもの（14～22）に大きく三分される。普通この順序で変遷すると考えられている。

1は口径13.7cm、器高3.4cmを測る。やや浅く丸底。口縁部と体部の境目が部分的に鬼高期の須恵器模倣环のような稜線風に作られる。口縁部は尖る。底部内面中央に布目压痕がある。口縁部外面から底部内面にかけてヨコナデ、底部中央付近内面は丁寧なヘラナデ、体部・底部の外面はヘラケズリ後暗文風ヘラミガキ。体部と口縁部の境からやや下5mm程の範囲に削られずナデのみの部分あり。底面中央付近に削り残しの凹凸があり、内面の布目压痕に対応する。胎上細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。内面は全体的に黒ずんでいる。焼成良好。ほぼ完形。No.630。

2は口径12.7cm、器高3.5cmを測る。内面には凹凸が目立つ。口縁部はやや内屈。浅く丸底。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面ヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリである。口縁部と体部の境目付近に削り残しのナデのみの部分あり。胎上細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。ほぼ完形。No.660。

3は口径14.0cm、器高3.7cmを測る。口縁部やや張む。口縁部は上部で少し内屈するが、全体的に丸いスムーズな器形。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体

・底部外面へラケズリされる。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。完形。No.786。

4は口径12.8cm、器高3.8cmを測る。口唇部に1ヶ所鶴状にやや突出する部分があり、図示していないが片口土器のような機能があったかもしれない。小振りの杯で口縁部は内詰気味。ヘラケズリの上端部は稜線の意識がある。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリされる。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。口縁部内面に1ヶ所スス付着部あり。焼成良好。85%残存。No.258・259・883。

5は口径12.3cm、器高3.7cmを測る。小振りの杯。口縁部はゆるく内側に曲げられ、口唇部は丸い。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリされる。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。口縁部の一部に内外面が対応するようにならべた黒変した部分あり。焼成良好。90%残存。No.99・100・101・102・103・252・253・254・255・659。

6は口径13.0cm、器高3.6cmを測る。口縁部の内湾ゆるく、口唇部内面わずかに肥厚。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリされ、内面の約半分は黒ずみ、「おこげ」状付着物もあり。焼成良好。90%残存。No.932。

7は口径13.4cm、器高3.9cmを測る。小振りの杯。口縁部は尖り氣味で内部にわずかに肥厚。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリされる。胎土細。器面の風化ひどくザラザラ。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。径1mm代の小石も少量含む。淡橙褐色。底部内面中央に黒ずみあり。焼成やや良で、少し軟。65%残存。No.234・236・234・245・335・646。

8は口径12.7cm、器高2.9cmを測る。小振りでやや扁平化した器形。口唇部は内側につまみ出し氣味で丸い。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリ後ナデ、部分的にケズリの稜線消失。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。内外面に黒ずんだ部分斑状にあり。焼成良好。25%残存、口縁部1/4。No.464。

9は口径13.0cm、器高3.6cmを測る。スムーズに内湾する器形。口縁部やや尖り氣味。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリ後ナデでケズリの稜消失、底部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。完形。No.884。

10は口径12.7cm、器高3.5cmを測る。小振りの杯。口縁部は内湾氣味に直立。摩滅が激しく内面の調整不明。口縁部外面ヨコナデ、体部外面へラケズリ後ナデでケズリの稜不明瞭、底部外面へラケズリ。胎土やや細。ザラザラ。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成やや良で硬い。80%残存。No.235・237・239・242・647。

11は口径13.2cm、器高3.9cmを測る。口縁部は体部で弱く屈曲して直立。やや深い丸底。底部内面凹凸顯著。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、径2mm程の小石少數含む。淡橙褐色。内面

の半分「おこげ」状に黒ずみ、付着物もある。焼成良好。ほぼ完形。No.641。

12は口径13.6cm、器高4.1cmを測る。口縁部はゆるく内湾して直立するが、わずかに外傾気味。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体部外面ヘラケズリ後ナデで稜不明瞭、底部外面ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。完形。No.76・112・167・413・417・425・649・652。

13は口径14.8cm、器高3.5cmを測る。口縁部直立し、口唇部は尖り気味。人振りで扁平な器形。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリ、縦横に重複。口縁部と体部の境日にナデのみの部分あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。75%残存。No.25・540・774・881。

14は推定口径14.0cm、器高3.7cmを測る。口縁部は外傾して立ち、口唇部は尖り気味。やや扁平な器形。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリ。胎土細だが、やや粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。20~25%残存、口縁部は1/10程度ある。No.582・662。

15は推定口径14.5cm、残存部の器高3.0cmを測る。口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はやや尖る。扁平な器形。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。10~13%残存、口縁部約1/5。No.332。

16は推定口径16.1cm、残存部の器高3.5cmを測る。口縁部は短く外傾して立ち、口唇部は尖り気味。体部との境にゆるい稜を持つ。後の下方には器面の亀裂が目立つ。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体部外面上位ナデのみ、下位ヘラケズリ後ナデ、底部外面ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。10%弱残存、口縁部約1/9。No.665。

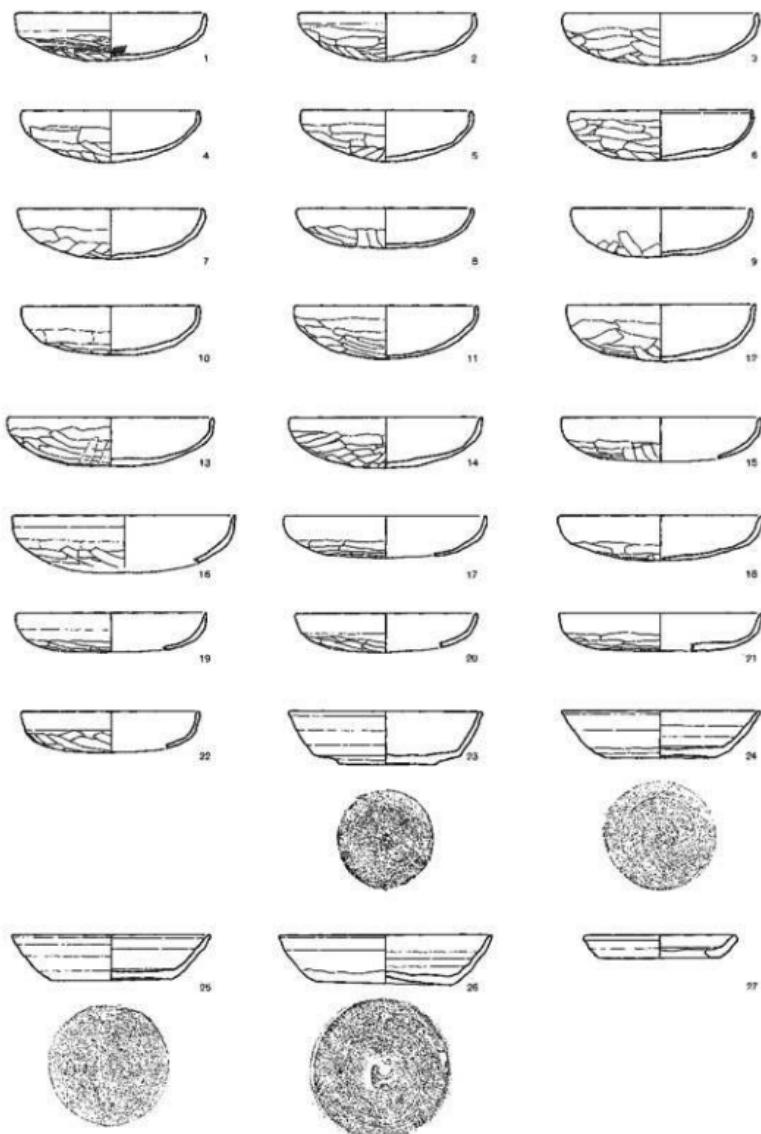
17は推定口径14.5cm、残存部の器高2.9cmを測る。口縁部は内湾しながら外傾して立つ。扁平な器形か。器面の摩滅激しく調整不明瞭。胎土細。ザラザラで粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。石灰質の微細粒もやや多。橙褐色。焼成良好。15~20%残存。No.293。

18は推定口径15.0cm、器高3.3cmを測る。口縁部は体・底部に比べて器壁厚く、外傾して立つ。口唇部は丸い。扁平・大振りの器形。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリ。胎土細。やや粉っぽい角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。25%残存、口縁部1/4。No.1103・1114・1141・1142。

19は推定口径13.8cm、残存部の器高2.7cmを測る。口縁部は内湾しながら外傾して立ち、口唇部は尖り気味。扁平な器形。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部下半外面ヘラケズリ。底部を欠く。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。13~15%残存、口縁部約1/4。No.150。

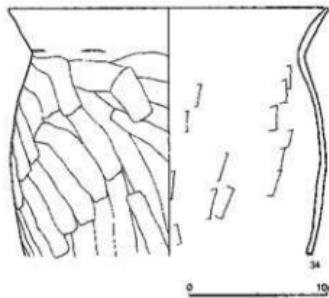
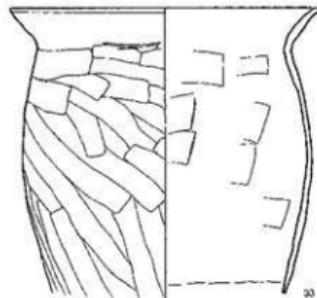
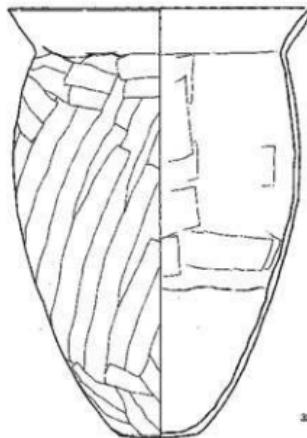
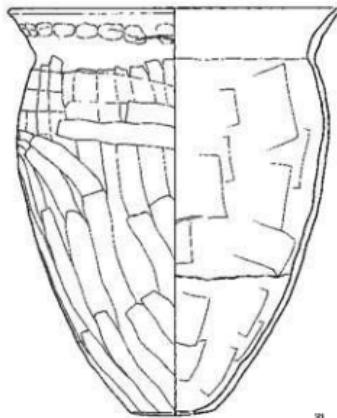
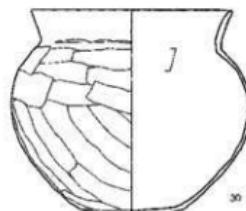
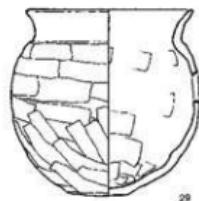
20は推定口径13.2cm、残存部の器高2.5cmを測る。口縁部は内湾しながら外傾して立ち、口唇部は丸い。やや小振りで扁平。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面丁寧なヘラナデ、体・底部外面ヘラケズリ、体部上端にナデのみの部分あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多

竹之花



第75図 7号住居跡出土土器(1)

竹之花



第76圖 7号住居跡出土土器（2）

量に含む。淡橙褐色。焼成良好。10%残存、口縁部約1/7。No.932。

21は推定口径14.7cm、残存部の器高2.7cmを測る。口縁部は割合直線的に外傾し、口唇部は尖り気味。平底に近く、大振りで扁平な器形。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。20%残存。No.1138。

22は推定口径12.8cm、残存部の器高2.7cmを測る。口縁部はゆるく内湾しながら外傾して立ち、口唇部は尖り気味。小振りで扁平な器形。口縁部と体部の境目にゆるい稜がある。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部外表面へラケズリ。底部を欠く。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。10~15%残存、口縁部1/3。No.1124。

須恵器杯は4点ある。おおよそ箱形の杯でやや内湾気味だが直線的に立ち上がる口縁部・体部と回転へラケズリを全面に施す平底ないし上げ底風の底部を持つ。

23は口径14.1cm、底径7.0cm(10.5cm)、器高3.8cmを測る。口唇部がつまみ出され、丸い。底部は粘土塊から切り離した部分と調整のために指が入った部分に段がついている。底面平底。ロクロ右回転で調整。胎土細で砂っぽく、角閃石・石英などの微細粒やや多量、結晶片岩径の小石を若干含む。灰褐色。外面の半分は黒斑状に変色。焼成やや良で、少しあいまい。完成。No.634。

24は口径14.3cm、底径7.8cm、器高3.4cmを測る。口唇部はつまみ出される。底面は回転へラケズリで上げ底風になる。ロクロ右回転で調整。ロクロミズビキ痕はやや不明瞭。体部下端にも回転へラケズリが施される。胎土細。白色針状物質やや多量、小石も多く含む。青黒灰色。焼成良好。完形。No.631。

25は口径14.3cm、底径8.7cm、器高3.3cmを測る。口唇部は尖り気味。底面は上げ底風平底。ロクロ右回転で調整。ロクロミズビキ痕はやや不明瞭。体部下端にも回転へラケズリが施される。胎土細。白色針状物質やや多量、小石も多く含む。やや白っぽい青灰色。焼成良好。完形。No.635。

26は口径15.3cm、底径9.8cm、器高3.65cmを測る。口唇部は尖り気味。底面は中央で大きく浮き上がっており、ヘラオコシ痕のような粘土痕の残存がある。ロクロ右回転で調整され、ロクロミズビキ痕はやや不明瞭。体部下半にも回転へラケズリが施される。胎土細でザラつきあり。結晶片岩系の小石・微細粒を多量に、白色針状物質をわずかに含む。「赤焼き」状態で橙褐色を呈する。口縁部内面に1ヶ所、底部内面に数ヶ所油の焦げ付きのような黒変部がある。焼成やや良で、少しあいまい。完形。No.769。

27は須恵器小皿(?)の破片である。当初長頸壺などに製作していたものの底部を切り取って作ったものではなかろうか。短く外に開く体部・口縁部と回転へラケズリで調整された平底を持つ。器壁はやや厚い。口径11.2cm、底径8.9cm、器高1.7cmを測る。口唇部は外側に面を持つ。ロクロ左回転で調整される。胎土細。石英などの微細粒やや多量、白色針状物質少量含む。灰褐色。焼成良好。15%残存。No.173。

28はやはり皿状の器形の土師器であるが、中央に長径2.2cm、短径1.8cmの孔が開けられ、孔の断面と内面全体にススの付着が顕著である。小型壺の底部を焼成後打ち欠いて転用品としたようである。平底の底部からゆるく屈曲して立ち上がり、大きく開く体部・口縁部を持つ。口径12.1cm、器高2.2cmを測る。内面は丁寧なヘラナデ、口縁部へ体部外表面ヨコへラケズリ、底面へラケズリ。口唇

部は打ち欠いたままである。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。65%残存。No.324・685。

29・30は土師器小型壺である。29は口径12.2cm、推定胴径13.8cm、底径4.6cm、器高13.5cmを測る。器の大きさに比して器壁が厚い。口縁部はやや大きく外反し、口唇部は尖る。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部上端に段を持つ。胴部はあまり張り出さないが球形胴を呈する。底部はヘラケズリで作出された平底である。胴部中位を欠く。口縁部から頸部の内外面ヨコナデ、胴部内面へラナデ後丁寧なユビナデ、胴部外面上半ヨコヘラケズリ、下半ナナメヘラケズリ、底面無方向ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。65%残存。No.750・751・752・755・759・760・761・762・763・841・842・844。

30は口径14.6cm、胴径17.4cm、底径7.4cm、器高14.9cmを測る。口縁部は外反して立ち、頸部で「く」の字に折れる。胴部はやや大きく張り出し、中位に最大径がある。ゆるく屈曲して平底の底部に移行する。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面へラナデ丁寧、外面上半ヨコヘラケズリ、下半ナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。全体的にススが付着してくすんだ感じ。焼成良好。70%残存。No.867・878。

土師器壺は長胴壺13・丸胴壺2（42・46）に分かれる。長胴壺は「く」の字状口縁を呈するもので、胴下半部内面に明瞭な粘土帯接合痕があり、器肉の薄い平底の底部を持つ。上器全体の最大径は口縁部にある。丸胴壺は大きく胴が張り出し、球形に近い形態となる壺で、外面調整にヨコヘラケズリが卓越する。

31は口径24.3cm、胴径22.7cm、推定底径6.2cm、残存部の器高29.4cmを測る。口縁部はゆるく外反して立ち、口唇部はつまみ出しで外側に肥厚する。胴部最大径はやや上位にある。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面はヘラナデ丁寧、外面上位タテ・ヨコナデケズリの重複（タテ卓越）、中位～下位タテ・ナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。口縁部外面には指頭圧痕目立ち、頸部外面にはヘラ痕若干あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。1mm大の小石もやや多。橙褐色。胴上位～下半ススの黒ずみ多し。焼成良好。底部の大半と口縁部の1/3を欠失。80%残存。No.28・31～33・294・492・672・741～750・749・838・845・846・848～857・859・1034・1036・1037・1076。

32は口径22.2cm、胴径20.9cm、底径5.8cm、器高31.2cmを測る。口縁部は外傾して立ち、口唇部はつまみだしでやや尖る。頸部の屈曲ゆるく、胴の張り出しも小さい。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面へラナデ丁寧、外面上位はヨコヘラケズリ、中位～下半右上→左下のナナメヘラケズリ、下位左上→右下のナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。頸部外面へラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。1mm大の小石もやや多。橙褐色。焼成良好。85%残存。No.274・275・283・285～287・286・355・357～359・392・480・483・547・574・593・606・614・616・660・666・674・683・684・692・711・712・718・724～726・808・835・839・840・861・892・926・1023・1044・1118・1130。

33は胴部下位を欠く。口径22.6cm、胴径21.1cm、残存部の器高20.7cmを測る。口縁部はやや大きく外反して立ち、口唇部は外側に肥厚する。胴部の張りは小さく、中位や上方に胴部最大径があ

る。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位～下半ナナメ・タテヘラケズリ。頸部外面ヘラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。55～60%残存。No.97・584・656・936・949～957・960・962～967・971～973・979・990～994・996・1007・1011～1013・1015～1018・1060～1064・1066・1067・1070。

34は口径23.3cm、胴径23.0cm、残存部の器高18.0を測る。胴部下位を欠く。口縁部は外傾して立ち、口唇部は尖り気味。頸部の屈曲ゆるく、胴部の張りは小さい。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位～下半ナナメ・タテヘラケズリ。頸部外面ヘラ痕若干。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。1mm大小の小石少量。橙褐色。焼成良好。20～25%残存、口縁部1/3。No.388・909・929。

35は口径20.0cm、胴部残存部最大径20.1cm、残存部の器高10.4cmを測る。胴部中位より下部を欠く。頸部は外傾気味に直立し、口縁部との境日で屈曲する。口縁部は大きく外に開き、口唇部はつまみ出し。胴部はやや下方で張り出し気味で、最大径は中位か。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位ナナメヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。器面の大半はススと火受けのため黒ずんでいる。焼成良好。5%程度残存、口縁部1/4、胴部上位1/5。カマドソデNo.1・2・左ソヂ一括・No.1040。

36は口径22.4cm、胴径20.8cm、残存部の器高11.5cmを測る。胴部中位より下部を欠く。頸部から口縁部にかけて外溝しながら立ち、口唇部はつまみ出され、丸い。頸部から胴部へは屈曲弱く、胴部の張りも小さい。胴部上位に最大径。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位ナナメヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、1mm大小の小石わずかに含む。橙褐色。焼成良好。15～20%程度残存、口縁部約3/4。No.717・794・795・815・898・988・1008・1009・1047・1053・1059・1072・1092・1114・1120。

37は口径23.3cm、残存部の胴径22.0cm、残存部の器高7.5cmを測る。胴部上位より下部を欠く。口縁部はゆるく外反して立ち、口唇部はつまみ出し気味。胴部の張り出しは大きい。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。頸部外面にはヘラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5～7%残存、口縁部約1/2。No.291・361・363・364・372・494・495・497・1108。

38は口径24.0cm、残存部の胴径19.9cm、残存部の器高6.9cmを測る。胴部上位より下部を欠く。頸部は外窩状にゆるく屈曲し、口縁部は外傾して立ち、口唇部はつまみ出し。胴部の張りは弱い。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。頸部外面ヘラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5%程度残存、口縁部は1/4。No.1048・1057。

39は口径24.7cm、残存部の胴径23.7cm、残存部の器高8.1cmを測る。胴部上位より下部を欠く。口縁部外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味。胴部の張りはやや大きい。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、一部ササラ状。胴部内面ヘラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5～7%程度残存。No.271・272・585・1104・1112。

40は口径21.2cm、残存部の胴径20.5cm、残存部の器高8.8cmを測る。胴部上位より下部を欠く。全体的に器壁が薄い。口縁部はやや大きく外反、口唇部は強いつまみ出しひため内面が帯状にへこむ。頸部は外湾して胴部に移行、胴部はやや大きく張る。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、1mm大の小石少量含む。橙褐色。スス付着でくすんでいる。焼成良好。10%残存。No.411・493・619・625・627・693・702・707・730・734・736・739・769・822・826・930・938・1042。

41は口径21.3cm、残存部の胴径18.5cm、残存部の器高6.0cmを測る。胴部上位より下部を欠く。頸部は直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部はわずかに内湾し、内側につまみ出し気味で丸い。胴部は張りが小さい。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。ヘラケズリの上端部はヘラ痕で段になっている。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。焼成良好。5%以下の残存、口縁部1/4～1/5。No.969・1020・1026・1032・1151。

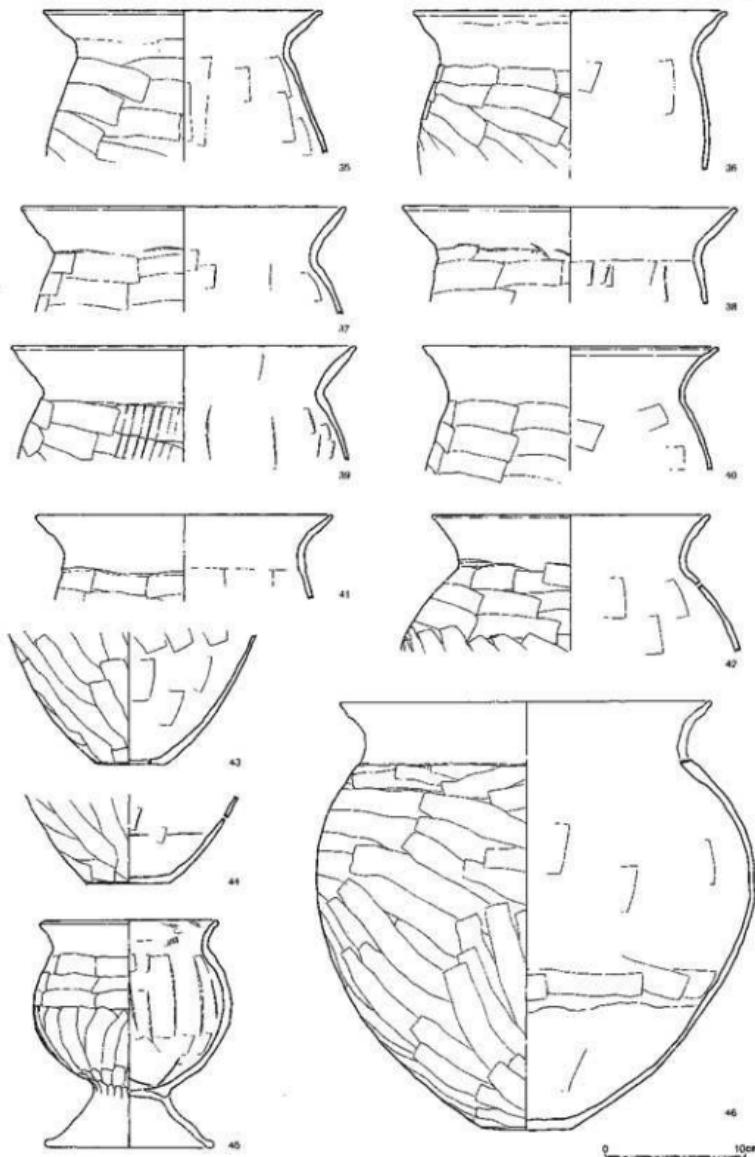
42は口径20.0cm、残存部の胴径24.3cm、残存部の器高9.8cmをはかる。胴部上位より下部を欠く。口縁部やや大きく外反し、口唇部は丸い。頸部はゆるく屈曲し、胴部は大きく張り出す。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位ナナメヘラケズリ。頸部外面にはヘラ痕顯著。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5%以下の残存、口縁部1/3。No.113・298・299・303・424・650。

43は長胴甕の胴下半部である。残存部の推定胴径17.8cm、推定底径5.0cm、残存部の器高9.3cmを測る。胴部はゆるくつぼまり、器壁の薄い底部に屈曲して移行。胴部下半外面ナナメ・タテヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向、内面ヘラナデ丁寧。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。外面スス付着で黒変。焼成良好。10%残存、胴下半1/6。No.54・581・997・1031・1043・1051・1125。

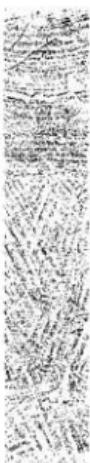
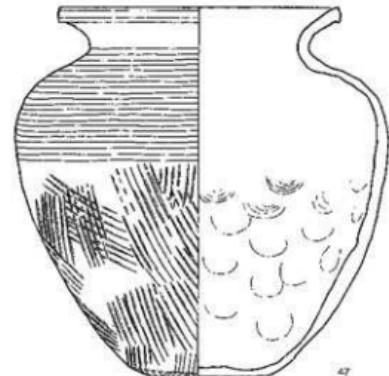
44も長胴甕の胴下半部である。残存部の推定胴径15.2cm、底径6.0cm、残存部の器高6.2cmを測る。胴部はやや張り出しがゆるくつぼまり、器壁のやや厚い底部に屈曲して移行。胴部下半外面ナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向、内面ヘラナデ丁寧。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5%残存。No.385・679・899・1077・1087・1107。

45は台付甕である。脚台部を欠く。口径12.9cm、胴部14.2cm、残存部の器高12.7cmを測る。頸部はゆるく「く」の字に屈曲し、口縁部は外反して立つ。口唇部は外側に面を持つ。胴部はやや大きく張り出し、球形胴を呈する。脚台部は大きく「ハ」の字に開くものだが、残存していない。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上半部ヨコヘラケズリ、下半部タテヘラケズリ。胴部内面ヘラ痕顯著。胎土細。ザラサラ。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。外面全体と口・頸部内面はスス付着で黒変。焼成良好。70%残存。No.867。

46は口縁部を欠く丸胴甕である。胴径31.3cm、底径6.6cm、残存部の器高26.4cmを測る。胴部は大きく張り出し、上半部は丸く、下半部はゆるやかにつぼまる。小さな平底の底部に屈曲して移行する。胴部上半ヨコ・ナナメヘラケズリ、中位～下位ナナメヘラケズリ、下端部ヨコ・ナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向、胴部内面ヘラナデ丁寧、下半部の接合痕の付近は強いナデ。胎土細。



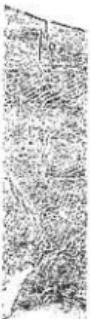
第77図 7号住居跡出土土器(3)



角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。内外面ともスス付着・焦げ付き痕などのため黒変する部分多い。焼成良好。60%残存。No.125・126・130～137・140・142～144・179～181・184・187・191・194・199・201・202・208・212・214・215・217・218・463・592・637・640・642～645・715・765・767・772・776・779～781・783・864・865・868～870・872～874・878～880・882・885。

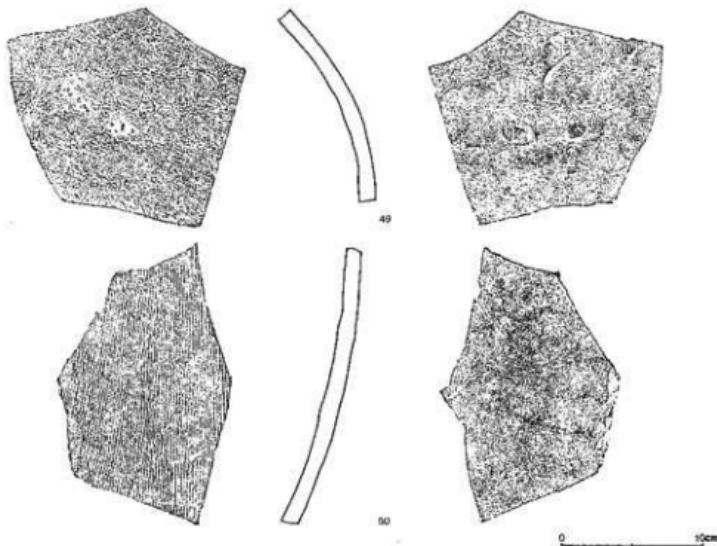
40～50は須恵器甕であり、中型（47・48）と大型（49・50）に分かれる。

47は口径20.0cm、胴径16.7cm、底部9.8cm、器高26.2cmを測る。口縁部は短く、大きく外反、胴部は外側に面を持つ。頸部は強く外湾して胴部に移行。胴部は大きく張り出し、上位に最大径を持つ。ゆるやかにつぼまり、ゆるく屈曲して大きな平底の底部に移行。胴部と底部の境目はやや曖昧。胴部外面上半部はカ



第78図 7号住居跡出土土器（4）

キ目調整、口縁部内外面・頸部内面・胴部内面上半部ロクロナデ、胴部外面下半部・底面粗い原体による平行タキ、内面の当て道具痕跡は曖昧（浅い同心円状か？）。胎土緻密。片岩系の小石と石灰質の粒子をやや多く含む。薄い青黒灰色。火まわりが悪くて赤変した部分あり。焼成良好だが、やや火力が低いためか焼きがあまい感じ。胴下端に欠失孔あり、95%残存。No.658。



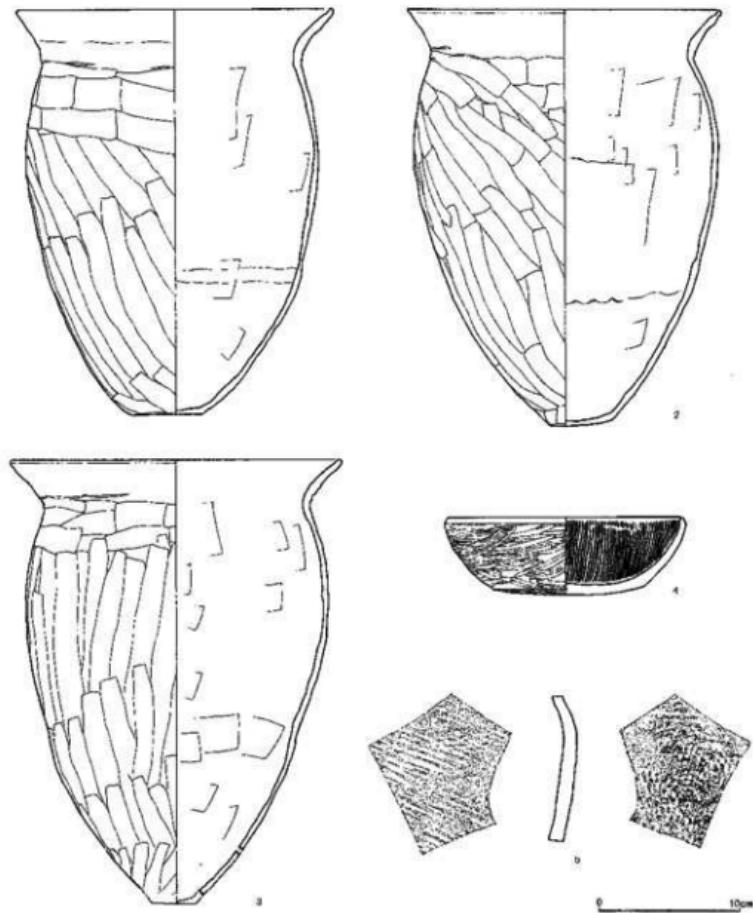
第79図 7号住居跡出土土器(5)

48は口縁部を欠く。胴径29.1cm、底部12.5cm、残存部の器高25.0cmを測る。47に比較してややナデ肩の器形。頸部はゆるく屈曲して胴部に移行。胴部は大きく張り出し、中位よりやや上に最大径がある。ゆるやかにつぼまりながら底部へ移行するが、底部との境目はゆるく屈曲する。底部は大きな平底で、ヘラケズリで胴部との境目を作出。胴部外面上半カキ目調整、下半細かい平行タタキ後カキ目およびロクロナデ、内面ロクロナデ、下半部および底部には当て道具痕若干残る。調整は全体をタタいた後、カキ目を含むロクロナデでタタキ目を消していくようである。底面ヘラケズリ後ナデでケズリ痕を消す。胎土緻密。角閃石・還元鐵風の黒色粒子・石灰質粒子などを多量、2mm大以上の小石をやや多く含む。やや薄い黒灰色。胴部上半と内面の下部に自然釉アバタ状にかかる。緑褐色に発色。焼成良好、堅緻。60~65%程度残存。No.910・914。

49・50は大型壺胴部の破片である。双方とも外間に細かい平行タタキ目、内面は凹面状の当て道具痕であり、内面はよくナデされている。49は15.0cm×17.0cmを測り、緑褐色の自然釉が厚くかかる。胎土緻密。1mm大の小石若干含む。黒灰色。焼成良好、堅緻。No.246。50は20.0cm×13.0cmを測り、灰褐色の自然釉がアバタ状にかかる。胎土緻密。白色針状物質多量、3mm大以上の小石やや多く含む。青黒灰色。焼成良好、堅緻。No.343。

#### 8号住居跡（第80~83図）

8号住居跡は130点の遺物を取り上げているが、縄文時代の土器片の流れ込みが多く、住居跡に伴うものはカマド内およびカマド付近から出土したものだけである。図示したものはカマド構築材として使用されていた十師器甕3個体、半瓦・軒丸瓦・丸瓦各1個体、カマド左ソデに密着して出



第80図 8号住居跡出土土器

上した土器器底1個体、および須恵器要素1点の8点にすぎない。

1～3の土器器底はカマド焼き口天井部の芯材になっていたもので、第80図の3・2・1の順に縦に重ねてそれを口縁部左方向に横に向け設置していたようである。

1は口径22.6cm、胴径20.8cm、底径5.0cm、器高28.6cmを測る。口縁部は外反して立ち、口唇部は内側につまみ出し気味で、丸い。頸部の屈曲弱く、胴部の張りも小さい。中位よりやや上に胴部最大径がある。ゆるやかにつぼまりながら底部に移行。胴部と底部の境はゆるく屈曲、底部はやや小さな平底。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位

～下半部ナナメ・タテヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。口縁部外面には粘土帶接合痕、頸部外面にはヘラ痕顯著。胎土細。ザラつきあり。1mm大の小石やや多く、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。90%残存。No.129。

2は口径22.4cm、胴径21.7cm、底径4.6cm、器高29.4cmを測る。口縁部は外反して立ち、口唇部はつまみ出され、尖り気味。頸部「く」の字に屈曲し、胴部小さく張り出す。上位に最大径あり、ゆるやかにつぼまりながら小さな平底の底部に移行。胴部と底部の境はやや強く屈曲。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコ・ナナメヘラケズリ、中位～下半部タテ・ナナメヘラケズリ、下端部ヨコヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。頸部外面にはヘラ痕若干、胴部内面上半部と下半部に粘土帶接合痕あり。胎土細。1mm大の小石多く、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。ほぼ完形。No.128。

3は底部を欠く。口径23.6cm、胴部21.5cm、残存部の器高30.9cmを測る。口縁部はやや大きく外反して立ち、口唇部は丸い。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部の張り出しが小さい。ゆるやかにつぼまりながら底部に移行。底部はかなり小さいものか。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位～下半部タテ・ナナメヘラケズリ。胴部全体に橙褐色の粘土が強く付着する。胎土細。1mm大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。95%残存。No.127。

4は土器部环である。口径16.1cm、底径10.6cm、器高5.5cmを測る。大振りで器壁が厚い。体部から口縁部へは内湾して立ち上がり、口唇部は内側に軽く曲げられ、尖り気味。底部は平底気味の丸底であるが、体部との境目はヘラケズリで稜を作出する。内面は丁寧なヘラナデの後正放射状暗文を施す。口唇部外面ヘラミガキ、体・底部外面ヘラケズリ後かなり密なヨコヘラミガキ、底面無方向ヘラケズリ後密なヘラミガキ。胎土細1mm大の小石多く、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。約50%残存。No.130。カマド左ソデに接して出土。

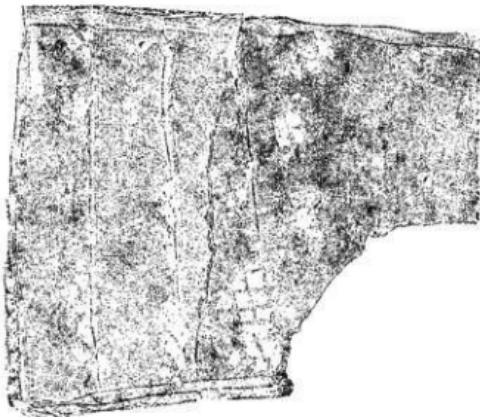
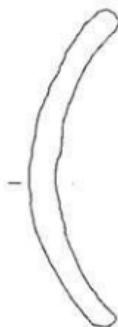
5は須恵器中型甕の破片で、南西コーナー付近の覆土から出土した。10.1cm×9.9cmの大きさの胴部上位の破片である。外面はやや粗い平行タタキ目、内面は同心円當て道具痕で、上部のみロクロナデで消している。胎土緻密。長石風の小石・黒色粒子などやや多く、白色針状物質ごくわずかに含む。黒灰色。焼成良好、堅敏。No.79。

瓦も前述したようにカマド構築材である。便宜的に、カマド煙道部に使用された平瓦を瓦1、左ソデ芯の軒丸瓦を瓦2、右ソデ芯の丸瓦を瓦3として記述することにする。

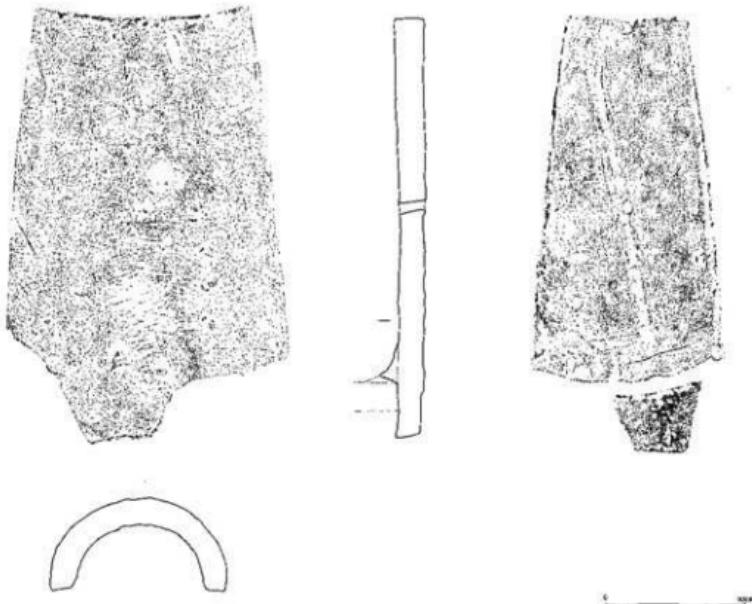
#### 瓦1（第81図）

いわゆる桶巻造りの平瓦である。一隅が弧状に欠失しており、中央部で二つに打損していた。大きさは中央部をとると、長さ34.0cm、幅23.0cm、厚さ1.5cm～2.0cmを測る。凹面は布目痕と模骨痕が見られる。模骨痕の幅は広い方（桶板材の突出部）が約3cm、狭い方が約2.4cmである。布の縫い目はやや斜めに走っており、下端部の縫い目から右側の部分は模骨痕がはっきりしていない。凸面は格子タタキ目を施した後幅広のヘラで強くケズっている。タタキ目原体は一辺7mm～1cm程度の不整形方の山を縦4個・横4個作出したものと思われ、ヘラケズリが深かったためにタタキ目は変形あるいは消失している部分が多い。原体の大きさは縦・横共に5cm程と推定され、右下端を中心

竹之花



第81图 8号住居跡出土瓦1(平瓦)

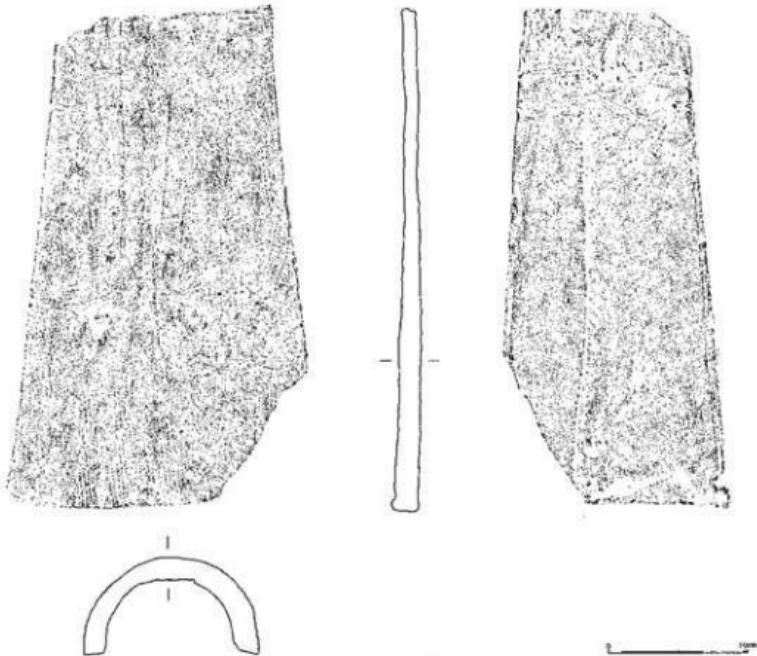


第82図 8号住居出土瓦2（軒丸瓦）

に弧を描くようにタタキを施されていたようである。なお、凸面にも布目痕が残る部分がある。側端面は両側ともヘラケズリでやや粗く面取りされている。軒方向の端面にもヘラケズリ状の痕跡があるが、屋根側はナデに近く、軒側も当初の面をわずかに調整する程度である。2mm以上の大石、角閃石・石英などの微細粒を多量に含み、割合緻密な胎土である。全面黒色を呈し、焼成も良好、堅敏である。85%程度残存している。No.132。

#### 瓦2（第82図）

瓦当面が脱落してしまった軒丸瓦である。出土時は瓦当面方向を下に向けてたてられていたため瓦当面脱落破損後に8号住居のカマド構築際に転用されたことは確実である。長さ30.8cm、残存部の広端部幅は外径13.4cm、内径10.2cm、狭端部幅は外径8.0cm、内径5.5cm、厚さ1.3~2.0cmを測る。凹面は布目痕のままであるが、凸面は純タタキ後ヘラケズリし、さらによくナデられている。ただし、縦竹状のものの上に凹面を上にして置いていたためか、線状の圧痕がやや多く横向きに残っている。凸面のヘラケズリは両側面際でゆるい面取り状になっている。側端面は両側ともヘラケズリされている。小口側の端面は軒側がヘラケズリ、屋根側がヘラケズリ後ナデである。瓦当面接合部は裏側の接合補助の粘土が残っており、強くナデした痕跡がある。また瓦当面の上端部が貼り付いていた部分の天井面には布目痕があり、本体の整形後に瓦当部を「馬籠の内技法」と呼ばれる懸垂貼り付け技法で接合していたようである。本体の中央には径7mmの釘穴がある。穿孔は



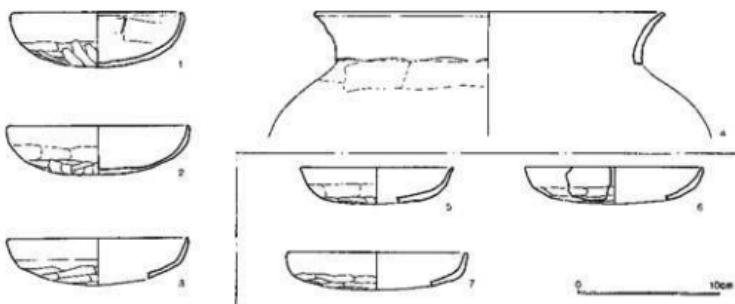
第83図 8号住居跡出土瓦 3（丸瓦）

内側からである。胎土緻密。石英の微細粒および白色の粒子多く、2mm以上（大きなものは1cm以上）の小石もやや多く含む。灰褐色でやや青灰色気味。焼成良好、堅緻。75%残存。

## 瓦3（第83図）

完形に近い丸瓦である。軒側を上に向けて直立した状態で出土した。軒側の小口から側面にかけた部分と屋根側の一隅を欠失している。長さ35.5cm、広端部近くの幅は軒側端面から10cmの部分で外径11.7cm、内径9.7cm、狭端部近くの幅は屋根側端面から2.1cmの部分で外径10.5cm、内径7.9cm、厚さ0.8cm～2.4cm（軒側端部付近平均1.8cm、屋根側端部付近平均1.3cm）を測る。凹面は布目痕が残るが、屋根側端面から11cmの部分までは荒い粘土搔き取り・ナデつけ痕で消されている。凸面は繩タタキ後強い縦方向のナデが施される。タタキも強めで面ができる。側端面は両側ともヘラケズリされ、内側を面取りしている。小口端面は屋根側は雑なヘラケズリ、軒側はヘラケズリ後ナデである。胎土緻密。石英の微細粒および白色の粒子多く、2mm以上（大きなものは1cm以上）の小石もやや多く含む。「赤焼き」であり、淡橙褐色～褐色を呈する。焼成良好であるが瓦1・2と比べるとややあく歎かい焼きである。90%残存。

## 10号住居跡（第84図1～4）



第84図 10・14号住居跡出土土器

10号住居からは388点の土器片が出土したが、繩文土器の流入品が多く、住居に伴うと見られたものはごくわずかであった。図示したのは土器片3・4の4点にすぎないが、これ以外は器形復元の困難な小破片であった。

1は推定口径12.3cm、器高3.9cmを測る。小振りでやや深身の杯である。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部は内側につまみ出しで肥厚し、丸い。体部は内湾したまま丸底の底部に移行。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面へラナデ丁寧、体・底部外面へラケズリ。体部と口縁部の境目にへラケズリで稜線を作出する意識あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/9。No.207・212・301・302。

2は推定口径12.8cm、器高3.5cmを測る。やや小振りの杯。口縁部は内湾して立ち上がり、口唇部は内側につまみ出しで肥厚気味。やや尖る。体部は内湾したままやや扁平な丸底の底部に移行。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面へラナデ丁寧、体部外面ナデのみか。粘土の亀裂多い。底部外面へラケズリ。器面は風化して荒れている。胎土細。ザラつきあり、粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。30~35%程度残存、口縁部1/5。No.246・251。

3は推定口径12.8cm、残存部の器高2.9cmを測る。口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味で尖る。体部はゆるく屈曲して底部に移行。底部は欠失しているが、やや扁平な丸底か。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面へラナデ丁寧、体部外面ナデのみか。粘土の亀裂多い。底部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。12%程度残存、口縁部1/4。No.10・92・107。

4は丸胴壺の口縁部・頸部の破片である。口径24.9cm、残存部の器高3.7cmを測る。口縁部は外反して立ち、口唇部はつまみ出し気味で外側に面を持つようにして肥厚する。頸部は直立し、ゆるく屈曲して胴部に移行。胴部は大きく張り出すか。口縁部・頸部内外面はヨコナデ。頸部へラ痕顯著。胎土細。やや砂っぽい。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。5~7%程度残存、口縁部1/5。No.153。

14号住居跡 (第84図5~7)

14号住居跡からは47点の土器片が出土した。しかしながら細片ばかりであり、器形復元の可能であったのは図示した土師器3点にすぎなかった。

5は推定口径10.8cm、残存部の器高2.5cmを測る。たいへん小振りの杯。口縁部外傾して立ち、口唇部はわずかに外反気味で尖る。内湾しながら体部・底部へ移行。底部は平底気味。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面へラナデ丁寧、体部外面へラケズリ後ナデ、底部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。淡橙褐色～灰褐色。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/8。No.2。

6は推定口径12.6cm、残存部の器高2.4cmを測る。小振りの杯。口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はつまみ出しで尖り気味。内湾しながら体部・底部へ移行。底部は扁平。口縁部と体部の境はヘラケズリの継を作出。口縁部外面ヨコナデ、口縁部下半～底部内面へラナデ丁寧。体・底部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、石炭質風粒子若干含む。橙褐色。焼成良好。5%程度残存、口縁部1/12。No.25。

7は推定口径12.9cm、残存部の器高2.4cmを測る。小振りの杯で底部を欠く。口縁部は外傾して立ち、口唇部は丸い。ゆるく屈曲して体部に移行。底部は扁平な丸底か。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部外面へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。淡橙褐色。焼成良好。20%程度残存、口縁部1/8。カマド内No.6。

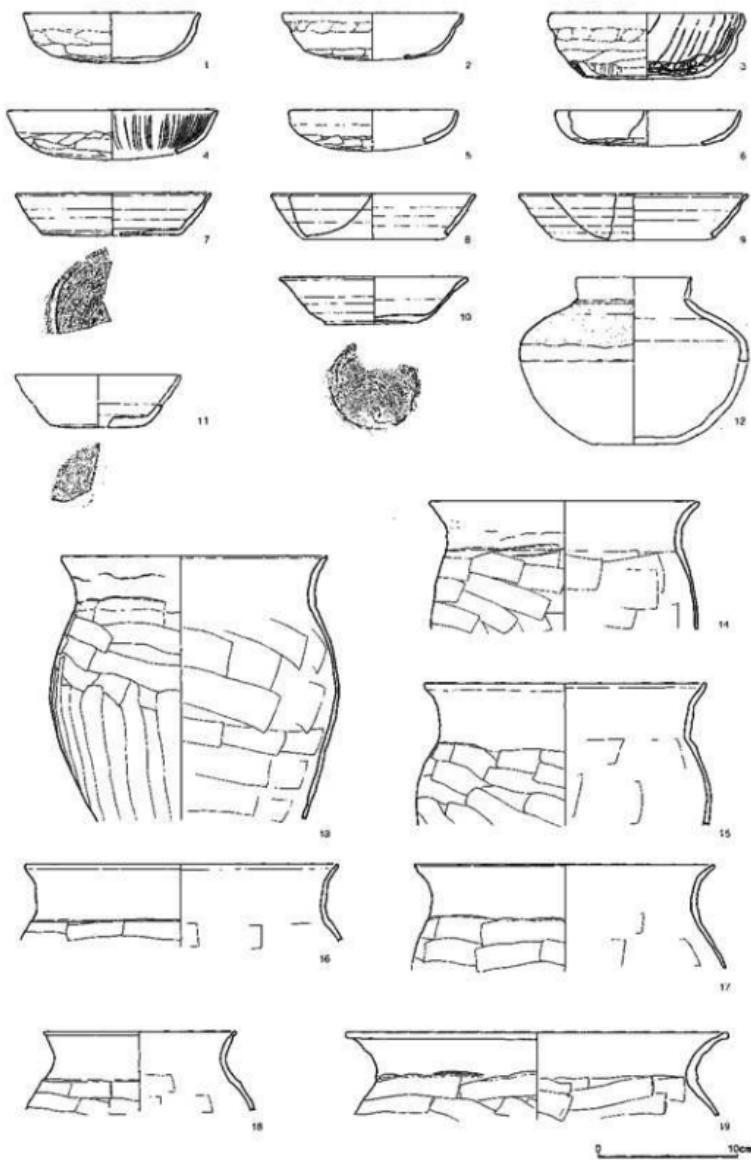
これら以外にカマド前方の覆土中から十脚器壺腹部破片が若干量出土している。長胴窯で「く」の字状口縁ないし初期の「コ」の字状口縁になると思われるものである。4個体文はあるが、図上復元不能。厚さ2～4mm。胴下半部内面には粘土帶貼り付けによる地ぶくれ状痕跡が頗著。橙褐色または暗褐色を呈し、焼成良好。おそらく5～7の杯と略同時期になると見てよいであろう。

#### 15号住居跡（第85～87図）

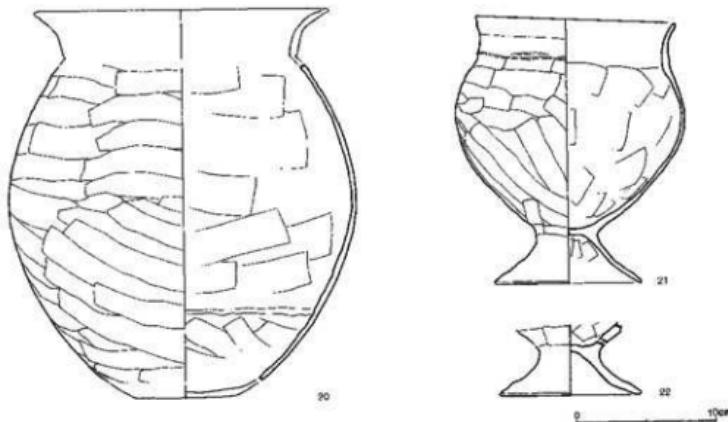
15号住居跡からは覆土中から140点、カマド内から155点の土器片が出土した。図示したのは、土師器杯6・長胴窯6・丸胴窯2・台付窯2・須恵器杯5・短頸壺1の22点である。なお、第85図3は墨書き器であり、第87図に詳細図を示した。

1は口径12.8cm、器高3.6cmを測る。小振りの杯。やや歪みあり。口縁部はわずかに外反して立ち、口唇部はつまみ出し気味で丸い。体・底部へは内湾しながらスムーズに移行。底部は平底風丸底。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面へラナデ（摩滅して不明瞭）、体部外面軽いヘラケズリ後ナデ、底部外面へラケズリ。胎土細。ザラつきあり。1mm大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。完形。No.83・86・87。

2は推定口径13.1cm、残存部の器高3.3cmを測る。小振りの杯。口縁部は内湾気味に立つが、ゆるく屈曲して外反し、さらに内湾して口唇部に至る。口唇部は丸い。底部へは内湾したまま移行するが外面でヘラケズリの継を作出する。底部は平底風丸底。口縁部・体部の内外面ヨコナデ、底部内面へラナデ丁寧、外面へラケズリ。口縁部上位の屈曲部外面にはユビオサエ痕残る。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/5。カマド内No.104・105。



第85圖 15号住居跡出土土器 (1)



第86図 15号住居跡出土土器（2）

3は墨書き器であるので、後述する。

4は推定口径15.2cm、残存部の器高3.2cmを測る。口縁部は外傾して立ち、口唇部はわずかに外反気味で尖る。体部との境でゆるく湾曲して体・底部に移行。底部は欠失するが、やや扁平な丸底か。口縁部内外面ヨコナデ、内面全体はヘラナデ後やや乱れた正放射状暗文を施す。体・底部外面ヘラケズリで、体部上端にはケズリ残し・ナデのみの部分あり。口縁部と体部の境にはヘラケズリによる稜線作出の意識あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。椎褐色。黒変部やや広い。焼成良好。20%残存、口縁部1/4。カマド内No.28・31。

5は推定口径12.2cm、残存部の器高2.5cmを測る。小振りの杯。体部～口縁部は内湾気味にやや外傾して立ち上がり、口唇部は尖る。内湾したまま扁平な丸底の底部に移行。口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、体部上端外面ヘラナデか、体・底部外面ヘラケズリ。胎土細。やや粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。椎褐色。焼成良好。10～13%残存、口縁部1/7。カマド内No.48。

6は推定口径13.3cm、残存部の器高2.5cmを測る。口縁部は内湾しながら外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味で尖る。内湾しながら平底化した底部に移行。底部は欠失。口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内面ヘラナデ丁寧、外面ヘラケズリ。胎土細。粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。灰褐色でやや赤味がある。焼成良好。7%程度残存。No.59。

以上6点が上師器杯である。完形品は1点、墨書き器が1/2残存であった以外顯著なものはなかった。

7～11は須恵器杯である。10以外は小破片である。

7は口径14.2cm、器高3.1cmを測る。口縁部は直線的に外傾して立ち、口唇部は丸い。体部と底部の境目は屈曲し、底部は平底。口縁部内外面・底部内面ヨクロナデ、底部外面全面回転ヘラケズ

リ。ロクロは右回転。胎土緻密。白色針状物質やや多く含む。青黒灰色。焼成良好、堅敏。20%程度残存。No.137・138。

8は口縁部から体部のみの破片である。推定口径14.8cm、残存部の器高3.0cmを測る。底径は10~10.8cm程度であろう。口縁部は直線的に外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味でやや丸い。口縁部・体部内外面ロクロナデ。ロクロ右回転。胎土緻密。白色針状物質少量含む。黒灰色。焼成良好、堅敏。10~13%程度残存、口縁部1/7。No.116。

9も口縁部から体部のみの破片である。推定口径16.6cm、推定底径11.8cm、残存部の器高3.2cmを測る。口縁部は直線的に外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味で丸い。口唇部・体部内外面ロクロナデ。ロクロ右回転。胎土緻密。白色針状物質やや多く含む。灰褐色でやや青灰色気味。焼成良好、堅敏。5~7%程度残存、口縁部1/11。No.54。

10は口径13.6cm、底径6.7cm、器高3.4cmを測る。体部から口縁部はまっすぐ外傾して立ち、口唇部付近は外反しやや厚い。体部と底部の境でゆるく屈曲し、底部は平底だが回転糸切り離しのために上げ底風になる。口縁部・体部内外面および底部内面ロクロナデ、底面回転糸切り離し未調整である。ロクロ右回転。胎土やや緻密だが、ザラつきあり。2mm大以上の小石をかなり多く含む。黒灰色だが、火まわりの関係で一部セピア色、灰褐色。焼成やや良、若干あまい。80%程度残存。No.109~112・132。

11は体部~底部の破片。推定底径6.7cm、残存部の器高1.8cmを測る。口径は12cm前後、器高は3.7cm前後になるであろう。体部は直線的に外傾し、底部との境で屈曲する。底部は平底で分厚い。体部内外面・底部内面ロクロナデ、底面回転糸切り離し未調整。ロクロ右回転。胎土やや緻密で、粉っぽい。ザラつきあり。角閃石・石英の微細粒やや多量、白色針状物質も多量に含む。灰白色。焼成やや良、若干あまい。5~7%程度残存。床面直上出土。

12は須恵器短頸壺の胴上半部の破片である。口縁部および胴下半部が残っていない。胴径16.4cmを測る。口径8.2cm前後、器高12cm前後になるものと思われる。胴部は頸部から大きく張り出し、肩を持つような器形。最大径部付近には細い沈線がある。残存部は内外面ともロクロナデ。ロクロ右回転。胎土緻密。石灰質風の白色粒子・還元鉄風の黒色粒子やや多く含む。灰白褐色。焼成良好で堅敏。10%以下の残存。No.88。

13~17は上部器長胴壺である。これらは「コ」の字状口縁壺の初期的形態を呈している。

13は口径19.2cm、胴径20.8cm、残存部の器高19.1cmを測る。頸部最大径が口径を上回っている。頸部は直立気味に内湾して立ち、口縁部は外反し、口唇部は内側に面を持って尖る。胴部へはゆるく屈曲して移行し、胴部は小さく張り出し、最大径は上半部にある。ゆるやかにつぼまりながら底部へ移行。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、胴部外面上位ヨコヘラケズリ、一部ササラ状。中位から下半部タテ・ナナメヘラケズリ。胎土細。1mm大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。暗茶褐色。スス・焦げ付きで内外面共に黒っぽい。焼成良好。60%残存。カマド内No.8・9・11・16~18・20・29・30・32・36・38・40~47・64・77・86。

14は口径19.4cm、胴径19.2cm、残存部の器高9.2cmを測る。頸部はやや明確に直立し、口縁部は外反し、口唇部は丸い。胴部へはわずかに屈曲して移行し、胴部の張りは小さい。胴部上半に最大径

あり。中位以下を欠失する。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部上半部内面ヘラナデ丁寧、外面ヨコヘラケズリ。頸部外面上にはヘラ痕が顯著。口縁部との境日の外面には粘土帶貼り付け痕が残る。胎土細。1mmの小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡棕褐色～淡褐色。焼成良好。5～7%程度残存口縁部1/6。No.80～83・床面直上。

15は推定口径20.3、胴径21.2cm、残存部の器高10.2cmを測る。頸部はやや外傾して立ち、口縁部は外反、口唇部は内湾気味につまみ出され、丸い。胴部は頸部との境で屈曲し、張り出す。胴部上位に最大径がある。11縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位ナナメヘラケズリ。胎土細。径1mmの大の小石や多く、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡棕褐色。胴部上端から頸部やや黒変。焼成良好。10～15%程度残存、口縁部1/4。No.32・39・43・カマド内No.57・59・107・111。

16は推定口径22.7cm、残存部の器高5.6cm、胴径23.3cmを測る。頸部直立し、口縁部は外反して立つ。口唇部は内湾気味につまみ出され、丸い。胴部との境目に軽い段を持ち屈曲し、胴部やや大きく張る。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒をやや多量に含む。橙褐色。焼成良好。5～7%程度残存、口縁部1/6。No.76・カマド内No.120・覆上。

17は11径21.7cm、胴径22.5cm、残存部の器高7.5cmを測る。頸部は外湾しながら直立、口縁部は大きく外反し、口唇部はつまみ出し気味で丸い。胴部は頸部から湾曲しながら移行し、やや大きく張り出す。胴部上半部以下を欠失する。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。胎土細。1mmの大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡棕褐色。焼成良好。20%弱残存、口縁部3/5。No.73・123・130・144・カマド内。

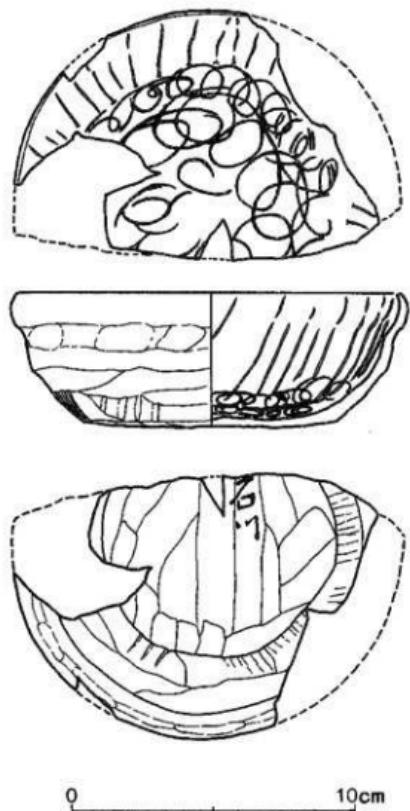
18は台付窓ないし小型の丸胴甕である。推定口径14.0cm、胴径16.6cm、残存部の器高5.6cmを測る。頸部は内傾して立ち、口縁部は外反、口唇部は丸く外側に肥厚する。胴部との境に軽い段を持ち、胴部は大きく張り出す。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒をやや多量に含む。橙褐色。焼成良好。10%程度残存、口縁部1/7。カマド内No.81・82。

19は丸胴甕である。推定口径27.6cm、残存部の器高6.1cm、胴径26.2cmを測る。頸部は強く湾曲している。口縁部は大きく外反し、口唇部はつまみ出され、外側に肥厚して丸い。胴部は湾曲したまま移行し、大きく張り出す。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ。胎土細。1mmの大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。3%程度残存、口縁部約1/6。カマド内No.22・105・133。

20は丸胴甕の胴部である。口縁部・頸部・底部を欠いている。胴部最大径25.0cm、残存部の器高22.6cmを測る。胴部はやや大きく張り出し、中位に最大径がある。ゆるやかにつぼまりながら底部に移行。やや大きな平底気味の底部か。口縁部はゆるい「コ」の字を呈するものであろう。胴部内面上位～中位ヨコヘラナデ丁寧、下位に粘土帶接合痕あり、上下は強いナデ付け、この下はナナメヘラナデ丁寧、外面上半部ヨコヘラケズリ、中位～下半部ナナメヘラケズリ。胎土細。ややザラつく。小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。15～20%程度残存。カ

マド内 №39・63・113・床面直上。

21は台付壺である。口径14.4cm、胴径16.5cm、底径10.7cm、器高19.2cmを測る。頸部は直立し、口縁部はゆるく外反して立つ。口唇部は尖り氣味。胴部との境はゆるく屈曲し、胴部はやや張り出す。最大径は中位よりやや上にある。底部へはやや急激につぼまりながら移行。脚台部は大きく「ハ」の字に開き、裾端部はやや尖り氣味。口縁部・頸部内外面と脚台部内外面はヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位から下半部ナナメヘラケズリ、脚台との接合部はヨコヘラケズリ、脚台部の天井部付近ヘラナデ。頸部と胴部の境目はヘラ痕断著でヘラケズリによる段がある。胎土細。1mm人の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。スヌ・焦げ付きで内外面全体が黒変している。焼成良好。約85%残存。№69。



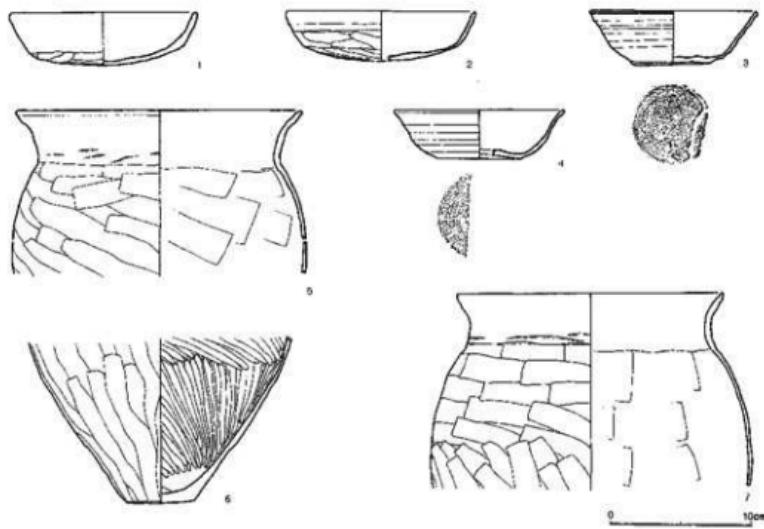
第87図 15号住居跡出土墨書き土器

22は台付壺の脚台部と底部下端の破片である。脚裾径10.2cm、残存部の器高5.2cmを測る。胴部は下端部のみであり、やや大きく張り出して、かなり丸い胴部であろう。脚台部は大きく「ハ」の字に開き、下半部でさらに外反する。裾端部はつまみ出し気味だが、やや丸い。胴下端部内面ヘラナデ、外面ヨコヘラケズリ、脚台部内外面ヨコナデ。胎土細。小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。7~10%程度残存。カマド内№155。

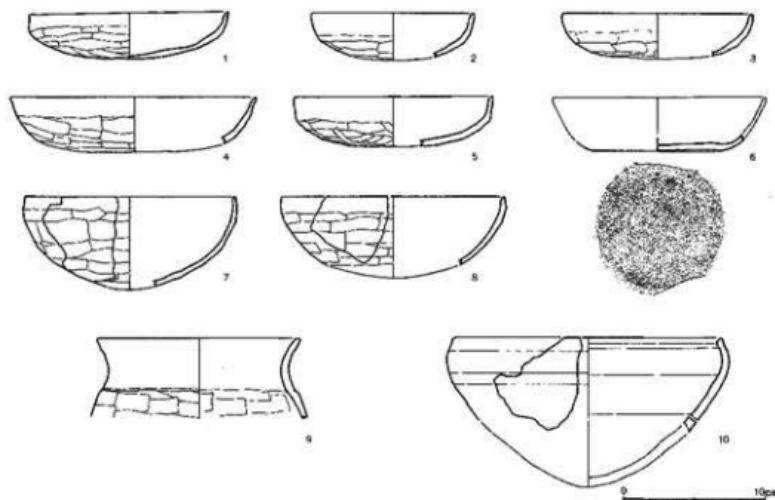
ところで、15号住居跡の上器は新旧2段階に分かれ、古い段階のものが流れ込みである。第84図4・5・7~9・12は確実にそれに該当する。

#### 15号住居跡出土墨書き土器（第85図3、第87図）

15号住居跡では土崩留痕1点の底面に2字分の文字を確認することができた。上器は底面の3割



第88図 16号住居跡出土土器



第89図 17号住居跡出土土器

近くを欠失しているため、発見された文字の上にもまだ文字があったかもしれない。

口径13.7cm、底径9.0cm、器高4.8cmを測る。器形やや歪む。体部・口縁部は内湾して立ち、一度ゆるく外反して、さらに強く内湾し、口唇部は内向きになって尖る。底部と体部の境はヘラケズリで稜を作出するが、ゆるく湾曲したまま移行する。底部はケズリで整えられた平底である。口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面の屈曲部にユビオサエ痕残存。口縁部～体部内面正放射状暗文、やや深めで弦線のように施される。底面はやや乱雑なラセン状暗文内外二重に施される。暗文施文以前のナデ・ミガキは丁寧。体部外面ヨコヘラケズリ、一部ササラ状。胎土細。1mm大の小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。約50%残存。No.23・80・100・床面直上。墨書きはかなり薄くなってしまい、現状での判読はやや困難であるが、実測時には形態も含めて十分観察可能であった。底面中央からやや右にはずした位置にあり、土器本体は字の上に欠けている。縦一列で「石川」と読むことができる。「石」は縦12mm、横9mm、「川」は縦9mm、横8mmの大きさに書かれており、字間は約3mm空いている。

#### 16号住居跡（第88図）

16号住居跡からは67点の土器片が出土したが、形態復元が可能だったのは図示した7点にすぎなかった。ただし、5・6はおそらく同一個体であるので、6個体ということになる。

1は上部器杯で、口径13.3cm、器高3.8cmを測る。体部・口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はやや尖り気味。底部との境目はヘラケズリで作出した稜を持つ。底部へは内湾したまま移行する。やや扁平な丸底。口縁部・体部内外面ヨコナデ、底部内面ナデだが、ユビオサエ状の凹凸目立つ。底部外面ヘラケズリ、胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。ややすくんだ色。焼成良好。完形。No.41。

2も土師器杯である。口径13.5cm、器高3.5cmを測る。体部～口縁部はやや直線的に外傾し口唇部は尖り気味。口縁部と体部の境目はナデとケズリで作出されたゆるい稜になる。体部と底部の境はゆるく屈曲し、外面にヘラケズリで作出した稜がある。扁平な丸底の底部。口縁部から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面ヘラナデ丁寧、体部外面ヘラケズリ後ナデ、底部外面ヘラケズリ無方向。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。口縁部外面くんでおり、外面にスス付着で黒変した部分あり。焼成良好。25～30%残存、口縁部1/3。No.9～11・15～19・22・23・37・38。

3は須恵器杯である。口径11.9cm、底径5.5cm、器高3.9cmを測る。体部・口縁部は比較的まっすぐ外傾して立ち、口唇部は丸い。体部と底部の境目で屈曲して、平底の底部に移行。口縁部・体部内外面および底部内面ロクロナデ、底面回転糸切り離し未調整、体部下端にロクロナデの指が入って底面調整にかかる部分がある。底部は粘土の円盤を回転糸切り離しにより連続的に作り、体部を付けていく手法をとることが底面に粘土板二重の切り離し痕があることによりわかる。ロクロ右回転。胎土緻密。片岩系の粒子・石灰質粒子やや多く、白色針状物質ごく少量含む。黒灰褐色。セピア色に近い。焼成良好、堅緻。75%残存。No.2・24・25・42・43・50・51・55・65。

4も須恵器杯である。推定口径12.2cm、底径5.9cm、器高3.5cmを測る。体部は内湾して立ち、口縁部はゆるく外反する。口唇部はやや丸い。体部と底部の境でゆるく屈曲する。底部は糸切り離し

で上げ底風となる。口縁部・体部外面および底部内面ロクロナデ、底面は回転糸切り難し未調整。胎土緻密。片岩系の粒子・石灰質粒子や多く含む。黒灰褐色。一部セピア色に近い。焼成良好、堅致。30%程度残存、口縁部3/10。No.60・65・67。

5・6は長胴壺である。取り上げの時点で上下に分かれ、接合面をもたなくなってしまったので図上は別々にした。法量上も双方の器高を見したもののが全体の器高ではない。5の推定口径は20.3cm、残存部器高11.6cm、胴径21.0cm、6の底径4.9cm、残存部胴径18.8cm、器高11.8cmを測る。頸部ゆるく外反して立ち、口縁部は内湾気味に外傾、口唇部わずかにつまみ出し気味で丸い。ゆるく屈曲して胴部に移行。胴部はやや張り出し、中位よりやや上に最大径あり。ゆるやかにつぼまりながら底部に移行。胴部と底部の境目に屈曲。底部は小さな平底。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴上半部内面ヘラナデ丁寧、下半部内面ナナメヘラナデ、单位が細くミガキ風。胴部外面上半ヨコ・ナナメヘラケズリ、下半部タテ・ナナメヘラケズリ、底面ヘラケズリ無方向。頸部外面ヘラ痕顯著。胎土細。小石少量、角閃石・石灰などの微細粒多量に含む。茶褐色。スス、二次焼成のために広く黒変。焼成良好。40%程度残存。5はNo.40のみ、6はNo.23・27・28・40・59。

7は長胴壺の胴部中位までの破片である。推定口径19.0cm、胴径22.9cm、残存部の器高13.7cmを測る。頸部は外湾気味に直立し、口縁部はゆるく外反、口唇部は内側につまみ出され、丸い。胴部へはゆるく屈曲して移行。胴部の張りは小さい。中位よりやや上に最大径あり。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、外面上位ヨコヘラケズリ、中位以下タテ・ナナメヘラケズリ。頸部外面にヘラ痕顯著。胎土細。1mm大の小石若干、角閃石・石灰などの微細粒を多量に含む。橙褐色。胴部外面に墨がボタ落ちしたようなヨゴレあり(11滴分?)。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/5。No.1・15号住No.45・カマド内No.3。

#### 17号住居跡(第89図)

17号住居跡からは203点の土器片が出土しているが、やはり図示に堪えうるものは少なかった。図示したのは土器部杯5・碗2・壺1・須恵器杯1・鉢1の合計10点である。北壁カマドの中央から出土した杯(第89図1)以外は小破片であった。

1~5は土器部杯である。1は口径14.2cm、器高3.2cmを測る。器径はかなり歪む。やや扁平な杯。口縁部から底部までゆるやかに内湾して移行。口唇部外側につまみ出しで尖る。扁平な丸底。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面ヘラナデ丁寧、体部外面ヘラケズリ後ナデ、底部外面ヘラケズリ。胎土細。小石少量、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。口縁部~体部外面1ヶ所黒ずみ。焼成良好。完形。No.1。

2は推定口径11.6cm、残存部の器高3.2cmを測る。小振りの杯。体部・口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部は丸い。内湾したまま丸底の底部に移行。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、底部内面ヘラナデ丁寧、体部上端外面ナデのみ、体・底部外面ヘラケズリ。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。灰褐色。やや赤味あり。焼成良好。20%程度残存、口縁部1/4弱。No.124。

3は推定口径13.8cm、残存部の器高3.0cmを測る。体部・口縁部は内湾して立ち、口唇部わずかにつまみ出し気味で丸い。底部へは内湾したまま移行。底部を欠くが、扁平・平底氣味の丸底か。口

縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部上端外面へラケズリ後ナデ、体・底部外側へラケズリ。胎土細。粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/5。No.111。

4は推定口径17.6cm、残存部の器高3.3cmを測る。底部を欠く。体部・口縁部はゆるやかに内湾しながら外傾して立ち、口唇部は外反し、尖り気味。底部は平底風か。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部外側へラケズリ。胎土細。1mmの大の小石若干、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。10%程度残存、口縁部1/12以下。No.153。

5は推定口径14.2cm、残存部の器高3.6cmを測る。体部は内湾し、口縁部との境にヘラケズリを作出したやや鋭い稜がある。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は尖り気味。底部へは内湾しながら移行。底部は扁平な丸底。口縁部内外面および体・底部内面ヨコナデ、体・底部外側へラケズリ。胎土細。1mmの大の小石若干、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。底部内面中央付近に黒ウルシ状の付着物あり。焼成良好。20~25%程度残存、口縁部1/4。No.46・84・88・111。

6は須恵器环底部の破片である。底径9.3cm、残存部の器高1.1cmを測る。口径15.2cm前後、器高3.8cm前後を想定することができる。立ち上がりが直線的な环であろう。体部から底部へはゆるく屈曲して移行する。底部は平底で、あまり上げ底風にならない。器面摩滅して整形度不明瞭。底面以外の内外面はロクロナデであろう。底面全面回転へラケズリ。ロクロ右回転。胎土やや緻密。片岩系小石・上器片粒やや多量、角閃石・石英などの微細粒・石灰質細粒多量に含む。灰褐色。内面は「赤焼き」。焼成やや良好だが、あまり。40%程度残存。No.190。

7は上部器腕の破片である。推定口径15.0cm、残存部の器高6.4を測る。半球形状を呈し、深い器形。口縁部から底部まで内湾して移行。口縁部は直立し、口唇部は尖り気味。口縁部外面から体部内面までヨコナデ、体・底部内面へラナデ丁寧、外面へラケズリ。胎土細。ザラついて粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。10%残存、口縁部1/12。No.4。

8も上部器腕の破片で、7と同じ特徴を持つ器形である。推定口径16.0cm、残存部の器高4.9cmを測る。口縁部はわずかに外傾気味で口唇部は丸い。口縁部外面から体部内面までヨコナデ、体・底部内面へラナデ丁寧、外面へラケズリ。胎土細。わずかにザラつきあり。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。5%程度残存、口縁部1/10。No.185。

9は上部器小型壺の破片である。推定口径14.6cm、残存部の胴径15.5cm、器高5.7cmを測る。頸部は外湾し、内傾気味に立ち、口縁部は外反、口唇部は丸い。胴部へはそのまま湾曲して移行。頸部と胴部の境は段を持つ。大きさに比べると器壁やや厚い。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部上位内面へラナデ丁寧、外面ヨコ・ナナメへラケズリ。胎土細。やや砂っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好。10~15%程度残存、口縁部1/4。No.35・36。

10は須恵器鉢の小破片である。推定口径19.0cm、胴径20.2cm、残存部の器高6.8cmを測る。器高は10.6cm程を想定できる。この種の鉢としては小型。やや厚い器壁。底部を欠く。口縁部は内湾して立ち、口唇部は内側に面を持つ。胴部最大径は口縁部直下。底部へは急激につぼまりながら移行。底部はやや突出する形態か。内外面ともロクロナデ。ロクロ右回転。胎土細。2mmの大の小石、白色針状物質多量に含む。薄い黒灰色。焼成良好。3~5%残存。No.155。

### c その他の遺構と出土遺物

竹之花遺跡においては縄文時代・奈良・平安時代に属さない、近世あるいは近代以降に形成されたと思われる遺構も数多く検出されている。それらは土壙415基、溝3条である。これらはほとんど遺物を伴なっておらず、縄文土器などの流れ込みが見られるが、時期的には江戸時代終末期を遡ることはないと想われる。土壙については個々の記述はせず、必要な数値を表とした。本文では形態上の傾向と土層の註記について記しておきたい。

#### (1) その他の遺構

##### 歴史時代土壙（第90～111図）

前述のように本遺跡には415基の歴史時代の土壙がある。形態・方向性・分布に若干の傾向があるので、その概要だけ述べる。

まず、形態であるが、①長方形、②不整円形ないし椭円形、③1つないし複数の突出部を持つ長方形などのものがある。大半は①に属するものである。①は特定の土で一気に埋め戻されているような土層を示すものが多く、側壁は直立しているがオーバーハングのものも含み、長径が1～3mの範囲にあるものが多いことも指摘できる。かつて土壙が広く行われていたことを考えると、このような土壙が寝棺を納めた墓穴を含むことは十分予想してよいと思う。ただし、かなり深めの掘り込みを持つものも、浅すぎて立ち上がりの一部を失っているものもあり、時代がかなり長期に亘っているのか、まったく違う機能を持つものを多く含むのか判然としない。今後類例の増加を待ってさらに検討してみたい。②はピット状のものも含んで居るが、おおよそ60～80cm程の長径、10～40cm程の深さのものが多いようである。用途・機能については判断材料が少ないので考えにくいが、①との関わりは薄いと考えておきたい。③は風倒木痕を含むと思われるが少數であり、やはり用途・機能は不明と言わざるをえない。ゴミ穴・便所などのような居住施設の周辺にあるべきものを含んでいると考えておきたいが居住施設本体を確認できなかったので、機能については保留しておくことにする。

方向性・分布は谷部の南側の台地上にある200基ほどの土壙群にかなりの集中性と特定方向の意識をタテ・ヨコで持っていることが顕著であるが、それ以外でも遺跡の北部に2ヶ所、遺跡中央部の谷の北側の斜面に1ヶ所方向性の揃った散在的な長方形土壙群がある。方向性の意識は長方形土壙①に限られているようであり、この点に関してても②、③は機能の推定の材料になるような事実を提供してくれない。

なお、391号土壙（第103図）はその確認面直上に奈良時代半ば前後に属する土師器長削縦口縁部の破片（第113図2）が出土しており、覆土にも焼土がやや多く含まれていた。確實とは言えないが、奈良時代の住居跡のカマドの掘り込みの一部になる可能性のあることを指摘しておきたい。

ところで、土壙の土層は竹之花・円阿弥河遺跡の縄文時代～歴史時代のすべての土壙に共通する記号に置き換えて図中の土層断面部分に表示した。次頁から土層註を記述する。その後の頁から歴史時代の土壙の個々の数値表を示すことにする。

## 土壤土層註記

- A 1 黒色土 やや粘性あり、しまっている。
- A 2 黒色土 ローム粒を多く含む。
- A 3 黒色土 ローム粒を少量含む。
- A 4 黒色土 3～5mm大のロームブロックを含む。
- A 5 黒色土 ローム粒、1～3cm大のロームブロックを多く含む。
- A 6 黒色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを少量含む。
- A 7 黒色土 ローム粒を多く、炭化物粒を少量含む。
- A 8 黒色土 ローム粒、炭化物粒、焼土粒を多く含む。
- A 9 黒色土 ローム粒、焼土粒を含む。
- A10 黒色土 ローム粒、3～5mm大のロームブロック、炭化物粒を多く含む。
- A11 黒色土 褐色土ブロックを含む。

- B 1 褐色土 やや粘性あり、しまっている。
- B 2 褐色土 ローム粒を多く含む。
- B 3 褐色土 ローム粒を微量含む。
- B 4 褐色土 ローム粒を斑状に含む。
- B 5 褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量含む。粘性あり。
- B 6 褐色土 ローム粒、炭化物粒、砂粒を微量含む。
- B 7 褐色土 ローム粒、砂粒を少量含む。
- B 8 褐色土 ローム粒、1～3cm大のロームブロックを含む。
- B 9 褐色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを多く含む。
- B10 褐色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを少量含む。
- B11 褐色土 3～5mm大のロームブロックを少量含む。粘性あり。
- B12 褐色土 5cm大のロームブロックを少量含む。
- B13 褐色土 5cm大のロームブロックを多く含む。
- B14 褐色土 5cm大のロームブロック、砂粒を含む。
- B15 褐色土 5cm大のロームブロック、褐色土ブロックを筋状に含む。
- B16 褐色土 ロームの再堆積。
- B17 褐色土 黒褐色土ブロックを含む。
- B18 褐色土 焼土粒を少量含む。やや粘性あり。

- C 1 黒褐色土 ローム粒を多く含む。粘性あり。
- C 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまっている。
- C 3 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒を多く含む。
- C 4 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量含む。やや粘性あり。

竹之花

- C 5 黒褐色土 ローム粒、炭化物粒を微量含む。  
C 6 黒褐色土 ローム粒を多く、白色砂粒を少量含む。  
C 7 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。  
C 8 黒褐色土 3～5mm大のロームブロックを多く含む。  
C 9 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

- D 1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。粘性に欠ける。  
D 2 暗褐色土 ローム粒を少量含む。  
D 3 暗褐色土 ローム粒を斑状に含む。  
D 4 暗褐色土 ローム粒、炭化物粒を少量含む。  
D 5 暗褐色土 ローム粒、砂粒を多く含む。  
D 6 暗褐色土 ローム粒を多く、砂粒を微量含む。  
D 7 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土ブロックを多く含む。  
D 8 暗褐色土 ローム粒を多く、炭化物粒、焼土粒を少量含む。  
D 9 暗褐色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを斑状に含む。  
D 10 暗褐色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを多く含む。  
D 11 暗褐色土 3～5mm大のロームブロックを少量含む。  
D 12 暗褐色土 1～3cm大のロームブロックを多く含む。やや粘性あり。  
D 13 暗褐色土 5cm大のロームブロックを多く含む。  
D 14 暗褐色土 5cm大のロームブロックを少量含む。  
D 15 暗褐色土 炭化物粒を多く含む。  
D 16 暗褐色土 炭化物粒を少量含む。やや粘性あり。  
D 17 暗褐色土 炭化物粒、白色砂粒を少量含む。やや粘性あり。  
D 18 暗褐色土 白色砂粒を少量含む。  
D 19 暗褐色土 砂粒を少量含む。  
D 20 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

- E 1 明褐色土 ローム粒を多く含む。やや粘性あり。  
E 2 明褐色土 ローム粒を少量含む。  
E 3 明褐色土 ローム粒、炭化物粒を多く含む。  
E 4 明褐色土 ローム粒、白色砂粒を少量含む。やや砂質。  
E 5 明褐色土 ロームブロックを多く含む。  
E 6 明褐色土 ロームブロック、白色砂粒、褐色土ブロックを多く含む。  
E 7 明褐色土 ロームブロック、黒褐色土ブロックを少量含む。  
E 8 明褐色土 白色砂粒を少量含む。やや粘性あり。  
E 9 明褐色土 砂粒を多く含む。

E 10 明褐色土 砂質。

E 11 明褐色土 粘性あり。しまっている。

F 1 茶褐色土 粘性に欠ける。しまっている。

F 2 茶褐色土 ローム粒を多く含む。

F 3 茶褐色土 ローム粒を少量含む。

F 4 茶褐色土 ローム粒を含む。ロームの再堆積。やや粘性あり。

F 5 茶褐色上 ローム粒、炭化物粒を斑状に含む。

F 6 茶褐色上 ローム粒、白色砂粒を多く含む。

F 7 茶褐色土 5~10mm大のロームブロックを多く含む。

F 8 茶褐色土 5cm大のロームブロックを斑状に含む。

G 1 明茶褐色土 やや粘性あり。

H 1 暗灰褐色土 砂粒を多く含む。

H 2 暗灰褐色 5cm大のロームブロックを多く含む。

I 1 黄褐色土 ローム粒を少量含む。やや粘性に欠ける。

I 2 黄褐色土 ローム粒、5cm大のロームブロックを含む。ロームの再堆積。

I 3 黄褐色土 5cm大のロームブロックを斑状に含む。

I 4 黄褐色上 黒褐色上ブロックを少量含む。

I 5 黄褐色上 褐色土ブロックを多く含む。

J 1 暗黄褐色土 5~10mm大のロームブロックを多く含む。ロームの再堆積。

J 2 案黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。しまっている。

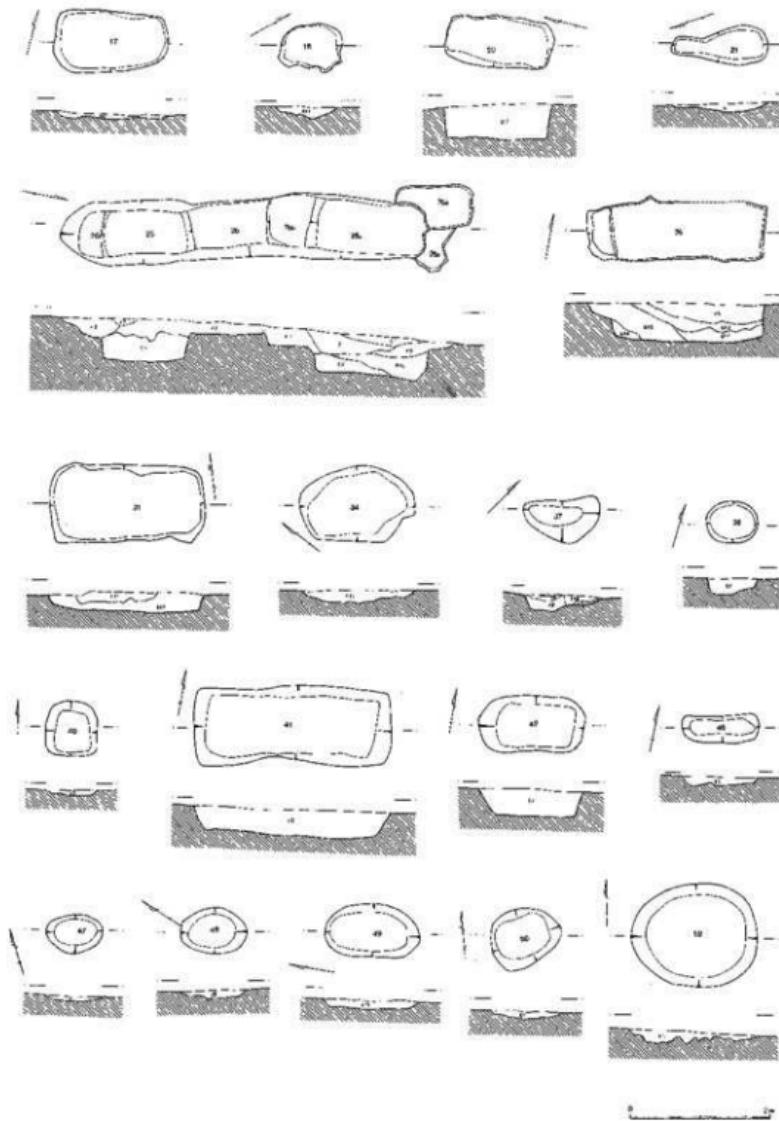
J 3 案黄褐色土 ローム粒を微量含む。しまっている。

K 1 明黄褐色土 ローム粒を少量含む。粘性あり。

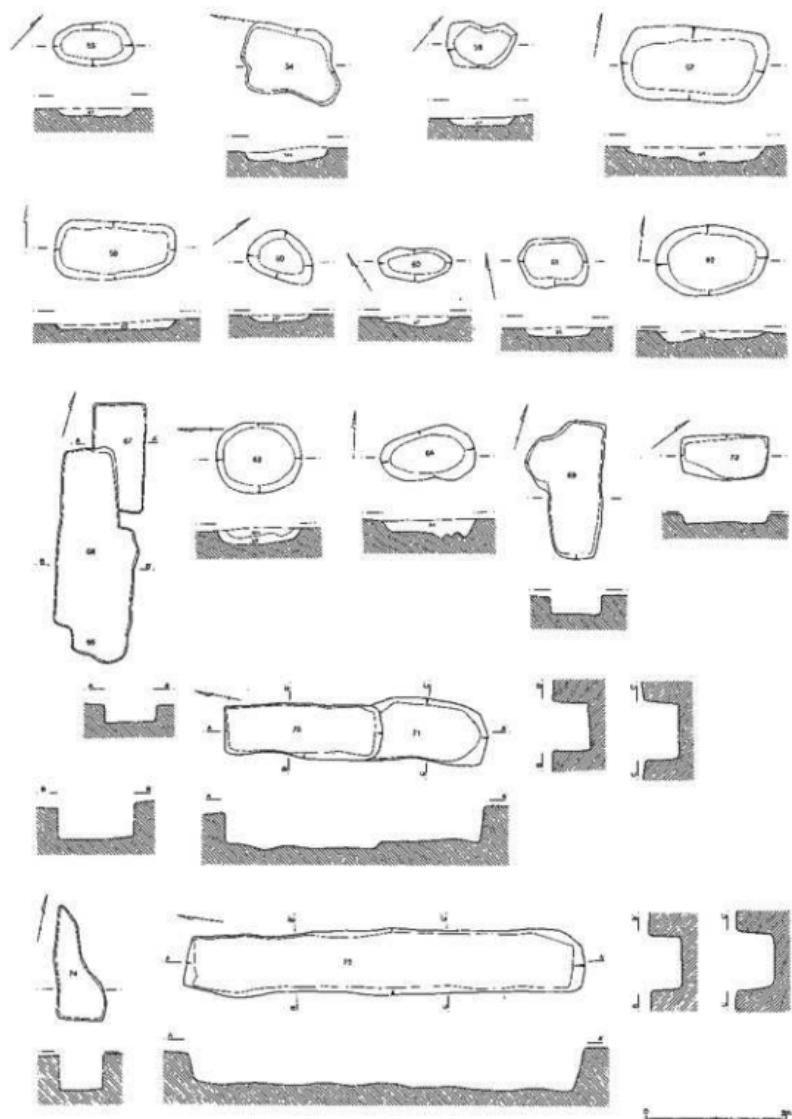
L 1 ローム

M 1 焼土

竹之花

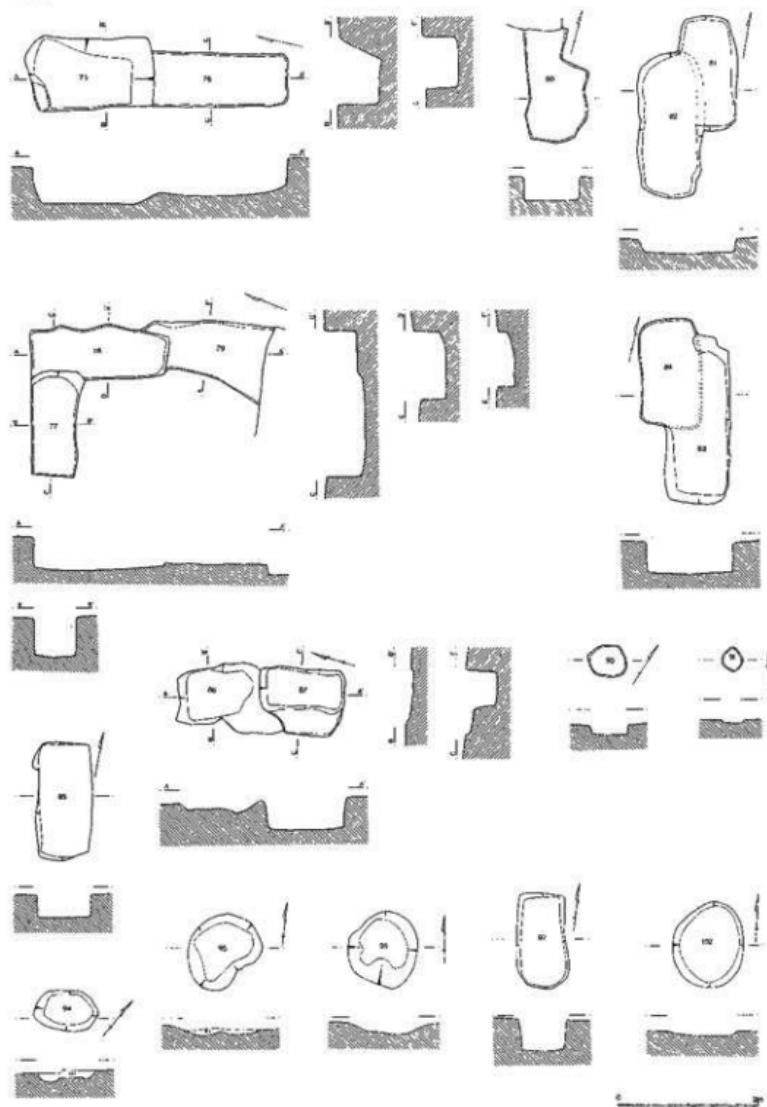


第90図 歴史時代土壤 (1)

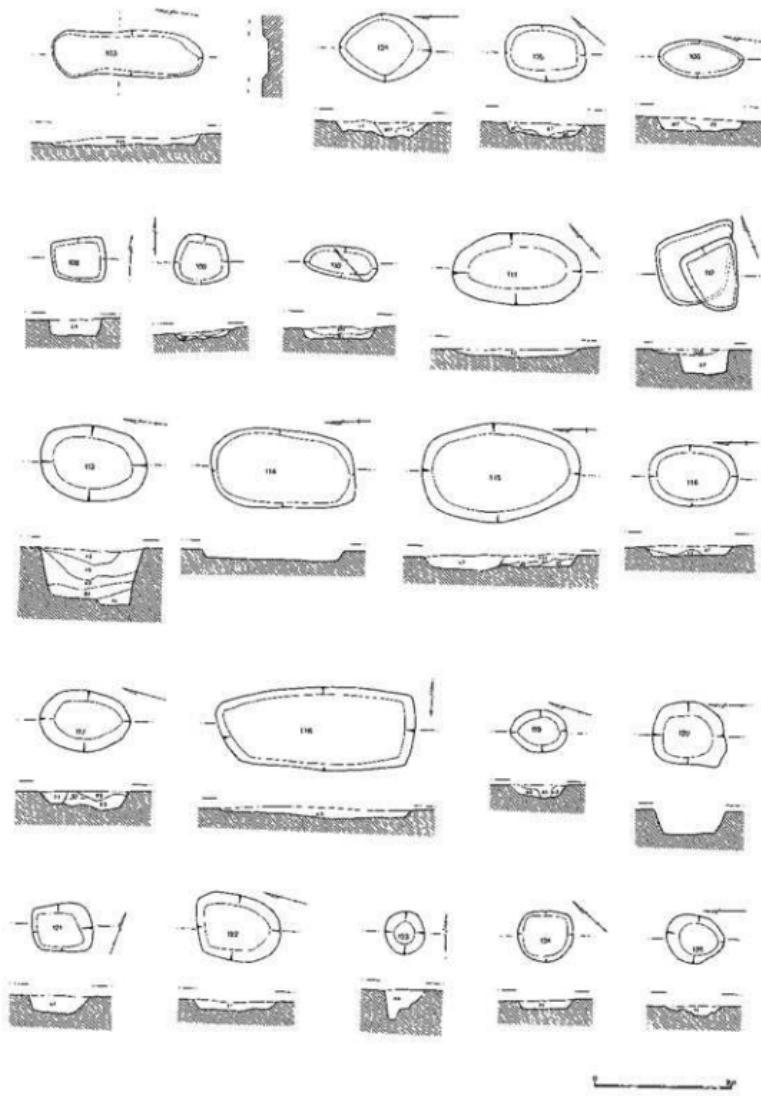


第91図 歴史時代土壤 (2)

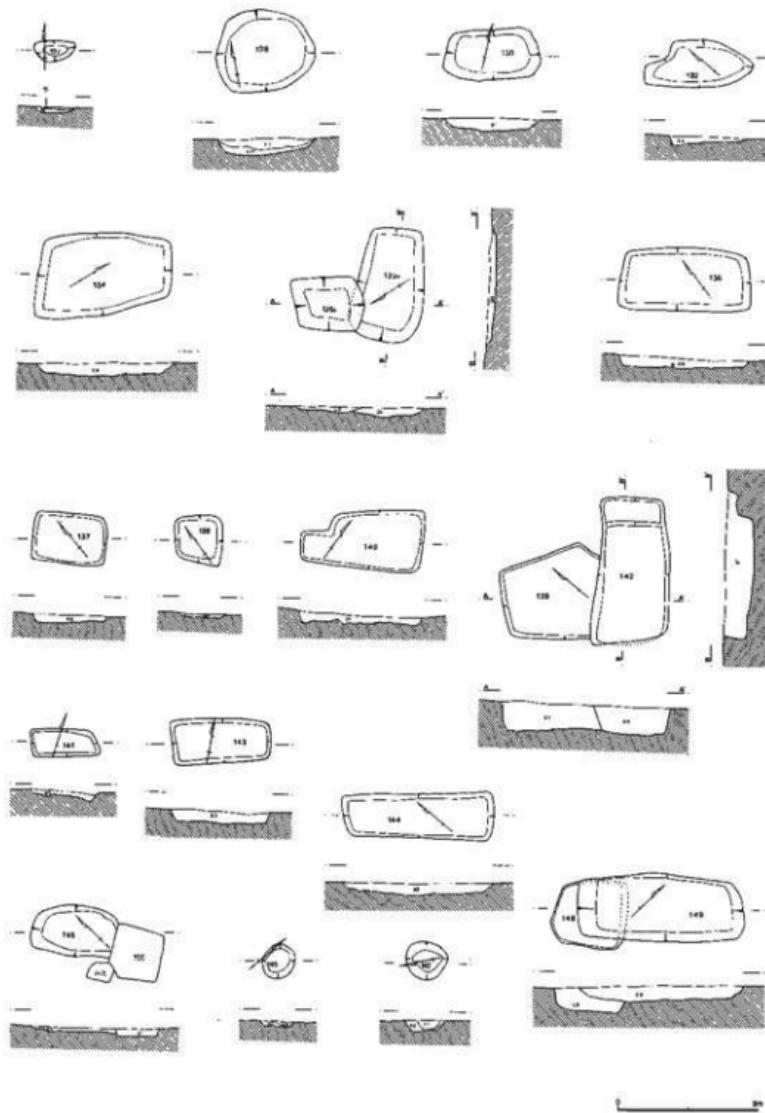
竹之花



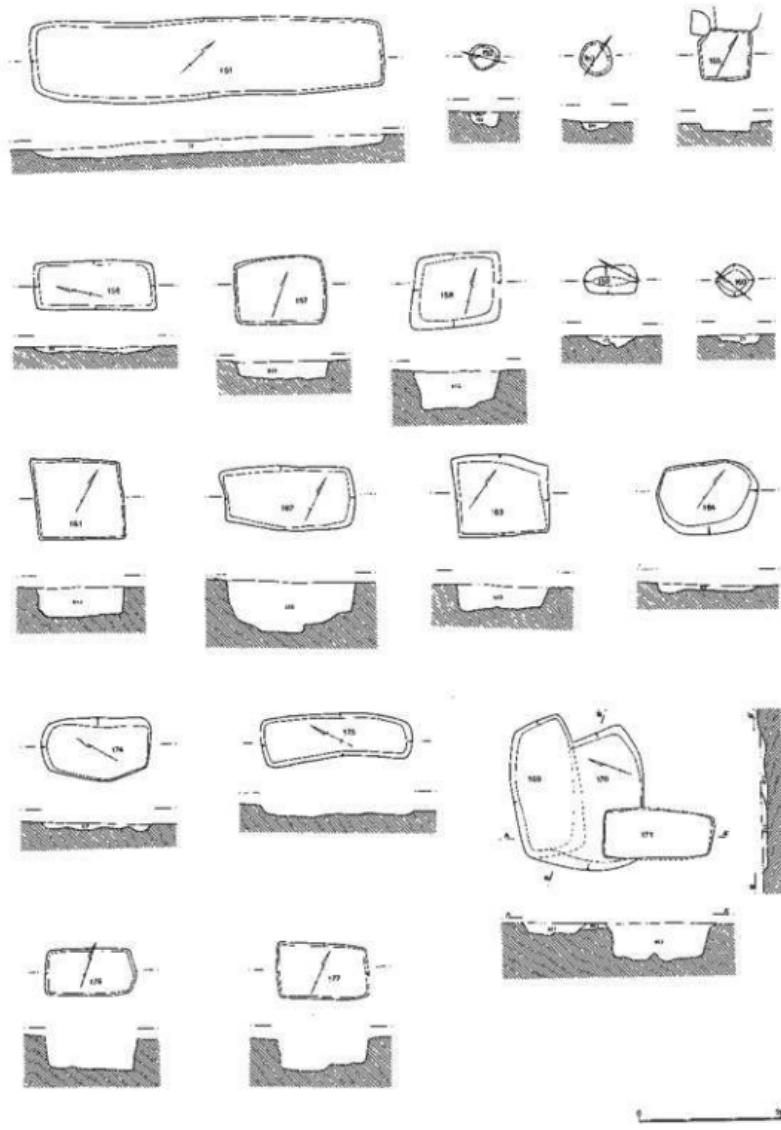
第92圖 歷史時代土壤 (3)



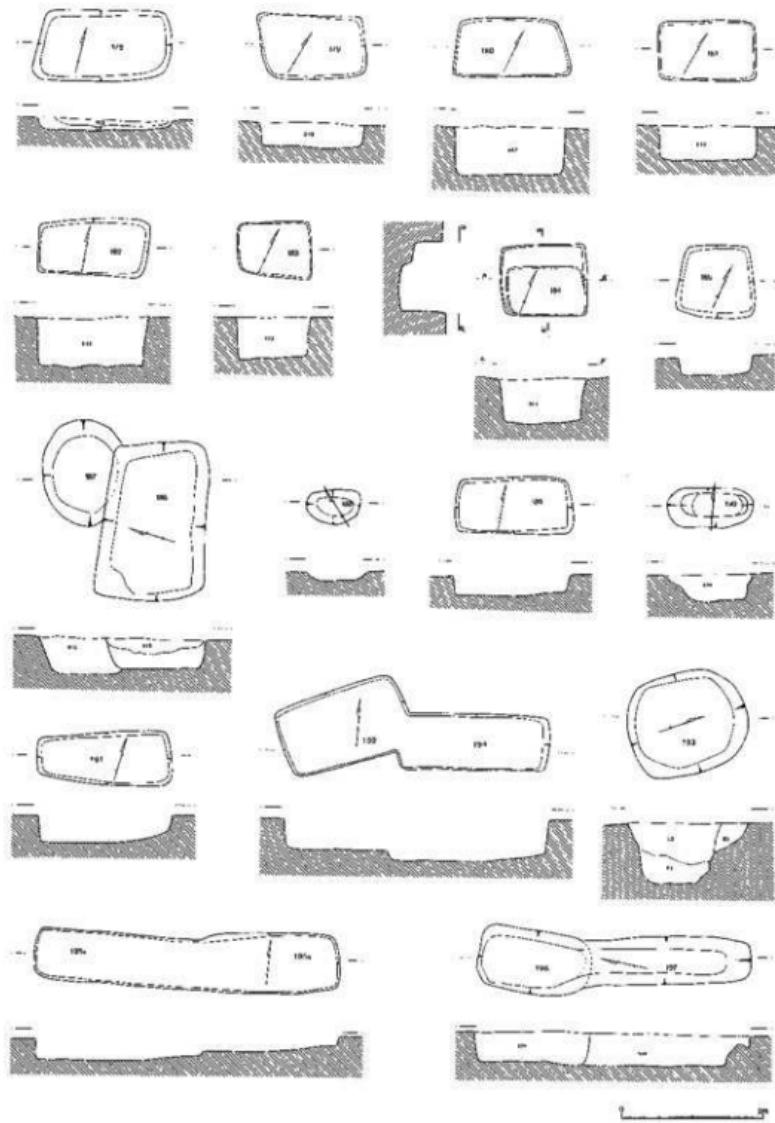
第93図 歴史時代土壤 (4)



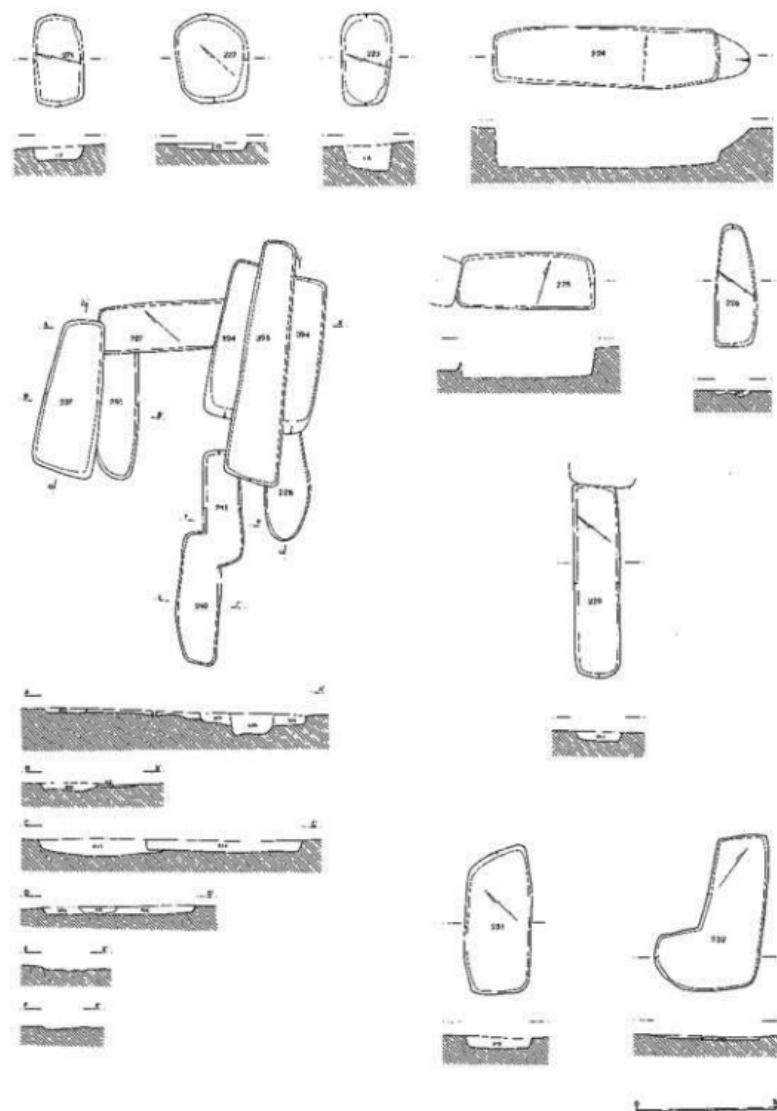
第94図 歴史時代土壤 (5)



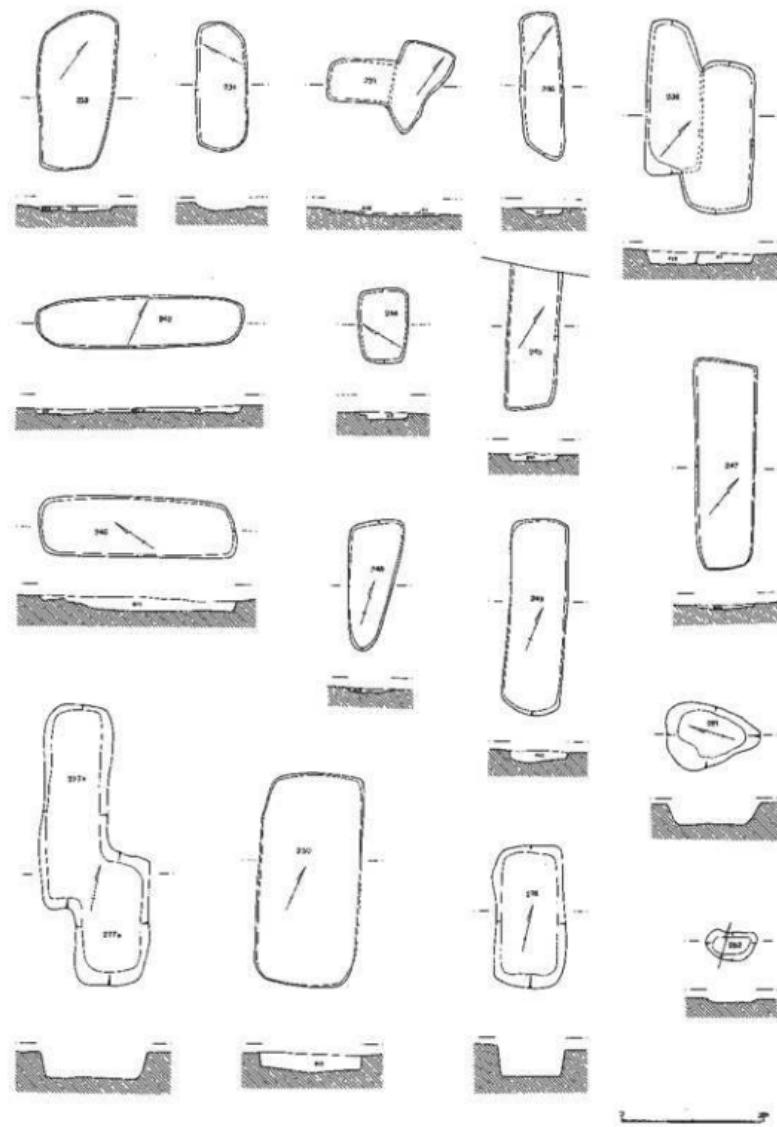
第95図 歴史時代土壤(6)



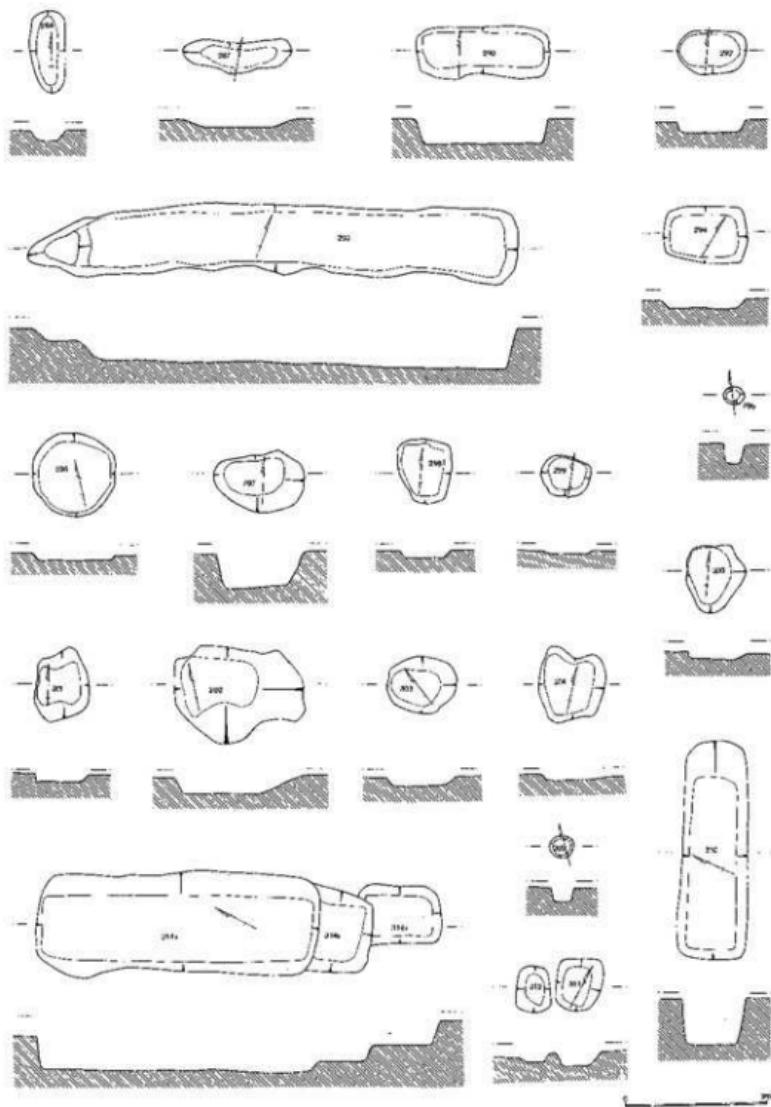
第96図 歴史時代土壙 (7)



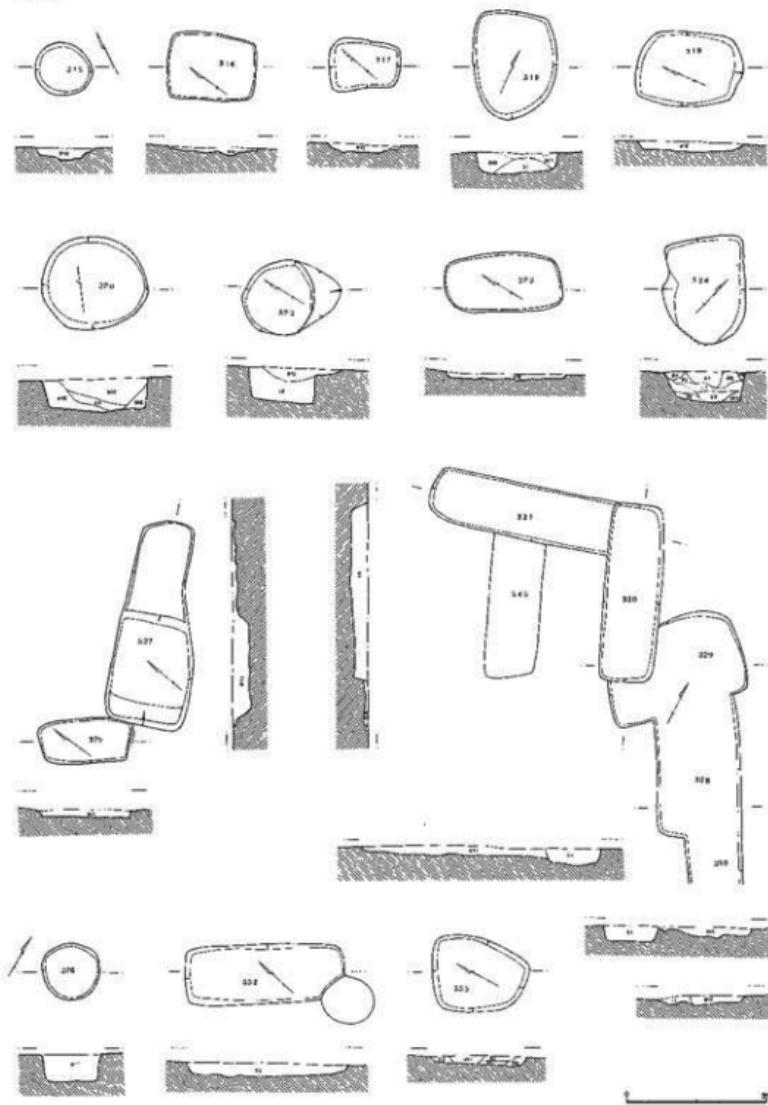
第97図 歷史時代土壤(8)



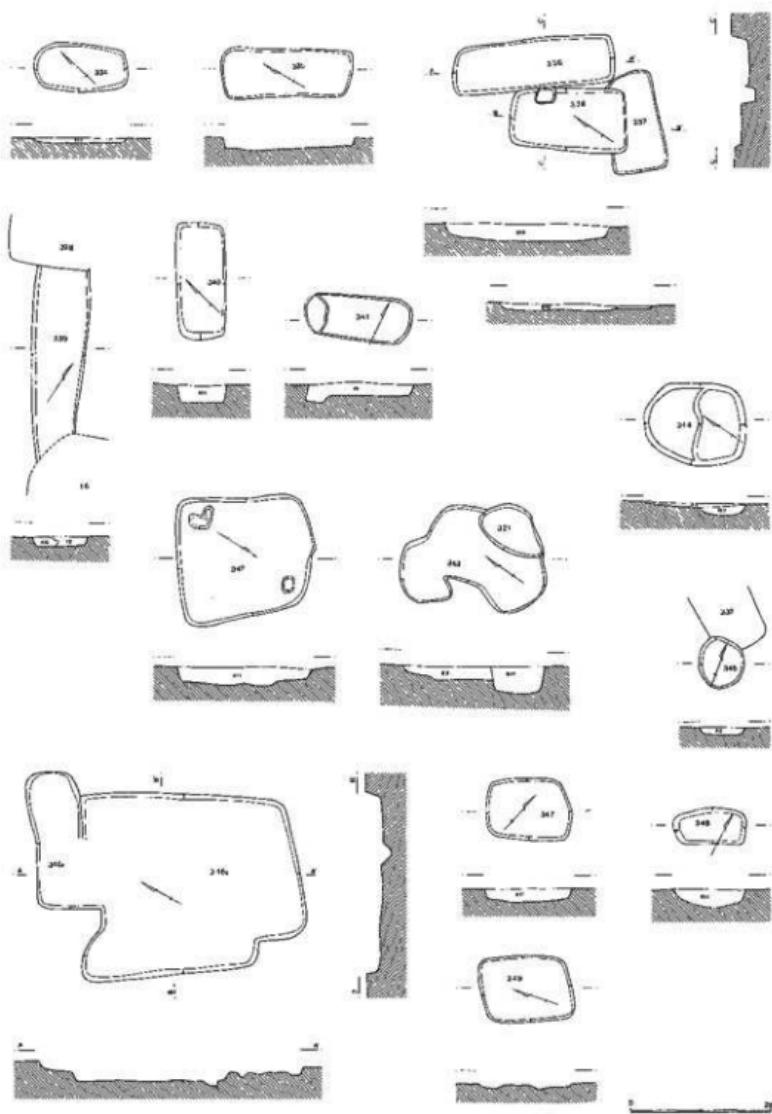
第98図 歴史時代土壤 (9)

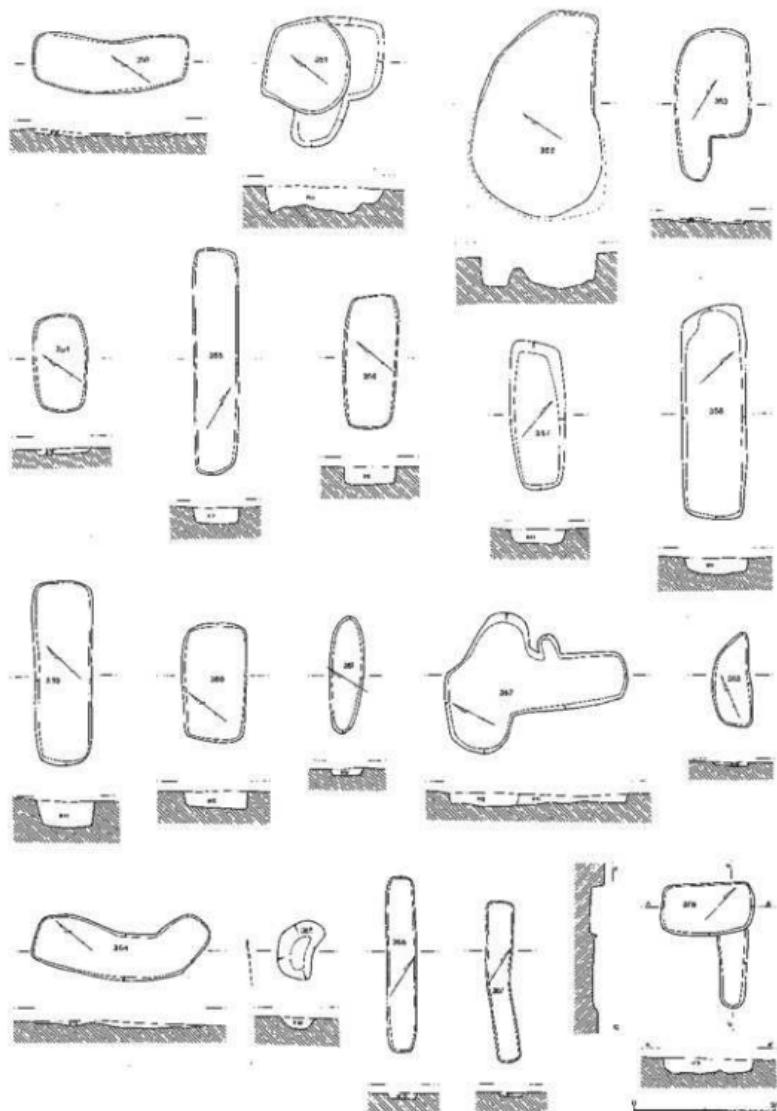


第99図 歴史時代土壙 (10)

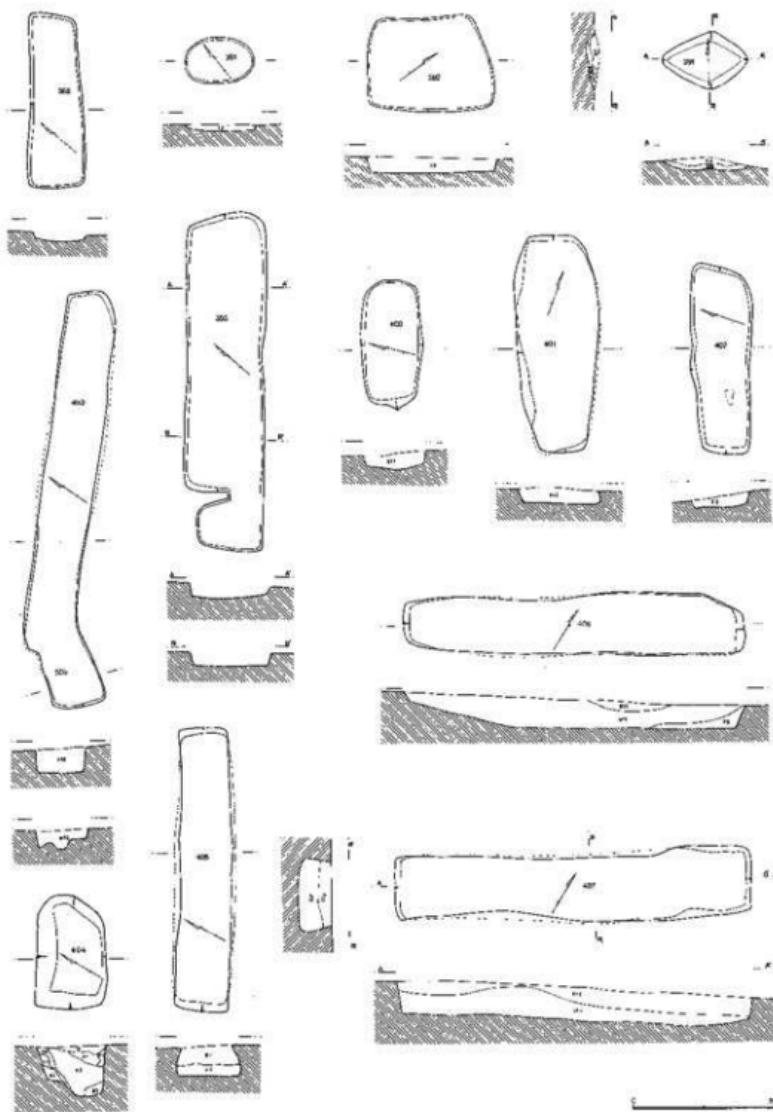


第100図 歴史時代土壤 (11)

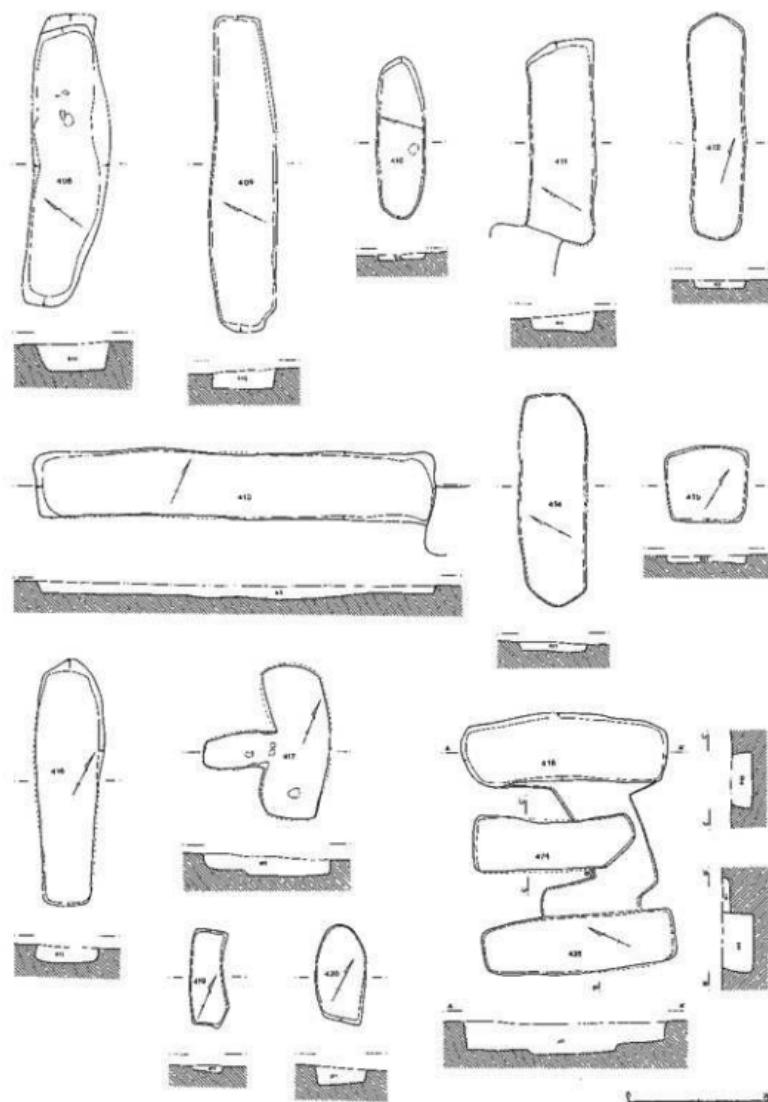




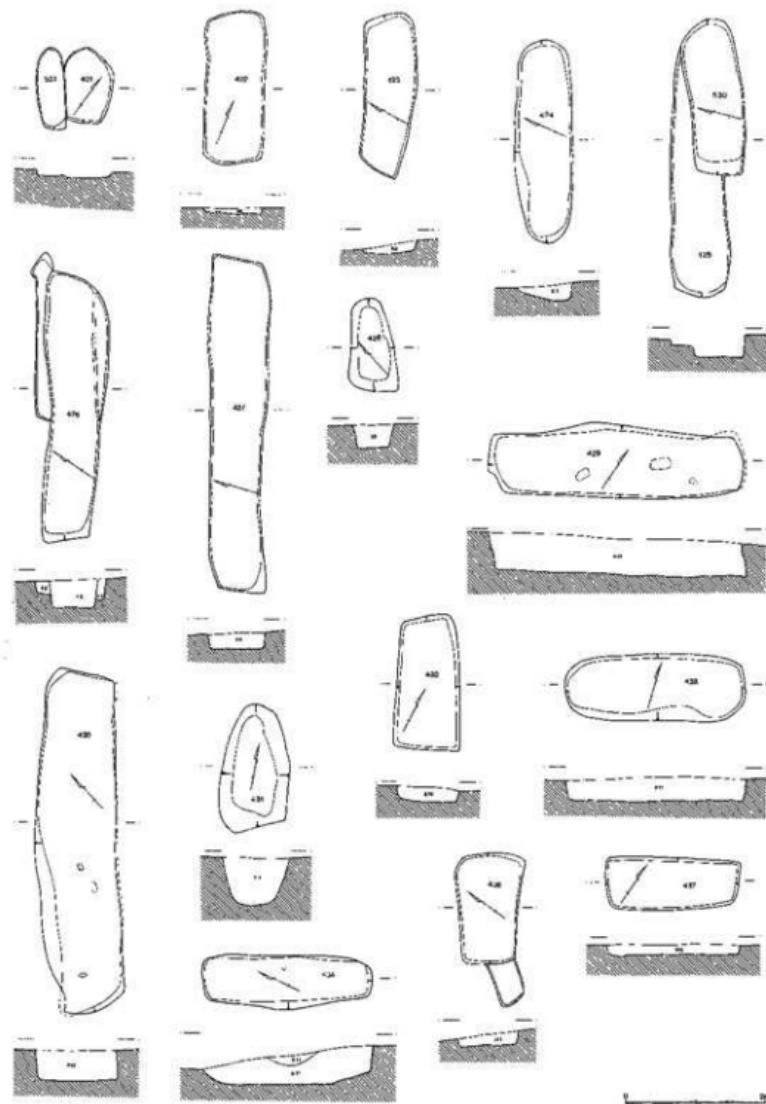
第102図 歴史時代土壤 (13)



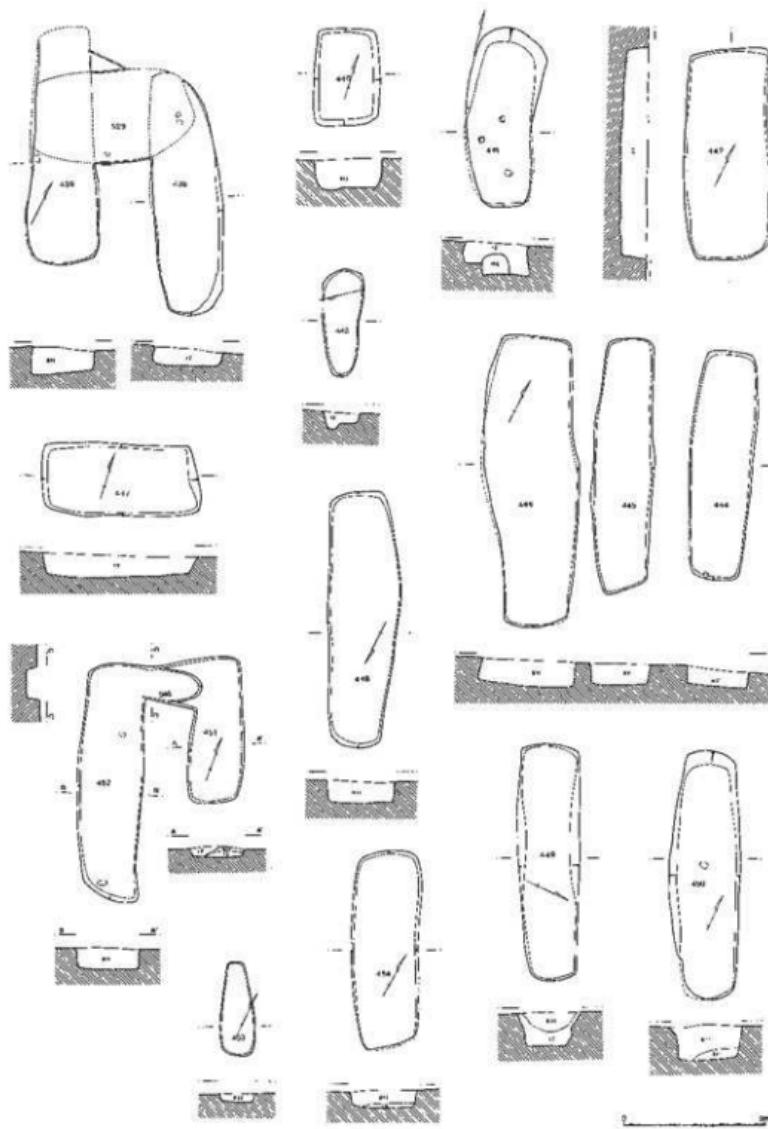
第103図 歴史時代土壤 (14)



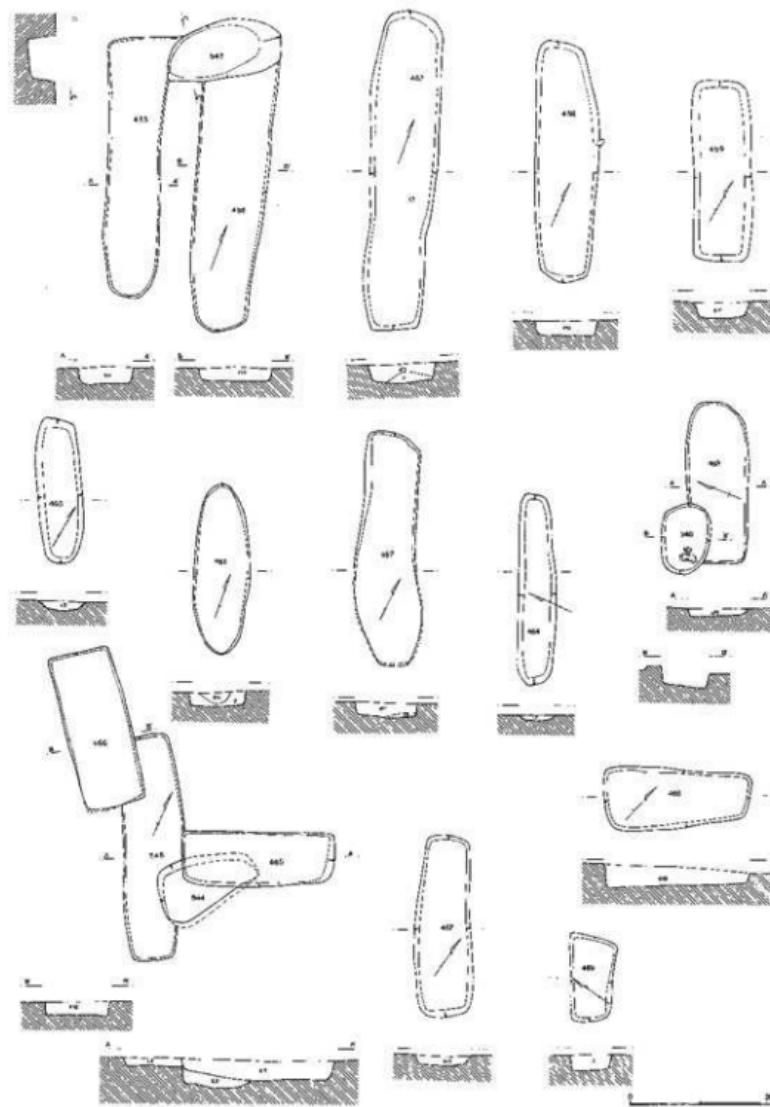
第104図 歴史時代土壙 (15)



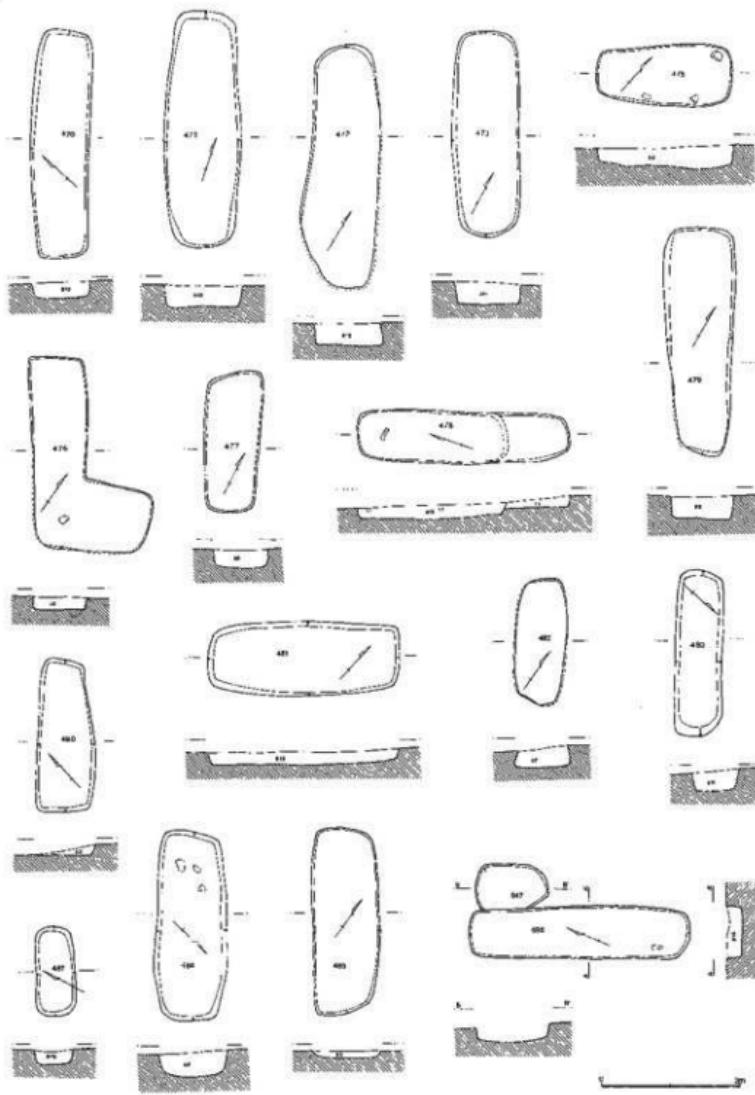
第105図 歴史時代土壤 (16)

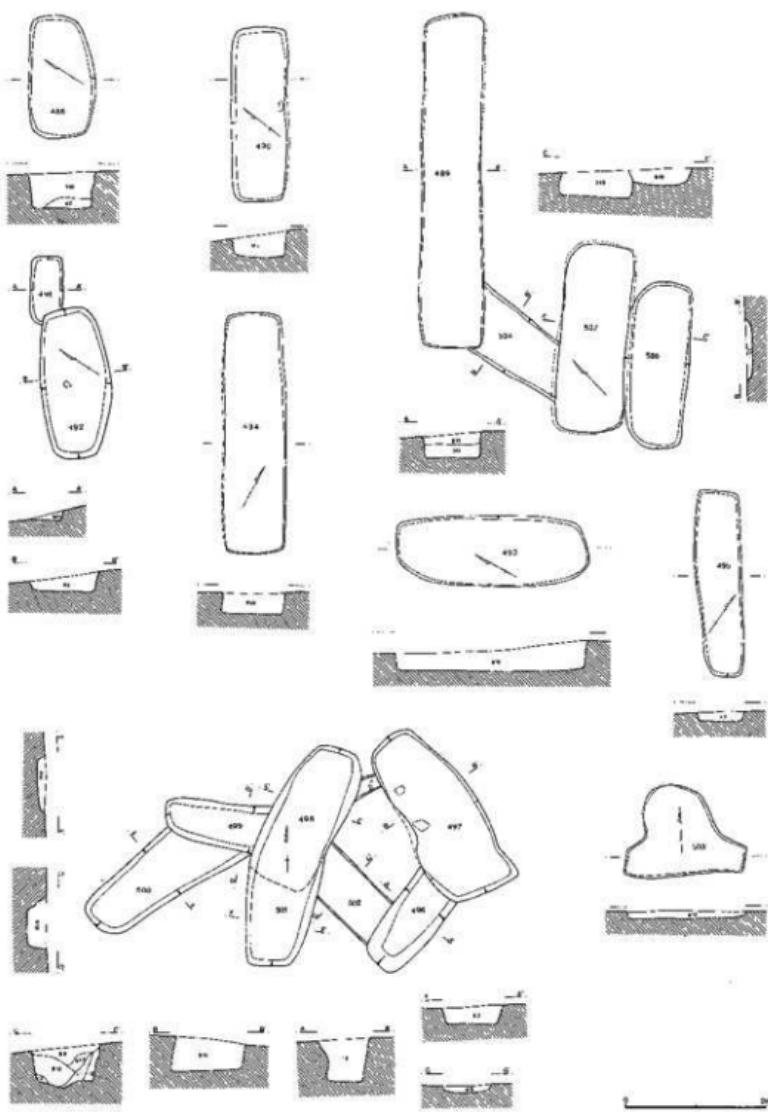


第106図 歴史時代土壤 (17)

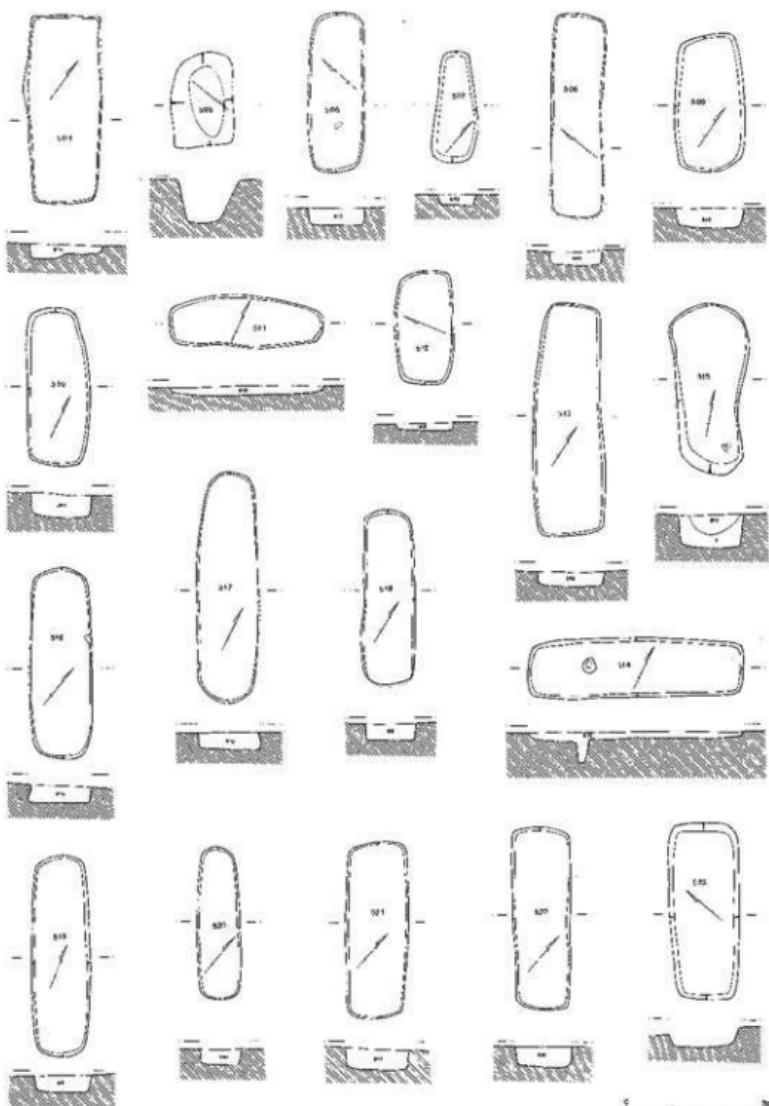


第107図 歴史時代土壤 (18)

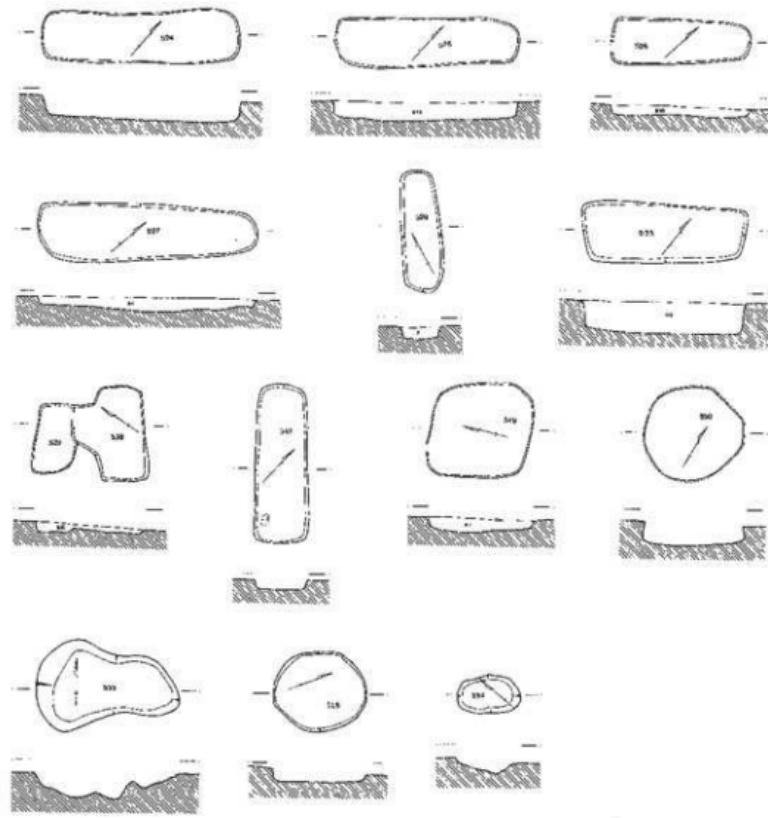




第109図 歴史時代土壤 (20)



第110図 歴史時代土壙(21)



第111図 歴史時代土壤 (22)

(単位 m)

No.	高さ (mm)	幅 (mm)	深さ	方 位	グリッド	標高	No.	高さ (mm)	幅 (mm)	深さ	方 位	グリッド	標高
17	1.64	0.92	0.08	N-76°-E	A18-I-38	61.20	42	1.50	0.80	0.40	N-82°-E	A23-I-32	61.40
18	0.88	0.66	0.16	N-35°-E	A16-I-36	61.20	46	1.10	0.36	0.12	N-77°-E	A26-I-31	61.30
20	1.54	0.76	0.52	N-11°-W	A14-I-44	61.30	47	0.80	0.54	0.06	N-77°-W	A28-I-31	61.40
21	1.40	0.44	0.12	N-19°-E	A14-I-39	61.30	48	0.96	0.66	0.10	N-35°-W	A29-I-36	61.80
25	1.34	0.90	0.60	N-78°-E	A13-I-42	61.20	49	1.38	0.74	0.14	N-6°-W	A27-I-34	61.70
26	5.96	0.94	0.24	N-78°-E	A12-I-42	61.20	50	1.04	0.86	0.10	N-83°-E	A24-I-32	61.50
28	2.52	0.82	0.56	N-80°-E	A19-I-42	61.50	52	1.82	1.48	0.18	N-89°-E	A28-I-31	61.50
31	2.24	1.26	0.30	N-48°-W	A09-I-45	61.50	53	1.18	0.60	0.13	N-49.5°-E	A20-J-05	61.50
34	1.66	1.04	0.18	N-45°-W	A23-I-44	61.60	54	1.36	0.90	0.20	N-1°-E	A13-I-43	61.20
37	1.08	0.60	0.24	N-44°-E	A26-I-35	61.70	56	0.92	0.62	0.13	N-55°-E	A18-J-06	61.50
38	0.74	0.60	0.24	N-80°-E	A18-J-03	61.40	57	2.04	1.06	0.20	N-83.5°-E	A13-J-11	60.80
40	0.98	0.72	0.08	N-1°-W	A29-I-36	61.70	58	1.74	0.82	0.10	N-90°-E	A13-J-11	60.90
41	2.82	1.04	0.36	N-80°-E	A22-I-35	61.30	59	0.98	0.74	0.10	N-73.5°-E	A19-J-05	61.40

第3表 歴史時代土壤一覧 (1)

No.	長さ (厘米)	幅 (厘米)	深さ	方 位	グリッド	標高	No.	長さ (厘米)	幅 (厘米)	深さ	方 位	グリッド	標高
60	1.04	0.46	0.15	N-58'-W	A19-J-07	61.40	120	1.06	0.90	0.34	N- 1'-W	A30-J-17	61.00
61	0.98	0.68	0.14	N-83'-W	A12-J-07	61.00	121	0.88	0.68	0.27	N-65'-E	A35-J-15	61.50
62	1.56	1.00	0.13	N-83'-E	A13-J-09	61.00	122	1.26	0.98	0.12	N- 0.5'-W	A35-J-14	61.50
66	1.94	0.82	0.50	N-12'-W	A12-I-44	61.00	123	0.64	0.58	0.24	N- 4'-W	A36-J-16	61.40
67	1.58	0.74	0.26	N-12'-W	A11-I-44	61.00	124	0.80	0.74	0.13	N-45'-W	A31-J-15	61.30
68	2.58	0.86	0.46	N-12'-W	A12-I-44	61.00	125	0.86	0.70	0.14	N- 1'-W	A30-J-18	61.00
63	1.22	1.00	0.24	N- 3'-W	A30-I-46	61.90	127	0.58	0.30	0.08	N-84'-E	A31-J-02	61.90
64	1.36	0.72	0.24	N-84'-E	A31-I-46	62.00	128	1.42	1.16	0.24	N-90'-E	A28-J-00	61.90
69	1.94	1.10	0.25	N-21'-W	A13-I-42	61.20	130	1.34	0.70	0.18	N-78'-E	A22-J-04	61.50
73	1.26	0.64	0.14	N-52'-W	A16-I-42	61.30	132	1.46	0.70	0.10	N-43'-W	B05-I-43	61.30
70	2.28	0.78	0.52	N-11.5'-W	A14-I-43	61.30	134	1.94	1.16	1.20	N-29'-E	B01-I-44	61.50
71	3.72	0.88	0.50	N-11.5'-W	A15-I-43	61.30	135	1.00	0.76	0.08	N-35'-E	B07-I-44	61.50
74	1.66	0.70	0.48	N-21'-W	A16-I-43	61.30	136	1.64	0.94	0.13	N-50'-W	B07-I-44	61.50
72	5.74	0.94	0.46	N-53.5'-W	A14-I-41	61.30	136	1.98	0.90	0.14	N-53'-W	B08-I-43	61.20
75	1.80	1.00	0.60	N-11.5'-W	A17-I-42	61.40	137	1.06	0.70	0.12	N-45'-W	B03-I-45	61.70
76	3.74	0.76	0.50	N-11.5'-W	A17-I-42	61.40	138	0.68	0.66	0.05	N-48'-W	B03-I-46	61.70
80	1.62	0.88	0.32	N-21'-W	A20-I-42	61.50	140	1.76	0.80	0.14	N-57'-E	B02-I-47	61.80
81	1.66	0.82	0.20	N-18'-W	A20-I-40	61.50	139	1.44	1.16	0.38	N-47'-W	B03-I-46	61.70
82	1.00	0.90	0.20	N- 8'-W	A20-I-40	61.50	142	2.06	1.04	0.42	N-54'-E	B03-I-46	61.70
77	1.50	0.64	0.58	N-72'-E	A18-I-42	61.50	141	0.96	0.40	0.10	N-75'-E	B02-I-48	62.10
78	2.00	0.78	0.42	N-23'-W	A18-I-42	61.50	143	1.40	0.62	0.18	N-80.5'-E	B02-I-49	62.10
79	1.40	0.80	0.20	N- 5'-W	A19-I-42	61.50	144	1.16	0.62	0.16	N-40.5'-W	B07-I-49	62.10
83	2.42	0.90	0.42	N-12'-W	A20-I-41	61.50	148	1.08	0.90	0.34	N-54'-E	B10-I-46	61.60
84	1.56	0.84	0.42	N-16'-W	A20-I-42	61.50	149	2.28	0.86	0.20	N-54'-E	B09-I-46	61.60
85	1.70	0.80	0.32	N-18'-W	A22-I-41	61.50	145	1.20	0.72	0.08	N-36'-W	B07-I-47	61.90
86	1.20	0.80	0.44	N-15.5'-W	A15-I-33	61.00	146	0.50	0.44	0.08	N-11'-W	B07-I-46	61.70
87	1.20	0.94	0.48	N-15.5'-W	A15-I-33	61.00	147	0.60	0.54	0.16	N-12'-E	B07-I-46	61.60
90	0.56	0.44	0.16	N-53'-W	A17-I-46	61.50	151	5.02	1.12	0.20	N-43'-E	B10-I-49	61.80
91	0.32	0.30	0.05	N- 1'-W	A15-I-40	61.00	152	0.42	0.36	0.18	N-15'-W	B07-I-45	61.60
94	0.90	0.56	0.12	N-60'-E	A15-I-35	61.20	153	0.50	0.44	0.12	N-34'-W	B08-I-45	61.60
95	1.12	1.00	0.12	N-12'-W	A16-I-32	61.00	155	0.72	0.70	0.10	N-60'-E	B08-J-47	61.80
96	1.06	1.00	0.14	N- 3'-E	A17-I-33	61.00	156	1.72	0.70	0.08	N-14'-E	B02-J-19	62.40
97	1.34	0.70	0.44	N- 8'-W	A19-I-32	61.10	157	1.30	0.96	0.24	N-71'-E	B04-J-15	62.60
102	1.26	1.00	0.08	N- 3'-E	A20-I-47	61.50	158	1.26	1.04	0.52	N-66'-E	B04-J-15	62.70
103	2.24	0.64	0.10	N- 4'-W	A09-I-48	60.70	159	0.56	0.40	0.16	N-31'-W	B04-J-00	62.10
104	1.36	1.00	0.22	N- 1'-E	A32-J-10	61.70	160	0.54	0.46	0.12	N-42'-W	B04-J-00	62.10
105	1.20	0.80	0.20	N-36'-W	A34-J-12	61.80	161	1.26	1.14	0.42	N-60'-E	B04-J-00	62.10
106	1.28	0.56	0.18	N- 7'-W	A32-J-15	61.30	162	1.86	0.92	0.70	N-63'-E	B05-J-01	62.10
108	0.80	0.62	0.24	N-86'-E	A34-J-17	61.20	163	1.32	1.18	0.30	N-57'-E	B05-J-02	62.30
109	0.80	0.72	0.12	N-85'-W	A33-J-16	61.30	164	1.40	1.02	0.10	N-48'-E	B06-J-02	62.30
110	1.10	0.44	0.18	N-40'-W	A32-J-17	61.20	174	1.54	0.88	0.08	N-29'-W	B09-J-03	62.40
111	1.09	1.04	0.12	N-43'-W	A37-J-17	61.40	175	1.14	0.60	0.12	N-32.5'-W	B10-J-03	62.30
112	1.00	0.78	0.36	N- 3'-E	A36-J-20	61.00	169	1.94	0.96	0.18	N-63.5'-E	B07-J-04	62.40
113	1.56	0.70	0.72	N- 3'-W	A40-J-17	61.30	170	2.00	1.36	0.08	N-63.5'-E	B08-J-04	62.40
114	2.14	1.16	0.18	N- 7'-E	A43-J-19	61.60	171	1.56	0.68	0.54	N-19'-W	B08-J-04	62.40
115	2.32	1.46	0.26	N- 3'-W	A42-J-17	61.70	176	1.30	0.64	0.44	N-69'-E	B04-J-08	62.60
116	1.30	0.90	0.14	N- 2'-W	A44-J-17	61.80	177	1.30	0.78	0.46	N-66'-E	B04-J-09	62.70
117	1.34	0.90	0.28	N-10'-W	A35-J-17	61.20	178	1.90	1.00	0.16	N-71.5'-E	B03-J-10	62.60
118	2.86	1.22	0.14	N-83'-E	A36-J-19	61.20	179	1.50	1.10	0.36	N-63'-E	B05-J-11	62.80
119	0.82	0.60	0.18	N-18'-W	A35-J-18	61.20	180	1.60	0.82	0.68	N-65'-E	B04-J-13	62.80

第4表 歴史時代土壤一覧 (2)

No	高さ (最高)	幅 (最深)	深さ	方 位	グリッド	標高	No	高さ (最高)	幅 (最深)	深さ	方 位	グリッド	標高
181	1.36	0.84	0.50	N-67°-E	B03-J13	62.70	283	0.64	0.40	0.07	N-80°-E	A10-J00	60.80
182	1.58	1.00	0.64	N-80°-E	B03-J13	62.70	284	1.16	0.50	0.15	N-4°-W	A12-I48	61.00
183	1.02	0.88	0.58	N-73°-E	B03-J14	62.60	287	1.54	0.44	0.12	N-81°-E	A14-I49	61.20
184	1.22	1.02	0.62	N-74°-E	B03-J14	62.70	290	1.90	0.66	0.36	N-87°-E	A33-I48	62.10
185	1.06	1.04	0.24	N-72°-E	B04-J14	62.70	292	0.98	0.62	0.14	N-83°-E	A35-I49	62.10
187	1.50	1.20	0.50	N-75°-E	A30-I47	62.00	293	6.90	1.00	0.48	N-75°-E	A14-J03	61.20
186	2.26	1.46	0.40	N-81°-E	A31-I47	62.00	294	1.18	0.80	0.12	N-70°-E	A42-J08	62.10
188	0.68	0.48	0.10	N-61°-W	A32-J03	62.00	296	1.18	1.18	0.10	N-89°-W	A28-J02	61.80
189	1.70	0.82	0.26	N-81.5°-E	A33-J04	62.00	297	1.30	0.64	0.50	N-87°-E	A13-J04	61.90
190	1.20	0.54	0.38	N-86°-E	A33-J149	62.10	298	0.90	0.70	0.10	N-10°-W	A12-J06	60.90
191	1.90	0.78	0.36	N-77.5°-E	A33-J05	61.90	299	0.70	0.58	0.04	N-89.5°-E	A13-J06	61.00
192	1.86	1.10	0.40	N-79°-E	A33-J07	61.90	295	0.30	0.24	0.28	N-87°-E	A45-I36	61.20
194	2.20	0.78	0.58	N-85°-E	A33-J06	61.90	301	0.96	0.76	0.10	N-1°-W	A13-J06	61.00
193	1.70	1.44	0.84	N-0.5°-E	A39-J03	62.30	302	1.84	1.38	0.24	N-85°-W	A13-J06	61.10
195	4.36	0.86	0.28	N-86°-E	A31-J05	61.80	303	1.00	0.80	0.12	N-47°-W	A14-J06	61.20
196	1.60	0.90	0.42	N-4.5°-W	A41-I46	62.00	304	0.96	0.92	0.07	N-0.5°-W	A15-J06	61.20
197	2.30	0.68	0.46	N-16°-W	A42-I46	62.00	300	0.94	0.80	0.08	N-1°-W	A13-J06	61.10
221	1.30	0.72	0.18	N-75°-E	A43-J22	61.60	314	5.80	1.40	0.56	N-25°-W	A14-J12	60.90
222	1.30	1.02	0.10	N-41°-E	A46-J21	61.70	305	0.36	0.30	0.20	N-94°-W	A46-I36	61.20
223	1.30	0.70	0.34	N-73°-E	A47-J20	61.90	310	3.10	0.92	0.64	N-70°-E	A16-J09	61.10
224	3.24	0.84	0.56	N-86°-E	A31-J07	61.80	312	0.64	0.48	0.10	N-29°-W	B13-J14	62.80
237	2.20	0.84	0.10	N-56.5°-E	B10-I49	61.80	311	0.74	0.64	0.20	N-16°-W	B13-J14	62.80
230	1.78	0.56	0.03	N-48°-E	B11-I49	61.80	315	0.82	0.74	0.16	N-51°-W	B12-J14	62.90
394	2.06	1.54	0.16	N-56°-E	B11-I48	61.70	316	1.30	0.94	0.12	N-34°-W	B13-J14	62.90
395	3.40	0.66	0.28	N-57°-E	B11-I48	61.80	317	1.04	0.70	0.10	N-37°-W	B13-J15	62.90
241	1.66	0.58	0.04	N-46°-E	B11-I49	61.80	318	1.56	1.18	0.30	N-24°-W	B13-J06	62.80
240	1.84	0.64	0.04	N-50°-E	B12-I49	61.80	319	1.56	1.06	0.16	N-23°-W	B09-J06	62.50
228	1.52	0.66	0.26	N-45°-E	B11-I48	61.70	320	1.54	1.32	0.44	N-90°-E	B13-J16	63.10
225	1.98	0.78	0.40	N-72°-E	A31-J08	61.50	322	1.44	1.12	0.48	N-39°-W	B14-J16	62.90
226	1.76	0.58	0.08	N-55°-E	B10-I47	61.60	323	1.68	0.84	0.08	N-32.5°-W	B13-J14	62.90
227	1.74	0.69	0.08	N-46°-W	B10-I48	61.80	324	1.54	1.20	0.42	N-48°-W	B13-J17	63.80
229	2.72	0.68	0.12	N-52°-E	B13-J00	61.70	325	1.30	0.64	0.10	N-46°-W	B15-J14	62.90
231	2.04	0.96	0.16	N-47°-E	B12-J00	61.80	327	3.00	1.14	0.22	N-57°-E	B15-J13	62.70
232	2.40	1.50	0.04	N-18°-W	B12-J00	61.80	331	2.65	0.80	0.16	N-69°-E	B10-J16	62.40
233	2.22	1.10	0.08	N-34°-W	B12-J01	61.80	330	2.56	0.82	0.26	N-26°-W	B11-J17	62.40
234	1.82	0.72	0.10	N-62°-E	B12-J02	61.90	329	2.02	1.20	0.16	N-41°-E	B11-J16	62.40
235	1.64	1.32	0.04	N-53°-E	B13-J02	61.90	328	2.10	1.20	0.14	N-40°-W	B11-J05	62.40
236	2.04	0.62	0.10	N-32°-W	B13-J02	61.90	326	0.84	0.80	0.40	N-89°-E	B15-J13	62.70
238	2.00	1.54	0.16	N-33°-W	B12-J03	62.10	332	2.30	0.86	0.20	N-48°-W	B17-J12	62.70
242	2.96	0.76	0.08	N-67°-E	B12-J07	62.50	333	1.40	1.10	0.14	N-27°-W	B18-J14	62.70
244	1.08	0.72	0.10	N-58°-E	B12-J16	62.50	334	1.36	0.70	0.08	N-40°-W	B17-J14	62.80
245	2.00	0.74	0.09	N-25°-W	B11-J06	62.50	335	1.86	0.66	0.18	N-29°-W	B16-J14	62.90
247	3.00	0.84	0.05	N-30°-W	B11-J10	62.60	336	0.64	0.72	0.24	N-38°-W	B16-J13	62.80
246	2.80	0.86	0.20	N-29°-W	B12-J07	62.50	338	1.68	0.90	0.10	N-30°-W	B17-J13	62.80
248	1.86	0.64	0.08	N-12°-W	B11-J12	62.80	337	1.44	0.78	0.04	N-50°-W	B17-J13	62.80
249	2.76	1.02	0.17	N-17°-W	B12-J12	62.80	339	2.80	0.78	0.14	N-31°-W	B12-J05	62.40
281	1.34	0.96	0.31	N-10°-W	A31-I46	61.90	340	1.68	0.70	0.22	N-51°-E	B11-J12	62.90
277	4.04	1.52	0.38	N-23°-W	A30-I39	61.80	341	1.56	0.62	0.20	N-73°-E	B16-J14	62.80
250	3.02	1.44	0.29	N-25°-W	B12-J13	62.90	342	2.00	1.70	0.24	N-39°-W	B17-J14	62.80
276	2.04	0.98	0.43	N-12°-W	A29-I39	61.80	343	2.04	1.10	0.18	N-46°-W	B16-J14	62.80

第5表 歴史時代土壤一覧 (3)

No.	長さ (厘米)	幅 (厘米)	深さ	方 位	グリッド	標高	No.	長さ (厘米)	幅 (厘米)	深さ	方 位	グリッド	標高
321	1.04	0.66	0.38	N- 6'-E	B16-J 14	62.80	417	2.20	1.80	0.26	N-18'-W	B29-J 06	63.30
344	1.46	1.18	0.18	N-25'-W	B18-J 12	62.50	418	2.94	0.94	0.42	N-26'-W	B28-J 08	63.40
345	0.70	0.66	0.10	N- 4'-E	B17-J 12	62.50	474	2.26	0.72	0.32	N-23'-W	B28-J 08	63.40
346(a)	1.96	0.76	0.14	N-57'-E	B17-J 15	62.80	435	2.76	0.80	0.44	N-28'-W	B29-J 08	63.40
346(b)	3.00	2.60	0.30	N-29'-W	B18-J 15	62.80	419	1.34	0.44	0.10	N-22'-W	B28-J 06	63.00
347	1.24	0.90	0.18	N-56'-E	B18-J 17	62.90	420	1.38	0.71	0.22	N-29'-W	B27-J 06	62.40
348	1.04	0.52	0.26	N-60'-E	B18-J 17	62.90	531	1.18	0.40	0.26	N-38'-W	B27-J 06	62.30
349	1.30	0.94	0.08	N-22'-W	B20-J 20	63.10	421	1.06	0.68	0.28	N-38'-W	B27-J 06	62.30
350	2.22	0.74	0.06	N-23'-W	B20-J 21	63.20	422	2.18	0.82	0.08	N-18.5'-W	B27-J 05	62.40
351	1.88	1.66	0.34	N-64'-E	B19-J 17	62.80	423	2.30	0.74	0.12	N-66'-E	B26-J 05	62.20
352	3.00	1.68	0.48	N-63'-E	B19-J 17	62.90	424	2.90	0.82	0.22	N-69'-E	B26-J 04	62.10
353	2.10	1.06	0.04	N-28'-W	B20-J 21	62.20	425	(3.60)	0.76	0.42	N-69'-E	B25-J 03	62.50
354	1.40	0.80	0.06	N-52'-E	B20-J 22	63.30	530	2.24	0.76	0.42	N-69'-E	B25-J 02	62.50
355	3.20	0.62	0.22	N-30'-W	B21-J 22	63.30	426	3.78	0.74	0.38	N-58'-E	B29-J 01	63.20
356	1.90	0.76	0.26	N-54'-E	B21-J 23	63.40	427	4.74	0.82	0.22	N-75'-E	B29-J 03	63.20
357	2.10	0.78	0.20	N-41'-W	B18-J 23	63.40	428	1.34	0.64	0.32	N-39'-E	B26-J 01	62.60
358	3.02	0.92	0.28	N-45'-W	B19-J 23	63.40	429	3.70	1.06	0.50	N-59'-E	B27-J 02	62.80
359	2.82	0.82	0.36	N-47'-E	B22-J 23	63.40	430	4.88	1.18	0.42	N-39'-E	B31-J 00	63.30
360	1.68	0.90	0.16	N-53'-E	B26-J 23	63.30	431	1.80	0.96	0.68	N-5'-W	B31-J 03	63.40
361	1.66	0.48	0.10	N-65'-E	B12-J 06	62.40	432	1.90	0.90	0.20	N-23'-W	B30-J 07	63.40
362	2.66	1.80	0.20	N-38'-W	B19-J 22	63.30	433	2.60	0.96	0.34	N-75'-E	B30-J 09	63.50
363	1.32	0.54	0.05	N-20'-E	B20-J 22	63.20	434	2.26	0.78	0.43	N-25'-W	B29-J 09	63.40
364	2.50	0.72	0.08	N-32'-W	B19-J 21	63.10	436	2.20	0.84	0.16	N-46'-E	B28-J 09	63.10
365	0.84	0.54	0.16	N-21'-E	B17-J 22	63.30	437	1.90	0.74	0.14	N-58'-E	B30-J 10	63.40
366	2.50	0.42	0.08	N-32'-W	B18-J 25	63.50	438	3.38	0.90	0.36	N-25'-W	B31-J 05	63.70
367	2.30	0.38	0.06	N-32'-W	B20-J 20	63.20	529	2.30	1.30	(0.07)	N-63'-E	B31-J 04	----
368	1.30	0.74	0.22	N-42'-E	B21-J 20	63.10	438	3.44	1.00	0.24	N-30'-W	B31-J 04	63.60
369	2.46	0.76	0.10	N-49'-E	B10-I 47	61.60	440	1.38	0.94	0.40	N-17'-W	B32-J 05	63.80
381	1.02	0.64	0.10	N-55'-W	A43-I 37	61.50	441	2.54	0.88	0.44	N-17'-W	B32-J 04	63.80
382	1.80	1.34	0.22	N-38'-E	A42-I 37	61.70	442	2.98	1.20	0.38	N-29'-W	B35-J 04	63.90
391	1.20	0.80	0.18	N-58'-E	B01-I 40	61.20	443	1.52	0.50	0.20	N-75'-W	B36-J 03	63.90
403	4.90	0.70	0.34	N-60'-E	B26-J 00	62.50	447	2.24	1.00	0.30	N-17'-W	B34-J 05	63.90
505	0.84	0.70	0.21	N-35'-E	B26-J 01	62.70	448	3.62	0.94	0.30	N-22'-W	B34-J 06	63.90
393	4.74	1.14	0.20	N-49'-E	B12-I 49	61.60	446	4.12	1.40	0.36	N-32'-W	B35-J 03	64.00
400	1.78	0.88	0.22	N-72'-E	B27-J 03	62.80	445	3.60	0.88	0.30	N-37'-W	B35-J 03	64.00
401	3.06	1.12	0.22	N-21'-W	B23-I 46	61.70	444	3.26	0.70	0.22	N-25'-W	B34-J 03	64.00
402	2.62	0.84	0.16	N-68'-E	B25-I 49	62.30	452	3.32	0.70	0.30	N-20'-W	B34-J 09	64.10
406	4.88	0.80	0.40	N-60'-E	B27-J 00	62.60	546	(1.62)	0.44	0.18	N-74'-E	B33-J 09	63.90
404	1.60	0.98	0.70	N-56'-E	B25-I 49	62.30	451	2.06	0.80	0.14	N-19'-W	B33-J 09	64.00
405	4.02	0.88	0.42	N-59'-W	B27-I 49	62.60	453	1.32	0.50	0.13	N-30'-W	B34-J 09	64.10
407	5.08	1.00	0.48	N-57'-E	B26-I 48	62.50	454	2.80	0.96	0.26	N-65'-E	B33-J 09	63.80
408	4.19	1.06	0.38	N-58'-E	B28-J 02	63.00	449	3.32	0.88	0.48	N-27'-W	B34-J 07	63.90
409	4.50	0.94	0.26	N-66'-E	B26-J 04	62.30	450	3.64	1.02	0.50	N-27'-W	B34-J 08	63.90
410	2.30	0.70	0.08	N-73'-E	B27-J 04	62.30	455	3.70	0.76	0.24	N-20'-W	B33-J 08	63.90
411	2.80	0.92	0.21	N-59'-E	B28-J 03	62.50	543	1.66	0.80	0.38	N-56'-E	B32-J 08	63.90
412	3.20	0.74	0.10	N-18'-W	B29-J 05	63.20	456	3.64	1.04	0.20	N-17'-W	B33-J 08	63.90
413	5.70	0.94	0.18	N-68'-E	B28-J 05	63.00	457	4.56	0.96	0.28	N-15'-W	B33-J 07	63.90
414	3.01	0.96	0.13	N-63'-E	B30-J 06	63.30	458	3.44	0.90	0.20	N-23'-W	B32-J 07	63.90
415	1.14	1.08	0.08	N-58'-E	B30-J 06	63.30	459	2.60	0.82	0.21	N-29.5'-W	B32-J 06	63.90
416	3.50	0.90	0.22	N-28'-W	B29-J 07	63.30	460	2.80	0.64	0.14	N-34'-W	B32-J 06	63.90

第6表 歴史時代土壤一覧(4)

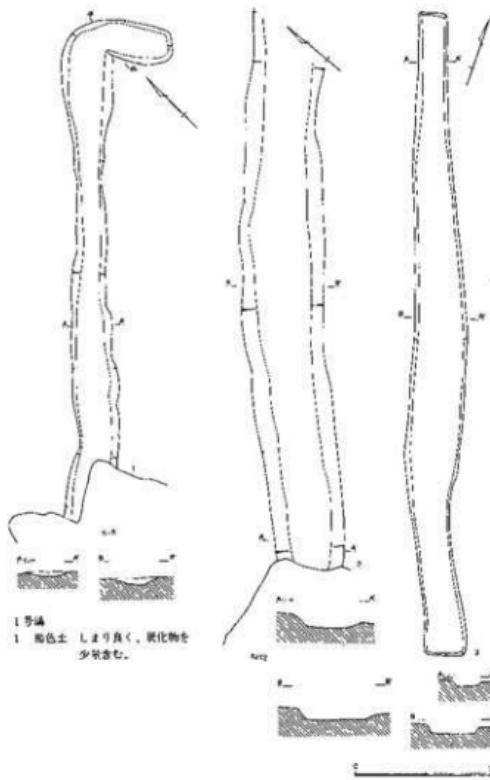
(単位 m)

No.	高さ (基準)	幅 (基準)	深さ	方 位	グリッド	標高	No.	高さ (基準)	幅 (基準)	深さ	方 位	グリッド	標高
461	2.44	0.80	0.20	N-21°-W	B31-J 06	63.70	499	1.36	0.60	0.28	N-77°-W	B29-J 11	63.30
462	3.30	0.90	0.40	N-25°-W	B31-J 06	63.70	498	2.10	1.00	0.56	N-20°-E	B29-J 10	63.30
464	2.70	0.52	0.08	N-69°-E	B31-J 07	63.70	501	3.30	0.90	0.24	N-20°-E	B30-J 11	63.40
540	1.00	0.70	0.22	N-72°-E	B31-J 07	63.70	502	1.12	0.70	0.10	N-44°-W	B30-J 10	63.40
463	2.30	0.86	0.10	N-67°-E	B31-J 07	63.70	496	1.38	0.72	0.60	N-40°-E	B30-J 10	63.40
466	2.26	0.92	0.18	N-40°-W	B32-J 09	63.70	497	2.60	1.04	0.46	N-32°-W	B29-J 10	63.70
545	3.22	0.86	0.13	N-26°-W	B32-J 09	63.70	503	1.70	1.31	0.12	N-98°-W	B29-J 08	63.40
544	1.12	0.91	0.43	N-42°-E	B32-J 09	63.70	504	2.68	1.03	0.20	N-29°-W	B29-J 07	63.50
465	0.78	0.74	0.08	N-52°-E	B32-J 08	63.70	505	1.32	0.74	0.26	N-50.5°-E	B38-J 00	64.00
467	0.94	0.80	0.12	N-33°-W	B31-J 10	63.50	506	2.28	0.80	0.24	N-48°-W	B31-J 09	63.60
468	2.08	0.88	0.26	N-47.5°-W	B31-J 11	63.50	507	1.58	0.56	0.14	N-40°-W	B30-J 10	63.40
469	1.20	0.60	0.22	N-58°-E	B31-J 11	63.30	508	2.88	0.70	0.18	N-53.5°-E	B32-J 10	63.60
470	3.30	0.86	0.22	N-52°-E	B32-J 11	63.50	509	1.94	1.02	0.28	N-38°-W	B33-J 12	63.70
471	3.40	1.14	0.30	N-18°-W	B36-J 07	64.30	510	2.26	0.90	0.32	N-29.5°-W	B33-J 11	63.90
472	3.50	0.86	0.30	N-27°-W	B36-J 08	64.30	511	2.20	0.74	0.13	N-64°-E	B34-J 12	63.90
473	2.88	0.96	0.32	N-26.5°-W	B36-J 08	64.40	512	1.60	0.84	0.10	N-66°-E	B34-J 11	64.00
475	1.94	0.86	0.28	N-49°-E	B32-J 12	63.60	513	3.30	0.96	0.20	N-27.5°-W	B36-J 11	64.20
476	2.90	0.76	0.18	N-45°-W	B32-J 09	63.70	515	2.40	0.96	0.46	N-12.5°-W	B37-J 12	64.40
477	2.04	0.80	0.24	N-23.5°-W	B32-J 10	63.80	516	2.72	0.86	0.24	N-41°-W	B36-J 13	64.20
478	3.08	0.74	0.18	N-21°-W	B34-J 06	64.20	517	3.28	0.88	0.23	N-24°-W	B37-J 14	64.20
479	3.28	0.90	0.30	N-31°-W	B35-J 08	64.20	518	1.48	0.70	0.22	N-30°-W	B37-J 14	64.20
480	2.18	0.86	0.10	N-42°-E	B31-J 13	63.10	514	3.06	0.84	0.10	N-63.5°-E	B35-J 12	63.80
481	2.78	1.06	0.20	N-49°-E	B32-J 13	63.50	519	2.86	0.84	0.22	N-22°-W	B38-J 16	64.20
482	1.80	0.72	0.26	N-59.5°-E	B31-J 13	63.70	520	2.16	0.60	0.20	N-40°-W	B36-J 17	64.00
483	2.40	0.70	0.28	N-52°-E	B33-J 14	63.70	521	2.50	0.92	0.30	N-42°-W	B35-J 14	63.90
487	1.30	0.56	0.18	N-59.5°-E	B34-J 13	63.80	522	2.48	0.80	0.30	N-40°-W	B35-J 13	63.90
484	2.74	1.00	0.34	N-48.5°-E	B33-J 14	63.70	523	2.52	1.00	0.22	N-48°-E	B32-J 14	63.30
485	2.38	0.94	0.10	N-36°-W	B35-J 13	63.80	524	2.88	0.70	0.32	N-45°-E	B34-J 14	63.80
486	3.20	0.76	0.22	N-23°-W	B36-J 09	64.50	525	2.66	0.70	0.26	N-47°-E	B38-J 16	63.90
547	1.06	0.64	0.22	N-25°-W	B36-J 09	64.50	526	2.02	0.66	0.14	N-45°-E	B37-J 17	64.00
488	1.76	0.86	0.50	N-58°-E	B33-J 13	63.80	527	3.16	0.80	0.20	N-37°-E	B38-J 18	64.00
490	2.50	0.79	0.32	N-52.5°-E	B29-J 10	63.00	528	1.76	0.58	0.16	N-23°-E	B31-J 08	63.60
489	4.76	0.82	0.32	N-46°-W	B34-J 15	63.70	535	2.36	0.84	0.46	N-54°-E	B32-J 12	63.70
534	2.50	0.79	0.32	N-52.5°-E	B35-J 15	63.70	539	1.00	0.52	0.14	N-39°-W	B28-J 08	63.70
537	2.70	0.94	0.36	N-50°-E	B35-J 15	63.90	538	1.37	1.02	0.08	N-34°-E	B28-J 07	63.70
536	2.28	0.82	0.26	N-49.5°-E	B35-J 15	63.90	542	2.28	0.76	0.14	N-47°-W	B37-J 16	64.00
491	0.82	0.48	0.10	N-57°-E	B29-J 08	63.10	549	1.12	1.06	0.40	N-9°-E	B27-J 18	61.80
492	2.14	1.02	0.21	N-63.5°-E	B29-J 09	63.10	550	1.44	1.32	0.30	N-51°-E	B24-I 39	61.40
494	3.44	0.88	0.28	N-31°-W	B35-J 09	64.20	555	2.04	0.82	0.32	N-89°-W	B22-I 38	61.20
493	2.76	1.01	0.30	N-28°-W	B35-J 10	64.30	556	1.34	1.15	0.12	N-23°-E	B44-I 40	63.00
495	2.68	0.66	0.12	N-37°-W	B35-J 12	64.00	564	0.92	0.54	0.16	N-44°-W	B34-I 42	62.50
500	1.90	0.82	0.12	N-53°-E	B30-J 11	63.30	172	1.08	0.80	0.44	N-20°-W	B04-J 05	62.40

第7表 歴史時代土壤一覧(5)

## ※歴史時代土壤一覧表の見方

この表は土壤の計測値と検出位置について示したものである。記述順序はおおよそ番号順になっているが、第90~111図に図示した土壤の配列順序に沿って並べたので、番号が前後したり急に大きな番号に飛んでいたりしている。172号土壤は第22図に図示されている。「グリッド」は土壤の全体または主要部が所在する 3 m グリッドの記号、「標高」は断面図基準線の標高の値を示した。



第112図 歴史時代溝状遺構

中に消えてしまっている。南端は12号住居跡に重複してわからなくなっている。N-47°-Eの方向を示す。確認した長さ8.0m、最大幅123cm、最小幅98cm、深さ16cmである。やはり浅い掘り込みで遺物も検出されていない。覆土は谷の埋土とあまり区別できないが、やや薄い暗褐色土で部分的には天明期の火山灰のような粒子も見られた。1号溝同様近世末以降のものと考えておきたい。

## 3号溝（第112図3）

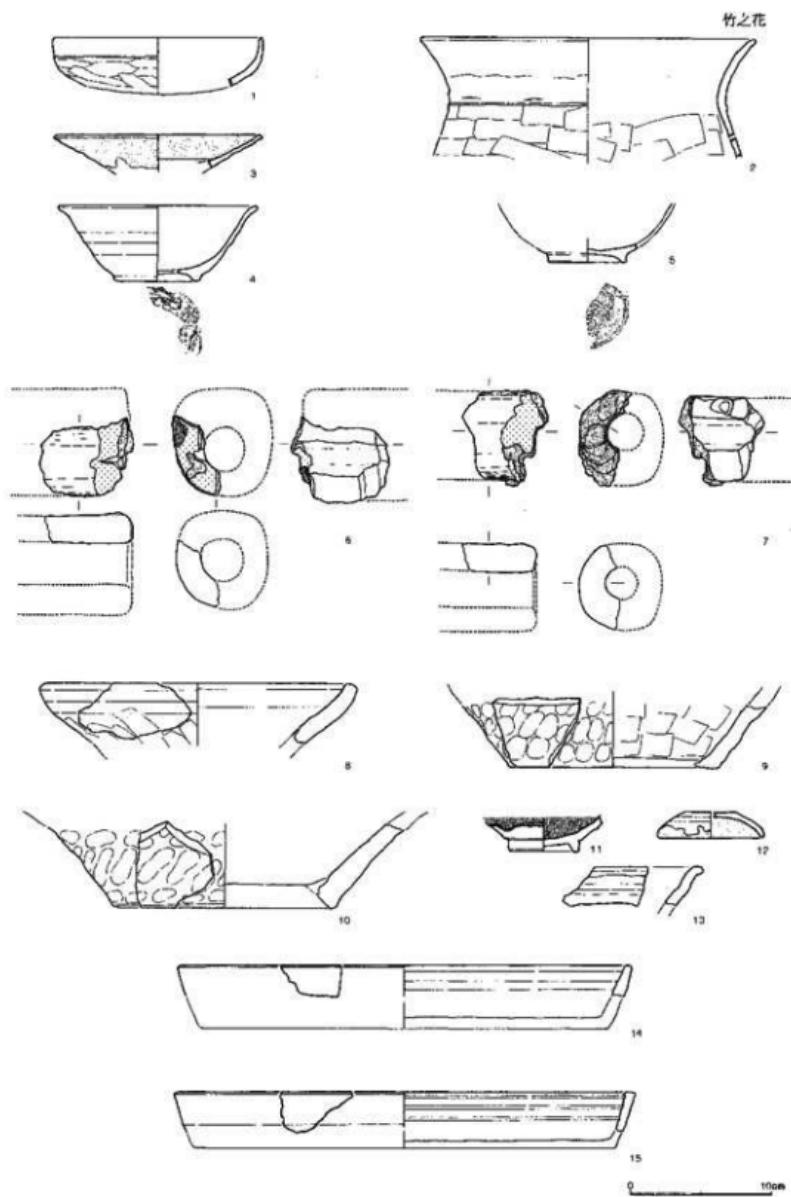
3号溝は1号溝の南西46mにあり、1.5m南には15号住居跡がある。B07-J 03グリッドからB10-J 02グリッドにかけて所在する。確認した長さ9.16m、最大幅80cm、最小幅40cm、深さ8~14cmを測る。N-19°-Wの方向を示し、1・2号溝とは異なり、やや西に振れる方向で北北西-南南東方向に伸びることとなる。覆土はややしよりの良くない暗褐色土であり、15号住居跡の周囲の土壤群と類似する覆土であった。遺物は伴わず、やはり時期決定の根拠が乏しいが、1号溝同様近世末以降のものと考えておきたい。

## 1号溝（第112図1）

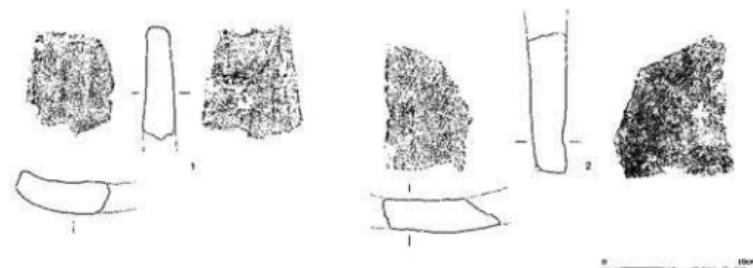
1号溝は遺跡中央部の8号住居跡に重複しており、A44-I 42グリッドからA45-I 43グリッドにかけて延長7.16mに亘って検出された。N-45°-Eの方向で伸び、北端でやや鋭角に南側に折れている。この屈曲部から1.52mで消失している。南端は8号住居跡に入りこんでしまってわからない。最大幅は73cm、最小幅34cm、深さ6~10cmであり、断面皿状の浅い掘り込みである。覆土はやや砂質でありの良い褐色土である。遺物はほとんど流れ込みであり、時期の決め手はないが、江戸時代末期を過ることはないと想われる。

## 2号溝（第112図2）

2号溝は1号溝から24m東にあり、A42-I 33グリッドからA40-I 32グリッドにかけて所在する。やはり北東-西南方向に伸びており、北端は谷地形の



第113図 グリッド出土歴史時代遺物（1）



第114図 グリッド出土歴史時代遺物（2）

## (2)グリッドその他の出土遺物

ここでは奈良時代以降の出土遺物のうち、関係のない遺構に流れ込んだりグリッドで取り上げたりした遺物について述べる（第113・114図）。

第113図1は土師器環で奈良時代前半ないしそれ以前に属するものである。推定口径14.9cm、残存部の器高3.5cmを測る。口縁部は内湾気味に直立し、口唇部は丸い。体部との境に沈線の痕がある。体部から底部へは内湾したまま移行する。底部を欠くが、扁平な丸底である。口縁部外面から体部内面にかけてヨコナデ、体部外側へラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。15%程度残存、口縁部1/10. 214号上塗出土。7号住居跡からの流れ込みか。

2は土師器腰で奈良時代前半頃の長胴壺の口縁部～胴上半部の破片である。推定口径24.1cm、残存部の胴径22.1cm、器高8.5cmを測る。口縁部は外反し、口唇部は丸い。頸部はゆるく肩曲して胴部に移行。頸部と胴部の境は弱い段になっている。胴部の扱りは小さい。口縁部・頸部内外面ヨコナデ、胴部上位内面へラナデ丁寧、外面ヨコヘラケズリ。口縁部には粘土帯接合痕があり、頸部には若干のヘラ痕が見られる。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒を多量に含む。橙褐色。焼成良好。7～10%程度残存、口縁部1/4. B01-140グリッド出土。391号土壤面上にあり、住居跡のカマドに伴うものだったかもしれない。

3は灰釉陶器の皿である。推定口径15.2cm、残存部の器高2.4cmを測る。体部～口縁部は大きく外に開き、口唇部は外側に面を持ち肥厚する。体部の中位でわずかに肩曲気味で扁平な器形。底部を欠く。全面ロクロ整形。スクリーン・トーンは施釉範囲。釉の発色は薄い緑灰色。胎土緻密で、精選されている。径0.5mm以下の石灰質粒や多量に含む。灰白色。焼成良好。20%程度残存、口縁部1/4. A25-J09グリッド出土。遺跡北部の標高のやや高い場所である。

4は須恵器高台付杯である。推定口径14.3cm、底径6.2cm、器高5.9cmを測る。体部から口縁部は「へ」の字状に外傾して立ち、口唇部は外反し、外側に肥厚気味で丸い。底部へは内湾して移行する。底部は平底で糸切り離しのために中央に向かって薄くなる。あまり高さのない、ゆるい断面の付け高台を体部と底部の境目に付ける。全面ロクロナデ。ロクロ目はゆるい。底面回転糸切り離し未調整。ロクロ右回転。胎土やや緻密で、ザラザラ。1mm大小の小石や多く含む。灰褐色。体部下

半は黒っぽい。焼成良好だが一部赤焼き気味。20%程度残存、口縁部1/5。A25-J09グリッド出土。3・4はほぼ一括で取り上げた。双方とも平安時代前葉か。

5は須恵器高台付环の底部のみの破片である。推定底径5.7cm、残存部器高1.3cmを測る。やや小さな底部で、内湾して体部・口縁部に立ち上がるか。高台は外側が直立、内側がゆるい傾斜を持つ形態の付け高台。内面やや粗いロクロナデ、底面回転糸切り離し未調整。ロクロ右回転か。胎土緻密。白色針状物質少量、石英などの微細粒・1mm大の小石多量に含む。青黒灰色。焼成良好、堅緻。残存率不明。418号土壤出土。近世以降の土壤への流れ込み。

6・7は羽口の破片である。6は径7cm前後、7は径6cm前後で双方ともやや大きめの部類である。不整円筒形である。濃いスクリーン・トーンは鉄滓のこびり付き、薄いトーンは器表面の発泡状変質・変色の範囲である。器壁の厚さは6が約1.8cm、7が1.9~2.2cmである。6は外面タテヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒、片岩系小石多量に含む。橙褐色で、先端部付近は灰色に変色。焼成良好で堅い。5%以下の残存。330号上塙出土。16号住居跡からの流れ込みか。7は外面タテヘラケズリ後ナデ。内面強めのナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒、片岩系小石多量に含む。灰褐色でやや赤味あり、先端部付近は灰色に変色。焼成良好で堅い。5%以下の残存。352号下塙出土。風倒木痕風の土壤への流れ込み。16号住居跡からか。

8~15は近世の遺物である。以下逐次述べておこう。

8は鉢の口縁部の破片であり、推定口径22.8cm、残存部の器高4.3cmを測る。胴部から口縁部下半は大きく外反し、口縁部から口唇部にかけてゆるく内湾する。口唇部は外側に面を持つ。口縁部外面ロクロナデか。胴部外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデか、摩滅して不明瞭。胎土細。ザラつきあり、やや粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒、長石風の小石多量、淡褐色。焼成やや良好、若干あまい。5%以下で、正確な残存率は不明。風倒木痕風の351号土壤から出土している。

9は鉢胴下半部の破片で、大きく「ハ」の字に開いて立ち上がる。底面もないが、やや大きな平底であろう。推定底径15.2cm、残存部の器高4.4cmを測る。胴部外面はユビオサエ後ナデか、指頭圧痕の凹凸目立つ。内面ヘラナデか、摩滅して不明瞭。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒、2~3mm大の小石やや多く含む。焼成やや良。3~5%程度の残存か。やはり351号土壤の出土である。

10も鉢胴下半部の小破片である。平底の底部を予想され、推定底径16.2cm、残存部の器高6.0cmを測る。胴部は9よりさらに大きく外反して立ち上がる。胴部外面はユビオサエ後ナデ、指頭圧痕の凹凸目立つ。内面ヘラナデ丁寧、使用による摩滅によるためかなりすべすべ。胎土緻密。角閃石・長石・石灰質粒子などの微細粒多量に含む。暗赤褐色。焼成良好。5%以下の残存。第1次調査B30-J20グリッド南北トレンチ出土。常滑か。

11は天目茶碗の底部破片である。底径5.1cm、残存部の器高2.1cmを測る。底部から体部にかけてはゆるく内湾し、体部下端外面は高台部分のケズリ出しのためやや尖った断面を呈する。高台から底面にかけてもしっかりした台形の断面に仕上がる。内面全体と外面の途中まで黒褐色の釉がかかることのかからない部分は体部下端から底面まで回転ヘラケズリ。胎土緻密。灰褐色。焼成良好。20%程度残存、底部1/2。第1次調査A10-J10グリッド南北トレンチ出土。

12は灯明皿の蓋である。推定口径7.8cm、器高1.9cmを測る。口縁部は内湾し、口唇部はやや尖り気味。ゆるく内湾したまま天井部へ移行。天井部外面はケズられて凹面風平面になっている。器面全体ロクロナデ、天井部外面回転ヘラケズリ。胎土緻密。角閃石・石英などの微細粒やや多く含む。灰褐色。内面全体と外面の口縁部付近はうすい灰緑色の釉がかかる。焼成良好。30%強残存、口縁部1/4。1号集石遺構出土。上層の流れ込みか。

13は器形がはっきりしないが、鉢か。口径不明、残存部の器高2.2cmを測る。口縁部のみの破片で大きく外反する器形。口縁部中位で屈曲し外面に稜がある。口唇部は上方に面を持ち、外に引き出されやや丸い。全体をロクロナデしており、口唇部外面直下は爪先で調整する。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量。淡褐色。焼成良好。残存率不明。3号住居跡No.46。流れ込みか。

14-15は鍋の口縁部小破片である。14は推定口径32.4cm、残存部の器高2.8cmを測る。口縁部は小さく外傾して立ち、口唇部は上方に平坦な面を持つ。ロクロナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多。灰白色。焼成良好。残存率不明。第1次調査A30-I 40トレンチ出土。

15は推定口径33.0cm、残存部の器高2.8cmを測る。口縁部は小さく外傾して立ち、体部より口唇部の方がやや厚めに作られる。口唇部は上からつぶされたように上方に平坦な面を持ち、わずかに内側に肥厚する。体部にはゆるい稜がある。内面には沈線状の痕跡が3条ある。ロクロナデ。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒多。橙褐色の地色だが残存部は黒褐色を呈する。焼成良好。残存率不明。第1次調査A30-J 20トレンチ出土。

第114図1・2は平瓦の小破片である。1は小口面と側端面が一面ずつ残る屋根側左隅の破片、2は軒側小口面だけが残る破片である。双方とも一枚造りのように見受けられるが、1には一見模骨痕のような凹凸があるので、1については桶巻造りの可能性のあるものとしておく。1は残存部の長さ8.0cm、最大幅7.0cm、厚さ1.5~2.3cmを測る。凹面は布目痕、凸面は綱タタキ後ヘラケズリとなっている。小口面と側端面はヘラケズリされているが、摩滅して不明瞭。凹凸両面の側端部附近は面取り状のヘラケズリが施される。胎土緻密だがザラつく。角閃石・石英などの微細粒、片岩系小石多量に含む。灰褐色。一部やや赤味あり。焼成良好、堅緻。全体の5%程度残存。A49-J 07グリッド出土。

2は残存部の長さ10.0cm、最大幅8.5cm、厚さ2.1~2.8cmを測る。凹面は布目痕、凸面はタテ・ナメヘラケズリ後ナデである。凸面は当初綱タタキを施しているらしい。小口面もヘラケズリのみ。胎土緻密。角閃石・石英などの微細粒、チャート質小石・片岩系小石多量。小石はかなり大きいものも含む。橙褐色。焼成良好、堅緻。全体の5%程度残存。B19-I 47グリッド出土。

以上が、グリッドその他出土の歴史時代遺物の概要である。遺構が確認されずに遺物のみ出土した平安時代前期の遺物として須恵器杯・灰釉陶器杯・羽口・平瓦があるが、これらは特に一定地区に集中していたわけではなかった。あるいは掘立柱建物などが若干存在したのかもしれないが、遺構確認面がすでにハードロームやそれより下層になっていた部分が広く、若干の遺物のみ残して表土中に消失したと思われる。また近世の遺物についてもやはりなんらかの遺構に伴っていた可能性があるが、同様の理由で消失しているものと考えておきたい。ただし、記述から省いた小破片を含めても近世土器は数少なかったので、長期的建築物はなかったであろう。

## IV 下大塚の発掘調査

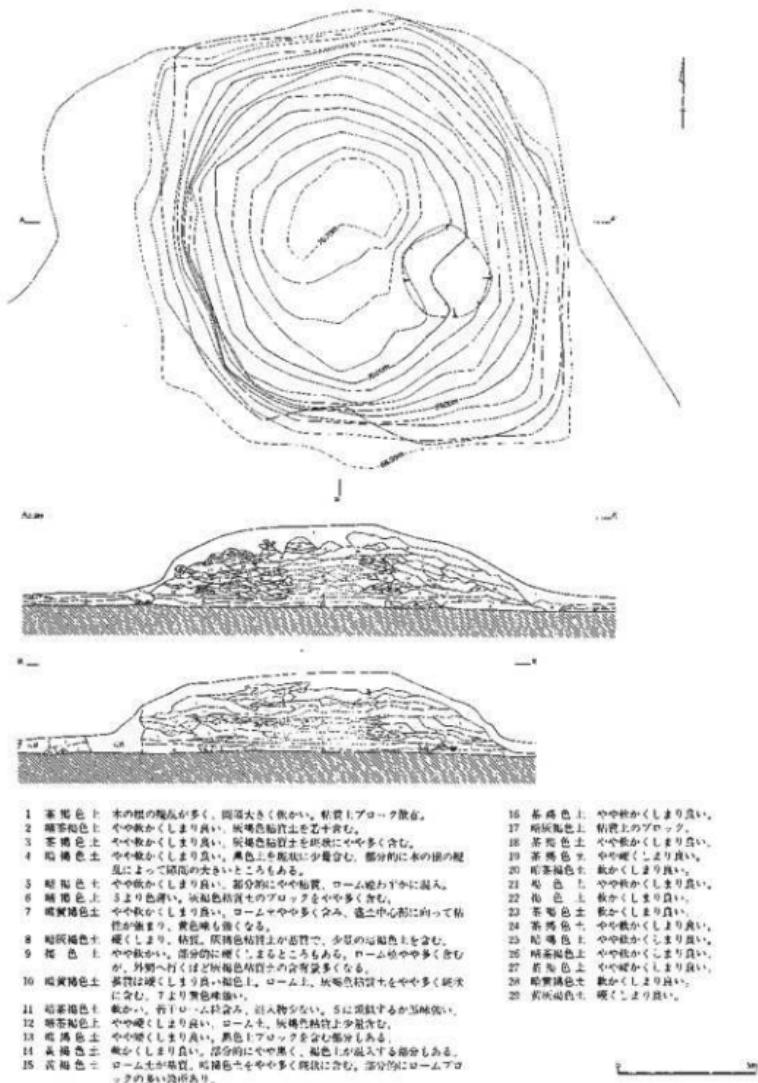
下大塚は工業団地事業地の中央部からやや北寄りの区域にあり、竹之花遺跡の南東約240m、竹之花遺跡の東に隣接する白草遺跡の南約100mの位置にある。竹之花・白草両遺跡が比較的斜面部に立地しているのに対して、下大塚は平坦面にある。グリッド位置はD05-K12グリッドを中心とした位置になる。

単独で存在しているため、当初「古墳」あるいは「古代・中世の墳墓」または「経塚」などの可能性も考えて盛土頂部から土層断面の観察を行なうながら徐々に掘り下げる方法により調査を開始した。しかし、盛土頂部の平坦面とその周囲の緩斜面部分を1m前後掘り下げたが、古墳やその他の墳墓の埋葬施設、あるいはそれ以外の特別な施設は確認することができず、中世以前の遺物も出土しなかった。さらに掘り下げても状況は変わらなかった。そこで、これを近世以降の「塚」と考え盛土全体の断ち割り、盛土下の遺構の有無の確認に進むことになった。盛土下にも明らかな遺構はなく、盛土の周囲を含めても遺構と考えることができる掘り込みは検出されなかった。故に、この章では、「下大塚」という「塚」1基について記述することになる。

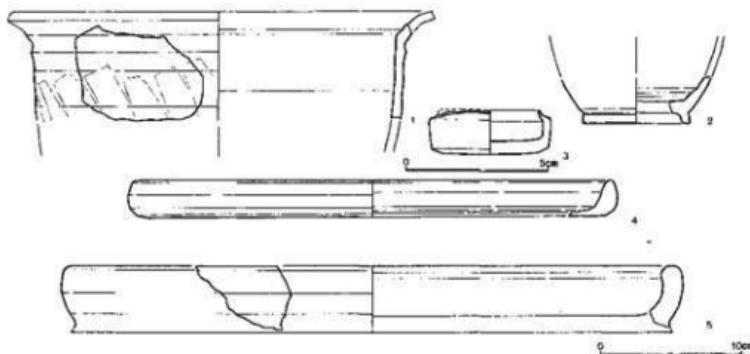
下大塚は「塚」としては中規模であり、長径18.5m、短径13.9m、地表面からの高さ2.4mを測る。盛土の形状は北西-南東方向に長い不整規円形で、長軸方向が若干突出する形はレモンを倒した形に近いが、この突出部分は盛土の崩落によるものと思われ、当初の形状は円形に近かったであろう。ごく普通の円墳と同様の上饅頭のような盛土をしており、南西側から西側にかけて屋状に立ち上がった部分が見られるが、ここはいかにも不自然なので上取りされたものと考えておきたい。また、盛土頂部平坦面の南東には径3~3.5m程の擾乱孔があるが、この「塚」を古墳と考えた人が掘った盗掘口と考えられる。南東側は最もゆるい斜面であるが、「塚」の盛土頂部に登っていく通路部分と考えることもできる。「塚」の機能を考える材料になるかもしれない。

盛土はかなり小さな単位で積み上げられており、厚さ10~30cmで平坦面を連続的に造成するようになっていた。盛土下半部から中位にはローム土をやや多く使う土塊が小刻みに数多く見られ、上半部には褐色の粘質土を多く使う土塊がやや多く見られた。ただし、盛土最上層は盛土頂部に生えていた雜木の根によって擾乱され、厚さ30~50cmの間隙の大きな軟かい土となっていた。盛土は総体的には軟かい土であった。なお、盛土中位には長径20~40cm程度の礫がやや多く確認された。この礫はやや散在的であり、垂直分布の状況をみてそれほど集中的とは言えなかった。何らかの施設を示すような配置も認められなかった。おそらく、盛土運搬の際に混入したかあるいは盛土を固める作業上の必要から意図的に混入させたものであろう。盛土全体の上層を観察すると、旧地形も平坦であることがわかり、盛土のすべてが運搬された土である。しかも、土質から考える限り近傍の旧表土を掘削して運んだのであろう。

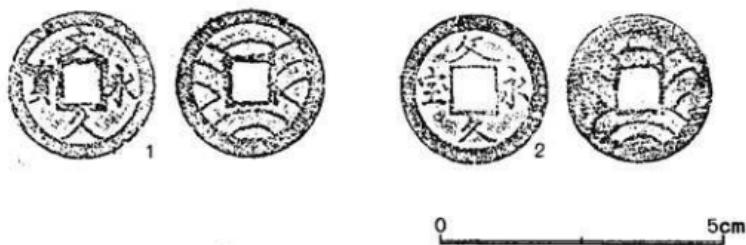
出土遺物はごくわずかであり、図示した7点の遺物にしてもそのすべてが「塚」の形成時期を指示しているとはいえない。第116図1・2はおそらく盛土運搬時に混入した古代末期前後の遺物であろう。第116図3は東西方向の土層断面清掃中に盛土頂部緩斜面の西端部の落ち際付近の盛土中から出土した。付近に擾乱がないため盛土造成期の手がかりになるかもしれない。これら3点も含



第115図 下大塚平面図および土層断面図



第116図 下大塚出土遺物(1)土器類



第117図 下大塚出土遺物(2)古銭

めて下大塚の出土遺物7点の観察結果を示しておきたい。なお、「塚」の盛土中から出土した遺物は29点についてナンバリングしたが、「塚」に関係ないものと関係の薄いものは省略した。

第116図は土器類である。1は土器器ないし土師質土器の壺か瓶の破片であろう。頸部および肩部上端部の破片で器形の復元は困難である。おそらく口縁部に最大径があり、胴部はゆるやかにつぼまり平底の底部に移行するという器形であろう。推定胴径26.5cm、残存部の器高6.7cmを測る。頸部で「く」の字に屈曲し、口縁部は外反する。胴部外面タテヘラケズリ後ロクロナデ。内面全体および口縁部・頸部外面ロクロナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。棕褐色。焼成良好。須恵質風のやや堅い焼き。残存率5%以下の小片。盛土頂部東北区出土。

2は須恵器長頸壺底部の小破片である。全体の復元は無理だが、おそらくややなで肩の胴部を呈する器形であろう。底径7.75cm、残存部の器高3.3cmを測る。断面逆台形のシャープな造りの高台は底面周縁部にあり、側部は内湾して立つ。全面ロクロナデ。高台は回転ヘラケズリ、削り出し高台か。胎土緻密。小石やや多。青灰色。焼成良好、堅緻。7~10%程度残存、底部1/5。

3は磁器の合子の身である。推定II径3.5cm、胴径4.4cm、底径4.2cm、器高1.6cmを測る。口縁部は薄く短く内傾して立ち、II唇部は尖る。屈曲して胴部に移行。胴部は直立し、さらに屈曲して底

#### 下大塚

部に移行。底部は平底だが、周縁部は面取り状に傾斜する。全面ロクロナデ、底面回転ヘラケズリ。ただし、底面のケズリの工具痕はかなり細かく、ロクロの回転力も相当強そうなので、近代になってからの製作品であるかもしれない。内面全体と底面を除く外面は表面がガラス質になり、釉の発色もわずかに青味がかった白色である。素地土の焼き上がりの色も白色である。胎土緻密。黒色の微細粒ごくわずかに含む。焼成良好、堅緻。60~70%程度残存。No.29。

4・5は鍋の破片である。4は赤焼き、5は瓦質に近い硬い焼きである。いずれも内耳土器であろう。4は推定口径34.8cm、底径33.6cm、器高2.6cmを測る。体部から口縁部にかけては分厚い器壁で内湾気味に直立する。底部との境でゆるく屈曲し、大きな平底の底部に移行。底面以外ロクロナデ。底面はザラザラで不明瞭であるがヘラナデか。胎土細。角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。橙褐色。焼成良好。5%程度残存、口縁部1/9。盛土頂部東南区出土。

5は4よりさらに分厚い器壁を持つ。推定口径46.6cm。残存部の器高4.4cmを測る。底部部分はまったくないが、やはり平底であろう。体部から口縁部にかけては内湾しながら直立し、口唇部は丸い。底部との境はゆるく屈曲して移行。底部外面は周縁部で外に突っ張る形であろう。胎土は緻密で、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。黒褐色。内面はやや青黒い。焼成良好。5%以下。盛土周辺出土。

第117図1・2は古銭である。2枚とも盛土頂部東南区の近接した位置から出土したが、盛土の中心からは4m程南にはずれている。ともに文久永宝であるが、鋳出されている文字および字体に異なる部分がある。1は「文久永寶」、2は「文久永宝」であり、2の「文」の字の上の「なべぶた」の羅画が「はらい」のような形に近く、一見「父」の字に近いように見える。裏面は双方とも波形文であるが、2の方が波の高低差が大きい。波を構成する条線（隆線）の数は上1・左右および下各3の10本で2枚とも同じである。大きさは、1が径2.65cm、中央の方形孔の一辺約6.5mm、厚さ約1mm、2が径2.7cm、中央の方形孔の一辺約7mm、厚さ約1mmで、2枚ともほぼ同じ大きさである。遺存状態は比較的良好で安定しており、薄く緑青が付着するが、両面の文字・文様は明瞭に見える。

これら以外にも、型造りの平瓦の小破片や器形不明の陶器片が若干ある。図示が困難なため、あえて省略したが、おそらく第116図4・5の内耳鍋や第117図の文久銭の時期に近いものと思われる。このように、下大塚の盛土構築状況・形態・規模、盛土頂部・盛土中・周辺の出土遺物から判断する限り江戸時代終末期以降に造られ、何らかの信仰目的に利用されたらしい。調査時には構築物の痕跡がなかったが、稻荷宮の小祠が祭られていたという伝承を聞いたことのある人が地元住民の中にいたのでとりあえずこの巷説に従っておくことにする。

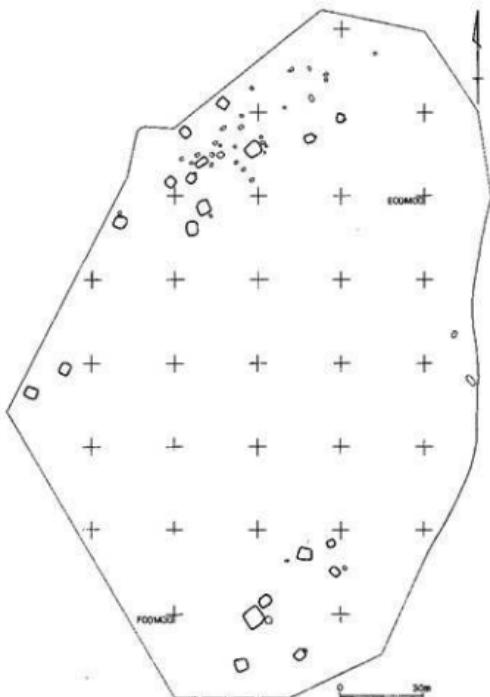
## V 円阿弥遺跡の発掘調査

### 1 遺跡の概観

円阿弥遺跡は工業団地事業地の西端部付近に位置し、南には権現堂北遺跡・権現堂遺跡が隣接して所在していた。竹之花遺跡の南西約550m、白草遺跡の南西約210mにあり、2遺跡同様吉野川を北西に臨む台地上に立地している。東西約170m、南北約350m、面積約27,000m<sup>2</sup>を測る。遺跡全体は北西方向に傾斜する緩斜面に乗っているわけであるが、遺跡の北端部はほとんど平坦面に近く、遺跡の全遺構の7割程度がここに集中する。南端部付近の緩斜面にも7軒の住居跡の集中する区域があるが、この区域の傾斜は中央部の傾斜に比べて緩い。遺跡中央部は遺構が存在せず、風倒木痕が多く見られ、しかも傾斜変換点にあたっているためか湧水点になる区域もあった。特に湧水の多い地点の北西には弥生時代の住居跡2軒が孤立して存在していた。

遺構の内訳は縄文時代の住居跡5軒、土壙4基、弥生時代の住居跡5軒、土壙3基、古墳時代の住居跡7軒、土壙3基、平安時代の住居跡3軒、土壙2基、近世以降の土塹22基である。縄文時代

の住居跡は前期後半諸磯期に属するもので、4本柱穴のもの2軒、埋甕を埋設するもの3軒であり、数多くの石器類を出土した10号住居跡には合計6個体の埋甕を1カ所に集中的に埋設していた。北端部に4軒、南端部に1軒の分布状況であり、古墳時代の住居跡の分布状況と正反対であった。住居形態は隅丸長方形でやや大型の住居跡と中型の住居跡がある。弥生時代の住居跡は後期後半吉ヶ谷期に属するもので北端部のやや西寄りに偏在していた。隅丸方形・長方形の形態であり、無柱穴であった。古墳時代の住居跡は前期五領期のもので、南端部に6軒、北端部に1軒が確認された。方形無柱穴の住居跡が多かった。平安時代の住居跡は3軒とも小型でカマド



第118図 円阿弥遺跡遺構分布概念図

を付設し、散在的分布を示す。

北端部にある住居跡は保存状況が悪く、壁がほとんど立たないもの、遺構確認時に床面が露出してしまったものが大半であった。そのため遺物が極めて少ない住居跡も多く、時期の特定が困難な住居跡もあった。これに対して、南端部で検出された住居跡は壁が30cm以上立ち上るるものばかりであったので、遺物は比較的よく残っていた。

土壇は近世以降の新しい時期のものを除くと各時期とも少數であった。1軒の住居跡に1基の土壇が付随して検出される例が古墳時代のものを中心にして6例確認されているが、住居跡の掘り込みに接近しすぎるものもあり、同時に存在かどうかはっきりしないが、このケースにあたる土壇を便宜上住居跡に対する「付属土壇」として扱い、各住居跡の項において記述することにする。なお、遺跡東端部には平安時代の長方形土壇が2基あり、須恵器杯を伴う。住居跡の時期とおおむね同じ時期であり、土壤墓と考えられるものであろう。

なお、円阿弥遺跡の特徴についてもう少し記述しておく。前述の竹之花遺跡においては東ないし南向きの斜面を意識的に利用する傾向があることが考へができるような遺構分布上の特徴が認められた。これに対して、円阿弥遺跡（そして東側の白草遺跡にも同様のことが言えるかもしれない）は北向き斜面を中心とした土地利用の所産として形成されたことが明確で、それも東西の広がりを考えるならばやや西寄りに眺望性が開ける環境になっていたことがわかる。おそらく飲料水などの生活用水を得ることを最優先にした遺跡の立地を選択したためと考えられるが、各時期とも短期的居住あるいは断続的居住であるために時期別住居跡数が最高7軒にしかならなかったのであろう。

## 2 遺構と出土遺物

### a 縄文時代の遺構と出土遺物

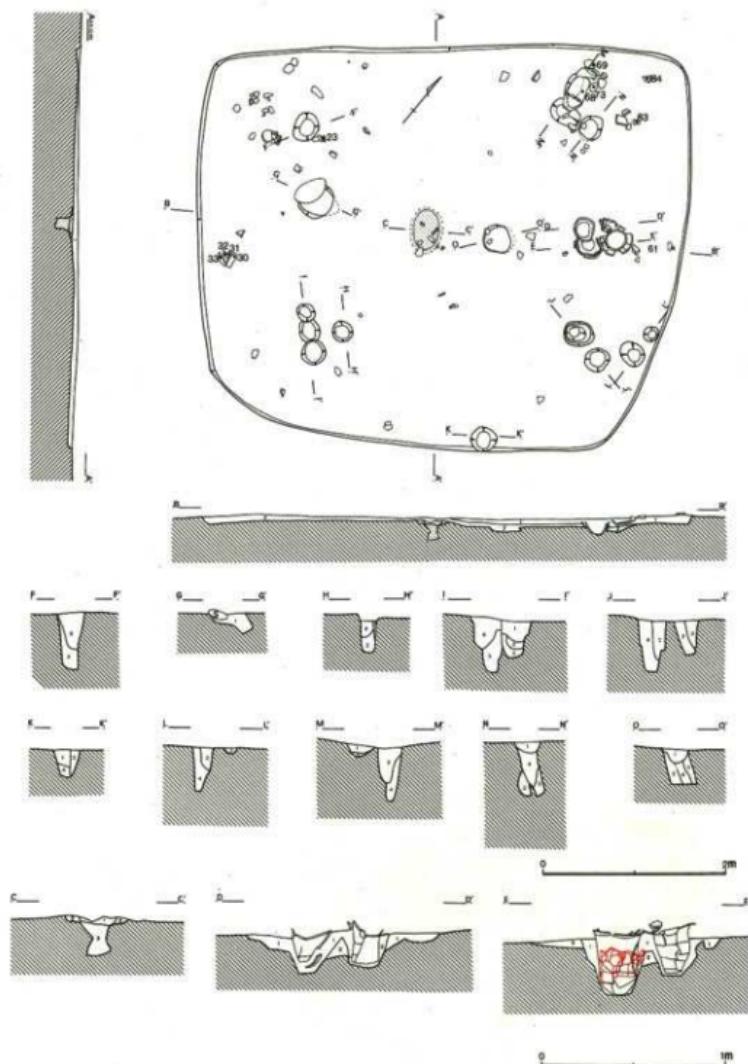
#### (1) 縄文時代の遺構

円阿弥遺跡においては前述のように縄文時代の住居跡が5軒、土壇4基が検出されている。いずれも前期後半に属するもので、住居跡は諸穂a・b期、土壇は黒浜期・諸穂a期である。

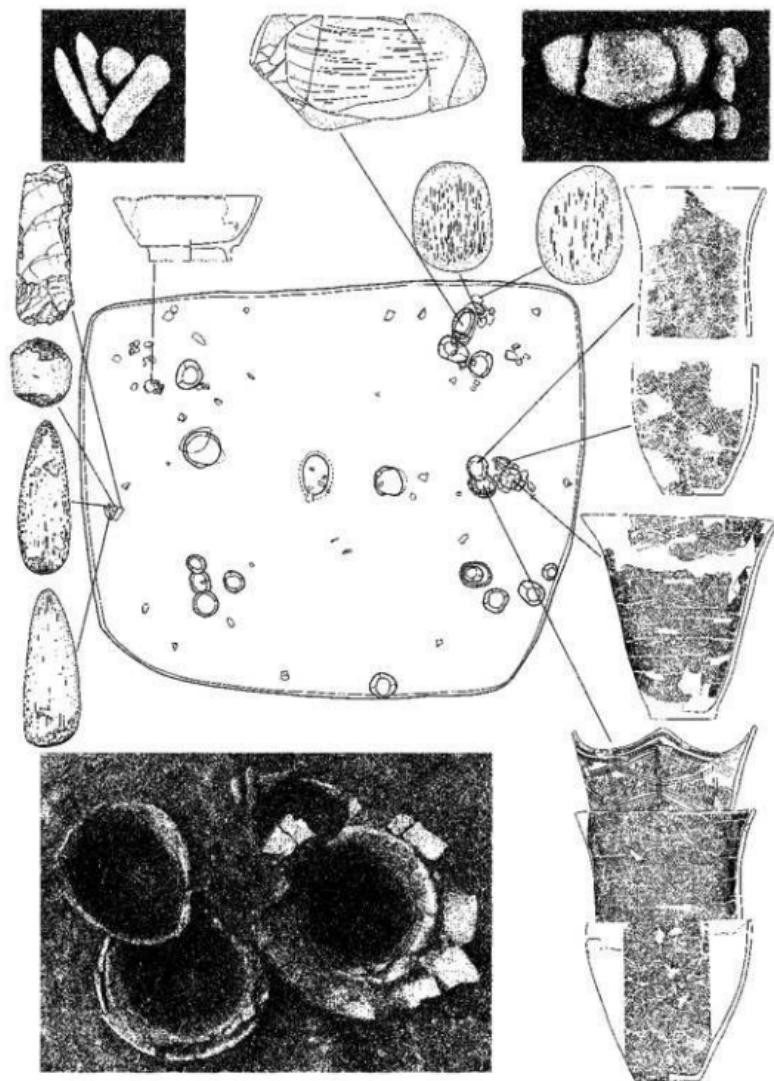
以下に個別に記述することにする。

#### 10号住居跡（第119・120図、遺物第125～127・130・131図）

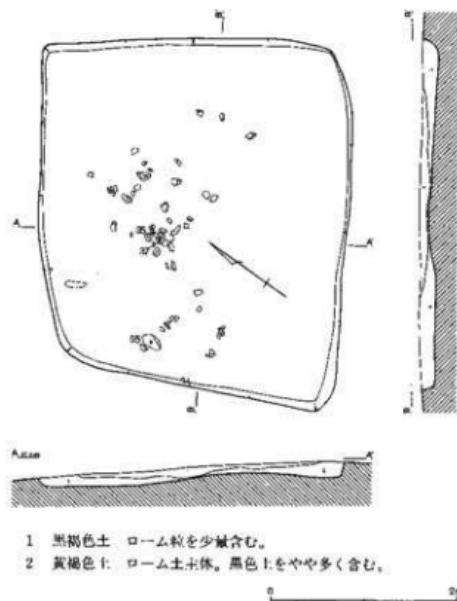
10号住居跡は遺跡北端部の住居跡群の中央やや東寄りにある。グリッド位置はD44-M20グリッドを中心としている。長辺5.1m、短辺3.4mを測り、台形に近い不整長方形を呈する。長軸方向をとると、主軸方向はN-54°-Eで、かなり東に振れている。覆土の深さは2～15cmと浅く、黒色土を中心としている。床面には数多くのビットがあるが、基本的には4本柱穴の掘り返しの連続的累積によるものであろう。これら柱穴は深さ40cm程度のものと60cm前後のものがある。住居跡の中央には長辺50cm、短辺36cmの炉がある。楕円形を呈する皿状の掘り込みで、焼土の堆積が9cm程あった。東壁中央から0.6～1.2メートル内側に4カ所で計6個体の深鉢が埋葬として埋設されていた。3個体が重なって出土したものもある。埋葬の下の掘り込みはごくわずかで上器の形態に沿って掘



第119図 10号住居跡（1）平面図・断面図



第120図 10号住居跡（2）遺物出土位置



第121図 11号住居跡

してはただ1軒遺跡南端部に所在している。南西に古墳時代の住居跡である3号住居跡が隣接して所在する。やや小型の住居跡であり、長辺3.86m、短辺3.14mを測る。台形に近い不整形形を呈する。E48-M19グリッドを中心とした位置にある。主軸方向はN-55°-Eでかなり東に振れてい。炉・柱穴などの付属施設はまったくなかった。覆土は10~18cmの厚さであり、黒褐色土が主体であった。地形は北西方向に傾斜しており、床面も地形に沿って傾斜していた。

上器は出土しておらず、石器類が若干量出土しているのみであるため、住居跡の時期はあまり明確にできない。

## 10号住居跡土層註

A-A'、B-B'

- 1 黒色土 ローム粒・焼土粒・炭化物をわずかに含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒や多く、焼土粒・炭化物をわずかに含む。

C-C' (D)

- 1 赤褐色土 やや硬く、しまり良い。焼土・黄褐色土多量に含む。
- 2 黄褐色土 硬く、しまり良い。ローム土・黒色土を斑状に含む。
- 3 黑褐色土 やや軟かく、しまり良い。ローム土多量、焼土少量含む。
- 4 黄褐色土 ハードローム。地山。

## D-D'、E-E'

- 1 黄褐色土 やや軟かく、しまり良い。ローム土少量含む。
- 2 黑褐色土 硬く、しまり良い。ローム土・黒色土を斑状に含む。

F-F' ~O-O'

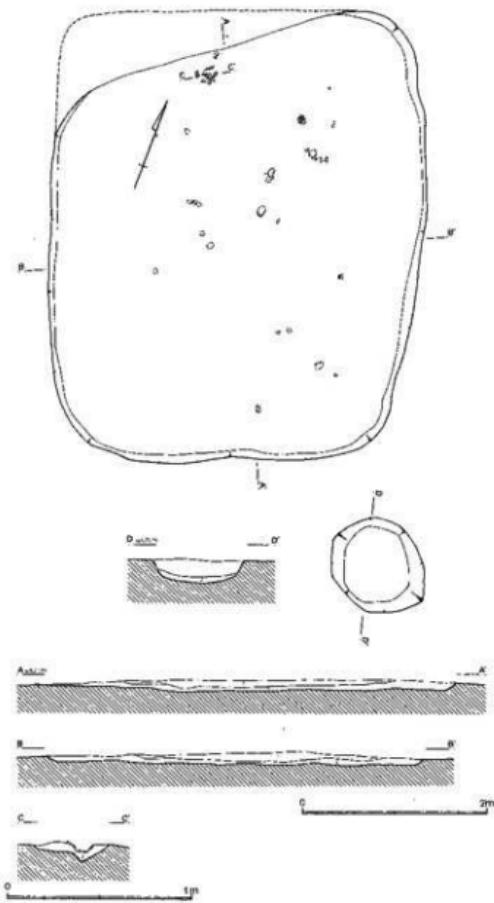
- 1 黑色土 ローム粒をわずかに含む。
- 2 黑色土 ローム粒・ロームブロックを少量含む。
- 3 黄褐色土 黒色土ブロック・ロームブロックを斑状に含む。
- 4 黄褐色土 黑色土粒・ローム粒を多量に含む。
- 5 黄褐色土 ローム土主体。黒色土をやや多く含む。
- 6 黄褐色土 黑色土粒・ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

り込まれていた。これら以外に柱穴と考えられない浅いピットが埋め戻しと炉の間、炉と西壁との間、東壁沿い、北東柱穴の外側に各1本計4本あり、入り口施設用と思われる柱穴状ピットが南壁沿いに1本検出された。

出土遺物は埋め戻しに使用された深鉢形土器6点、若干の上器部以外に石器類がセットとして2カ所から出土している。1つは北東コーナー付近の大きな右皿と磨石2点のセットであり、もう1つは西壁中央内側の敲き石1点・石斧3点を横並びにしたセットである。いずれも床面直上出土である。土器の時期は諸磯a期にあたると思われる。

11号住居跡（第121図、遺物第131・132図）

11号住居跡は縄文時代の住居跡と



- 1 黒色土 ローム粒・炭化物をわずかに含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒・炭化物少量含む。
- C - C'
- 1 暗褐色土 ローム粒や多く含む。
- D - D'
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物をわずかに含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒や多量、炭化物少量含む。

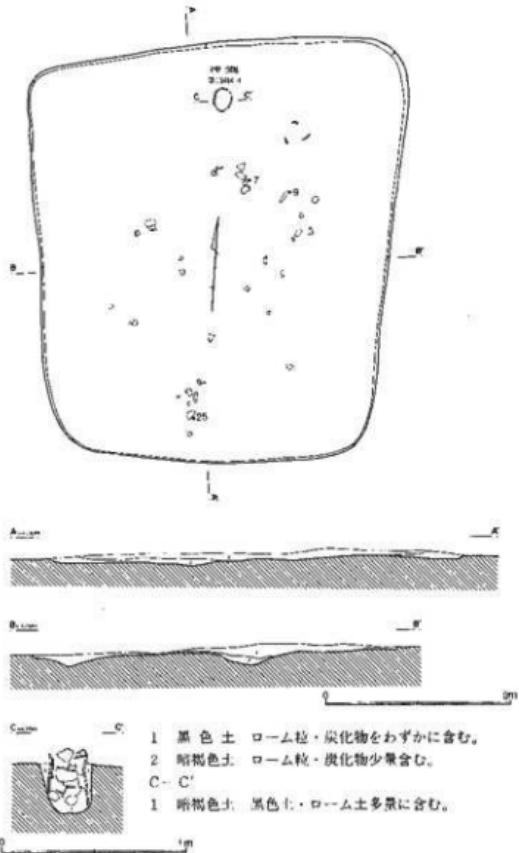
第122図 12号住居跡・32号土壤

#### 12号住居跡・32号土壤(第122図、遺物第127-128図)

12号住居跡は10号住居跡の南西22mの位置にあり、E01-M26グリッドを中心とした区域に所在する。保存状態が悪く、北壁の大半を失う。長辺4.55m、短辺3.15mを測り、隅丸長方形の平面プランを推定することができる。主軸方向は長軸をとるとN-20.5°-Wである。北壁中央内側には埋甕風に埋設された上器1個体があった。炉・柱穴等は検出されなかった。その他若干の上器・石器が散在的に出土した。覆土は黒色土主体で厚さ3~14cm、平均10cmしか残存していなかった。床面はわずかに凹凸があるが、おおむね平坦であった。南0.75mの位置には付属土壤である32号土壤が存在していた。長径1.16m、短径0.93m、深さ26cmを測り、不整形円形を示す。E02-M25グリッドに位置し、主軸方向N-74°-Wである。覆土は黒褐色土である。

#### 13号住居跡(第123図、遺物第126-127図)

13号住居跡は12号住居跡の南西約3mに隣接して所在していた。E03-M27グリッドに位置する。長辺4.23m、短辺4.0mを測り、主軸方向はN-3.5°-Wである。台形に近い隅丸長方形を示す。北壁中央内面の壁



第123図 13号住居跡

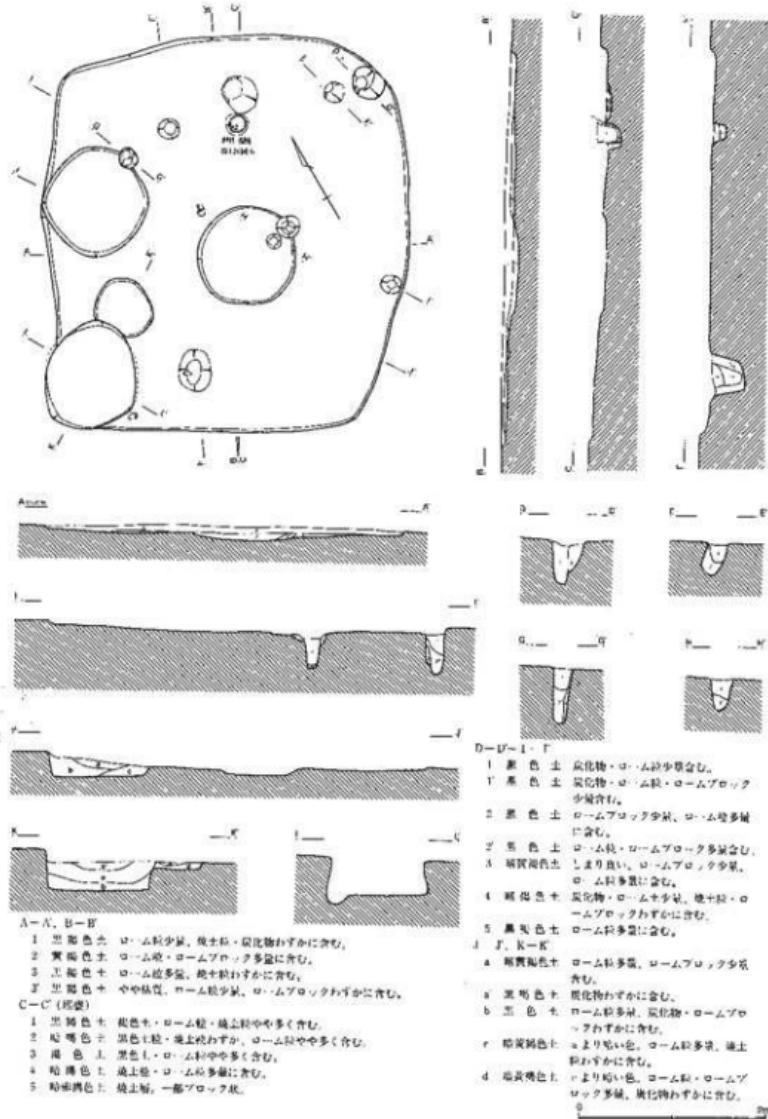
に接した位置になるため本来の住居掘り込みはもっと東寄りであったかも知れない。径1~1.2mの土壙3基と径65cmの土壙1基に切られているが、これらは上塙数に数えていないので、これを加えると円阿弥遺跡の上塙総数は38基になる。この4基も縄文時代に属する可能性があるが、土器を作っていないので、時期判定は保留しておく。覆土は3~10cm、平均6cmでやはり残存状態は良くない。黒色土が主体である。床面はおおむね平坦であった。遺物は埋葬以外わずかな土器片が出土したにすぎないが、遺物から考えられる時期は諸磯a期であろう。

なお、縄文時代に属する土壙は12号住居跡付属土壙とした32号土壙（前述）以外に24-26-35号土壙の3基が該当するが、住居跡付属土壙とは考えにくいものであった。これらについては「その他遺構と出土遺物」の項で述べることにする。

から約50cm内側に入った位置に埋葬1個体が埋設されていた。やはり柱・柱穴等は確認されなかった。覆土は2~22cm、平均10cm程度残存していた。黒色土主体である。床面は平坦であるが、凹凸の大きい部分もある。遺物は埋葬以外は床面付近に土器片・石器等が散在的に出土している。住居跡の時期は諸磯a期。

#### 19号住居跡（第124図、遺物第126-128図）

19号住居跡は13号住居跡の西約22mにあり、E03-M36グリッドを中心とした区域に所在していた。遺跡北端部の住居跡群中では、弥生時代の2軒を除いて最も西に位置する。長辺3.6m、短辺3.5mを測る。東壁がやや丸張り出す不整圓形を呈し、主軸方向はN-34.5°-Eである。北壁中央の約80cm内側に埋葬を埋設する。ピットは9本あり、やや整然とした4本柱穴になるが、南東の柱穴が東壁



第124図 19号住居跡

## (2) 繩文時代の出土土器

## (a) 住居跡出土土器

## 10号住居跡（第125図1～4、第126図1～3、第127図1～11）

第125図1は3段重ね埋甕の一番上の土器であり、胴部で緩く括れ、4単位の波状口縁が開く器形を呈している。口縁部は2列の爪形文で区画され、幅狭な無文帯を区画する。胴部は2列の平行沈線文で区画されており、平行沈線文間は地文が磨消されている。文様帯内は波頂部と波底部から平行沈線文が垂下されて縦位分割されており、相互に対向する平行沈線文を鋸歯状に施文して、変形肋骨文もしくは変形「米」字文のモチーフが描出されている。胴下半部には、多条の平行沈線文で鋸歯状文が施文されており、部分的に2段に施文されている。地文は無節Lしが全面に施文されており、モチーフはその上に施文される。推定口径26.4cm、現存高28cmを測る。

2は口縁が朝顔状に開く深鉢で、単節RLの斜繩文が全面に施文されている。口縁部は一部現存しており、円形竹管文が3段に施文されている。現存高22cmを測る。3は胴下半部が現存し、地文は単節RLが施文される。現存高19.2cmを測る。4は口縁部から底部まで現存するが、口縁部は半周が現存する。単節RLが施文され、推定口径28cm、現存高29.2cmを測る。

第126図1は3段重ね埋甕の中段の土器で、ほぼ完形である。全面に単節RLを施文し、口縁近くに補修孔が穿たれる。口径26.5cm、器高34cmを測る。2は3段重ね埋甕の一番下の土器で、胴下半部が現存する。地文に単節RLが施文され、現存高24cmを測る。

3は脚の付く浅鉢で、口唇が角頭状に整形され、内外面とも良く研磨されている。推定口径21cm、現存高9.6cmを測る。

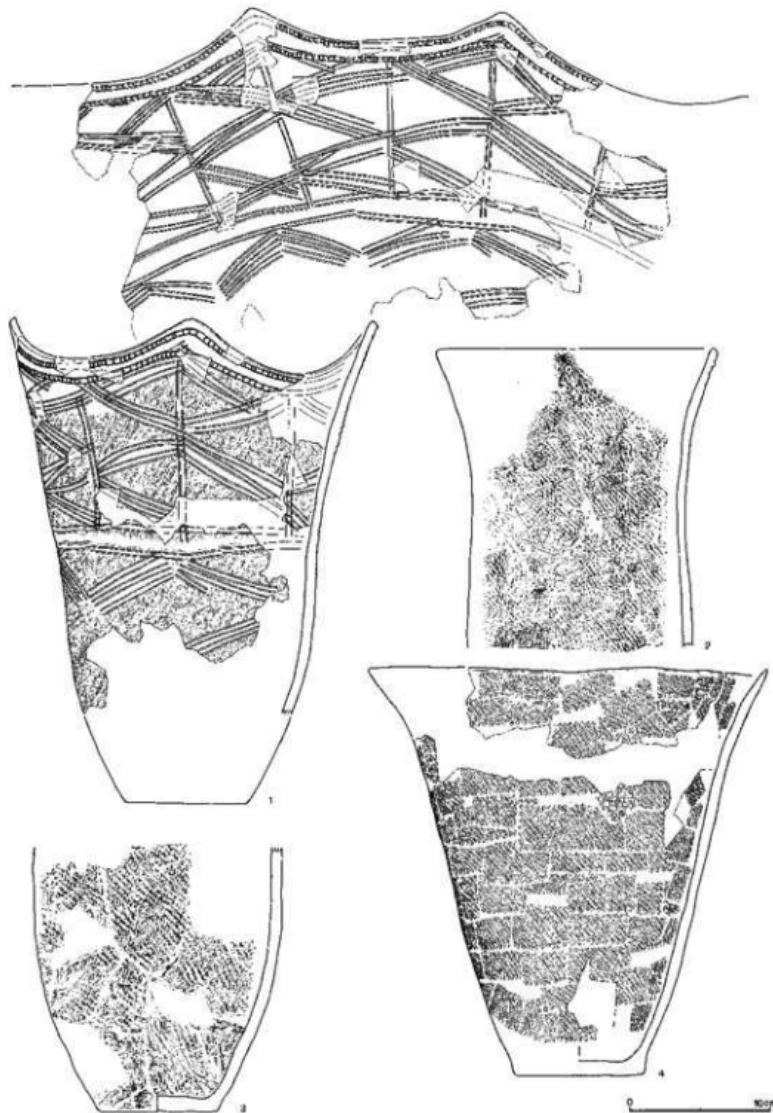
第127図1は波状口縁を呈し、2列の爪形文で口縁部が区画されて、爪形文の渦巻文が、地文繩文の上に施文されている。波頂部からは曲線状の爪形文が垂下する。2も波状口縁を呈し、爪形文で口縁部が区画され、鋸歯状のモチーフも爪形文で施文されている。波頂部から円形竹管文が垂下している。3、4は円形竹管文のみ施文されるものであるが、縦位の割り付け線の上から施文されている。いずれも単節RLが施文される。5～7は平行沈線文で区画するもので、5はモチーフが爪形文で施文されている。地文は5、6が単節LR、7がRLである。8、9は爪形文で文様帯が区画され、単節RLが施文される。10は胴部の大形破片であり、単節RLのみ施文される。11は単節RLの結節繩文が施文される。12は底部破片であり、無節Lが施文されている。

## 12号住居跡（第127図13～21）

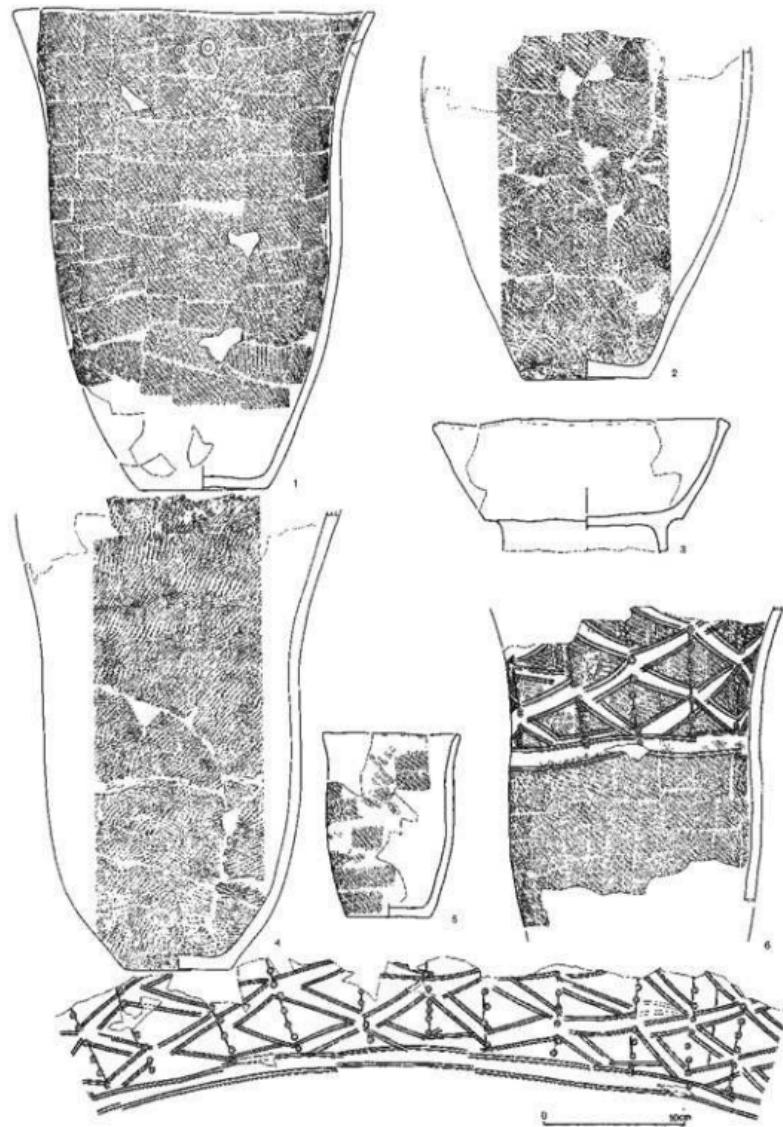
13は平行沈線文による変形木葉文の区画内に、磨消繩文単節RLが施文されている。15は波状口縁を呈し、条線文による肋骨文が施文される。器面が摩耗しており不鮮明ではあるが、地文に繩文が施文されている。19は爪形文で区画され、地文に単節LRが施文される。15～18は口縁部破片であり、いずれも単節RLが施文される。20、21は底部破片で、底部の剥落痕が明瞭である。

## 第13号住居跡（第126図4、第127図22～32）

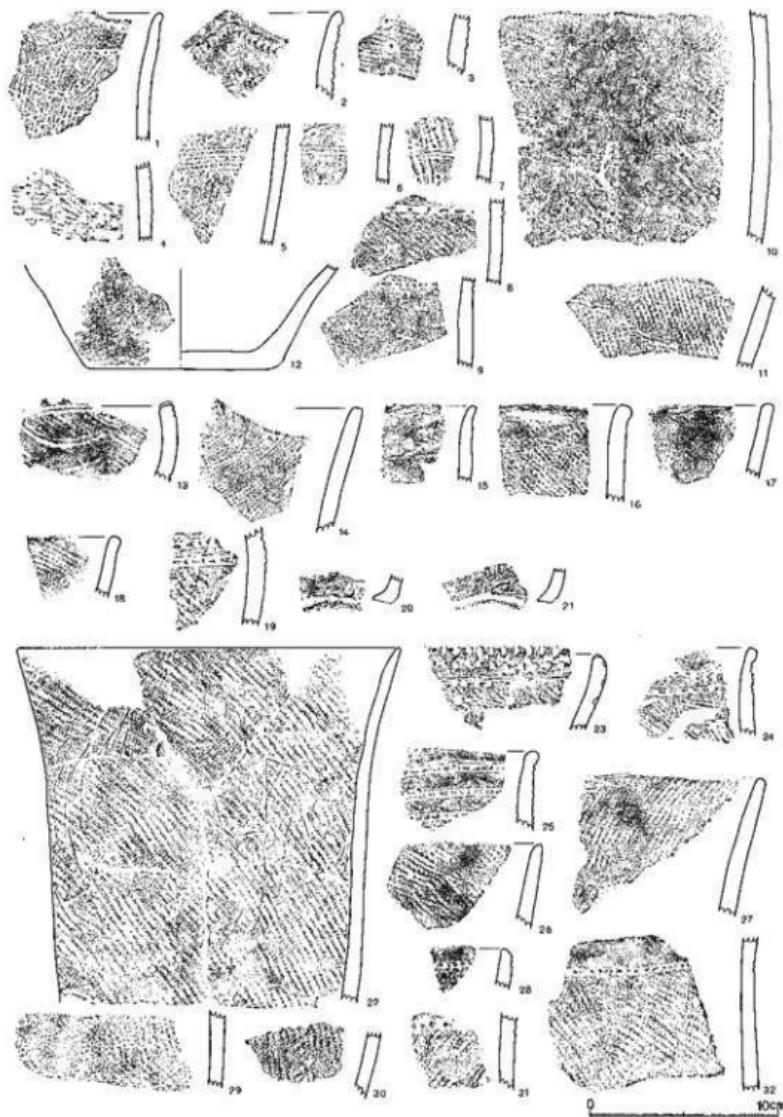
第126図4は埋甕であり、口縁部を欠損する。地文は太細の擦り合わせによる単節LRが施文されており、原体の末端が細くなるため付加条繩文に類似した繩文となっている。現存高26.8cmを測る。23は口縁部が若干内轉して開く器形を呈し、口唇部に刻みが施される。口縁部は2列の刺突文



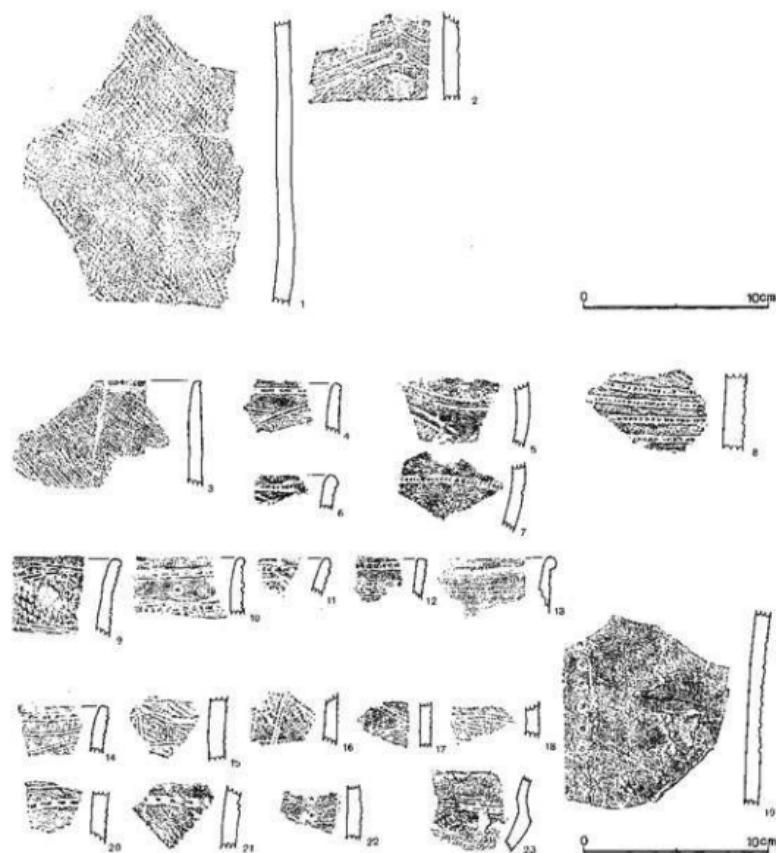
第125図 遺構出土土器（1）



第126図 遺構出土土器 (2)

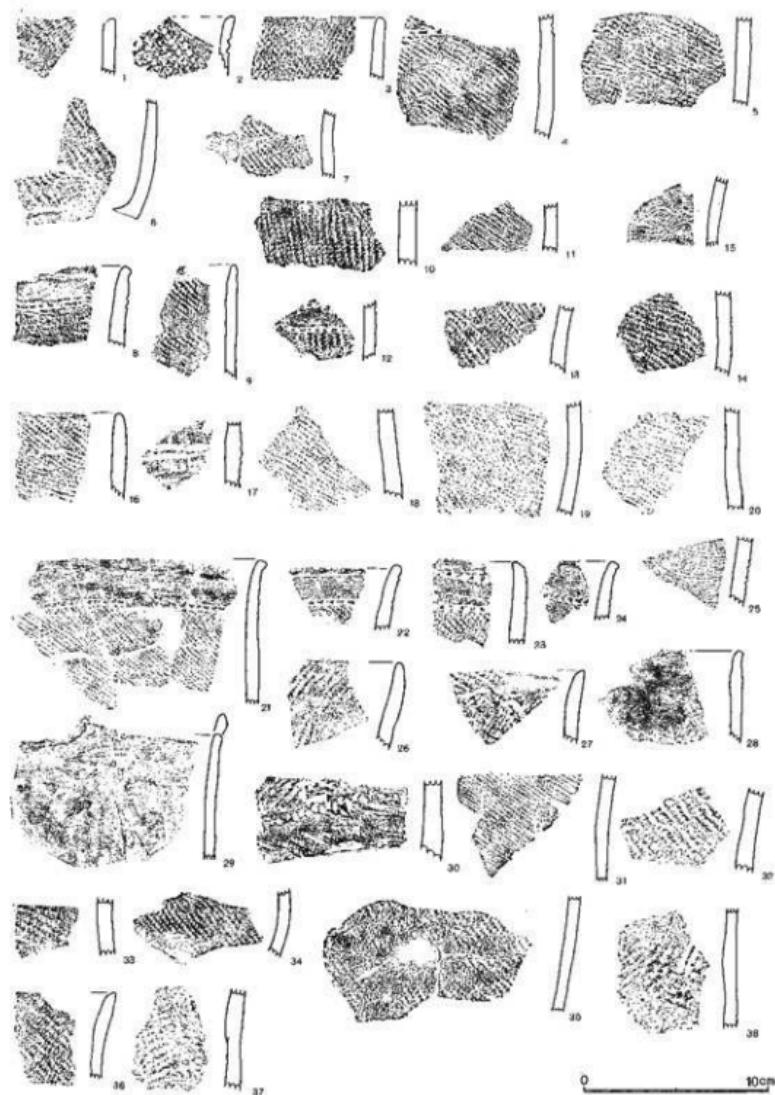


第127図 遺構出土土器（3）



第128図 遺構出土土器 (4) グリッド出土土器 (1)

列で区画され、文様は幅狭の平行沈線文で施文される。地文は単節RLである。24は口縁部が2列の爪形文で区画され、変形木葉文が平行沈線文で施文されてる。地文は単節RLである。25、28、31、32は口縁部が爪形文で区画されるものであり、25は多段の爪形文が施文され、28、32は単節RL、31はLRが施文される。22はII縁部まで現存する大型破片であり、単節RLの斜繩文が施文される。27は単節LRが施文されるが、末端の結節部分が施文される。26、29、30は単節RLが施文されている。



第129図 グリッド出土土器（2）

## 19号住居跡（第126図5、6、第128図1、2）

第126図6は埋甕であり、口縁部と底部を欠損する。文様帶は2本の平行沈線文で区画され、磨消繩文による連鎖菱形文が描出される。菱形文は、肋骨文の変形モチーフとして施文されており、縦位区画線施文の後、鋸歯状の肋骨文を施文することで、連鎖菱形文を構成し、最後に区画線上に円形竹管文を施文している。地文は単節のRLで、現存高22.4cmを測る。5は繩文のみ施文される深鉢で、口縁から底部まで現存する地文は単節RLである。器高13.2cmを測る。第128図2は肋骨文土器で、地文繩文LRの上に平行沈線文の肋骨文が施文される。1は単節RLが施文される大形破片である。

## (b)上墳出土土器

## 21号土壤（第128図3）

直立気味に開く口縁部破片であり、付加条繩文が施文される。

## 32号土壤（第128図4～7）

4、6は口縁部が爪形文で区画され、平行沈線文でモチーフが描出される。5は平行沈線文で木葉文が区画され、地文は単節RLが施文される。7は幅狭の爪形文が施文されるが、器面が荒れていたため、地文は不明である。

## 35号土壤（第128図8）

繊維を含む黒浜式土器であり、幅狭の爪形文が多段に施文されている。

## (c)グリッド出土土器（第128図9～23、129図）

グリッドからは少量の繩文土器が出土しているが、殆どが前期の土器であり、その大部分が諸磲a式であることから、ここでは一括して説明する。

第129図16、37、38は繊維を含む黒浜式であり、16は単節RL、37、38はRL、LRの羽状繩文が施文されている。

第128図9、14～18は肋骨文土器であり、地文繩文単節RLの上に平行沈線文で肋骨文を描出している。10～13は爪形文で口縁部が区画されるもので、10は円形竹管文が施文されている。20、21も爪形文が施文される。

22は肋骨文土器で、沈線区画文施文後、肋骨文、円形竹管文が施文されている。19は円形竹管文が垂下するもので、地文繩文単節RLの上に縦位の平行沈線文区画がガイドラインとして施文され、その上に斜めながらも円形竹管文列が施文される。23は副部で屈曲する器形を呈し、爪形文で区画されている。地文は単節RLである。

第129図は風倒木窓から出土した土器であり、グリッド一括遺物として扱うこととする。

8、21～24は爪形文で口縁部が区画されるもので、爪形文間は無文である。地文はいずれも単節RLである。25は条線文で肋骨文が、15は多段の波状文が施文されており、2は円形竹管文が垂下する。4、12、17は文様帶が爪形文で区画される。28、29は無文土器で、29は口縁に小突起が付く。他は繩文のみ施文される破片であり、30が結束の羽状繩文、11、31が付加条繩文、27が結節繩文が施文され、25が単節LRの他は単節RLである。

## (3)旧石器時代の石器

黒曜石製の細石刃が1点検出されている(第130図1)。19号住居跡(縄文時代前期)からの出土であるが、住居とは無関係の遺物であろう。細石刃は打点部を残し、下半部を欠失しているものである。下半部は折り取りによって失われたものである可能性が高い。表面には本細石刃の剥離に先行する細石刃剥離面が2面確認される。隣接する白草遺跡では真岩製の細石刃が大量に検出されているが、本遺跡の細石刃は白草遺跡とは若干様相を異にするようである。

## (4)縄文時代の石器

## (a)住居跡川土石器

## 3号住居跡

## 石鎌(第130図2)

6号住居跡は古墳時代の住居跡であり、砥石等の石器も検出されているが(後述)、1点の石鎌が検出されている。円基無茎の石鎌で形態等から判断して縄文時代に属するものであろうと思われ、6号住居跡に混入したものと考えられる。

## 10号住居跡

## 石斧(第130図3、4、5)

3点とも住居南縁中央部に集中して、敲き石(第131図1)とともに検出されている。3、4は磨製石斧で素材礫のはば全面に敲打による調整が施され、刃部周辺が集中的に研磨される。3は両刃、4は片刃で後者は斜刃となる。3の裏面中央部付近は研磨によると思われる凹みが横断しているが、着柄部である可能性がある。5は裏面を大きく残す剝片を素材とし、側縁および刃部周辺に剝離が認められる。剝離は概して雑で、未製品として把握することもできる。

## 凹み石(第130図7)

片面に節理面を大きく残し穢面と節理面によって鈍いエッジが形成されている。そこにも連続する加工が認められ、ややつぶれたような状態を呈しているため、エッジ部も使用された可能性がある。凹みは相接する形で2ヵ所認められるが、いずれも極めて浅いものである。

## 磨り石(第130図6、8、第131図4、5)

4、5は第131図3の石皿に接するように検出され、両者がセットで使用されていた可能性が考えられる。4、5共に磨り石としての主たる使用面は片面だけのようである。

## 敲き石(第131図9、10)

いずれも多数の敲打痕が広範囲に残るが、剝片剝離時の加熱の痕跡とは異なり、ややつぶれたような状態を呈する。9は3点の石斧に附まれて検出されている。3、4の石斧には多数の敲打痕が観察されており、敲き石と石斧の密接な関連が想起される。

## 石皿(第131図3)

一端がスキー状に反った形態の川原石を素材とし、よく使い込まれている。使用時には原形を保っていたものと思われるが、分割された状態で検出されている。

## 11号住居跡

## 敲き石（第132図1）

一枚の大きな剝離面とそれに隣接する2枚の小さな剝離面がいずれも先端方向からのものであり、研磨痕等も観察されないため敲き石の範疇で捉えたが、他の石器である可能性も残される。

## 12号住居跡

## 磨り石（第132図2）

扁平な縦が用いられ、一方の面が比較的よく使用されたようである。

## 13号住居跡

## 石斧（第132図3）

乳棒状の磨製石斧であるが刃部は欠損している。ほぼ全面に研磨が及んでいるが、一側縁に連続する敲打痕が残る。観察される敲打痕は刃部欠損後のものであろうと思われ、刃部再生を意図したものである可能性がある。

## 石皿（第132図4）

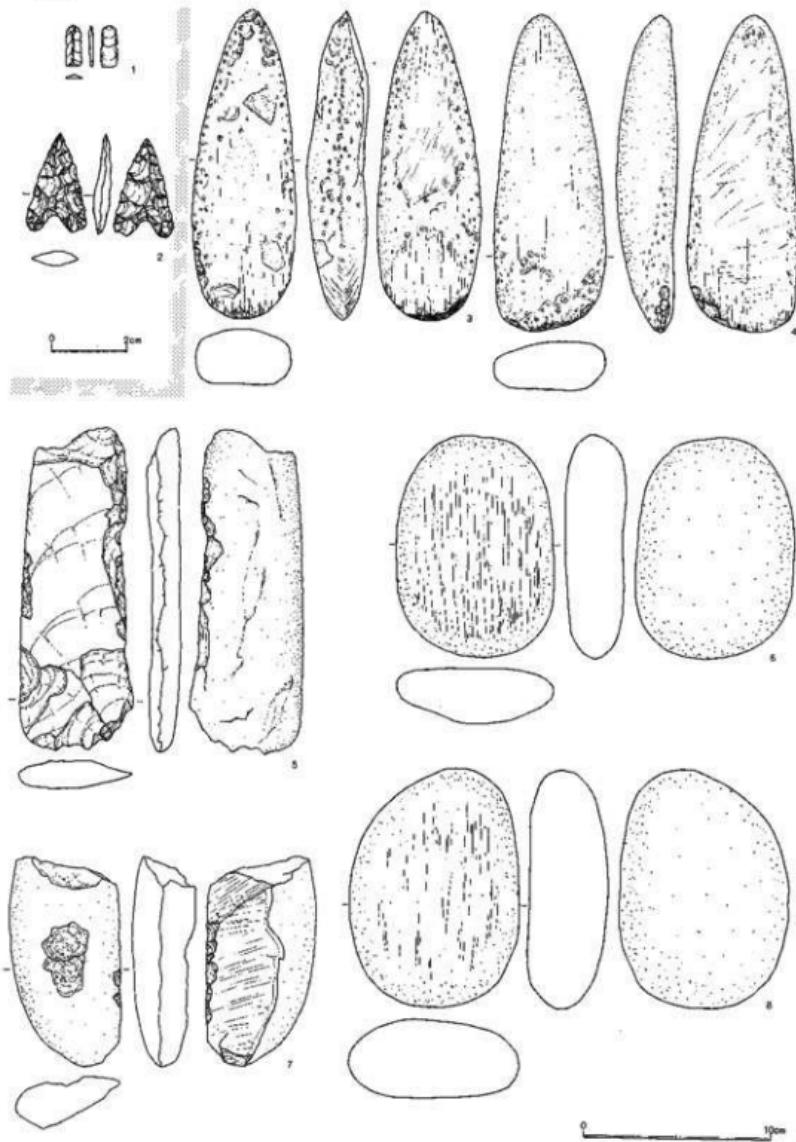
1/3程欠損しているが使用面は凹面をなしている。小形であるが石皿として認識しておく。

## 敲き石（第132図5）

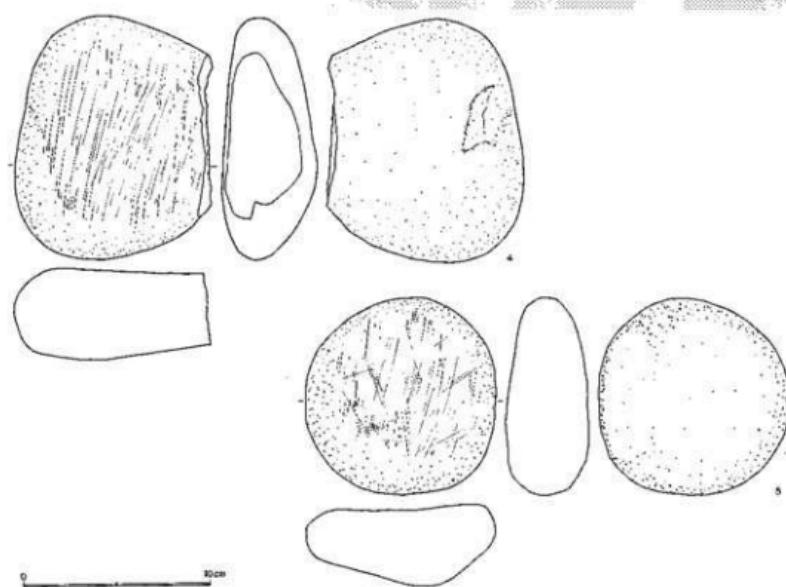
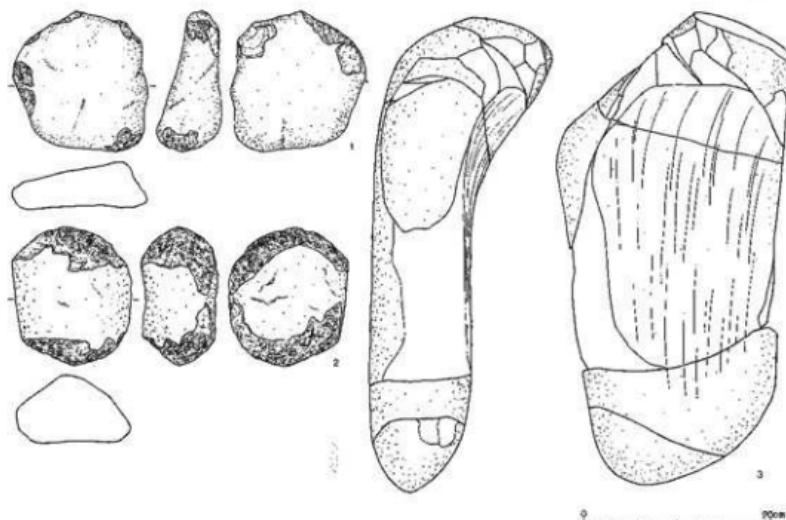
柱状の縦を用いた敲き石で、強力な加撃によって破損している。

番 号	注記番号	器 種	石 質	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
第130図1	S J19-1	細石刃	黒曜石	19号住	1.1	0.5	0.1	0.03	
2	S J 3-5	石鎚	チャート	3号柱	2.7	1.6	0.5	1.23	
3	S J 10-32	石斧	砂岩	10号住	16.5	5.7	3.3	440	
4	S J 10-83	石斧	砂岩	10号住	16.9	6.0	3.3	530	
5	S J 10-30	石斧	練泥片岩	10号住	17.3	6.1	2.0	260	
6	S J 10-73	磨り石	閃綠岩	10号住	12.0	8.5	3.3	520	
7	S J 10-61	凹み石	砂岩	10号住	11.2	6.0	3.5	260	
8	S J 10-69	磨り石	閃綠岩	10号住	12.8	9.2	4.3	720	
第131図1	S J 10-31	敲き石	チャート	10号住	7.4	6.5	4.2	300	
2	S J 10-84	敲き石	チャート	10号住	7.5	7.3	3.5	270	
3	S J 10	石皿	砂岩	10号住	51.0	24.5	20.0	26000	
4	S J 11-35	磨り石	花崗岩	11号住	13.0	10.7	5.1	990	
5	S J 11-37	磨り石	花崗岩	11号住	10.6	10.2	4.5	680	
第132図1	S J 11-55	敲き石	砂岩	11号住	23.0	14.3	4.7	2100	
2	S J 12-14	磨り石		12号住	10.1	8.6	2.6	310	
3	S J 13-9	石斧	練灰岩	13号住	14.7	4.0	2.5	200	
4	S J 13-25	石皿	砂岩	13号住	9.6	6.8	1.5	130	
5	S J 13-7	敲き石	練灰岩	13号住	7.8	3.4	2.9	80	

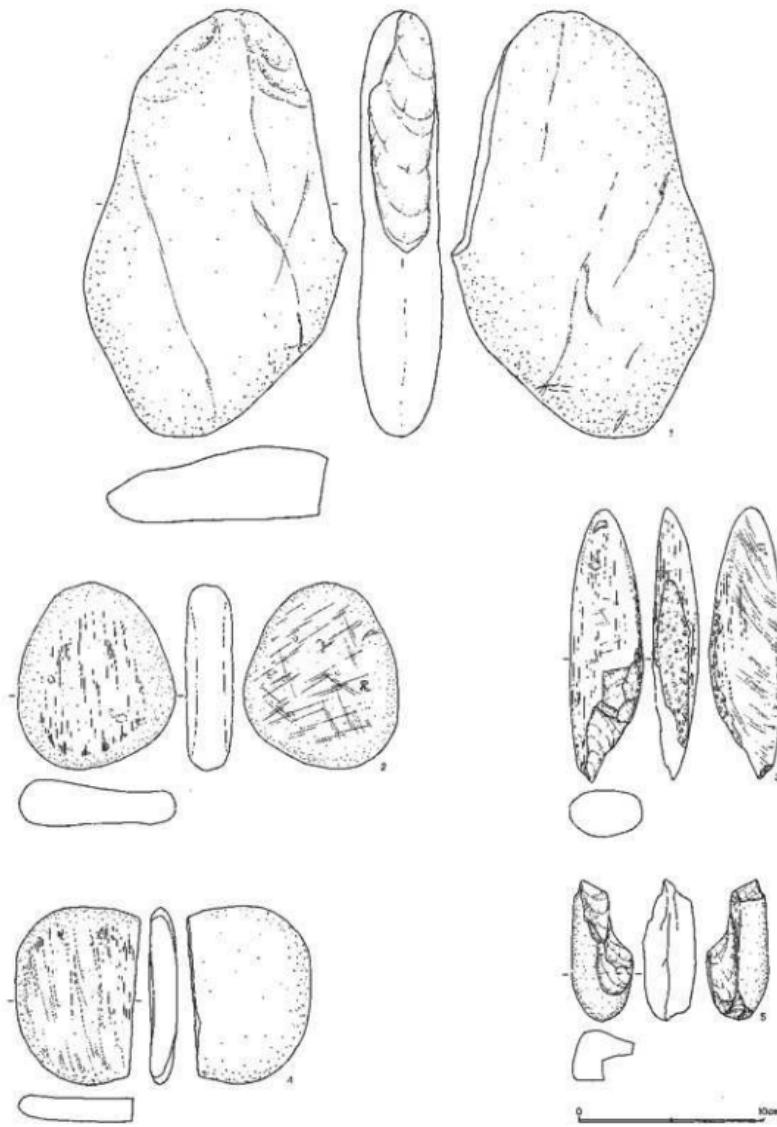
第8表 遺構出土石器一覧



第130図 造構出土石器（1）



第131図 遺構出土石器（2）



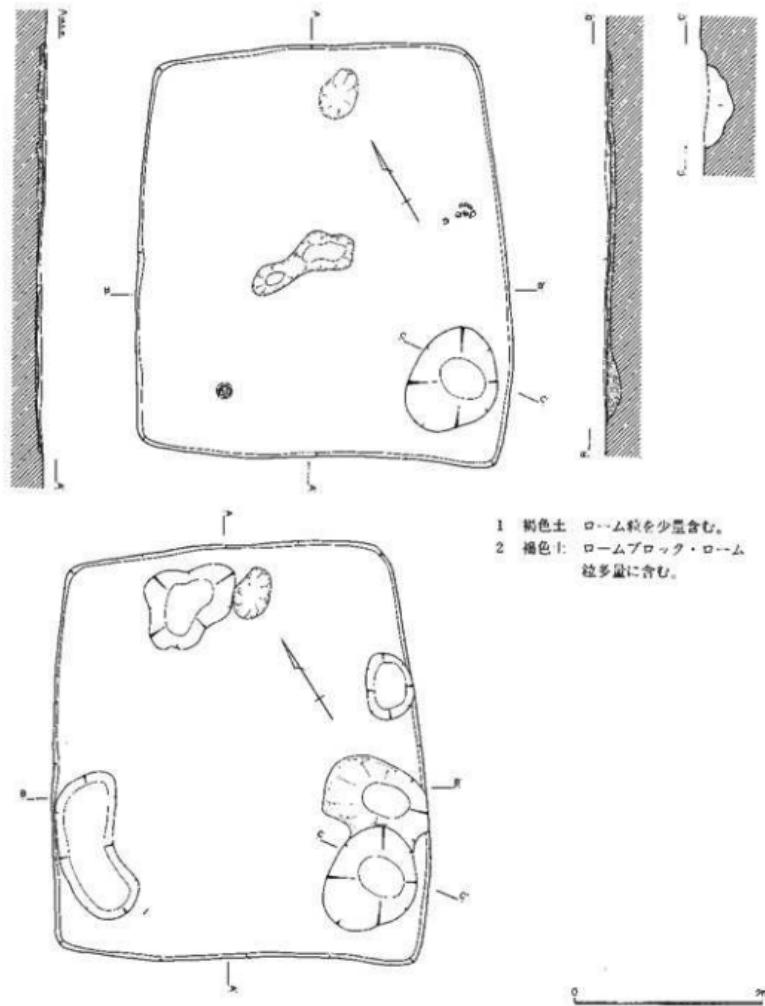
第132図 遺構出土石器（3）

## b 弥生時代の遺構と出土遺物

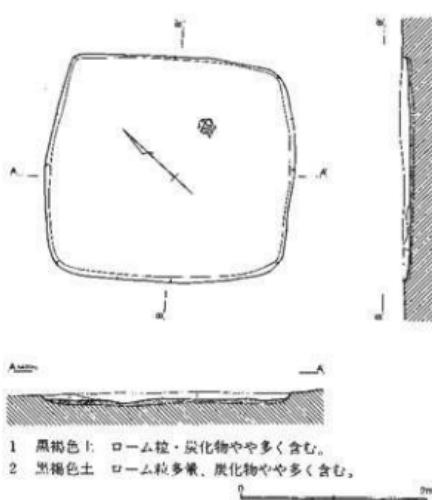
## (1)弥生時代の遺構

9号住居跡（第133図、遺物第138～141図）

9号住居跡は、南西に位置する20号住居跡とともに、遺跡北端部の住居群から南西に50m以上離



第133図 9号住居跡（下はホリカタ）



第134図 15号住居跡

いる。床面はおおむね平坦で、わずかな凹凸がある。遺物は少なく、床面上に甕の破片数点があるだけであった。

#### 15号住居跡（第134図、遺物第138図）

15号住居跡は12号住居跡の北西約10mに所存し、D48-M30グリッドに位置する。長辺2.38m、短辺2.00mを測り、不整方形を呈する。小規模で、無柱穴住居跡である。主軸方向はN-40°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とし、厚さ4~12cm、平均8cm程度である。ホリカタは3~7cm、平均5cm程度で、平らな掘り込みになっている。床面はわずかに凹凸がある。遺物は南東コーナー寄りに甕1点が出土したのみである。

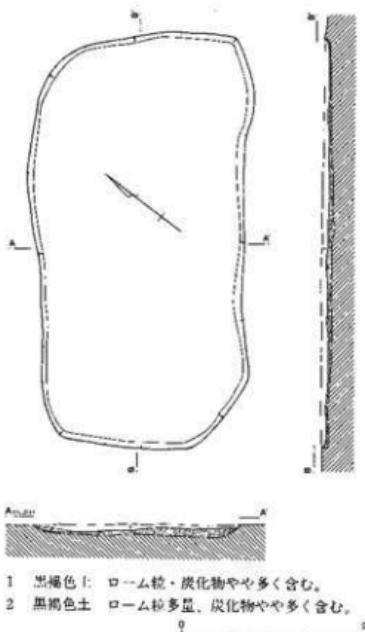
#### 16号住居跡（第135図）

16号住居跡は15号住居跡の北東約10mに所存し、D45-M26グリッドを中心とした区域に位置する。長辺4.40m、短辺1.40mを測り、不整隅丸長方形を呈する。一応、住居跡扱いするが、著しい不整形で無柱穴であり、他の住居跡と比較して住居跡と考える要素に乏しい。主軸方向はN-54°-Eである。覆土は浅く3~9cm、平均6cmであり、黒褐色土が主体である。平坦な床面でホリカタも浅く2~10cm、平均6cmの深さで、やはり平坦な掘り込みである。遺物はほとんどなく、図示できるものはない。

#### 18号住居跡（第136図、遺物第138・139・141図）

18号住居跡は15号住居跡の北北東15m、16号住居跡の北北西約10mに所存し、D42-M28グリッドを中心とした地域に位置する。長辺3.35m、短辺1.97mを測り隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-48°-Eである。北壁中央から内側80cmの位置に柱がある。長辺45cm、短辺27cmを測り、不整

れて所在し、間に北西方向から入り込む浅い谷を挟んでいる。E19-M44グリッドを中心とした位置にある。長辺4.38m、短辺3.33mを測り、台形に近い不整方形を呈する。主軸方向はN-30°-Eである。南東コーナーには倒卵形を呈する貯蔵穴状ピットがある。長辺1.18m、短辺0.95m、床面からの深さ32cmを測り、やや深い皿状の掘り込みである。北壁中央内側20cmには折跡かと思われる浅い皿状の掘り込みがある。長辺56cm、短辺40cm、深さ8cmを測る。それ以外付属施設はなく、無柱穴住居跡である。覆土は褐色土が主体で、厚さ2~6cmしか残存していない。ホリカタは2~22cm、平均5cm程度で、4ヶ所土壇状掘り込みになって



1 出褐色土 ローム粒・炭化物やや多く含む。  
2 黒褐色土 ローム粒多量、炭化物やや多く含む。

第135図 16号住居跡

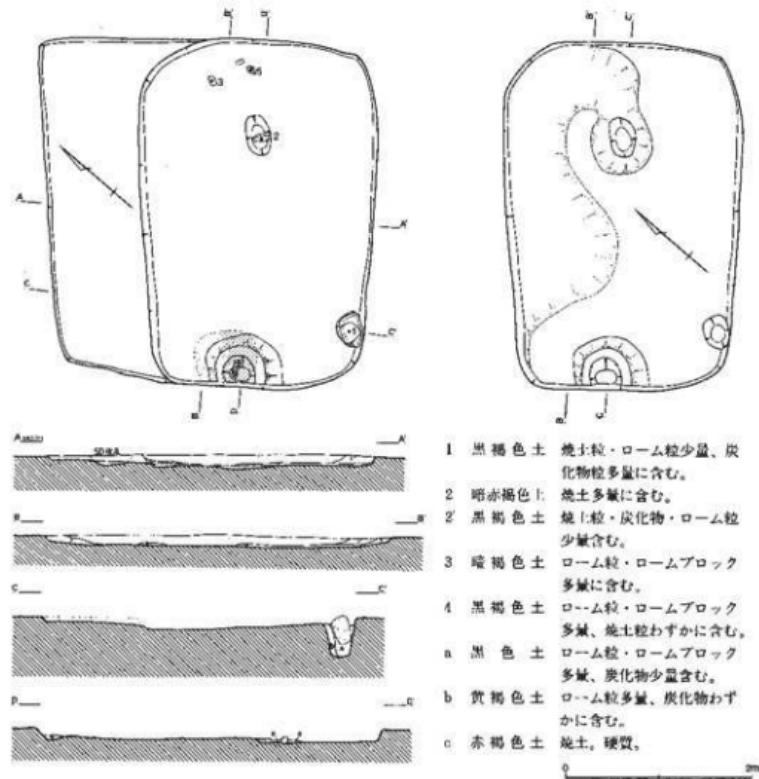
他の弥生時代住居跡と同様に遺物はごくわずかであり、上器片少量と石器4点が検出されたのみである。

#### 20号住居跡（第137図、遺物第138・141図）

20号住居跡は9号住居跡の西南西約10mに所在し、E23-M47グリッドを中心とした区域に所在する。長辺4.53m、短辺3.12mを測り、不整隅丸長方形を呈する。長辺の方向を主軸にとると、主軸方向はN-66°-Wである。短辺をとった場合は隣接する9号住居跡の主軸方向に近い値を示すことになる。南西コーナー内側90cmにはか跡がある。長径46cm、短径37cmの不整楕円形であり、深さ3cmの皿状掘り込みになっている。南東コーナー内側には貯蔵穴状の長方形ピットがある。住居跡の方向に対して斜めの方向で掘られており、ピットのコーナーが住居跡南壁に触れている。長辺77cm、短辺66cm、深さ32cmを測り、灰黒色土で埋まっていた。床面は北西方向にやや傾斜しているが、おおむね平坦であり、覆土は2~12cm、平均5cm程しか残存していなかった。覆土はやや灰色がかかった黒褐色土が主体であった。遺物はごく少量で、北壁沿いに鉢片などの土器3点と石器1点が出土している。

これらの住居跡以外の遺構としては16号土壙・28号土壙・29号土壙の土壙3基が弥生時代に属するものであるが、「その他の遺構と出土遺物」の項で述べることにする。

椭円形を呈する。皿状の掘り込みであり、焼土の厚さ2~4cmを測る。中央に石器が入り込んでいる。南壁中央内側やや西寄りに梯子穴状の浅いピットがある。深さ5cm程で、周囲に幅20~35cm、高さ2cmの緩い周堤がドーナツ状に巡る。このピットには小さい炭化材が内向きに傾斜して検出されており、ピットの上には55cm×70cmの範囲に薄い焼土の堆積が認められた。南東コーナーにも石器の入ったピットがあり、長径36cm、短径28cm、深さ35cmを測る。柱穴風であるが、対応するピットは1本もなく、屋根材を支えるという意味の柱穴とは考えられない。住居跡覆土は黒褐色土で厚さ4~12cm、平均9cmを測る。床面は平坦で、西半分に浅いホリカタを持つ。深さは2~4cmで炉の周開と西壁際ににおいてやや顯著な掘り込みとなっている。西壁の外に幅約1mの帯状の擾乱があり、当初この部分も住居跡の内部と考えて方形プランを予測したが、床面踏査によって長方形・無柱穴の小さな住居跡であることがわかった。



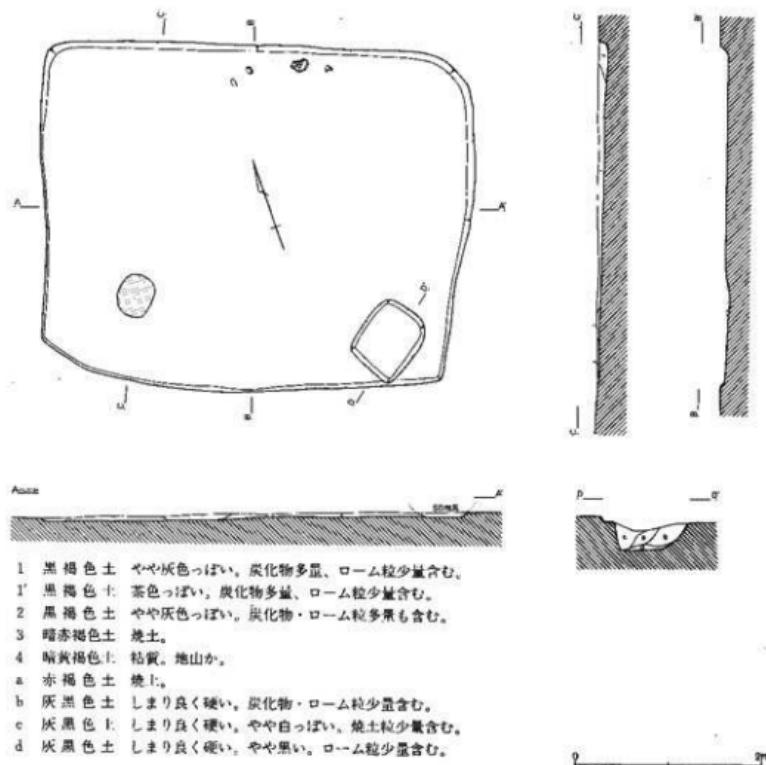
第136図 18号住居跡(右はホリカタ)

## (2)弥生時代の出土遺物

円阿弥遺跡から出土した弥生時代の遺物はきわめて少なく、甕・鉢などの土器類・手捏土器・石器等が少數出土したにすぎない。いずれも弥生時代後期吉ヶ谷期に属するものである。以下に遺構別に述べておきたい。

## 9号住居跡(第138図1~4、第140図)

9号住居跡の出土遺物で図示することができたのは、弥生土器甕1・手捏土器1および甕小破片(拓影)4であった。第138図1は甕の口縁部から頸部の破片である。口径14.4cm、残存部の器高4.9cmを測る。頸部から口縁部は外反して立ち、口唇部は尖り気味。頸部以下は欠いているが、やや胴が膨る器形であろう。外面は無節繩文で口唇部にも原体の押捺がある。内面はヘラミガキである。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。焼成良好。橙褐色。外面は炭化物吸着で黒変する。20%残存、口縁部4/5。No.1。



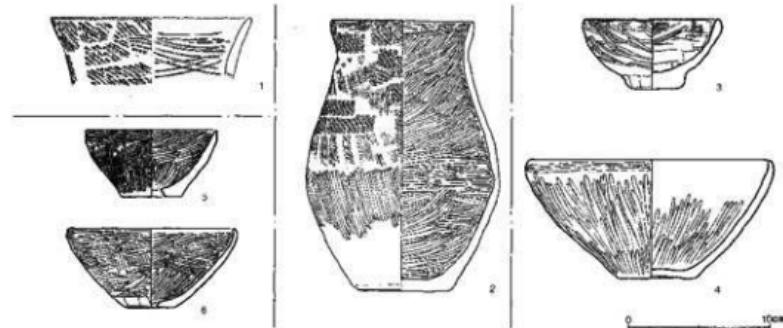
第139図 20号住居跡

第139図1～4はいずれも甕の胴部の破片でR-L単節縄文が施される。4は口径14.7cmを測る。

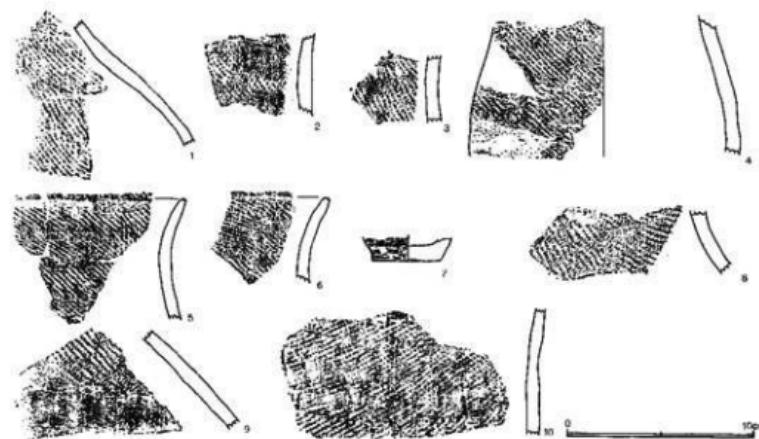
第140図は手握上器で器台を模したものである。口径3.2cm、底径3.1cm、器高2.4cmを測る。口縁部は外傾し、口唇部は尖り気味。体・底部でゆるくくびれ、台部もゆるく「ハ」の字に開く。底部の内側は径1.2cmで、ヘラで抉りとるように穿孔されている。外面ともヘラナデ、外面はその後ユビナデか。胎上細。ザラつく。石英の微細粒多量に含む。淡橙褐色。焼成良好、硬。完形。No.5。

#### 15号住居跡（第138図2）

15号住居跡からは弥生土器甕1個体が出土した。横倒して出土したためか縦方向に欠損して約50%残存していた。口径10.2cm、胸径13.9cm、底径6.3cm、器高19.2cmを測る。口縁部はゆるく外傾し、口唇部は尖り気味。頸部はゆるく屈曲し、胴部は中位よりやや下で最大径を持つ。ゆるくくぼまり、平底の底部へ移行。外面はR-L単節縄文が施された後タテハケ、胴下半はタテヘラミガキ



第138図 弥生時代遺構出土土器（1）



第139図 弥生時代遺構出土土器（2）

が施される。口縁部は原体押捺、その直下はヨコハケが施される。内面はヘラミガキである。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、片岩質・石灰質の小石やや多量に含む。橙褐色。胴下半は焦げ付きのため黒変。焼成良好。№1・14仕カマ№9。

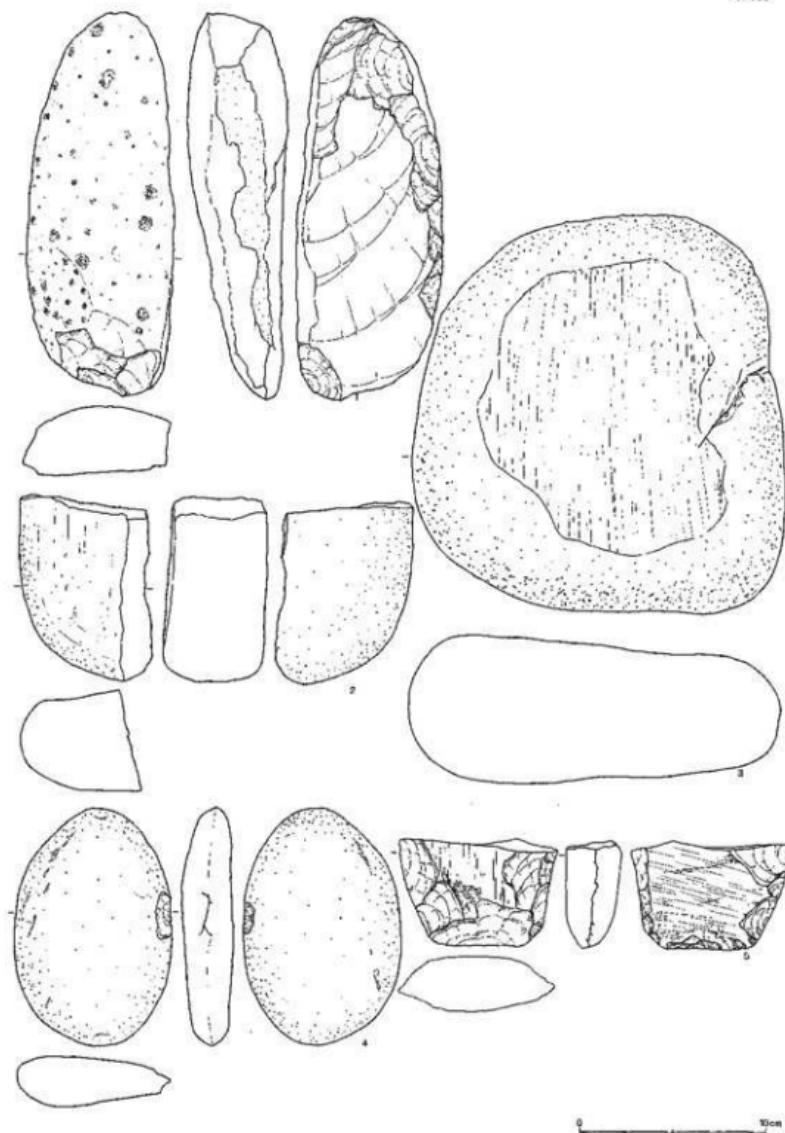
## 16号土壙（第139図 8）

16号土壙からは弥生土器甕片1点が図示できたにすぎない。頸部から胴部にかけての破片で、外面上R.L半節縄文が施文される。やや方向性に乱れのある施文である。

第140図 9号住居跡  
出土 手捏土器

## 18号住居跡（第139図 5～7、第141図 1～4）

18号住居跡からは弥生土器甕口縁部片2・底部片1・石器4を図示する



第141図 弥生時代遺構出土石器

ことができた。口縁部破片はRL繩文を施文するが、5は整然とした施文、6はやや乱れている。7は径3.7cmの小さな底部で内外面ともよくナデられている。第141図1は石斧で長さ20.7cm、幅8.0cm、厚さ5.5cm、重さ1,230gを測る。大型礫から剝離された剝片を側縁および末端からの剝離と礫面への敲打によって整形する。No.2。2は石皿で1/4の欠損品で、使用に伴う凹面が形成されている。残存部は長さ10.0cm、幅7.4cm、厚さ5.6cm、重さ540gを測る。No.5。3は完形の石皿であり、大型礫の片面を使用している。凹面は形成されていないが、面にわずかな光沢がある。長さ21.6cm、幅20.4cm、厚さ7.9cm、重さ5,400gを測る。No.1。4は敲き石で、扁平礫の側縁に1ヶ所表裏に剝離面がある。先端・末端は使用されていない。長さ12.8cm、幅8.5cm、厚さ2.9cm重さ450gを測る。No.3。

#### 20号住居跡（第138図3・4、第141図5）

20号住居跡からは弥生土器鉢2点・石器1点を図示することができた。第138図3は小型鉢である。口径9.7cm、底径3.8cm、器高5.0cmを測る。器壁は厚く、体部へ口縁部は内湾して立ち上がるため、丸い器形。底部は突出する平底で分厚い。口縁内外面ヨコナデで、ハケ目のような痕跡残る。口縁部へ体部外面へラケズリ後やや粗いヨコ・ナナメヘラミガキ、体部下端外面ヨコヘラナデ、底部外面タテヘラナデ平滑、底面へラケズリ、体部内面ヨコヘラケズリ。口縁部内面に粘土帯接合痕あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、小石多量に含む。橙褐色。焼成良好。85%残存。No.2。4は大型の鉢で、口径17.2cm、底径5.6cm、器高8.5cmを測る。体部へ口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はさらに内湾して尖る。体部下端で屈曲し、上げ底風平底の底部に移行する。内外面へラミガキか。器表面が風化して不明瞭。底面へラナデ。胎土細。ザラつく。角閃石・石英・雲母風粒子などの微細粒多量、片岩系小石多量に含む。灰褐色。内外面赤彩か。焼成良好。50%残存。No.3。第141図5は石斧で、上半部を大きく欠損する。側縁および末端からの剝離の後、表面にわたって研磨される。一部に被熱の痕跡がある。

#### 29号土壙（第138図5・6、第139図9・10）

29号土壙からは弥生土器鉢2点、壺片1・壺片1を図示することができた。第138図5は小型の鉢で、口径9.4cm、底径4.2cm、器高4.8cmを測る。全体的にやや厚い。体部へ口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部は尖る。体部下端で屈曲し、平底の底部に移行する。外面は口縁部ヨコヘラミガキ、体部ナナメ・タテヘラミガキ、底面へラケズリ、内面は口縁部へ体部上半ナナメヘラミガキ、体部下半タテヘラミガキ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、石灰質細粒や多量に含む。橙褐色。底面以外内外面赤彩。焼成良好、硬。25%残存。口縁部1/3。No.3。6は中型の鉢で、口径12.0cm、底径3.6cm、器高5.7cmを測る。体部へ口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部はさらに内湾して尖り気味。体部下端はゆるく屈曲し、小さな丸底の底部に移行。口縁部内外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキ、外面は口縁部へ体部ヨコヘラミガキで一部ハケ目残存、体部下端へラナデ、底面へラケズリ、内面は口縁部へ体部上半ヨコヘラミガキ、体部下半タテヘラミガキ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、小石や多量に含む。橙褐色。一部赤褐色気味。赤彩風の効果を考えた焼きか。焼成良好、硬。25%残存。No.5。第139図9は壺頸部の破片でRL単節繩文を帶状に施文し、その下はよく磨かれる。10は壺片でRL単節繩文が整然と施文される。

## c 古墳時代の遺構と出土遺物

## (1)古墳時代の遺構

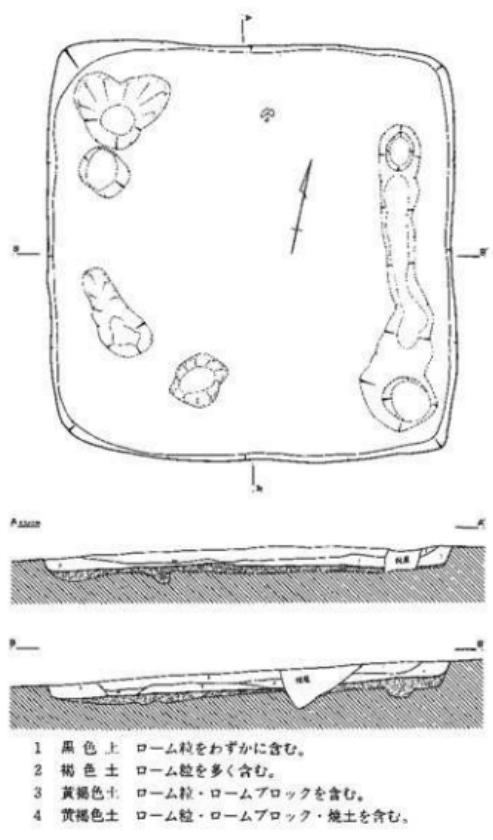
## 1号住居跡(第142図、遺物第151図1・2)

1号住居跡は遺跡南端部付近に所在する。南端部付近には古墳時代を中心とした7軒の住居跡群がある。F05-M22グリッドを中心とした区域に位置する。一辺4.2cmを測り、かなり整った隅丸方形を呈する。主軸方向はN-12°-Wである。床面精査時には柱穴は確認されず、ホリカタ検出時に柱穴状ピットを3本検出している。床面からの深さは北東コーナー内側のピットが36.8cm、南東コーナー内側ピット41.0cm、北西コーナー内側ピット27.5cmを測る。この他に不整形のピット3

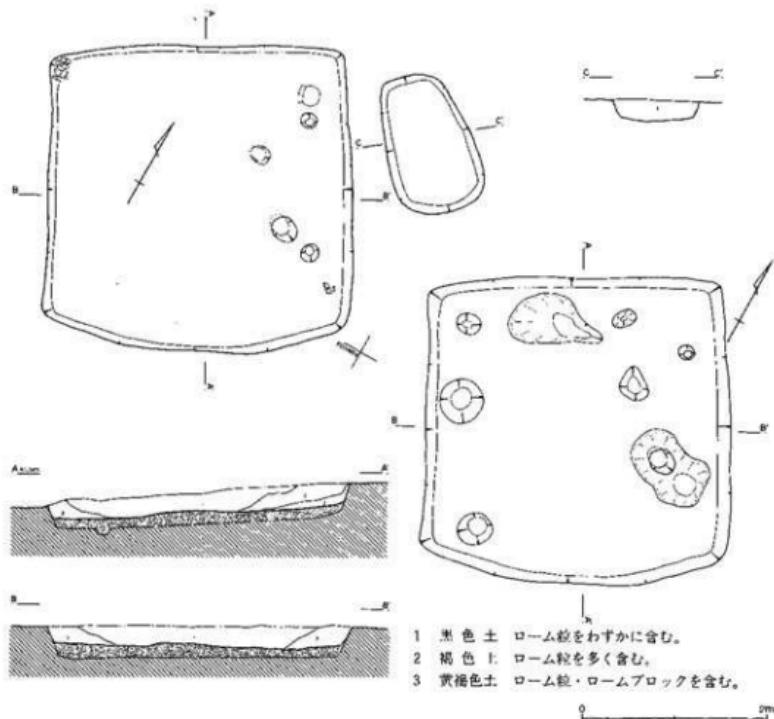
本があり、それ深さ17.5cm、18.5cm、19.5cmを測る。柱穴状ピットと不整形ピットのすべてをホリカタの一部と考えるならば、無柱穴の住居跡ということになる。床面は平坦面に近いが、地形に沿った傾斜を持つ。覆土は黒色土主体で厚さ15~20cmである。ホリカタも平坦な掘り込みであり、北東ピットと南東ピットの間に溝状の掘り込みを有する。ピットを除いてホリカタの深さは最深20cm、平均8~10cmである。遺物は僅少であり、北壁中央部から70cmの覆土中に高环片、住居中央付近の覆土中から埴的小破片が検出されたのみである。

## 2号住居跡・4号土壤(第143図、遺物第151・157図)

2号住居跡は南端部付近住居跡群中にある。1号住居跡の東17mに所在し、F04-M14グリッドに位置する。長辺3.35m、短辺2.8mを測り、南壁がやや外に張り出し気味の不整形方形を呈する。主軸方向N-29°-W



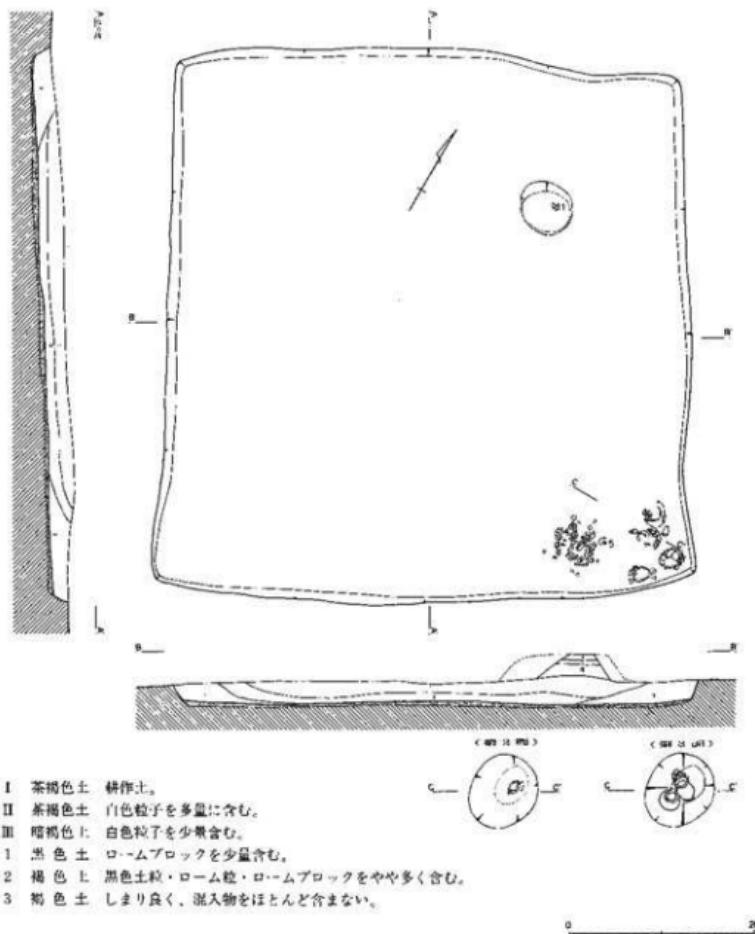
第142図 1号住居跡



第143図 2号住居跡・4号土壤 (右下はホリカタ)

である。東壁寄りにピット4本が検出されているが、床面からの深さは北東4cm、北西21.5cm、南東20cm、南西35.5cmであり、南北側の径がいちばん大きいものが柱穴風である。ホリカタ検出時にもピット5本が検出した。不整形になる北壁中央寄りのピットを除く4本の床面からの深さは北東13cm、北西コーナー35.9cm、西壁中央30.1cm、南西コーナー25.3cmであり、西壁沿いの3本が柱穴風であった。合計8本のピットの位置関係からは定型的な柱穴配置を想定できないので、すべてを柱穴とすることはできないであろう。覆土は18~25cmであり、黒色土を主体とする。床面はおおむね平坦で若干凹凸がある。傾斜は南北方向に顕著である。ホリカタはやはり平坦で深さ10~15cm程度である。4号土壤は2号住居跡付属土壠としたものであり、2号住居跡東壁の東40cmに壁の方向を揃えて所在する。長径1.55m、短径1.00m、深さ25cmを測り、小判形に近い不整形円形を呈する。2号住居跡と同じくF04-M14グリッドに位置し、主軸方向N-48°-Wである。覆土は黒色土でやはり2号住居跡と同じ上壤である。

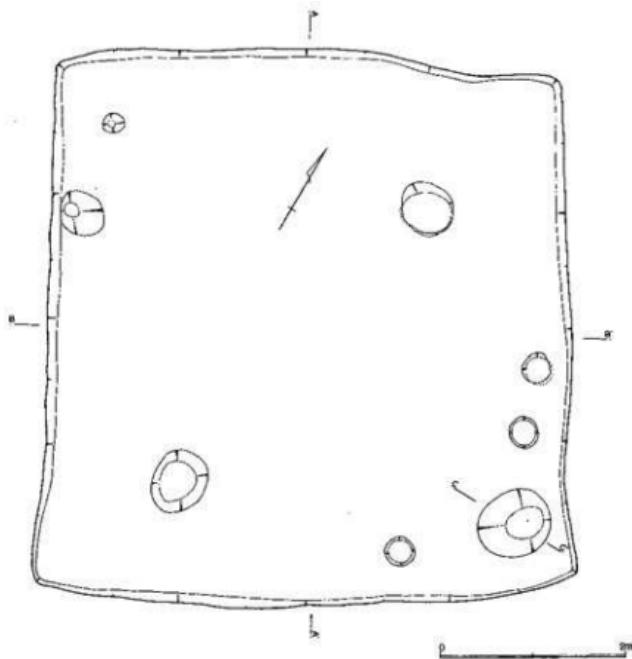
2号住居跡の遺物は多くなく、北東コーナーに甕、北西コーナーに鉢、住居中央に散在する甕片が出土している。



第144図 3号住居跡

## 3号住居跡（第144・145図、遺物第152・153・157図）

3号住居跡も南端部住居跡群の中に所在する。1号住居跡の北北東約10m、F00-M20グリッドを中心とした区域に位置する。長辺5.88m、短辺5.34mを測り、やや不整な方形を呈する。南端部住居跡群中最大の住居跡である。南東コーナーに貯蔵穴状ピットを有する。長径80cm、短径70cm、床面からの深さ46.8cmを測り、不整楕円形を呈する。床面精査時にはこれ以外には北東コーナー内側1.7mにある床面からの深さ62cmを測る柱穴状ピットが確認されただけである。ホリカタ検出時



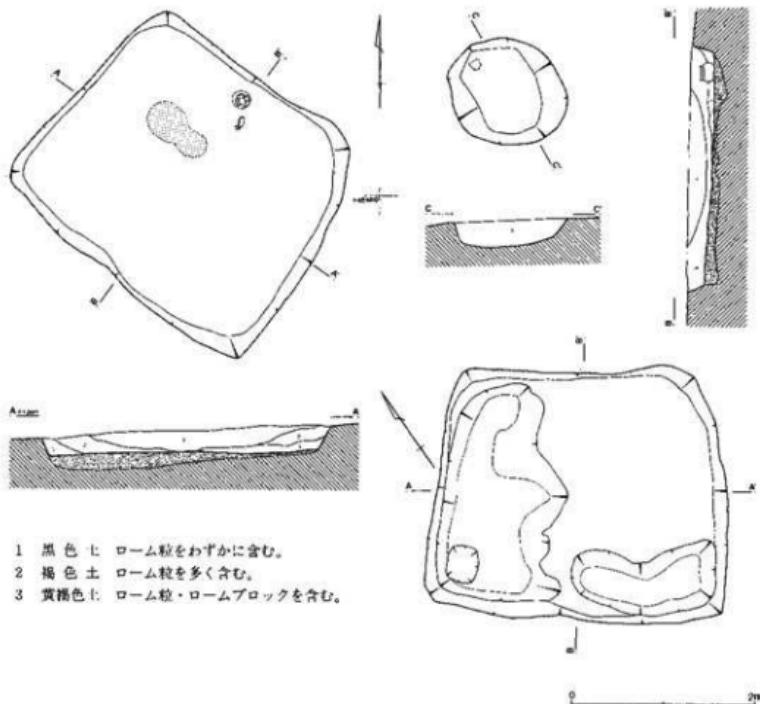
第145図 3号住居跡ホリカタ

には、さらにビット 6 本が検出された。床面からの深さは東壁中央 42.6cm、東壁際貯蔵穴北側 30.5 cm、南壁沿い貯蔵穴西側 19.7cm、南西コーナー内側 42.7cm、北西コーナー内側 16.4cm、西壁際北寄り 28.5cm を測る。四本柱穴としてとれば平行四辺形のようにならんだ形になる。住居主軸方向は N-30°-W である。覆土は黒色土主体で、厚さ 23~32cm である。床面はおおむね平坦で、南北方向に斜面に沿ったゆるい傾斜がある。ホリカタも平坦で浅く、2~7cm 程度である。

遺物は貯蔵穴内に鉢 1・甕 2 の 3 点がすっぽり納まるように入り込んでおり、その直上・周囲にも壺・甕類が集中的に出土している。他の場所からはほとんど出土していない。

#### 4号住居跡・5号土壤（第146図、遺物第154図）

4号住居跡は 3号住居跡の東北東約 30m にあり、E44-M10 グリッドを中心とした区域に位置する。長辺 3.14m、短辺 2.48m を測り、台形に近い不整長方形を呈する。主軸方向は長軸をとると N-53°-W である。西壁から 70cm 内側の、住居中央からやや西壁寄りに炉跡がある。長径 75cm、短径 38cm を測り、ヒョウタンを倒したような形を呈する。掘り込みはほとんどなく、焼土分布も弱くはっきりしない。柱穴・貯蔵穴などの付属施設は検出されなかったが、ホリカタ検出時に南西コーナーに長径 40cm、短径 33cm、深さ 14cm のビットが検出されている。覆土はほとんど黒色土であり、

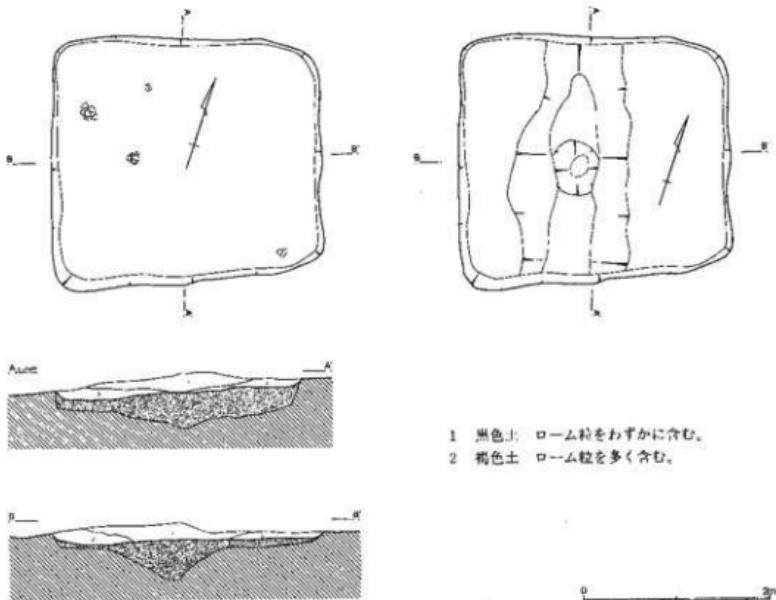


第146図 4号住居跡・5号土壤（右下はホリカタ）

厚さ19~30cm、平均25cmを測る。床面は平坦であるが、ホリカタは斜面の傾斜に沿って傾斜している。床面造成時に傾斜の修正をしているようである。ホリカタは3~18cmの深さであり、平均12cm程度である。ホリカタは大きく二つの掘り込みに分かれ、西壁沿い・南壁沿いに不整形にゆるく掘られている。付属土壤である5号土壤は4号住居跡の東1.3mにあり、E44-M09グリッドに位置する。長径1.32m、短径1.12m、深さ28cmを測り、不整橢円形を呈する。主軸方向はN-57°-Wであり、4号住居跡の主軸方向に近似している。覆土は黒色土で4号住居跡と同様な土壤である。遺物は北壁中央内側の床面上から甕2点、覆土上層から高环片・台付甕片などが出土している。

#### 5号住居跡（第147図、遺物第155図1・2）

5号住居跡は4号住居跡の北7mにあり、E41-M11グリッドを中心とする区域に位置する。長辺2.80m、短辺2.08mを測り、やや台形気味の隅丸長方形を呈する。主軸方向は長軸をとるとN-69°-Eである。小型・無柱穴の住居跡であり、付属施設はない。覆土は大半が黒色土で、厚さ5~21cm、平均16cmである。床面はおおむね平坦でやや凸凹があり、斜面に沿って傾斜している。



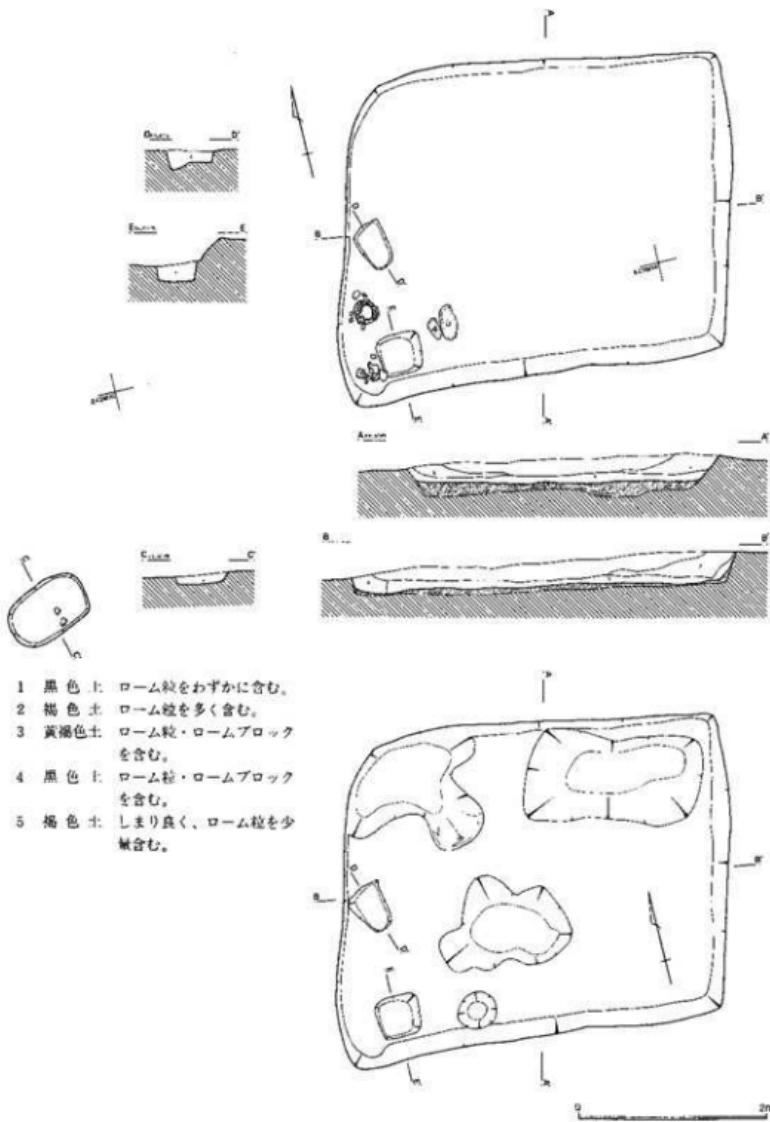
第147図 5号住居跡（右はホリカタ）

ホリカタは中央が南北方向に溝状に深くなり、それ以外はほぼ平坦に掘られている。最も浅い部分で3cm、最深部で44cmで、平均10~15cmを測り、深い部分は木の根の擾乱がかなりありそうである。

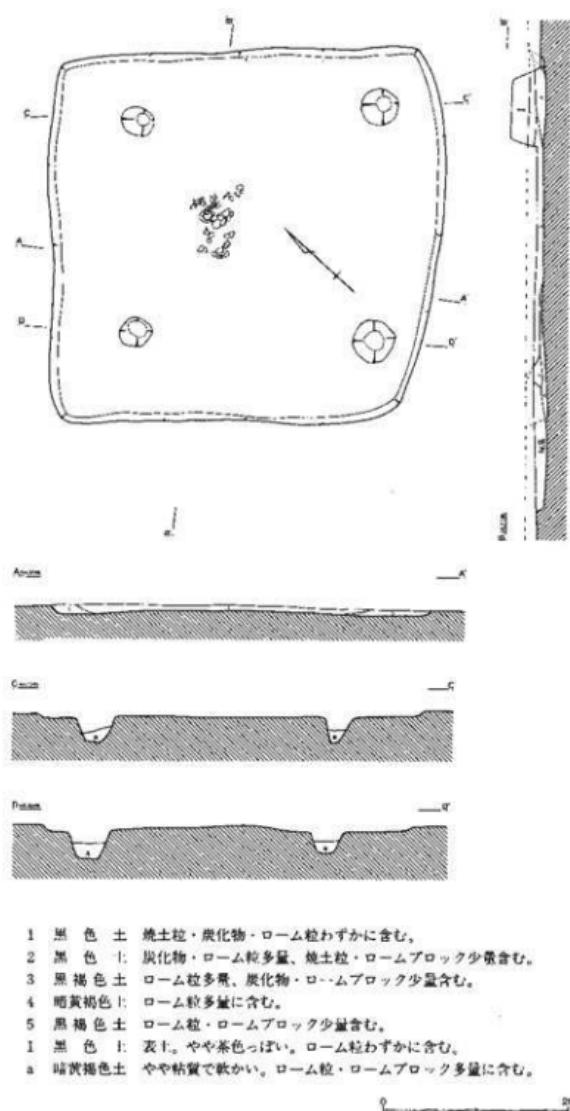
遺物は少なく、住居中央やや西壁寄りに甕片、南東コーナー付近に甕底部片、西壁寄りに甕胴部片（図示不能）などが出土している。

#### 6号住居跡・3号土壤（第148図、遺物第155・157図）

6号住居跡は5号住居跡の西6mに所在し、E42-M14グリッドを中心とした区域に位置する。長辺3.96m、短辺3.10mを測り、台形に近い不整長方形を呈する。主軸方向は長軸をとるとN-84°-Wである。南西コーナー内側に方形の貯蔵穴状ピットがあり、長径47cm、短径44cm、床面からの深さ22cmを測る。また、西壁際中央付近にも長径55cm、短径33cm、床面からの深さ20cmの不整長方形を呈するピットがある。覆土は黒色土が大半で厚さ12~35cm、平均26cmである。床面はやや凹凸があるが、おおむね平坦で斜面に沿って傾斜している。ホリカタは不整長方形の土壤状掘り込みが北西コーナー、北壁沿い東寄り、床面中央やや南寄りの3ヶ所にあり、南壁沿いにも径40cm、床面からの深さ16.7cmのピット状掘り込みがある。やや浅めに掘られている部分はやはり傾斜に規制されている。深さ2~17cm、平均8cm程度である。付属土壤の3号土壤は6号住居跡の西南西3.5mにあり、E43-M16グリッドに位置する。長径90cm、短径58cm、深さ9cmを測り、不整楕円形を呈する。主軸方向はN-69°-Eである。



第148図 6号住居跡・3号土壤



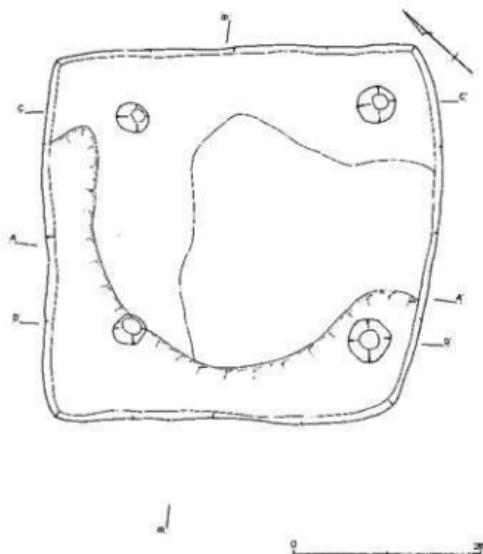
- 1 黒色土 焼土粒・炭化物・ローム粒わずかに含む。
- 2 黒色土 炭化物・ローム粒多量、焼土粒・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒多量、炭化物・ロームブロック少量含む。
- 4 明黄褐色土 ローム粒多量に含む。
- 5 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。
- 1 黑色土 表土。やや茶色っぽい。ローム粒わずかに含む。
- a 明黄褐色土 やや粘質で軟かい。ローム粒・ロームブロック多量に含む。

第149図 17号住居跡

6号住居跡の遺物はやはり少なく、南西コーナーの貯蔵穴と壁の間に壺・甕、そのやや北方の西壁沿いに壺が検出された程度であった。また、3号土塹からも土器片2点が出土しているが、そのうち1点はS字状口縁台付甕の口縁部であつた。

17号住居跡(第149・150図、遺物第156図)

17号住居跡は遺跡北端部住居跡群の最北端で検出されており、18号住居跡の北東約13mにあり、D38-M23グリッドを中心とする区域に位置する。長辺3.88m、短辺3.64mを測り、東壁がやや外に張り出し、若干歪んだ隅丸形を呈する。主軸方向はN-49°Eである。割合整った四本柱穴で、各柱穴の床面からの深さは北東27cm、南東22cm、北西27cm、南西31cmを測る。床面中央には炉跡があり、



第150図 17号住居跡ホリカタ

遺物は少なく、前述の炉跡に据え置かれた壺口縁部とその周間に散乱していた壺の破片2個体分が検出されただけである。

## (2)古墳時代の出土遺物

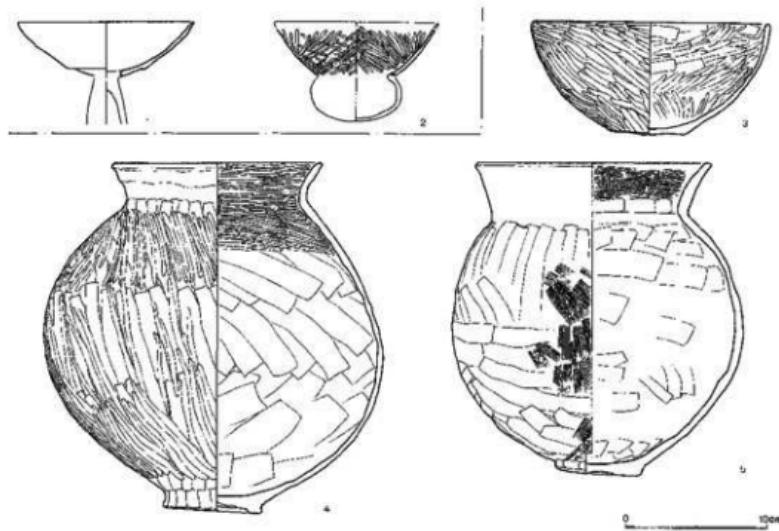
円阿弥遺跡から出土した古墳時代の遺物は土器類と砥石などのわずかな石器類である。これらはすべて古墳時代前期の五領期に属する遺物である。この項では住居跡・土墳出土の遺物について述べることにする。グリッド出土遺物にもこの時期の遺物が含まれているが、これについては「その他の遺構と出土遺物」の項で記述する。以下遺構ごとに示したい。

### 1号住居跡（第151図1・2）

1号住居跡からは小破片2点を図示することができた。第151図1は高环で、杯部のみの破片である。口径12.5cm、残存部の器高3.9cmを測る。口縁部は内湾気味に大きく外に開き、口唇部は尖る。杯部の下端には稜がある。脚部はかなり細いと思われる。口縁部内外面ヨコナデ、杯部内面ヘラナデ、杯部外面ヘラナデ後タテヘラミガキ、杯底部外面ケズリ後ナデか。摩滅して痕跡不明瞭。胎上細。摩滅して粉っぽい。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。椿褐色。焼成良好。30%程度残存、杯部2/5。No.1。

2は堆の口縁部の小破片である。口唇部・脚部は欠いており、復元して図示した。推定口径11.7cm、残存部の器高3.3cmで、全体でも7cm程度の器高であろう。口縁部は大きく外に開き、内湾気

壺の口縁部破片を逆位で据え置いて器台とし、周囲の床面には掛け置かれていたと思われる壺の破片が散乱していた。この散乱部分には焼土・炭化物を多量に含む黒褐色土が広がっていた。炭化材は確認されていないが、火災を起こした住居跡かもしれない。覆土は5~10cm程度しか残存していないかった。黒色土主体である。床面はおおむね平坦で若干の凹凸がある。ホリカタは西壁および南壁沿いを幅50~120cm程度の範囲を中心に3~5cm平均で浅く掘り下げている。最も深い部分でも7cm程度しか下がっていない。また床面中央から東壁方向に薄い粘土貼り床が広がっている。



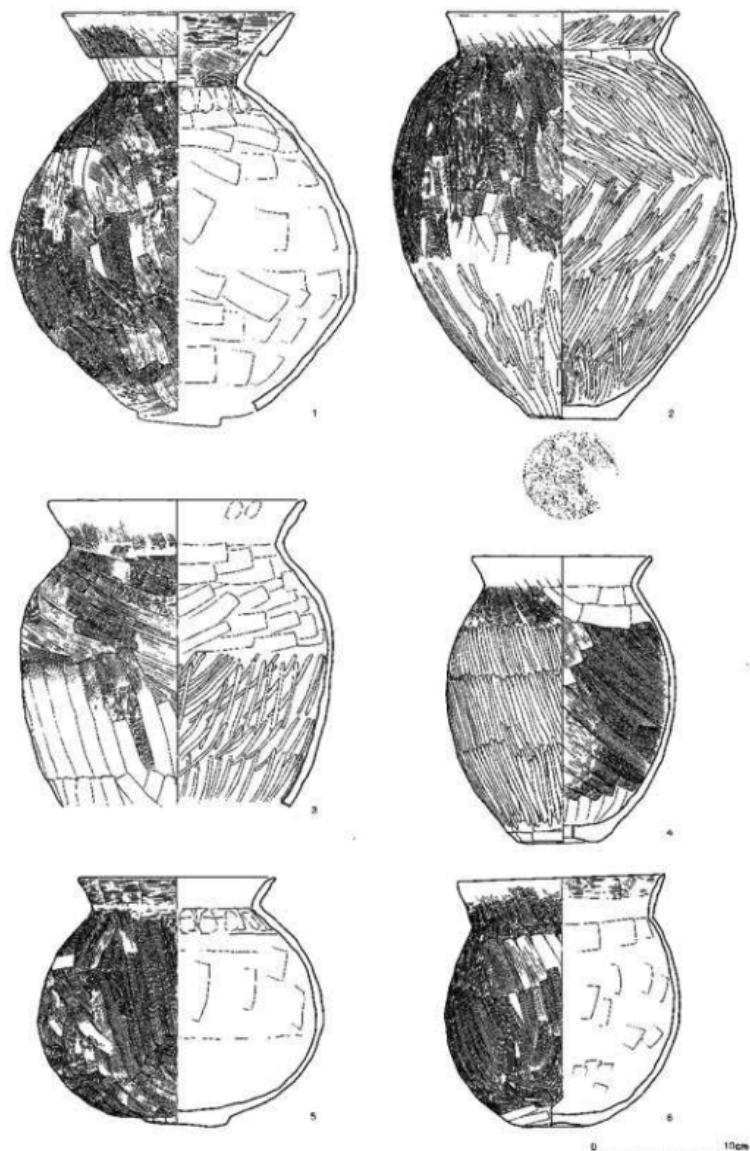
第151図 1・2号住居跡出土土器

味である。おそらく口唇部は尖り、胴部と口縁部の境は強く屈曲する。胴部は小さく丸胴・丸底であろう。口縁部外面は細かいタテハケの後、斜格子状にヘラミガキ、内面は滑なナナメヘラミガキである。胎土細。角閃石・石英などの微細粒やや多く、精選された土である。淡褐色。赤彩的効果のある色調である。焼成良好、硬。10~15%程度残存。覆土川十。

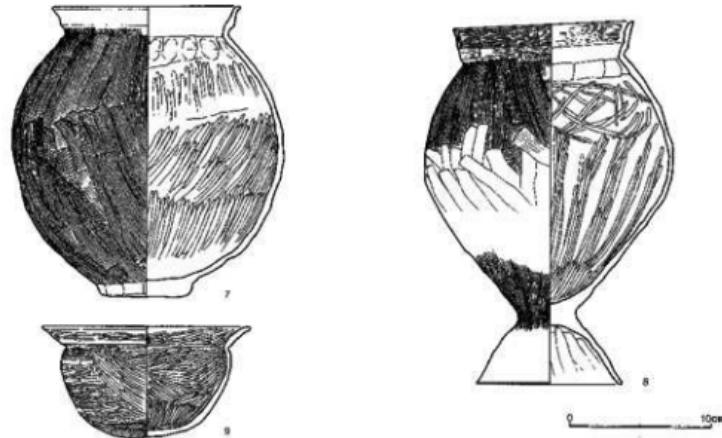
#### 2号住居跡（第151図3～5）

2号住居跡からは鉢1点・甕2点が図示することができた。第151図3は半球形の鉢である。口径16.9cm、底径5.8cm、器高8.0cmを測る。薄い器壁。全体的に丸く内湾し、口縁部は直立する。口唇部は上方に面を持つ。体部と底部の境はゆるく屈曲し、ケズリ出しの稜線で分けられる。口縁部～体部外面密なナナメヘラミガキ、内面へラケズリ後ナナメヘラミガキ、底面へラケズリ。胎土細。角閃石微細粒少量、長石風の小石・微細粒多量に含む。淡褐色で赤味薄い。焼成良好、硬。90%残存で、ほぼ完形である。No.3。

4は甕であり、住居中央に散乱して検出されたものである。口径15.0cm、胴径24.3cm、底径7.1cm、器高24.9cmを測る。口縁部は外反して立ち、口唇部はつまみ出し気味で丸い。頸部は「く」の字に屈曲し、内面には屈曲部の稜線がある。胴部は大きく張り出す。胴部中位に最大径があり、やや歪んだ球形胴を呈する。底部はドーナツ状の粘土貼り付けによる上げ底状に作られる。口縁部～頸部外面ヨコナデ、口唇部～胴部上位内面ヨコヘラミガキ、それ以下の胴部・底部内面へラケズリ後ヘラナデ丁寧、胴部外面タテヘラケズリ後タテ・ナナメヘラケズリ、頸部・底部突出部外面・接地面へラケズリ、胴部下端外面へラケズリ後ナデ。胎土細。ザラつきあり。角閃石・石英・



第152図 3号住居跡出土土器 (1)



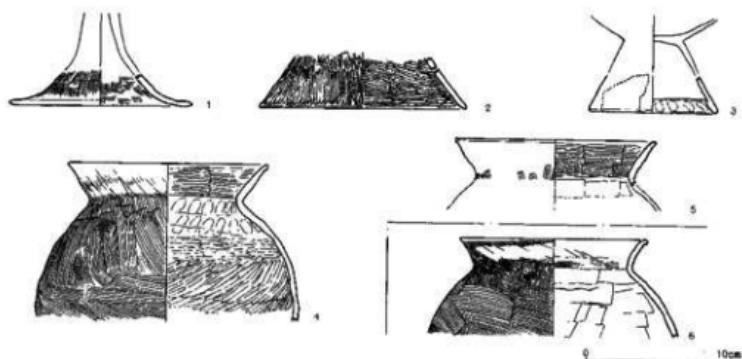
第153図 3号住居跡出土土器（2）

長石・石灰質粒子などの微細粒多量に含む。淡褐色～淡橙褐色。器の上半部～中位にスス付着、下半部二次焼成で一部黒変。焼成良好。50%程度残存。No.4～6・8・11・15～17・19～21・27・29～32・39～42・59・60・68・71・75・76・89。

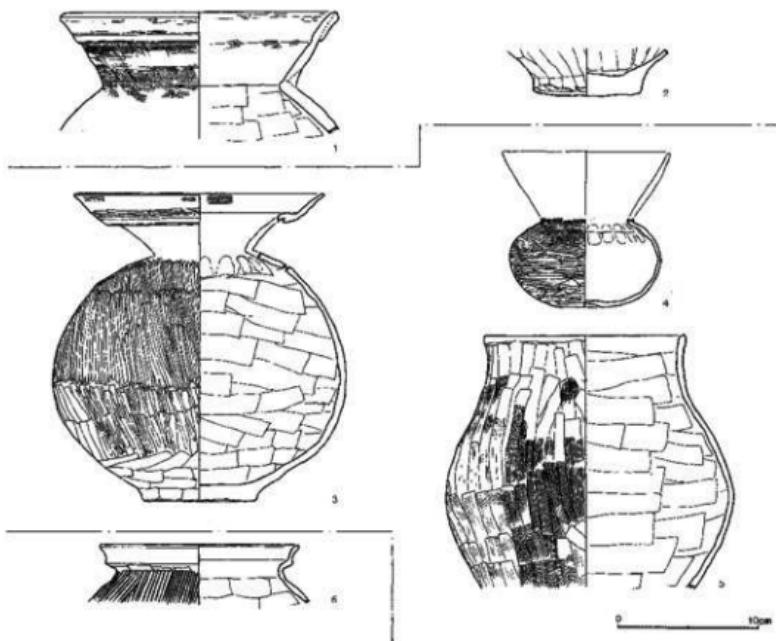
5も丸い胴の壺である。口径16.9cm、胴径20.8cm、底径6.2cm、器高22.1cmを測る。器壁やや厚め。口縁部外反して立ち、口唇部は上方に面を持ち、外側に尖る。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部はやや大きく張り出す。球形胴で中位に最大径。底部は突出する平底で底面中央に凹みあり。ドーナツ状の粘土貼り付けによるか。II縁部内外面ヨコナデ、口縁部内面はヨコナデ以前に軟かいヨコハケ調整後ヘラナデ、頸部・胴部内面ヨコ・ナナメヘラナデ丁寧で平滑、胴部外面かなり細かいナナメ・タテハケ後ヘラナデ、その後ヨビナデ丁寧で平滑、底部外面ヘラナデ。胎土綿。ややザラつく。石英・長石・石灰質粒子の小石・微細粒多量に含む。淡褐色。口縁部・胴部中位外面にスス付着多量。焼成良好、硬。ほぼ完形。No.2。

### 3号住居跡（第152・153図）

3号住居跡からは貯蔵穴内・外を中心にやや多くの土器が出土したが、壺1・甕6・台付甕1・境1の9個体を図示することができた。1は折り返し口縁の壺である。底部を欠く。口径17.8cm、胴径24.9cm、残存部の器高28.5cmを測る。頸部～口縁部外傾して立ち、II軽部は外側に面を持つ。折り返し部下端は丸い。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部はやや大きく張り出す。やや下彫れの胴部で最大径は下半部にある。底部は小さな平底か。口縁内外面ヨコナデ、口縁部～頸部内面軟かいヨコ・ナナメハケ日、胴部上端内面ユビオサエ後ナデ、胴部内面ヘラナデ丁寧、折り返し部外面ナナメハケ後ナデ、頸部外面ナデ風の弱いハケ、胴部外面タテ・ナナメハケ、一部ケズリ風でハケ目不明瞭、下端部ヨコハケないしヨコヘラナデか。胎土綿。石英・長石などの微細粒多量、石墨状黑色微細粒やや多量、角閃石微細粒・小石わずかに含む。淡褐色。一部ややオレンジ色気味。焼成良



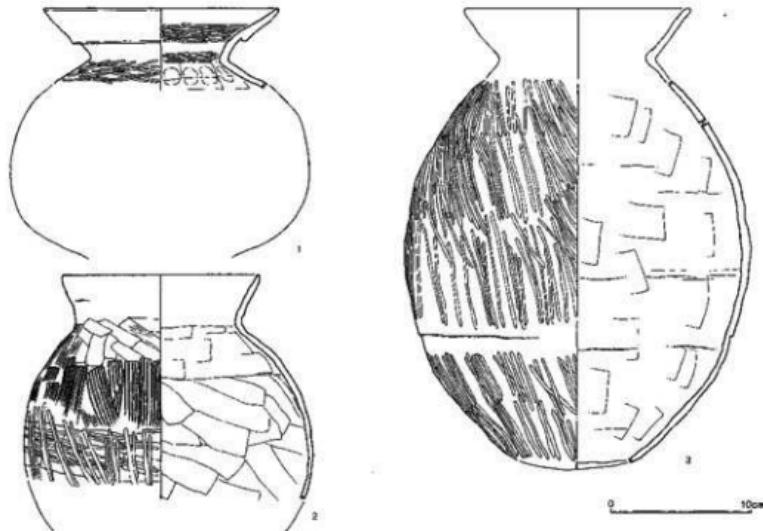
第154図 4号住居跡および5号土壌出土土器



第155図 5・6号住居跡および3号土壌出土土器

好、硬。約50%残存。No.1・2・7・貯藏穴内・F00-M10東西トレンチ内。

2は長胴形態の甕である。口径16.8cm、胸径24.5cm、底径 6.6cm、器高29.1cm測る。口縁部はやや短く外傾して立ち、口唇部は外につまみ出され、丸い。頸部で「く」の字に屈曲し、肩部はやや



第156図 17号住居跡出土土器

大きく張り出す。胴部中位に最大径あり、下半部は徐々につぼまり、底部に移行。底部はやや小さな平底である。口縁部外面ヨコナデ、口縁部～頸部内面ナナメヘラミガキ、胴部内面ナナメヘラミガキ、上端部はミガキ以前にヘラケズリ、頸部外面ナナメハケ、ナデ消され気味、胴部上位～中位外面タテ・ナナメハケやや乱雜、下半部ナデ後タテヘラミガキ、下端部タテヘラケズリ、底面は木葉痕残る。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、小石わずかに含む。淡橙褐色～灰褐色。黒斑部広い。焼成良好。75%残存。No. 6・F00-M10グリッド東西トレンチ。

3もやや長胴の壺である。復元口径18.7cm、胴径22.7cm、残存部の器高22.1cmを測る。口縁部やや厚くボテッとした感じ、外反して立ち、口唇部は丸い。頸部はゆるく「く」の字に屈曲し、胴部やや大きく張り出し、ナデ肩状になり、ゆるやかにつぼまり底部に移行。底部は欠失する。口縁部～頸部外面ヨコナデ、口唇部内面に指頭圧痕若干残る。胴上半部内面ヨコ・ナナメヘラナデ、胴下半部内面タテ・ナナメヘラミガキまばらか? 器面剥落で不明瞭、頸部外面タテ・ナナメハケ、ナデ消されて不明瞭、胴上半部外面ヨコ・ナナメハケ不明瞭、胴部中位～下半部外面タテハケ、ヘラケズリ状でハケ目不明瞭。胎土細。ザラつく。小石多量、角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。淡橙褐色。胴部中位の一部焦げ付きないし黒斑で黒変。焼成良好。20～25%程度残存。No. 6.

4はやや小型の壺である。復元口径13.1cm、胴径16.5cm、底径5.9cm、器高20.5cmを測る。口縁部は短く、外反して立ち、口唇部は丸い。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部の張りは小さい。胴部中位に最大径あり、ゆるやかにつぼまって底部に移行。底部は上げ底風。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴部上位内面ヨコヘラナデ、胴上半部～下半部内面弱いナナメハケ、下端部内面タテヘラナ

テ丁寧、胴部上位外面弱いナナメハケ、一部ナデ状、胴上半部～下半部外面タテヘラミガキ、下端部外面ヨコヘラナデ、底面無方向ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英・長石微細粒やや多量、片岩系小石少量含む。淡橙褐色～淡褐色。胴部上位に黒斑。焼成良好。40～45%残存。No.3・F00-M10東西トレンチ。

5は貯蔵穴出土の中型甕である。口径14.4cm、胴径20.7cm、底径5.9cm、器高19.9cmを測る。口縁部は短く、やや大きく外反し、口唇部は外につまみ出され、尖り気味。頸部は強く「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。胴部は下彫れ氣味で中位より下に最大径がある。急激につぼまって底部に移行。底部は小さな平底である。口縁部～頸部外面ヨコナデ、外面は軟かいヨコハケ日々状の痕跡残る。胴部上端内面ユビオサエ後ヨコヘラケズリ、胴上半部以下の内面ヘラナデか、痕跡不明瞭。胴部外面タテ・ナナメハケ日々、一部擦痕状。底部立ち上がり面ヘラナデ、底面ヘラケズリか、剥落して不明。内面に胴部上位2ヶ所、下半部1ヶ所粘土帶接合痕あり。胎土細。角閃石・石英・長石などの微細粒多量、1mm大の小石やや多量に含む。橙褐色。焦げ付きの付着が胴部中位外面やや上下に広がる。焼成良好、硬。90%残存。No.10。

6は中型甕である。口径15.0cm、胴径17.0cm、底径5.2cm、器高18.1cmを測る。口縁部はやや長く、ゆるく外反し、口唇部は尖り気味。頸部はゆるく「く」の字に屈曲し、胴部は弱く張り出し、中位に最大径がある。やや急激につぼまって、上げ底風平底の小さな底部にそのまま移行する。口縁部内外面ヨコナデ、内面はヨコハケ状痕跡残る。胴部上位～下半内面ヨコヘラナデ丁寧、下位内面タテヘラナデ丁寧、頸部～胴部下半外面細かいタテ・ナナメハケ、一部ヘラケズリ状、下位外面ヨコ・ナナメハケ、下端部ヨコヘラケズリ、底面ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英・長石の微細粒多量、小石やや多く含む。橙褐色。焼成良好、硬。70%程度残存。No.2。

第153図7はやはり貯蔵穴出土の中型甕である。口径13.4cm、胴径19.3cm、底径6.3cm、器高20.6cmを測る。口縁部は下位で段を持ち、ゆるい「S」字状を呈する。口唇部は外反して尖る。頸部は強く屈曲し、胴部はやや大きく張り出す。中位に最大径あり、やや間延びした球形胴である。底部は突出した小さな平底である。口縁部～頸部外面ヨコナデ、胴上端部内面ユビオサエ後ヘラケズリ、上半部内面タテヘラミガキ、中位内面ナナメヘラミガキ、下半部内面タテヘラミガキ、胴部外面タテ・ナナメハケ、底部立ち上がり部ヨコヘラナデ、底面ヘラケズリ後ミガキか、器面剥落で不明瞭。胎土細。風化してややザラつく。片岩系小石多量、角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。橙褐色。焼成良好。ほぼ完形。No.9。

8は台付甕である。口径12.9cm、胴径17.7cm、底径10.5cm、器高25.6cmを測る。口縁部はゆるい受口状であるが、北陸系のいわゆる「5」の字状口縁甕の系譜にある甕と思われる。口唇部は上方にゆるい面を持ち、外側に尖る。頸部は屈曲し、胴部はゆるく張り出す。中位に最大径あり、直線的につぼまって底部に移行する。底部～脚台部は「く」の字に屈曲し、脚台部は内湾気味に「ハ」の字に開き、瓶端部は下方に面を持ち、外側に尖る。口縁部外面ヨコナデだが、外面はやや不連続だが凹線状のヨコハケ、内面も弱いハケ目にになる。胴部上端内面ヨコヘラケズリ、それ以下の胴部内面丁寧なヘラナデ後ヘラミガキ、上半部は格子目状ナナメ・中位以下はタテ方向。胴上半部外面タテハケ、中位～下半部外面ヘラケズリ状擦痕、下端部～脚台接合部外面タテハケ、脚台部内

外面へラナデ、脚裾部内外面ヨコナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、石灰質小石やや多量に含む。橙褐色。焼成良好。50%程度残存。No.4・F00-M10東西トレンチ。

9は貯蔵穴出土の碗である。口径14.8cm、器高8.0cmを測る。口縁部は大きく外反し、口唇部は外につまみ出し気味で丸い。体部との境に小さな段がある。体部は上部がやや張り出し、急激につぼまって丸底の底部に移行する。口縁部内外面ヨコナデ後軽いミガキ、体部内面ヨコ・ナナメへラミガキ、底部内面タテへラミガキ、体部外面ヨコへラケズリ後ヨコ・ナナメへラミガキ、底部外面「X」字状へラミガキ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、1mm大の小石少量含む。灰褐色。一部やや赤味あり。焼成良好。75~80%残存。No.8。

#### 4号住居跡（第154図1~5）

4号住居跡からは高杯2・台付甕1・壺2の5点を図示した。このうち1~3は細片で復元寸法には若干不安がある。1は高杯片である。復元底径13.1cm、残存部の器高2.3cmを測る。脚部下半は大きく開き、裾部は大きく外反し、端部は尖り気味。内面ヨコハケ後ナデ、外面タテハケ後ナデであり、裾部内外面ヨコナデ。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。灰褐色。外面赤彩。焼成良好、硬。3~5%残存、脚裾部1/10。覆土出土。

2も高杯の細片である。復元底径14.9cm、残存部の器高3.7cmを測る。脚部は「ハ」の字に開いて立ち、裾部は外にゆるい面を持つ。脚下半部内面ナナメへラミガキ、裾部内面ヨコへラミガキ、脚部外面タテハケ後タテヘラミガキ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。内外面赤彩か。焼成良好、硬。3~5%残存、脚裾部1/12覆土出土。

3はいわゆる「S」字状口縁台付壺の脚台部の細片である。復元底径9.2cm、残存部の器高2.6cmを測る。脚台部は「ハ」の字に開いて立つ。裾部は内側に折り返され、端部は下方にゆるい面を持つ。残存部外面および折り返し部より上の内面へラナデ、折り返し部内面はユビオサエ後ナデで凹凸する。胎土細。ややザラつく。灰褐色。焼成良好。3%程度の残存か。覆土出土。

4は甕口縁部の破片である。復元口径14.4cm、残存部の器高3.3cmを測る。口縁部はやや大きく外傾して立ち、口唇部は外につまみ出し気味で丸い。頸部は「く」の字に屈曲して胴部に移行。口縁部内外面ヨコナデだが、外面はそれ以前にタテハケ調整あり、ナデ消される。内面はナデ以後ヨコハケ、頸部へ胴部外面タテハケが、胴部上端内面へラケズリか、残存部少なく不明瞭。胎土細。ややザラつく。チャート風の小石、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。外面スス付着でやや黒い。焼成良好。5~10%残存、口縁部1/3。No.2。

5は壺の口縁部から胴上半部である。口径14.4cm、胴径19.0cm、残存部の器高11.0cmを測る。口縁部大きく外傾して立ち、口唇部はつまみ出し気味。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。蝶形胴を呈し、中位に最大径を持つ。中位以下を欠く。口縁部外面ヨコナデでナナメハケナデ消し、内面はヨコナデ後ヨコハケか、胴上端内面2段のユビオサエ後ナデ平滑、その直下弱いヨコへラミガキ、胴部中位内面ナナメへラミガキ、胴部上位外面重複多いナナメハケ、胴部中位外面ヨコ・ナナメハケ。胎土細。チャート風小石、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色でオレンジ色気味。焼成良好。45~50%残存。No.1。

#### 5号土壤（第154図6）

5号土壇からは土器片2点が出土しているが、先1点のみ図示可能であった。第154図6は壺の口縁部から胴部上位までの破片である。復元口径13.5cm、残存部胴径18.1cm、残存部の器高7.0cmを測る。口縁部は外反して立ち、口唇部は外につまみ出され丸い。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。球形胴を呈する壺であろう。口縁部内外面ヨコナデ、外面はナナメハケをナデ消し、内面もヨコ・ナナメハケをナデ消す。胴部内面ヘラナデ丁寧、頸部外面タテハケ、胴部外面ヨコハケ。口縁部へ胴部上位内面に粘土帶接合痕3条あり。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。灰褐色。内外面ともスス・炭化物付着で黒ずんでいる。焼成良好、硬。10~15%程度残存、口縁部1/4。No.1。

#### 5号住居跡（第155図1・2）

5号住居跡からは小破片のみの出土であったが、壺2点を図示できた。第155図1は折り返し口縁の壺の口縁部から胴部上位までの破片である。復元口径20.1cm、残存部の器高8.7cmを測る。頸部へ口縁部は外傾して立ち、口縁部は幅2.8cmで外側に折り返されている。口唇部は外側にゆるい面を持つ。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。胴部はやや器壁厚い。口縁部内外面ヨコナデ、内面はナデ以前にヨコハケ、以後ヨコヘラミガキ、外面はナデ後ヨコヘラミガキ、頸部内面ヨコヘラミガキ、胴部との接合部ユビオサエ後頸部側ミガキ、胴部側はヘラナデ、胴部内面ヘラナデ、頸部外面タテハケ→ヨコハケ→ヨコヘラミガキ、胴部ナナメハケ後タテヘラミガキ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。灰褐色。胴部にやや赤味。焼成良好。10%程度残存、口縁部1/6。No.2・覆土上。

2は壺底部の破片である。底径7.7cm、残存部の器高3.3cmを測る。底部は分厚い平底で、胴部に向かって大きく開くため球形胴に近いか。胴部下位～底部内面ヘラナデ平滑、胴部外面タテヘラケズリ、底部側面ユビオサエ後ナデ、底面ヘラケズリ。胎土細。チャート質・石灰質の1mm大小の小石多量、角閃石・石英などの微細粒や多量に含む。淡褐色～淡橙褐色。底部の一部赤みあり。内面ススで真っ黒で、割れた断面まで煤けており、がくの台に使用した後の施薬を思わせる。焼成良好、硬。器高30cm程度の壺ならば5%以下の残存。No.3。

#### 6号住居跡（第155図3～5）

6号住居跡からは南西コーナー付近から壺・壺・甕が出土している。第155図3は有段口縁の甕である。頸部を欠くため正確な器高はわからない。口径18.0cm、胴径21.1cm、底径8.3cm、復元器高21.9cmを測る。口縁部は大きく外傾し、口唇部は尖る。有段部は縫を持って内側に入り込み、下端部は内向きの面になり、折り返し風に作られる。内面側に膨らみながら頸部に移行。頸部も大きく外傾するか。胴部との境で屈曲し、胴部は大きく張り出す。やや下彫れの胴部で下半部に最大径がある。丸い下端部から上げ底風のやや大きな平底に移行する。口縁部内外面ヨコハケ後ヨコナデ、口縁部下半外ヨコヘラミガキ、胴上端部内面ユビオサエ後ヘラナデ、胴部内面ヘラナデ、上位～下半強く搔き取り気味、下位歯かく平滑、胴上半部外面密なタテヘラミガキ、下半部外面タテヘラナデ後ヘラミガキ、下端部～底部側面ナナメ・ヨコヘラナデ、底面無方向ヘラケズリ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、チャート質小石やや多量に含む。橙褐色。焼成良好、硬。75~80%残存。No.1。

4は壺の胴部である。胴径10.9cm、残存部の器高10.3cmを測る。口縁部は欠いているが、やや長めで、内湾気味に外傾すると思われる。口径12cm、器高11cm程度か。頸部との境で強く屈曲し、胴部は大きく張り、丸い。底部は小さな凹面状の上げ底風中央部を持つ扁半丸底である。口縁部～頸部内面ヨコヘラミガキ、胴部上端内面ユビオサエ、胴部中位以下ユビナデか、ユビオサエ部分に粘土帯接合痕1条あり、胴部と頸部の境目外面タテハケ、胴部上半ヨコハケ後ヨコヘラミガキ、中位外面ヨコヘラミガキ、下位外面ヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、底面ナデ、胎土細、角閃石・石英などの微細粒多量、片岩系小石や多量に含む。橙褐色。口縁部～頸部内面と外面全体に赤彩。焼成良好、硬。40～50%残存。No.1・2・覆上。

5は甕であるが、やや特異な形態であり、弥生後期の吉ヶ谷式土器の甕とこの時期の甕との折衷的なものと考えるべきものであろう。復元口径14.5cm、胴径20.8cm、残存部の器高20.0cmを測る。頸部～口縁部はわずかに外反気味に直立し、口唇部は外側に肥厚気味で丸い。頸部～胴部はゆるく外湾して移行し、やや大きく張り出す。胴部は中位に最大径あり、ゆるやかにつぼまって底部に移行する。口縁部内外面ヨコナデ弱い、口縁部下位～胴部内面ヨコヘラナデ丁寧、口縁部～胴部外面細かいタテハケ、擦痕状でヘラナデと区別できない部分広い。胎土細、ややザラつく。チャート質小石多量、角閃石・石英などの微細粒やや少なく含む。灰褐色。焦げ付きが胴下半部に多く認められる。焼成良好。35～40%残存。No.3。

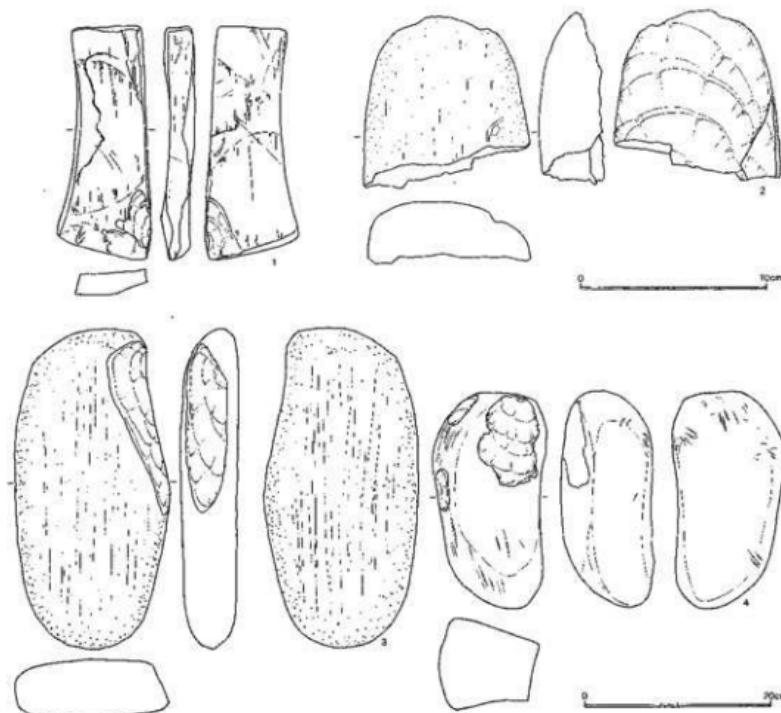
### 3号土壤（第155図6）

3号土壤からは2片の土器片が出土しているが、図示可能だったのは「S」字状口縁台付甕の口縁部から胴部上位の破片1点であった。復元口径14.3cm、残存部の器高3.2cmを測る。「S」字下部の屈曲は明瞭で口唇部内面の沈線はややあまい。頸部の屈曲やや強く胴部上位は大きく張り出す。口縁部～頸部内外面ヨコナデ強め、胴部上位内面ヘラケズリ、頸部外面ヘラナデ、胴部上位外面粗いタテハケやや間隔不揃い。胎土細、角閃石・石英などの微細粒多量、白色針状物質やや多く含む。灰褐色。焼成非常に良好、硬。5%以下の残存、口縁部1／8。No.1。

### 17号住居跡（第156図）

17号住居跡からはが跡内およびその周辺から出土した壺1・甕2の3点を図示できた。第156図1は折り返し口縁の壺の口縁部から胴部上端の破片である。口径16.8cm、残存部の器高5.7cmを測る。頸部～口縁部はやや大きく外反し、口唇部は小さく内湾して丸い。折り返し部は幅広く、下端部は丸い。頸部で「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。口縁部内外面ヨコナデだが、外面はタテヘラミガキがナデより前、頸部上位内面ヨコヘラミガキ、下位内面ヨコヘラナデ、軟らかいヨコハケ、胴部上位内面ユビオサエ後ヨコヘラナデ、頸部外面ヨコヘラナデ、胴部上位外面ナナメヘラミガキやや疎で格子目状。胎土細、角閃石・石英などの微細粒多量、片岩系小石多量に含む。灰褐色。一部赤味あり。内外面に黒斑風黒ずみあり。焼成良好。20%程度残存。No.1。

2は球形壺に近い甕である。口径14.1cm、胴径20.7cm、残存部の器高16.0cmを測る。口縁部はやや長く、外傾して立ち、口唇部は内湾し尖る。頸部は「く」の字に屈曲し、胴部は大きく張り出す。中位に最大径あり、球形壺を呈する。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、上半部でやや強め、胴部上位内面ヨコヘラケズリ後ナデ平滑、中位～下半部内面ナナメヘラケズリ、胴上半部外面やや雑なタテ



第157図 古墳時代遺構出土石器

ハケ・タテ・ナナメヘラケズリ、中位へ下半部外面ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量、土器片粒の小石やや多量に含む。灰褐色。外面全体スス付着で黒い。焼成良好。40%残存。口縁部3/5。No.1。

3は長胴の壺の胴部である。復元胴径24.8cm、残存部の器高27.2cmを測る。間延びした胴部であり、ラグビーボール状の器形である。胴部中位に最大径があり、下半部には粘土帯の継日の段が受けられる。「く」の字状の縁と平底ないし突出底を呈する壺であろう。内面は丁寧なヘラナデで、粘土帯接合痕が5ヶ所ある。外面はヘラナデ後や問隙のあるタテ・ナナメヘラミガキである。胎土細。角閃石・石英・長石などの微細粒多量、1mmの大いな小石やや多量に含む。淡褐色。内外面ともスス・炭化物の付着・吸着で黒変。焼成良好、硬。40%程度残存か。No.1・2。

#### 石器類（第157図）

古墳時代の住居跡からは砥石4点を検出した。1は2号（No.1）、2は3号（No.11）、3・4は6号住居跡（No.5・4）出土である。1・3・4は研磨著しく、かなり使い込まれている。重量は1：約350g 2：320g、3：6,000g、4：4,400gである。

## d 平安時代の遺構と出土遺物

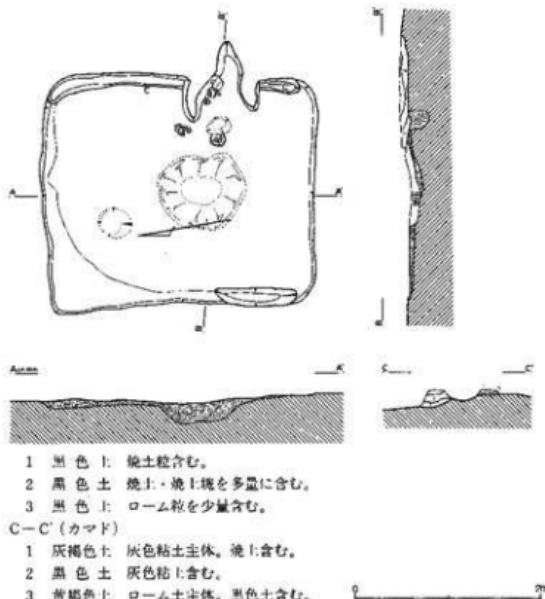
## (1) 平安時代の遺構

## 7号住居跡（第158図、遺物第161図1～3）

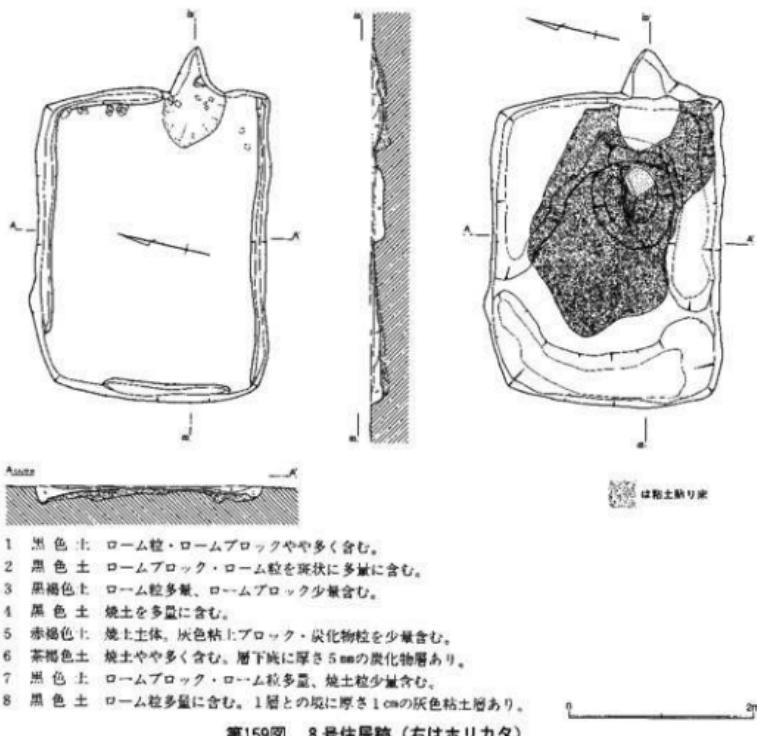
7号住居跡は10号住居跡の東北東約30mにあり、D40-M10グリッドを中心とした区域に位置する。円阿弥遺跡の住居跡中最も東に所在する。長辺2.76m、短辺2.20mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はカマドの取り付く方向を考えると短軸の方向となり、しかも南への偏りが大きいため、表記としてはS-80°-Eということになる。東壁の南寄りの部分にカマドが取り付き、壁面から外側40cmまで煙道が伸びる。カマドの主軸方向はS-74°-Eである。カマドの掘り込み形態はやや歪んでおり、砲弾形に近い形である。ソデの残りもあまり良くなく、右ソデは、長さ34cm、幅31cm、左ソデは長さ46cm、幅31cmが残っている。ソデ部分はローム土→黒色土→粘土の順序ではほぼ平らに積み重ねて構築している。東壁全体と西壁のカマドに対向する位置に深い壁溝が巡る。幅13～19cm、平均15cm、深さ1～4cm程度である。ソデ内側はよく洗けており、頻繁に使用されたことを思わせる。ところで、遺構確認時に床面の大半が露出してしまったため、覆土はカマド周囲を除くとほとんどのがこっていなかった。黒褐色土を中心とした土が覆土の主体であったようである。壁も1～7cm、平均4cm程しか立たない状態であった。床面は平坦で、ほぼ全体に粘土貼り床があることが認められた。

ホリカタもやや平坦で一部のピット状・上塗状掘り込みになる部分を除き2～17cm、平均10cm程度の深さである。カマド前面には長径26cm、短径21cm、床面からの深さ20cmのピット状ホリカタがある。また、床面中央やや南寄りに長径97cm、短径75cm、床面からの深さ22cmの床下土壤状ホリカタがあり、やや北寄りにも長径37cm、短径30cm、床面からの深さ33.2cmのピット状ホリカタがある。

遺物はやや少なめで、カマド内および前面に集中している。杯の完形品



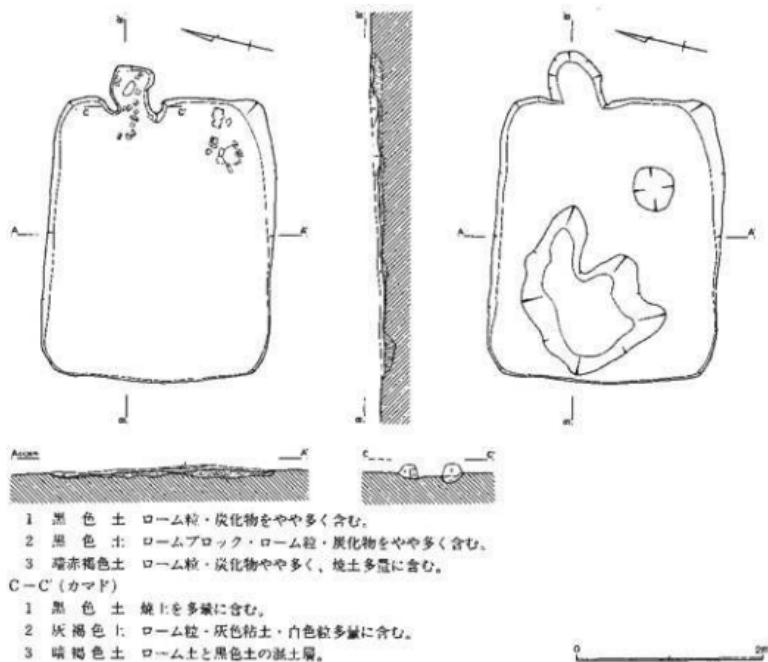
第158図 7号住居跡



あるいは大型破片はカマド内に1点、カマド前面に2点検出されている。

#### 8号住居跡（第159図、遺物第161図4～6）

8号住居跡は7号住居跡の南西約10m、D43-M13グリッドを中心とした区域に所在する。長辺3.13m、短辺2.21mを測り、やや台形気味の長方形を呈する。主軸方向はN-77°-Eである。東壁のやや南寄りにカマドが取り付く。主軸方向はN-83°-Eである。カマド壁の外に三角形の掘り込みの煙道を持つ。煙道は壁面から約50cm外に伸びる。ソデは残存していなかった。カマド掘り込みの側壁はよく焼けている。また、壁面より内側には長さ60cm・幅66cm、深さ18cmの半楕円形掘り込みがある。東壁のカマドより北の部分、北壁の北西コーナーを除く部分、西壁の北西・南西両コーナー付近を除いた部分および南壁全体に壁溝が巡る。幅10～25cm、平均15cm、深さ3～6cmを測る。覆土は黒色土主体であり、厚さ2～14cm、平均8cm程しかなく、やはり遺構確認時に床面を露出してしまった部分がある。壁は6～8cm前後しか立たない。床面は平坦だが、中央から西寄り・北寄りに若干傾斜している。ホリカタは壁に沿って周縁部を掘り下げる形式であり、北壁・南壁



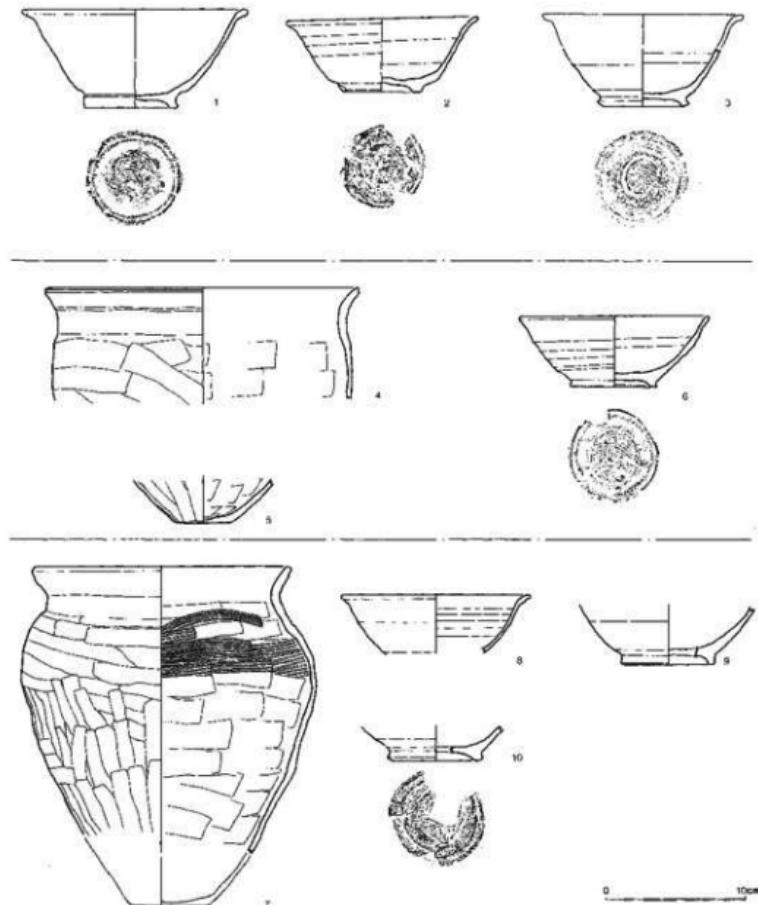
第160図 14号住居跡（右はホリカタ）

に各1ヶ所ブリッジ状になっている。概30~80cm、平均45cmで、深さ4~15cm、平均7cm程度であった。カマド前面には床下土壤状ホリカタがあり、長径97cm、短径90cmの不整椭円形を呈し、深さ12cm程度である。中央に細い隔壁状の高まりがあり、掘り込みは2つに分かれている。薄い粘土貼り床が床面中央から東壁寄りにあり、ホリカタの掘り下げ部分を避けるように施されていた。

遺物は少なめで、東壁沿いに杯片が散乱し、カマド寄りに甕片、カマド内北寄りに甕底部片などが出土している。

#### 14号住居跡（第160図、遺物第161図7~10）

14号住居跡は8号住居跡の西南西42m、16号住居跡の南2.5mにあり、遺跡北端部住居群の中央やや西寄りに所在している。D47-M28グリッドを中心とした区域に位置する。長辺2.88m、短辺2.10mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-80.5°-Eである。東壁のやや北寄りの部分にカマドが取り付く。煙道が壁面の外側約40cmまで伸びる。ソヂの残りは良くなく、右ソヂは幅21cm、壁面からの長さ25cm、左ソヂは幅17cm、壁面からの長さ25cmだけ残る。焼土を多量に含む黒色土と灰色粘土で構築されている。カマド掘り込みの形態は不整椭円形である。覆土は黒色土を主体としているが、厚さ2~9cm、平均4cm程度しか残っておらず、床面露出部分もかなりある。壁も



第161図 7・8・14号住居跡出土土器

2~6cm程しか立たない。床面は平坦で、西に若干傾斜している。ホリカタも平坦に近いが、カマドの対向位置の西寄り床面に長径1.83mの不整形掘り込み、南壁寄りに径45cmの不整円形ピット状の掘り込みがある。深さ2~11cm、平均6cmの浅いホリカタである。遺物はやはり少なく、カマド内からカマド前面にかけて杯3個体以上、南東コーナー付近に甕がある。

これら3軒の住居跡は10世紀初頭を前後する時期の土器を出土しているようである。

以上、3軒の住居跡以外に平安時代に属する遺構は、1・2号土塹の2基の上塙があるが、これについては「その他の遺構と出土遺物」の項で扱うこととする。

## (2)平安時代の出土遺物

円阿弥遺跡から出土した平安時代の遺物は土師器・須恵器の上器類のみであった。この項では住居跡出土類について述べ、土壇出土土器類については「その他の遺構と出土遺物」の項で取り上げることにする。以下遺構ごとに示したい。

## 7号住居跡（第161図1～3）

7号住居跡からは須恵器高台付杯3点を図示した。第161図1は口径16.4cm、底径6.8cm、器高7.1cmを測る。体部～口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部は外反して肥厚し、丸い。底部は平底で、底面の周縁部の位置にやや歪んだ平行四辺形の断面の高台を貼り付ける。一部は直立気味に整えられる。全面ロクロナデだが、弱めでミズビキ痕がほとんどない。底面は回転糸切り離し未調整。胎土緻密。ザラつきあり。白色針状物質・1mm大のチャート質小石やや多量、土器片粒少量含む。「赤焼き」で橙褐色を呈する。焼成やや良、かなりあまい焼きで、器面の摩滅激しい。60%残存、口縁部1/4。No.2～5・7・16・17・20・カマドNo.3。

2は口径13.9cm、底径5.8cm、器高5.5cmを測る。体部～口縁部は外傾して立ち、口唇部は小さく外反して、わずかにつまみ出し気味で、丸い。体部下端でゆるく屈曲し、平底の底部に移行。底部周縁よりやや内側に断面逆台形の高台を貼り付ける。底面中央は凹んでいる。全面ロクロナデ。内面はロクロ目不明瞭。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。片岩系小石5mm～1cm大のものも含め多量、角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。橙褐色。外面ともくすんで黒っぽい。灯明皿使用か。焼成やや良、かなりあまい焼き。90%程度残存。カマド左ソーデ前面出土。

3は口縁部を欠く。底径6.6cm、残存部の器高4.2cmを測る。体部～口縁部は内湾気味に外傾して立ち、底部との境でゆるく屈曲して平底の底部に移行。底部周縁に断面不整台形の高台を斜めに貼り付ける。全面ロクロナデ、ロクロ目不明瞭。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。ややザラつく。3mm大の片岩系小石多量に含む。灰褐色。焼成やや良、ややあまい焼き。底部は完存、30%程度残存。カマドNo.2・No.8。

## 8号住居跡（第161図4～6）

8号住居跡からは土師器甕2・須恵器高台付杯1の3点を図示した。第161図4は土師器甕の口縁部から胴上半部までの破片である。復元口径22.8cm、胴径21.8cm、残存部の器高8.0cmを測る。頸部は直立し、屈曲して口縁部に移行。口縁部はゆるく外反し、口唇部は丸いが外向きに沈線1条がある。いわゆる「コ」の字状口縁のややくずれた形態。頸部の張り出しあは小さく上半部に最大径がある。口縁部～頸部内外面ヨコナデ、頸部と口縁部の境目の外面にはヘラによる小さな段あり。胴上半部内面ヘラナデ丁寧、胴部上位外面ヨコヘラケズリ、中位以下ナナメヘラケズリ。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量、チャート質小石やや多量に含む。橙褐色。内面くすんで黒っぽい。焼成良好。7～10%残存、口縁部2/15。No.11・12。

5は上師器甕底部の破片である。底径4.1cm、残存部の器高3.1cmを測る。底面は平底で、胴部との境でゆるく屈曲する。胴部やや大きく開き、丸い胴か。胴下端部外面タテヘラケズリ面取り風、内面ヘラナデ丁寧、底面無方向ヘラケズリ。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色。一部黒ずみあり。焼成良好、硬。3～5%残存。No.7。

6は須恵器高台付环である。口径13.9cm、底径6.8cm、器高5.2cmを測る。体部～口縁部は内湾気味に外傾して立ち、口唇部は丸い。底部へは内湾したまま移行し、平底の底部の周縁に断面平行四辺形の高台が貼り付けられる。高台底面は内向きに傾斜。全面ロクロナデ、ロクロ目は外面やや強め、内面弱め、底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。角閃石・石英などの微細粒多量、片岩系小石やや多量、白色針状物質少量含む。青黒灰色。焼成良好、堅緻。完形。No.1・13・14・15。

#### 14号住居跡（第161図7～10）

14号住居跡からは土師器壺1・須恵器高台付环3の4点を図示した。第161図7は土師器壺で、底部は欠欠。口径18.8cm、胴径21.4cm、残存部の器高20.6cmを測る。「コ」の字状口縁のくずれた形態で、頸部は内傾し、屈曲して立ち上がる口縁部は外傾、口唇部は外側にゆるい面を持つ。胴部はナデ肩に張り出し、上半部に最大径がある。直線的にぼぼまって底部に移行する。底部は小さい平底か。口縁部内外面ヨコナデ強め、頸部～胴部上位内面ヘラナデ後ハケ状工具による強いナデ、中位～下半部内面ヨコヘラナデ平滑、胴上半部外面ヨコ・ナナメヘラケズリ、中位～下半部外面タテ・ナナメヘラケズリ、一部ヨコヘラケズリもあり。胴下半部内面に接合痕あり。胎土細。チャート質小石多量、角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。橙褐色～茶褐色。焦げ付きなどによる黒変部広い。焼成良好。40%～50%残存。No.1～3・6～9・床面ホリカタ・15住・15住カマド。

8は須恵器高台付环の口縁部～体部の破片である。復元口径13.8cm、残存部の器高4.3cmを測る。ゆるく内湾しながら外傾して立ち、口唇部は強く外反し、外につまみ出し気味で丸い。全面ロクロナデ、ロクロ目外面弱めで内面明瞭。胎土緻密。ザラつく。片岩系小石多量、角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。橙褐色～灰褐色で「赤焼き」。焼成やや良で、あまい焼き。40%残存、口縁部1/2弱。カマドNo.6・No.5・8。

9は須恵器高台付环の体部～底部の破片である。体部内湾気味に外傾して立つ。底部へは内湾したまま移行。底部は平底で、周縁に断面不整逆台形の高台を貼り付ける。全面ロクロナデ、ロクロ目内外面とも不明瞭。底面回転糸切り離し未調整か。胎土緻密。ザラつく。片岩系小石、角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡橙褐色で「赤焼き」。一部黒ずみあり。焼成やや良、あまい焼き。30%～40%残存、底面1/3。カマドNo.1・2・3・15住カマド。

10も須恵器高台付环の体部～底部の破片である。体部は内湾気味に外傾して立ち上がり、底部との境でゆるく屈曲する。底部は平底で周縁に断面不整逆台形の高台がやや外に傾斜して貼り付けられる。全面ロクロナデ、ロクロ目は外面やや強め、内面弱めで不明瞭。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。片岩系小石多量、白色針状物質若干含む。青黒灰色。焼成良好、堅緻。25%程度残存、底部3/4。カマドNo.7・10・12・13。

以上が住居跡出土の土器類の概要であるが、簡単に考察しておきたい。これらは須恵器高台付环の供膳具と土師器壺の煮沸具によって構成されており、時期決定は①土師器壺が消滅していること、②須恵器の环は「赤焼き」でやや深身の塊状でロクロ痕の明瞭でない高台付环であること、③土師器壺は「コ」の字状口縁の末期ないし垂穂になってしまっていることなどから9世紀末を過らず、おおむね10世紀前半代にあたることがわかる。これは竹之花遺跡のグリッド出土土器や本遺跡の土壙出土土器とも共通する特色があるので、遺跡群全体としても明瞭な生活痕跡の最新段階といえよう。

## e その他の遺構と出土遺物

## (1)各時代の遺構

円阿弥遺跡においては前節までに記述した住居跡のほかに縄文・弥生・古墳・平安・江戸時代（以降）の土壙34基がある。縄文時代の32号土壙、古墳時代の3・4・5号土壙は前節で記述したので残る30基について本節で記述する。土壙番号はやや前後するが時代順に記述することにする。

## (a)縄文時代の土壙

## 24号土壙（第162図）

24号土壙は10号住居跡の西2.5m、D44-M22グリッドに位置する。長径95cm、短径84cm、深さ22cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN-51°-E。断面図基準線標高は64.20mである。

## 26号土壙（第162）

26号土壙は24号土壙の西6m、10号住居跡の西約10mにあり、D43-M25グリッドに位置する。長径198cm、短径126cm、深さ33cmを測り、不整椭円形を呈する。主軸方向はN-42°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 35号土壙（第163図、遺物第128図8）

35号土壙は19号住居跡の北30cmにあり、E02-M36グリッドに位置する。長径130cm、短径121cm、深さ30cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN-53°-Wである。覆土は黒褐色土である。土器が少量出土しているが、黒浜期に属するものである。断面図基準線標高は64.40mである。

以上が縄文時代の土壙であるが、32号土壙も含めて考えても、これらは住居跡の近傍にあることがわかり、貯蔵穴その他の機能を果たしたものであろう。

## (b)弥生時代の土壙

## 16号土壙（第162図、遺物第139図8）

16号土壙は16号住居跡の北東約17m、D41-M22グリッドに位置する。長径2.01m、短径1.18m、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。主軸方向はN-42°-E。断面図基準線標高は64.20mである。

## 28号土壙（第163図）

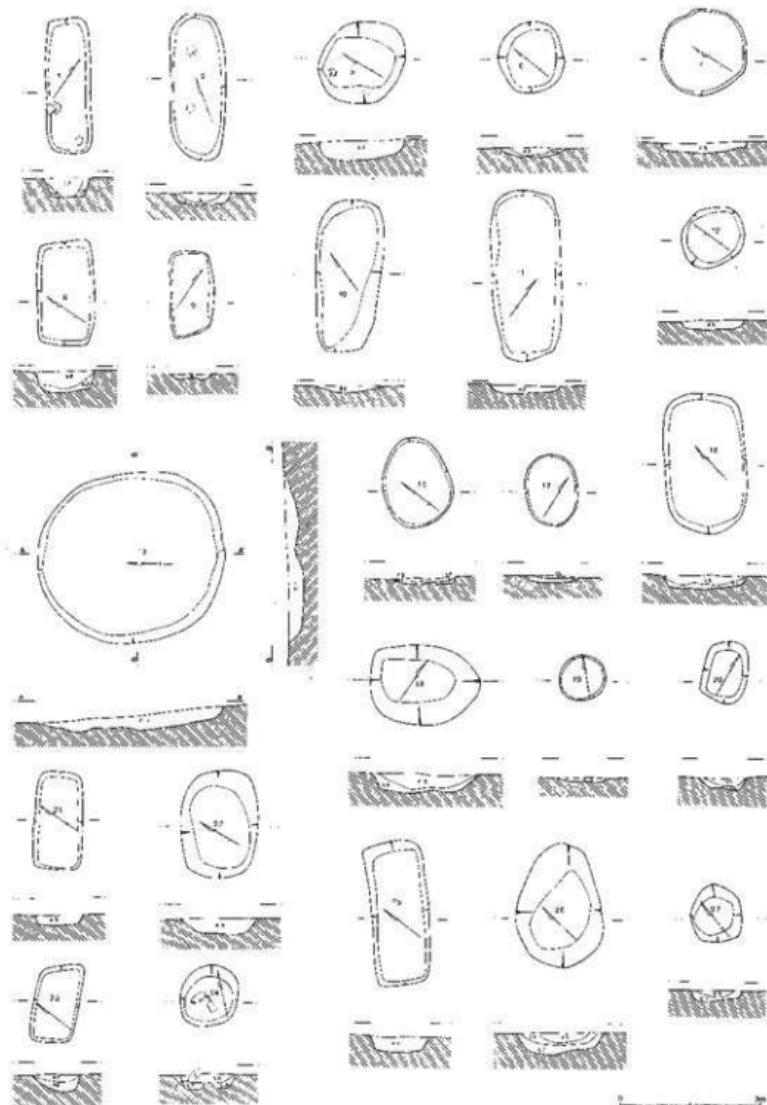
28号土壙は16号住居跡の北東約2mにあり、D46-M25グリッドに位置する。長径1.48m、短径1.26cm、深さ10mを測り、不整隔丸長方形を呈する。主軸方向はN-40°-Eである。覆土は黒色土・黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 29号土壙（第163図、遺物第138図5・6、第139図9・10）

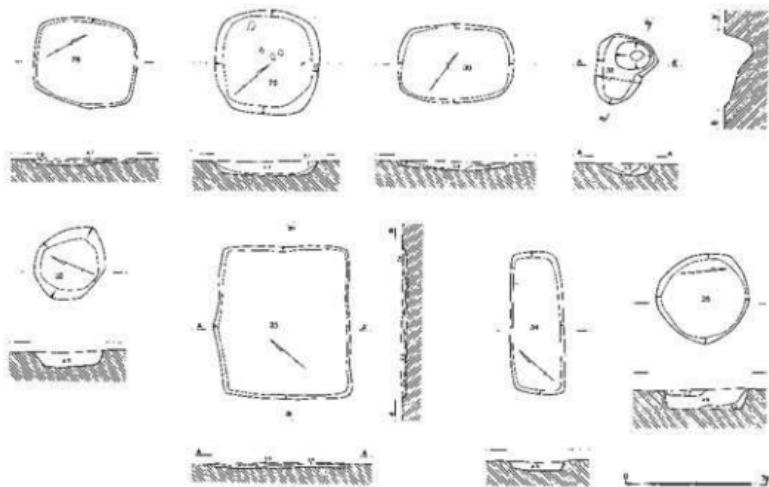
29号土壙は16号住居跡の東約1.5m、D44-M25グリッドに位置する。長径1.50m、短径1.48m、深さ22cmを測り、隅丸方形を呈する。主軸方向はN-44°-Eである。覆土は黒色土・黒褐色土である。遺物は鉢・壺片・甕片など比較的多く出土した。断面図基準線標高は64.20m。

以上が弥生時代の土壙である。16号住居跡の近傍にあるが、16号住居跡自体が住居跡として機能していたかどうか疑わしいので、隣接する15・18号住居跡を含めた一群に対応するものと見ておきたい。貯蔵穴と考えるよりはゴミ穴などの機能を想定しておきたい。

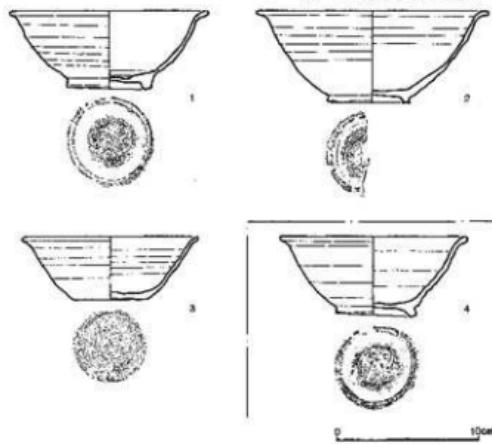
## (c)平安時代の土壙



第162図 円阿弥遺跡土壤 (1)



第163図 円阿弥遺跡土塁(2)



第164図 1・2号土塁出土土器

1号土塁(第162図、遺物第164図1~3)

1号土塁は遺跡東部の北向き緩斜面にある。8号住居跡の南東約100mに離れて所在し、E21-L44グリッドに位置する。長径1.95m、短径0.65m、深さ29cmを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-34°-Wである。覆土は黒褐色土で、ローム粒・ロームブロックを多量に含み、埋め戻したような感じであった。遺物は、凸壁沿いに2点、南壁沿いに1点の須恵器坏

を横倒し状態で出土しただけである。断面因基準線標高は66.60mである。

2号土塁(第162図、遺物第164図4)

2号土塁は1号土塁の北北西16m、8号住居跡の南東85mにあり、E16-L46グリッドに位置する。長径2.09m、短径0.80m、深さ18cmを測り、不整椭円形を呈する。主軸方向はN-17°-Eである。覆土は黒褐色土でローム粒を多量に含むもので、やはり埋め戻しを想定できそうである。遺

物は須恵器杯2点で主軸に対して中央付近、やや北壁寄りと南壁寄り覆土から出土した。1点は図示不能であった。断面図基準線標高は65.80mである。

以上が平安時代の土壙である。双方とも長さ2m前後で、墓壙を思わせる。遺物は供獻土器で埋葬後墓壙直上に置かれ、棺材の腐朽によって墓壙内に転落したものと思われる。

#### (d) J.戸時代以降の土壙

##### 6号土壙（第162図）

6号土壙は7号住居跡の北北東25mにあり、本遺跡の遺構の中で最も北に検出された。D32-M05グリッドに位置する。長径1.05m、短径0.97m、深さ13cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN-84°-Eである。覆土は黒色土主体である。断面図基準線標高は63.90mである。

##### 7号土壙（第162図）

7号土壙は7号住居跡の北北西13m、6号土壙の西北西19mにあり、D36-M11グリッドに位置する。長径1.27m、短径1.19m、深さ16cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN-52°-Wである。覆土は黒色土主体である。断面図基準線標高は63.90mである。

##### 8号土壙（第162図）

8号土壙は7号土壙の北壁2mにあり、D35-M11グリッドに位置する。長径1.50m、短径0.83m、深さ33cmを測り、不整長方形を呈する。主軸方向はN-53°-Eである。覆土は軟かい褐色土である。断面図基準線標高は63.90mである。

##### 9号土壙（第162図）

9号土壙は8号土壙の西北西約5mにあり、D34-M13グリッドに位置する。長径1.23m、短径0.62m、深さ8cmを測り、不整台形を呈する。主軸方向はN-37°-Wである。覆土は軟かい褐色土である。断面図基準線標高は64.00mである。

##### 10号土壙（第162図）

10号土壙は9号土壙の西約6m、D34-M15グリッドに位置する。長径2.17m、短径0.97m、深さ10cmを測り、不整椭円形を呈する。主軸方向はN-41°-E。断面図基準線標高は64.00mである。

##### 11号土壙（第162図）

11号土壙は7号土壙の南西約7mに所在し、D38-M13グリッドに位置する。長径2.45m、短径1.01m、深さ14cmを測り、不整圓丸長方形を呈する。主軸方向はN-33.5°-Wである。覆土は黒色土である。断面図基準線標高は63.90mである。

##### 12号土壙（第162図）

12号土壙は11号土壙の西南西約9m、D39-M16グリッドに位置する。長径0.97m、短径0.84m、深さ14cm。不整椭円形を呈する。主軸方向はN-85°-W。断面図基準線標高は64.00mである。

##### 13号土壙（第162図）

13号土壙は遺跡南端部住居跡群の3号住居跡のすぐ東隣に所在し、F00-M18グリッドに位置する。長径2.70m、短径2.43m、深さ26cmを測り、楕円形を呈する。主軸方向はN-12°-Wである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は67.25mである。

## 15号土壌（第162図）

15号土壌は12号土壌の西15m、D40-M21グリッドに位置する。長径1.27m、短径0.97m、深さ11cm。不整梢円形を呈する。主軸方向はN-41.5°-Eである。覆土は黒褐色土である。なお、14号土壌は調査中に現代のゴミ穴であることがわかり、欠番とした。断面図基準線標高は64.20mである。

## 17号土壌（第162図）

17号土壌は15号土壌の南東約10m、10号住居跡の北東2mにあり、D42-M19グリッドに位置する。長径1.03m、短径0.75m、深さ10cmを測り、梢円形を呈する。主軸方向はN-35°-Wである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

18号土壌は17号土壌の南東1.3mで、やはり10号住居跡に隣接して所在する。D43-M19グリッドに位置する。長径1.57m、短径1.13m、深さ28cmを測り、不整梢円形を呈する。主軸方向はN-61.5°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 19号土壌（第162図）

19号土壌は18号土壌の南東1m、10号住居跡の北東2mに所在し、D43-M19グリッドに位置する。長径0.59m、短径0.55m、深さ6cmを測り、不整円形を呈する。主軸方向はN-62°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 20号土壌（第162図）

20号土壌の南南西2m、10号住居跡の南東1.3mにあり、D44-M19グリッドに位置する。長径0.90m、短径0.65m、深さ17cmを測り、不整梢円形を呈する。主軸方向はN-18°-Wである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 21号土壌（第162図）

21号土壌は10号住居跡の南7.5m、D48-M20グリッドに位置する。長径1.40m、短径0.70m、深さ1.5cmを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-61°-E。断面図基準線標高は64.20mである。

## 22号土壌（第162図）

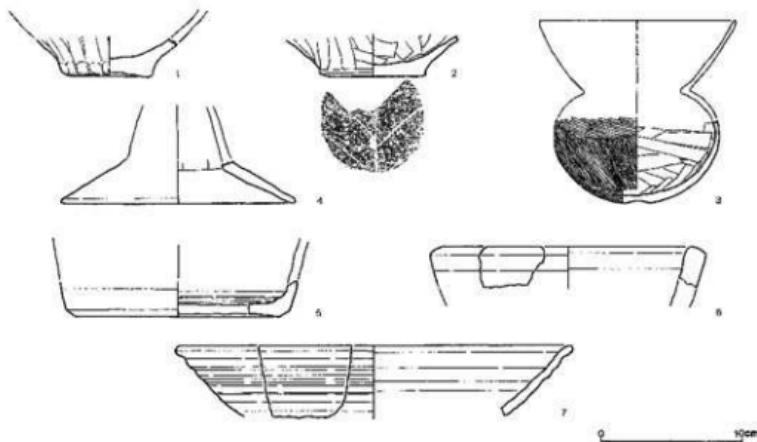
22号土壌は21号土壌の北西3.5m、10号住居跡の南南西4.5mにあり、D46-M21グリッドに位置する。長径1.54m、短径1.12m、深さ23cmを測り、不整梢円形を呈する。主軸方向はN-62°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 23号土壌（第162図）

23号土壌は21号土壌の東2.5mにあり、D48-M19グリッドに位置する。長径1.13m、短径0.65m、深さ25cmを測り、不整台形を呈する。主軸方向はN-65°-E。断面図基準線標高は64.20mである。

## 25号土壌（第162図）

25号土壌は16号土壌の東約5m、10号住居跡の北西約10mにあり、D41-M24グリッドに位置する。長径2.06m、短径0.83m、深さ24cmを測り、不整隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-50°-Eである。覆土は黒色土である。断面図基準線標高は64.20mである。



第165図 円阿弥遺跡グリッド出土土器

## 27号土壙（第162図）

27号土壙は25号土壙の南約5m、D43-M24グリッドに位置する。長径0.81m、短径0.74m、深さ17cmを測り、不整椭円形を呈する。主軸方向はN-34°-E。断面図基準線標高は64.20mである。

## 30号土壙（第163図）

30号土壙は16号住居跡の北東1mに隣接して所在し、D45-M27グリッドに位置する。長径1.66m、短径1.12m、深さ13cmを測り、不整隅九長方形を呈する。主軸方向はN-60°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 31号土壙（第163図）

31号土壙は16号住居跡の西0.5mに近接し、30号上壙の南西約2.5mにある。D46-M27グリッドに位置する。長径1.00m、短径0.80m、深さ40cmを測り、不整椭円形で二段の掘り込みになっている。主軸方向はN-69°-Wである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.20mである。

## 33号土壙（第163図）

33号土壙は27号土壙の南1m、29号土壙の東1.5mにあり、D44-M24グリッドに位置する。長径2.18m、短径1.95m、深さ9cmを測り、不整長方形を呈する。主軸方向はN-53°-Eである。覆土は黒褐色土である。断面図基準線標高は64.30mである。

## 34号土壙（第163図）

34号土壙は8号住居跡の南西40mに所在し、E02-M03グリッドに位置する。長径2.03m、短径0.78m、深さ14cmを測り、不整隅九長方形を呈する。主軸方向はN-46°-Eである。覆土は黑色土である。断面図基準線標高は64.30mである。

以上が江戸時代以降の土壙である。形態・規模などはかなりバラエティに富んでおり、機能を特定しにくい。生活遺構に直接結びつくものもあるうかとは思うが、墓壙風のものも見られ、規則的

配置になると考えられるものも少ないので、この点については保留しておきたい。

## (2) 土壙・グリッドその他の川土遺物

この墳では平安時代の土壙から出土した土器とグリッドおよび第1次調査時のトレンチから出土した土器類について述べる。

### (a) 平安時代土壙出土土器

#### 1号土壙（第164図1～3）

1号土壙から出土したのは須恵器高台付杯2・須恵器杯1の3点である。第164図1は高台付杯である。口径14.2cm、底径6.2cm、器高5.6cmを測る。体部～口縁部は内湾しながら外傾して立ち上がり、口唇部は大きく外反して丸い。底部へは内湾したまま移行し、平底の底部の周縁に断面不整逆台形の高台が貼り付けられる。全面ロクロナデ、ロクロ目内面は不明瞭。底面内側はナデによりやや凹凸あり、底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。石灰質粒子の微細粒・片岩系小石多量に含む。灰褐色。一部淡橙褐色。油煙の付着による黒変部口縁部内外面に1ヶ所あり。焼成良好、堅敏。完形。No.2（西壁際出土）。

2はやや大振りの高台付杯である。口径16.6cm、底径5.9cm、器高6.6cmを測る。体部～口縁部内湾しながら外傾して立ち上がり、口唇部は大きく外反して丸い。体部と底部との境で屈曲し、平底の底部に移行。底部の周縁に断面不整逆台形の高台が貼り付けられる。全面ロクロナデ、ロクロ目は上半部に顕著。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。片岩系小石多量に含む。黒灰褐色～淡橙褐色。焼成良好、堅敏。50%残存。No.1（南壁寄り出土）。

3は無高台の杯である。口径12.6cm、底径5.5cm、器高4.5cmを測る。体部下半は内湾し、上半部～口縁部はやや直線的に外傾して立つ。口唇部は外反し、丸い。体部と底部の境でゆるく屈曲し、平底の底部に移行する。全面ロクロナデ、体部中位を上下する部分の内外面にロクロ目が顕著。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。片岩系小石やや多量、白色針状物質少量含む。灰褐色。一部セビア色。油煙のこびりつきの黒変部口唇部内外面に1ヶ所あり。焼成良好、堅敏。85%残存、口縁部3/4。No.3（西壁際内寄り出土）。

#### 2号土壙（第164図4）

2号土壙からは須恵器杯が2点出土したが、1点は残りが悪く、作図できなかった。残り1点は高台付杯である。口径13.5cm、底径5.8cm、器高5.75cmを測る。体部～口縁部はやや内湾気味に外傾して立ち、口唇部は弱く外反し、少し肥厚し丸い。体部と底部の境でゆるく屈曲し、平底の底部に移行する。底部周縁に断面不整逆台形の高台が外向きに傾斜して貼り付けられる。全面ロクロナデ、ロクロ目不明瞭。底面回転糸切り離し未調整。胎土緻密。片岩系小石多量に含む。黒灰色。焼成良好だが、やや「くすべ焼き」的である。完形。No.1。

### (b) グリッド・トレンチ出土土器

グリッドおよび第1次調査トレンチから出土した土器のうち、弥生時代以降と思われる土器の主なものを7点図示した（第165図）。以下に順次述べることにする。

1は甕ないし壺の底部であり、弥生時代後期～古墳時代前期の土器であろう。底径6.3cm、残存部

の器高2.7cmを測る。底部は上げ底風の平底で、胴部はかなり大きく張り出す器形になりそうである。内面ヘラナデ丁寧、胴部下端外面タテヘラナデ、底面との境界の屈曲部ユビオサエ後ヘラナデ、底面ヘラケズリ後ヘラミガキ。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。淡褐色、部分的に淡橙褐色。焼成良好。5%程度残存か。F00-M10東西トレンチ。

2は要底部である。調整の特徴などから古墳時代前期に属するものと思われる。底径7.8cm、残存部の器高2.8cmを測る。底部は平底で、胴部は大きく張り出す球形胴か。内面は丁寧なナデ、外面タテヘラナデ、底部周縁はつまみ出しのままナデか。底面は木葉痕残る。胎土細。ザラつく。角閃石・石英などの微細粒やや多量に含む。淡褐色。焼成良好。10%程度残存、底向3/4。F00-M10東西トレンチ。(2号住居跡と4号住居跡の中間)。

3は塔の胴部中位以下の破片である。古墳時代前期。胴径11.8cm、残存部の器高6.0cmを測る。口径14cm、器高13cm前後のやや大型化したものであろう。胴部中位に最大径あり、底面まで丸い。底面には径1.5cmの凹みがある。内面ヘラナデ強め、外面ナメヘラミガキ、残存部だけで3段に分かれる。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量、土器片粒若干含む。淡褐色。外面に大きな黒斑あり。焼成良好、硬。30~40%残存。E03-M33グリッドNo.3。

4は高杯脚部破片である。古墳時代前期。復元底径16.8cm、残存部の器高3.1cmを測る。脚部大きく開き、屈曲して脚部へ立ち上がる。脚部ヨコナデ、脚部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ後ミガキか。胎土細。ややザラつく。角閃石・石英などの微細粒多量、白色針状物質少量含む。橙褐色。焼成良好、硬。10~15%残存、脚部1/8。E30-N00グリッド。

5は胸器の底底部の破片である。江戸末期か。底径16.0cm、残存部の器高2.5cmを測る。上げ底風平底で直線的に外傾して立ち上がる。底部周縁は回転ヘラケズリで面取りされている。全面ロクロナデ、内面はロクロ目による凹凸顯著。底面は回転ヘラケズリ後ナデ。胎土緻密。石英・角閃石などの微細粒やや多量に含む。やや青白い灰褐色。底部周縁面取り部以外全面褐色釉がかかる。焼成良好、堅敏。5%以下の残存。E20-M40東西トレンチNo.2。

6は土師質上器の器形不明の容器の口縁部破片である。江戸末期か。復元口径19.8cm、残存部の器高2.9cmを測る。器壁が厚い。口縁部は外傾して立ち、口唇部は外向きのあまい面を持つ。全面ロクロナデ。胎土細。角閃石・石英などの微細粒多量に含む。橙褐色。焼成良好、硬。残存率不明。E20-M40東西トレンチNo.2。

7は陶器の鉢の体部から口縁部の破片である。江戸末期か。復元口径28.5cm、残存部の器高5.0cmを測る。体部～口縁部内湾気味に外傾して立ち、口唇部はゆるく外反して丸い。全面ロクロナデで内外面ともロクロ目顯著で凹凸もある。胎土緻密。石英の微細粒やや多量に含む。灰白色。内面全体と外面の口唇端部から3cmの範囲に薄緑色の釉が薄くアバタ状にかかる。焼成良好、堅敏。5%程度残存か。E37-M38グリッドNo.2。

## VI 結語

前章までに今回報告の3遺跡について調査記録の概要と遺構・遺物に関する所見を述べたが、本章においてはさらに遺跡や遺物群の評価について若干のまとめをしておきたい。

### (1) 遺跡について

川本工業団地事業地内遺跡群の各遺跡は1つで完結した景観を考えられるような傑出した遺跡ではなく、各時代の遺跡がほとんど住居跡の重複もなく検出されたことにより、まず考えねばならないことは遺跡の継続性の問題であろう。継続期間が長い遺跡は遺跡が占地したスペースを数回反復して使用することが当然考えられるため遺構の重複が多くなる。また、同じ集団が世代を越えて居住した場合、住居の建て替えを繰り返すので、古い廃絶後の住居（ゴミ穴使用）における遺物廃棄や埋め戻しが行われることを予測しなければならない。これに対して、短期間居住の遺跡ならば遺物は少なくなり、住居の建て替えも少ないはずであるから住居跡の重複は少なく、1軒の住居跡が占拠するスペースも広くなるであろう。竹之花遺跡は緩斜面立地の住居においてこの問題を考える契機を与えられているといつてよい。特に奈良時代前半の7号住居跡は80個体を越える上器類を出土しており、居住人員が10名近くにならない限り一時期の使用数をはかるに越える上器が出上していることになる。またほぼ同じ時期に属する8・10・17号住居跡からは上器の出土数がきわめて少ないという対照的な状況がある。続く時期の住居跡が奈良時代末期から平安時代初期にあたることも加味して考えるならば、奈良時代前半における短期間居住を想定することができよう。これは奈良時代末期から平安時代初期の住居跡群にもあてはまるのではないかと思う。これは住居跡の上軸方向の近似性も傍証することができよう。奈良時代前半4軒、奈良末～平安初期4軒であることから、それぞれの時期に1～2単位の集団が居住したことを想定できるが、1単位が何軒の住居跡で構成されるか、その内容がどういう集団であるかはとりあえず保留しておく、古代においてもこのような短期間居住のパターンがあることを事実として確認しておきたい。

ところで、縄文時代前期の住居跡群についても若干考えておきたい。竹之花遺跡では北端部における黒浜期の住居群、中央谷部北側の諸磯b期の住居群、南端部斜面の諸磯a期の住居群という時期別の占地が明らかになった。各時期をつなぐ土器群も各住居群内および周辺で若干量出土しているのでこれらの住居群がそれぞれ無関係に占地したとは考えにくいが、このような状況で「定住生活」と考えることはできにくい。しかし、円阿弥遺跡は近接した時期と考えられる住居が遺跡北部に偏在しており、その中心となる10号住居跡は大型の石皿を床面に据え置き、多数の埋甕を埋設していた。これは一定期間の長期居住を暗示させる。従来「復古居住」・「定住」・「半定住」などの概念でとらえようとしている縄文時代の居住形態に関して、より具体的に考えるためにはこのような対立的な状況を如何に総合的に解釈できるかが問題であり、今後の課題としておきたい。

なお、円阿弥遺跡の弥生時代・古墳時代・平安時代の住居跡群についても考えるべき点は多いと思うが、先の竹之花遺跡の奈良・平安時代の住居跡群の状況ほど特徴的でなく、遺物の出土状態についても竹之花遺跡のように具体的に考えられるほど細かく把握していないので機会を改めて考えてみたい。

## (2) 遺物について

ここでは、円阿弥遺跡の弥生時代・古墳時代の土器について特に考えておくこととする。

まず、弥生時代の土器であるが、円阿弥遺跡では後期の吉ヶ谷式土器に属するもののみ検出された。土器の出土量がわずかであったため、器種のすべてが揃っているわけではなく、一時期のものと断定することはできない。しかしながら、その特徴を考えていくならば、かなり新しい一群であり、本遺跡に関する限り短期間の所産であると考えてよいであろう。器種は甕・鉢のみ全体がわかり、他に壺の小破片があった。甕は無節ないし半節縦文を口縁部から胴部中位まで施文するが、施文部位・施文方向に乱れが目立つ個体が多く、器形も頸部の屈曲が大きく、胴の強く張るものがほとんどである。15号住居跡の甕は細かいタテハケで縦文を消してしまう部分がある。これらは整然とした施文と輪積眞・わずかな頸部のくびれ・やや大型といいう吉ヶ谷式土器の甕の古い一群の特徴からいざれもはずれてしまうものであり、整形・調整の極端化および強緩と考えられ、ほとんど終末段階に近いものと考査ができる。ただし、東松山市根平遺跡・下道派遺跡などのように畿内系・東海西部系の精製土器類を作らず、庄内式（新）段階・欠山式（新）段階併行期まで下るかどうか明瞭でない。鉢の器形の比較などを含めて考えて、柿沼幹夫氏が吉ヶ谷Ⅱ式（新）段階とする川本町万願寺川土の土器群よりやや新しく、吉ヶ谷Ⅰ式（新）からⅡ式にかけての時期にあたることはできそうであるが、広義の「古墳時代」にはあたらないと見ておきたい。

古墳時代の土器は前期の五領式土器に属するものである。7軒の住居跡と土塹2基から29個体を図化したため、やはり一時期のものとすることはできないが、総じて新しい時期と考えることはできよう。壺は折り返し口縁のもの2種（仮に口唇部が尖るものをA、口唇部が面をもつものをBとする）と有段口縁のものがある。折り返し口縁A（第152図1、第156図1）は幅広の折り返し部と短く外傾する頸部を特徴とし、この系統の古式なものが幅狭い折り返し口縁と長い頸部を持つことから考査るとかなり祖形から離れて変形していることが明らかである。折り返し口縁B（第155図1）はやや薄い板状の幅狭い折り返し部であり、古い段階にはあまり見られない器形である。有段口縁（第155図3）は頸部を欠くが、口縁部自体の矮小化が顯著で、段の作りも定型的なものをやや離れ、折り返し状に作る部分を持つなど在地的器形との折衷型となっている。甕は「く」の字状口縁の平底甕・S字状口縫台付甕・「5」の字状口縫甕などがある。在地系の「く」の字甕は器形の整ったものがむしろ少くないくらいで、ゆるい肩を持ったり長胴化した器形のものもある。器表面に施されるハケ目もケズリ・ナデ・ミガキに置換しているものが多い。S字甕も肩横線のない段階のもので、口縁部自体の作りもあまりシャープではない。「5」の字甕も美里町志渡川南遺跡のものよりゆるい作りのII縫部になっており、ハケ目も難である。高杯・壇・小型鉢などもやはり古い段階のものより変形が進んでいる傾向が指摘でき、やや占手になる可能性のある1号住居跡の出土品を除くとかなり新しい時期に置いて考えた方がよいものが多い。五領式土器を何段階に細別すべきかは問題であるが、3段階説をとるならば最新段階つまり「五領Ⅲ式」、最近の横川好富氏や佐森紀己子氏のように4段階説をとるならば、「五領Ⅲ式」から「IV式」にかけての時期にあたるのが本遺跡の土器群であり、4世紀後半～末期あるいは一部5世紀に入り込む時期と考えておきたい。

## 参考文献

- 鈴木 敏昭他 1982 『下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集
- 市川 修他 1982 『上南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
- 高橋 一夫他 1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県県史編さん室
- 横川 好富 1982 『埼玉県の古式土師器』『埼玉県史研究』第10号
- 市川 修他 1983 『塙屋・北塙屋』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集
- 鈴木 敏昭他 1983 『台耕地(Ⅰ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
- 酒井 清治他 1984 『台耕地(Ⅱ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集
- 黒坂 植二他 1985 『北塙屋(Ⅰ)』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第48集
- 宮井 英一他 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
- 瀧瀬 芳之 1986 『小前田古墳群』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集
- 埼玉考古学会 1987 『討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景—前内出窯跡その後…」資料』
- 新井 端他 1988 『本田 東台 上前原』 江南文化財調査報告第8集
- 新井 端他 1989 『塩西遺跡Ⅱ』 江南町文化財調査報告第9集
- 小林 茂・柿沼幹夫・鈴木秀雄  
1989 「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第25号
- 埼玉考古学会 1989 『討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景—前内出窯跡その後…」記録集』『埼玉考古』第26号
- 川本町 1990 『川本町史』
- 兼森紀己子 1990 「大宮市内出土の外来系土器について」『大宮市立博物館研究紀要』第2号